明治三十八年一月一日發行
毎月一回五日發行
明治三十三年十二月二十五日
第三種郵便物認可

女學世界

第五巻第壹號





新年之御慶目出度申納候

明治三十八年一月

追て弊店儀は元三井呉服店の組織を相改め候ものに有之爾今一層事業を擴張し漸次種々の新設備を施して益々御便利を圖り可申候間相變らず御用命の程奉願上候

東京市日本橋區駿河町

三越呉服店

電話本局 特五二五番 一、二一七番 一、八六〇番 一、八五六番 二、二二二番

女學世界 第五巻第壹號 目次

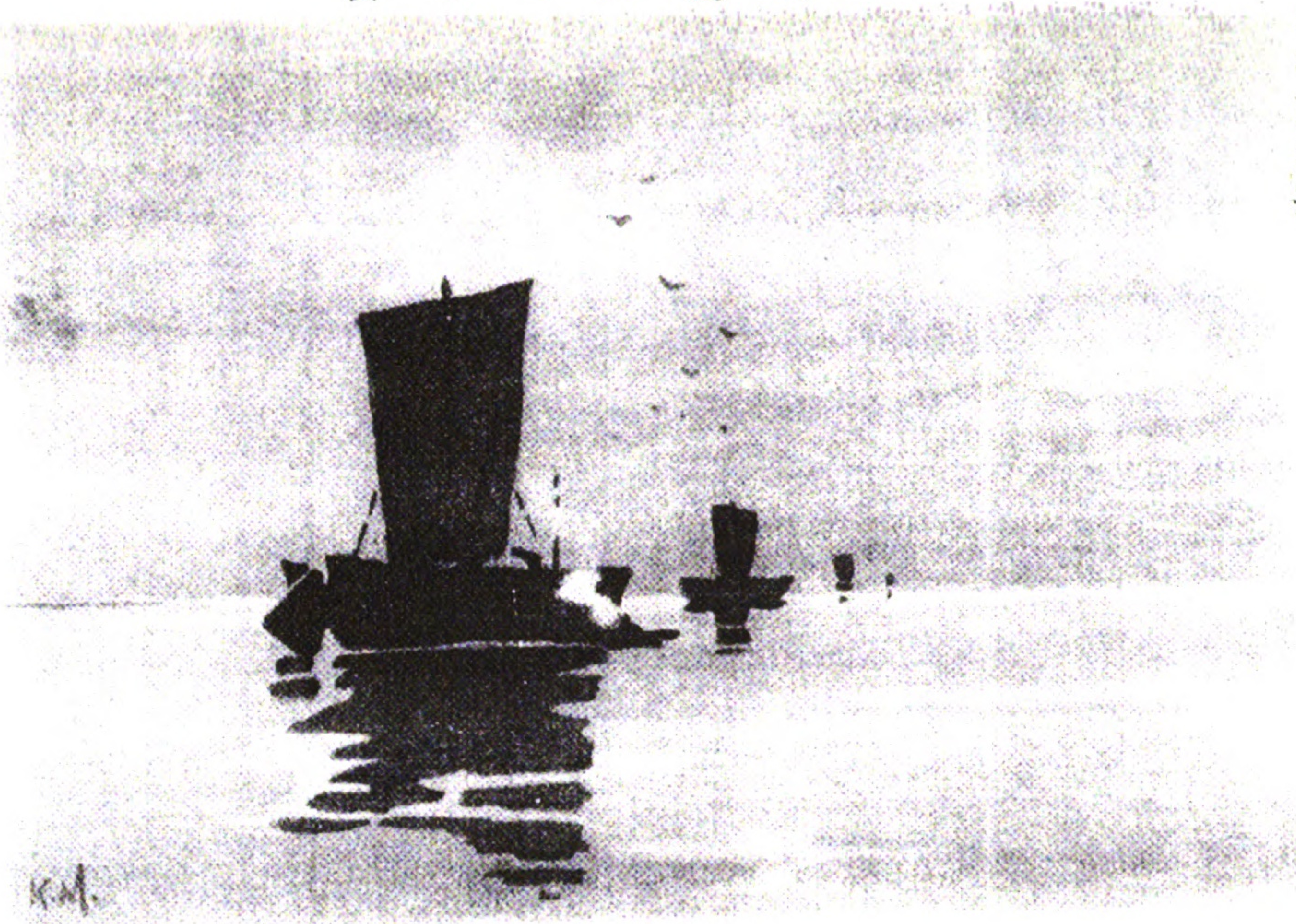
女學生



藤島武二筆

海邊に日の出

三宅克己筆





(甲の二)

◎伊藤銀月君著◎

表紙意匠平福百穂君著者書翰挿入

町の仙女

空前の奇文!!

天下の珍書!!

グロース装釘最美本全一冊

定價金六十五錢郵税金八錢

好評!!

再版!!

「著者言ふあり爾後斷じて小說に筆を染めずと於茲乎町の仙女は何人も備へざるべからざる珍品となれり」

◎田口掬汀君著◎

平福百穂君口繪並ひに表紙意匠

新生涯

着想奇抜文情悽艶

一月十五日發賣

定價金五十八錢・郵税金八錢

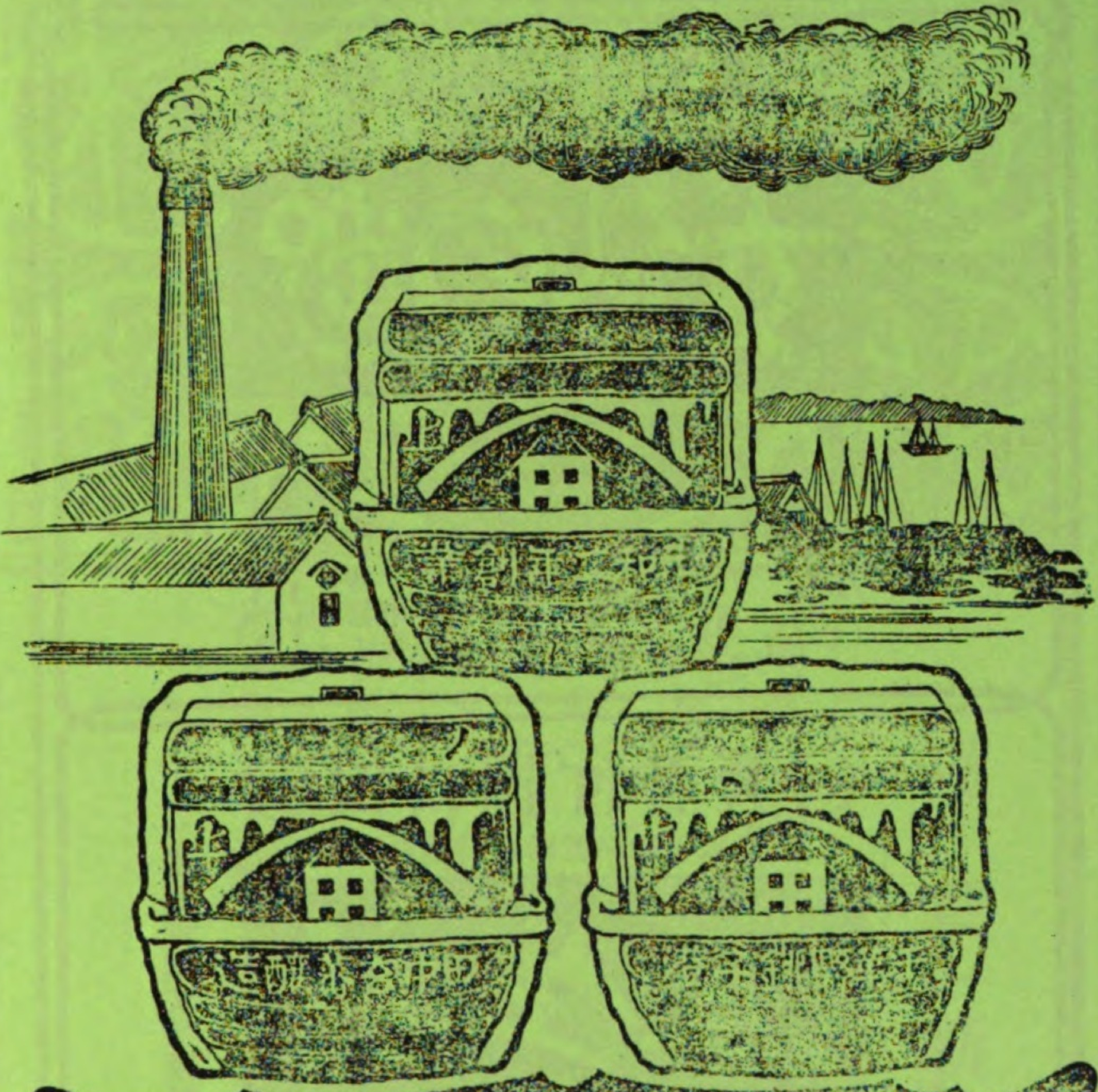
情が勝つか、理性が勝つか、人間生存に最も必要なる此疑問に答へるのが新生涯の主眼である

新生涯は堅固なる理性を保ちつ世の迫害に抗して進む青年と薄倖の佳人との間に蟠れる奇しき運命を寫した長篇小說である

著者が前作女夫波によりて靄然たる溫味を貪ぼりたる讀者は更に此編に就いて可憐な野の花が暴き風雨に揉まれる樣をも見給へ

發行所 東京市本鄕區彌生町三番地 金色社

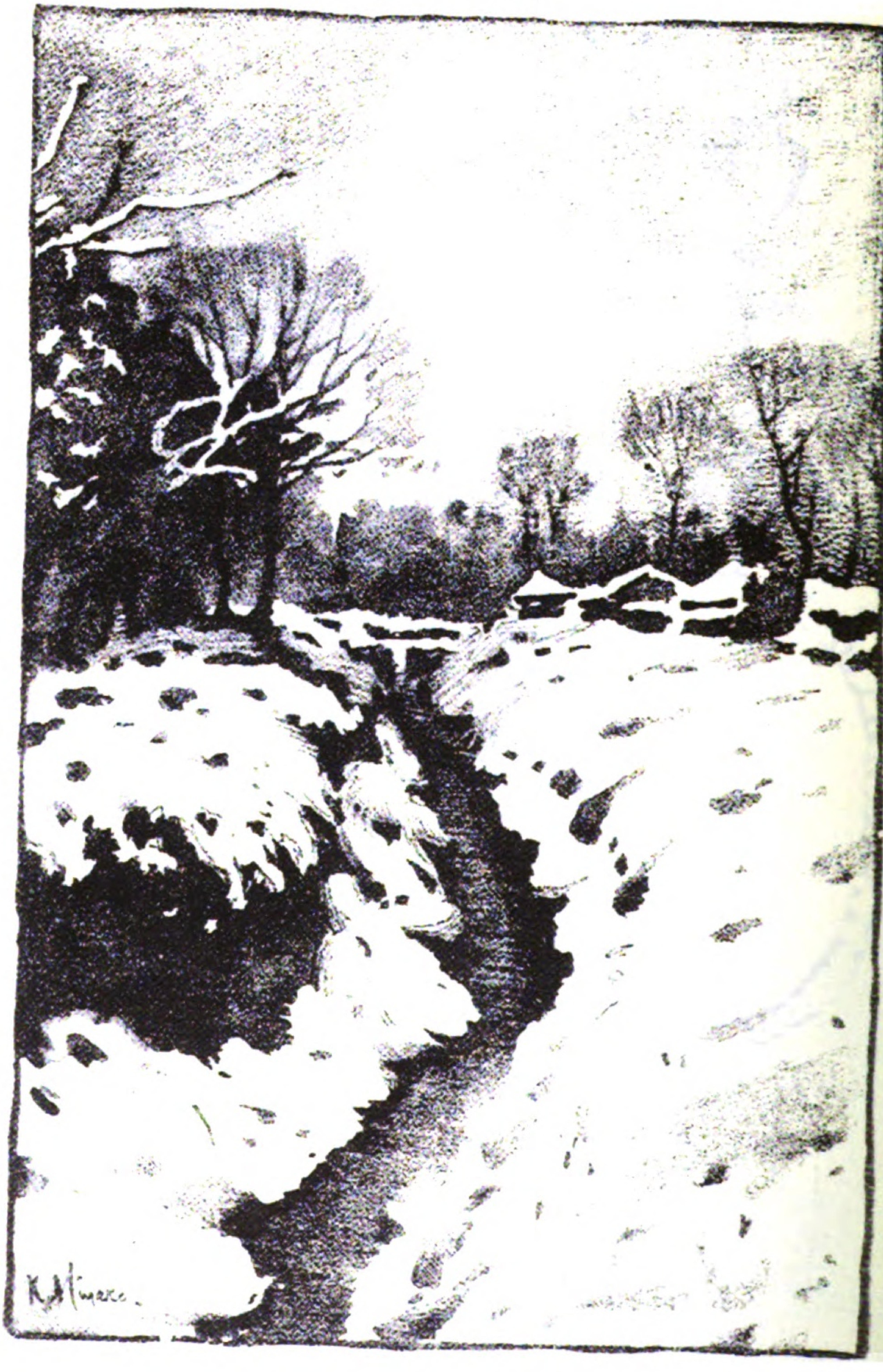
(甲の三)



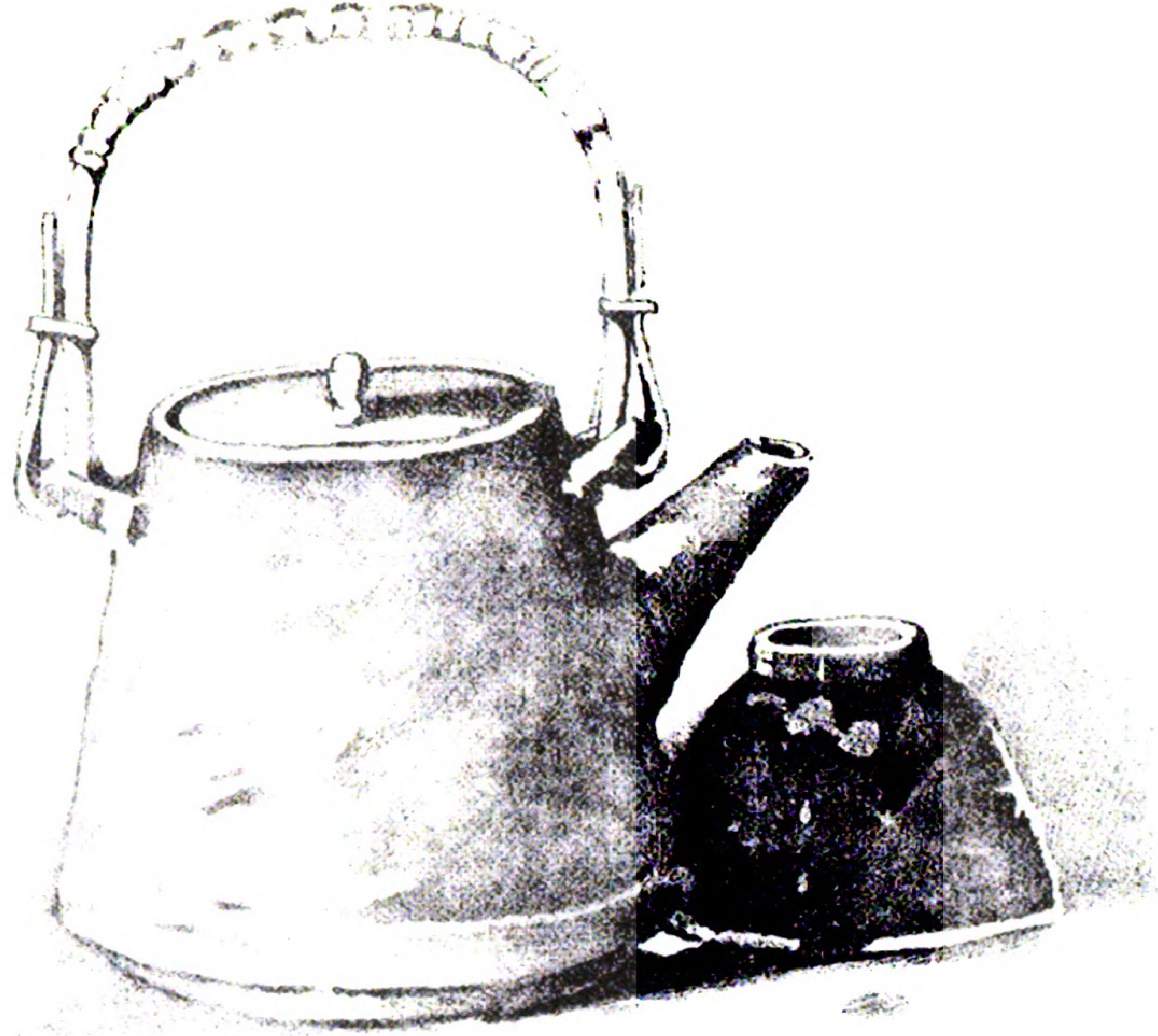
(甲の四)

初雪

三宅克己筆



三宅克己筆



新年祝

あらたしきとしをむかへて君か代安

ゝやこゝろいしなるうきはぬもなし

久子

公爵夫人岩倉久子筆

新年雪

久子

松竹たてる門に
ふるゆきは
うめの花とも
まかひけるかな

新年山



跡見花蹊先生筆



跡見花蹊先生筆

報知新聞

明治卅八年を迎ふる

東洋一の

報知新聞

丸の内の新築工事將に成らんとす

一大飛躍を試むるは近き將來にあらん

既に博取せる十特色とは何ぞ??

報知新聞が他に優れたるもの十種!! 曰く色印刷、曰く寫眞版、曰く記事の精確、曰く報道の迅敏、曰く戰報の詳細、曰く號外の隨報、曰く趣味ある雜報、曰く先見なる相場、曰く職業案内、曰く安信所

既に誇るべき三魁けとは何ぞ??

職業案内を始めたるは報知新聞也(他新聞之に倣へり)▲雜報に挿繪を入れ始めたるは報知新聞也(他新聞之に倣へり)▲寫眞版に成功したるは報知新聞也(各新聞之に倣へり)

最も誇るべき**色刷輪轉**即ち着色の新聞にては東洋唯一也(各新聞未だ之に倣はず)

報知新聞は家庭の讀物を以て家庭を賑はすを主義とし紙面の總指揮官に**弦齋居士**のあるあり記者皆清新の思想と流麗の筆とを以て立ち一方には讀者に親しむ、吾社無二の方針**便利主義**法律顧問、衛生顧問、家庭顧問(新設)安信所買物部の設置あり

「家庭に報知新聞の備付なきは臺所にテンヒのない様な氣がし升」との某夫人の稱辭以て報知新聞の内容を知るに足らん

●定價 壹枚壹錢五厘●壹ヶ月參拾五錢●郵税拾五錢●壹ヶ月分拂込の讀者に限り郵税共金壹圓廿錢●郵券代用壹割増拂込銀座局
●廣告料 五號活字十九字詰壹行四拾五錢

東京京橋區卅間堀三丁目

報知社

報知社用電話

編輯局用	新橋	特十一番
販賣部用	新橋特	三千九百六十七番
安信所用	新橋	二千三十六番
廣告部用	新橋	千六百十番
新築所用	本局	千二百九番
印刷部用	新橋	二百六十三番
大阪支局	東特	三千四百三十一番
京都出張所	特	千七百六十五番

(乙の二)

總裁 伯爵 東久世通禧君

國文學講義

會員募集

講習一年講義錄 毎月二回 二十四冊完了
●東修二十錢 月費廿五錢 一年四圓
◎規則郵劵二錢にて呈す

國勢日に月に發展す**國文の研究**豈之に伴はずして可ならんや本會玆に見るあり懇切博識なる左記諸先生を贊成員講師に仰ぎ整齊なる組織と嶄新なる施設とに由りて、**國語の性質國文學發展の由來**各時代**文學の特色**を一目の下に通觀せしめんとす各時代の文學に亘る講義は實に本書を以て嚆矢とす如何に系統的にして又如何に組織的なるかは乞ふ本誌に就て之を見よ

文學博士 芳賀矢一君
文學士 尾上八郎君
文學士 武島又次郎君
高師教授 松井簡治君
文學士 志田義秀君
文學博士 萩野由之君
學習院教授 和田英松君
文學士 高木尙介君
文學士 藤岡作太郎君
文學士 森洽藏君
文學士 長谷川福平君
文學士 渡邊良法君
文學博士 上田萬年君
文學士 藤岡繼平君
高師教授 關根正直君
文學士 堀重里君
文學士 垣內松三君
文學士 山內二郎君
文學士 菊地壽人君
文學士 杉敏介君

◎講習科目大要

一、日本文學史
二、奈良朝文學評釋 祝詞宣命萬葉集等
三、平安朝文學評釋 源氏大鏡三代集枕草紙等
四、鎌倉文學評釋 増鏡太平記盛衰記等
五、足利文學評釋 謠曲狂言舞本連歌等
六、德川文學評釋 隨筆書類戯曲小說俳諧俳文川柳狂歌狂文等
七、日本文法
八、國語研究法

第一卷（十一月廿日）要目◎日本文學史 日本に於ける漢文學の變遷 松井教授◎奈良朝文學 祝詞宣命 堀文學士●平安朝文學 三代集 武島文學士 大鏡 藤岡文學士●鎌倉文學 増鏡 荻野博士●足利文學 謠曲狂言 森文學士●德川文學 隨筆 高木文學士 戯曲小說 山內文學士 俳文俳句 渡邊文學士●文法 芳賀博士●國語研究法 垣內文學士●檢定試驗問題解答●俗謠に就て 志田文學士●傳說と小說 山內文學士●萬歲の話 長谷川文學士●文學史料●其他應問 文苑、彙報、新著批評等

文部省檢定受驗案內

◉會則 郵劵二錢にて呈す

檢定試驗各學科の受驗者及受驗志望者のため講義錄紙上特に一欄を設け受驗上に必要なる手續報道又は心得を載せ或は之に關する質問照會等に應答す獨り國語漢文科のみならず各學科の受驗者に多大の便宜あらん

東京神田區西小川町二丁目 **國語漢文學會**

（乙の三）

蓬萊の仙女



名士の家庭



有賀博士の一家

軍人家庭



蠣崎陸軍中佐の一家

京都清水寺の景



文藝倶樂部

每月一回一日發行　**第拾壹卷第壹號**　一月一日出版發賣

表紙　已成金……武内桂舟君筆
木版口繪　初音……同
原色版美人の追羽子……上

▲小說▼

綾小袖……（古洞君畫）川上眉山君
座敷牢……（春帆君畫）廣津柳浪君
果報者……（春汀君畫）嬰庭篁村君

▲懸賞小說▼

新知己……（清方君畫）齋藤紫軒君
宿の春……（同上）山田鄂南君
畫題（統一）……（同上）安倍村羊君

▲民文▼

日露戰爭中の一大美事美術國と軍人、……大町桂月君
夢と幻老後の計

▲名家談▼

作家の苦心……嬰庭篁村君
同上……宮崎三昧君
同上……廣津柳浪君

雜錄

▲鷹狩……幸田露伴君
▲寶船三番叟……巖谷小波君
▲めでた雜纂……岸上吮劍君
▲さびしみの悲哀……田山花袋君
▲龍尾蛇頭　長谷川天溪君
▲戰勝國の新年……平田骨仙君
▲戰正月……竹貫佳水君
▲辨天島……木村小舟君
▲門禮者……武田櫻桃君
▲手前未発有……石橋思案君

社會

▲おでん屋……山岸柳葉君

演藝界

▲萬屋吉右衛門……杉贋阿彌君
▲饒舌初……岡鬼太郎君

新家庭

▲藝者の化粧法……近藤蕉雨君

流行

▲春着……

講談

▲黃金の蛇……猫遊軒伯知

落語

▲橋の結婚……三遊亭圓遊

詞苑は「新年の山」其他筵
花爛熳

新年大附錄

繪端書「新春の美人」四葉
水野年方氏筆、日本橋標原製金銀十度刷

雅人必携「文藝節用」
色刷寫眞版數十葉挿入新案趣味實益兩全

五百圓の俳句投句箋
第一等二百圓以下第七等迄百三十三名

每月一回一日發行年刊十二冊定期增刊年四回
正價一冊廿五錢郵稅貳錢
五厘前金四冊金九拾五錢
●八冊金壹圓八拾錢⊜拾
六冊金參圓五拾錢⊜郵稅
壹冊貳錢五厘ッ、……

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（其の一）

肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別分壹圓五拾錢



わきが (腋臭症)

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

新發明

おこゑのくすり 美音錠

右は從來内藤家の製劑に有之所今回弊店に讓受候間猶引續御用命給り度此段奉希望候

定價廿錢以上のものへは引繼御披露のため極めて美麗なる丸藥及楊枝入を封入進呈仕候各地有名藥店に差出し有之候得共若し品切の場合には直接御註文被下度全國は無遞送料にて御郵送申上候

將校軍人 敎師 僧侶 演舌家 音曲家 謠曲家

定價 十錢 廿錢 五十錢 壹圓

東京日本橋區兩國米澤町二丁目一番地

美音錠發賣所 萬珠堂藥局 稀食丸本舗 **吉田安五郎**

(丙の二)

子宮病 自宅療法

妾嫁きてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらひ色々と藥癒を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快姙娠の身となり今や安す〱と健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容體書を添へ遠慮なう問合せあれ

奈良縣宇陀郡 榛原町 **笹岡りん**

人命の保護者
急救藥として完全なるは
醫師藥劑師の證明あり

戰地に行く人は見よ
旅行をなす人は見よ

懐中用
急救藥函
輕便

戰地必携
旅行必携

出征者ニ贈呈品トシテ最モ適當ナルモノナリ
出征者ニ贈呈品トシテ最モ適當ナルモノナリ

小包料共壹個壹圓六拾錢
東京市日本橋區本石町三丁目角
發賣元
合資會社 博愛堂藥店

花の心

佐々木信綱 編輯主幹

第九巻第一(一月一日發行)要目

●蝸牛庵瑣談 幸田露伴
●萬葉と古今の歌 芳賀文學博士
●陣中手簡 森鷗外
●イブセンの社會劇 大塚文學博士
●息災延命(小説) 小栗風葉
●アルペン(新體詩) 土井晩翠
●萬葉集講義 木村文學博士
●元朝風雨(新體詩) 小山内薫
●脚本春曙夢 大久保雨枝
●少年文學に就て 巖谷小波
●短歌新潮 佐々木信綱
●毎號短歌課題あり●投書歡迎す

●定價一冊郵税共十參錢●半年七拾五錢
●日本橋本石町一ノ一 竹柏會出版部

通信女子教授 學術講義

會長 東京教育會長 東京府教育會長 子爵岡部長職君

皇后陛下華族女學校へ賜はりし令旨を同校若林常猛先生謹書シ毎號習字手本として號より掲載◎繪畫並に圖案の懸賞 授與法は試◎共他各女學校入學試驗問題解答◎會員募集◎

毎月壹回 第參號 一月一日發行 學期全一年半完結

教育科	東教授
修身科	篠田教授
國語科	佐方教授
地理科	伊藤教授
歷史科	高木教授
家政科	林校長
英語科	下田學監
裁縫科	原講師
作法	喜多見舍監
女子衛生	小笠原講師
兒童心理	鷲山校長
傷病手當法	松本教授
習字	三好醫學士
圖畫圖案	若林教官
割烹科	渡邊香涯
茶道講話	赤堀講師
挿花	井城抱齋
	秋香庵一英

入會金廿錢
會費 三ヶ月七十五錢 六ヶ月一圓五十錢 全學期四圓五十錢
●見本廿五錢●規則進呈

發行所 東京神田神田橋際 東京府教育會附屬 女子講學會

文學士南條文雄、林幸行著

國語辭典

全壹册　洋裝美本　千三百頁　正價金八十錢　郵税八錢

國語國文に關する辭典の世に行はるゝや汗牛充棟も啻ならず然れども其の繁なるは冗長に過ぎ簡なるは粗略に陷る繁簡此に見るあり當代知名の林南條兩先生に乞ひ本書を發行す記事精確材料豐富繁簡亦其の宜しきを得眞に空前の良書と云ふを憚らざるなり繁を敢て誇張的の言を弄せず本書一たび世に出づるや數多の辭典其れ顏色なけむ

十家七日大迹

池田蘆洲先生述　生駒万治先生述　芳賀矢一先生述
長尾[illegible]垣先生述　野田正人先生述　萩野仲三郎先生述
可兒吾德先生述　吉田靜致先生述　佐藤牧太先生述
紀平正美先生述　重野安繹先生述　八木光貫先生述
關根正直先生述　鈴木[illegible]次郎先生述　其他某大家二名イロハ順

北川三友　石山操共編

中學校 師範學校 高等女學校

教員受驗撮要

全壹册　正價金八十錢　小包料十錢

●紙數約千百頁●製本優美

●附錄に第一回乃至第十一回檢定試驗問題項問題解釋其他規則等を網羅す

世上二三の文部省檢定試驗問題集なりと稱唯單に數回の問題を羅列するに止まり眞に應試者ノ指針となるべきもの殆どなし故に此に見るあり從來に於ける試驗檢定試驗委員及び各専門大家の贊助を得て其の蘊蓄せらるゝ點を井にノ科研究ノ法等を掲載す

中島雅郎伯著　●打井に而龍介凡そ千個●

スケッチ

圖畫速寫法

上下合本　全壹册　正價四十錢　郵税四錢

右は圖畫速寫法の規定として先生が多年の苦心と經驗とにて作號より成立つ圖畫の正法なる事再語の速記に等しきものを説明されて最も適當なり學び居ると居らざるとに拘はらず簡易に覺へ得らるゝ册子なれば學ぶ者は云ふも更なり圖畫を志さんとするには必坐右の友として須臾も欠くべからざる有益多なるべし、

酒井勳著　●卅八年●（每年改訂）

男女東京遊學案内

全壹册　正價五十錢　郵税六錢

佐川安官著　●卅七年度●

官立 諸學校

入學試驗問題答案

全壹册　紙數五百頁　正價五十錢　郵税八錢

官立諸學校に於て施行せられたる本年度試驗問題を蒐集し問題每に各自專門諸先生の懇篤なる答案解釋を求め以て受驗者の便に供したらん事を期せり若し夫れ問題の正確なる答案解釋の懇切なるに至りては本書の右に出るものなきを確言す、

帝國大學教授法學博士和田垣謙三著

法制講義

全一册　大版洋裝金字入　正價壹圓廿錢　小包料十錢

帝國大學教授法學博士和田垣謙三著

經濟講義

全一册　大判洋裝　正價壹圓廿錢　小包料十錢

明治大學講師大學院專攻法學博士[illegible]聰明著

法學通論

全一册　大判洋裝　正價壹圓五十錢　小包料十錢

研數學館々長奧平浪太郎講述

平面三角法講義

全一册　大判洋裝　正價一圓　小包料十錢

福島縣立中學校教諭理學士[illegible]太郎講述

物理學講義

全一册　大判洋裝　正價一圓　小包料十錢

京北中學校教諭理學士杉谷左五郎講述

化學講義

全一册　大判洋裝　正價一圓　小包料十錢

研數學館外國語科擔任講師[illegible]編輯

英語學獨修講義

全一册　大判洋裝　正價七十錢　小包料十錢

理學士松井[illegible]力著　●一名實業の手引●

改訂增補

工業須知

全一册　洋裝金文字入精美本　正價一圓五十錢　小包料十五錢

工學士影山[illegible]講述

東京中學校教務幹事陸軍中尉松本小七郎先生講述

測量術講義

合本　全一册　大判洋裝　正價一圓二十錢　郵税十錢

算術講義

合本　全一册　大判洋裝　正價八十錢　郵税十錢

以上拾[illegible]は博士學士が專攻の科目を多年の實驗と豐富の學力を以て平易流暢に講述せられたるものなれば普通ノ腦力ある以上は必らず了解し得らるべく又述者の苦心に依り本書が師の位地にある如く講述せられたる良書なり

●發兌元　東京市神田區表神保町（電話本局一七五二）修學堂支店

自宅獨習 通信教授

研數學館々外生募集

●東京市神田區表神保町七番地　研數學館（館主奧平浪太郎）

詳細の規則郵劵二錢を要す

（其の四）

雪中の封鎖任務



新年の山



薩摩潟海門嶽



京都比叡山の頂

謹告

落合直文氏の國文學上に偉績ありしは世皆之を認めざるはなく、氏を斯學界より失ひしは吾人の痛歎に堪へさるところなり。吾人已に逝きて今や一週年。玆に同志相謀りて資金を募集し、落合奬學資金の名を以て之を東京帝國大學に寄贈し、國文學専攻の學士養成の資にあて、永く同氏の紀念となさんとす同感の諸君幸に吾人微意の在る所を察し、此擧を賛襄し給はん事を

明治三十七年十二月

池邊義象	今井彦三郎	今泉定介
市村瓚二郎	荻野由之	富山健
芳賀矢一	岡山正久	和田萬吉
和田英松	髙津鍬三郎	上田萬年
黒川眞道	松本愛重	松井簡治
丸山正彦	佐藤球	菊地壽人
三上參次	平田盛胤	關根正直
杉敏助		

追啓資金の貸與利息等に關しては東京帝國大學に一任する事、資金は明治三十八年三月三十日迄に左記六名の内へ宛て便宜御發送相成度こと

帝國大學	池邊義象
東京本郷淺嘉町九	今井彦三郎
東京本郷駒込蓬萊町九、七	荻野由之
東京麹町區飯田町六、十七	芳賀矢一
仝 五、廿六	富山健
東京小石川區第六天町十七	平田盛胤

(丁の二)

リヨマチス

藥名（ギーチル）本劑はリヨマチスの最新藥にして現今最も賞用せらるゝギーネルと稱する一種の有力なる新劑なり有験たる無功藥品の比にあらず筋肉は關節もりよまちす

なるとを問はず非凡なる効驗あり 試に一劑を用ゐよ忽ち偉大なる効驗あり無効賣藥と同視する勿れ早く本劑を用て永年の苦痛を脱せよ

劑八拾五錢一劑分圓六拾錢試劑參圓

根治確證

わきが

新發明 ワキヒラ

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を清潔し根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症も甲價特別製を用ゐよ必ず速に用て苦惱を脱せしむ

必ず全治して決して再發せず或は他病に變ぜず

丙價七十錢乙價壹圓廿錢甲價特製貳圓五拾錢

化學美顏

色の白くなる洛液

本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新の秘方奇劑にして流行の本劑を塗擦すれば皮膚は次第に新陳代謝を盛ならしめ主性分の力に依り白色艶美の容貌となる

色素を漂白するを以て如何程色黒き人もB印特製を用ゆれば白色艶美の男女

共交際上最も必要の品也A印壹圓五拾錢B印特製壹圓五拾錢送料拾四錢

らい病

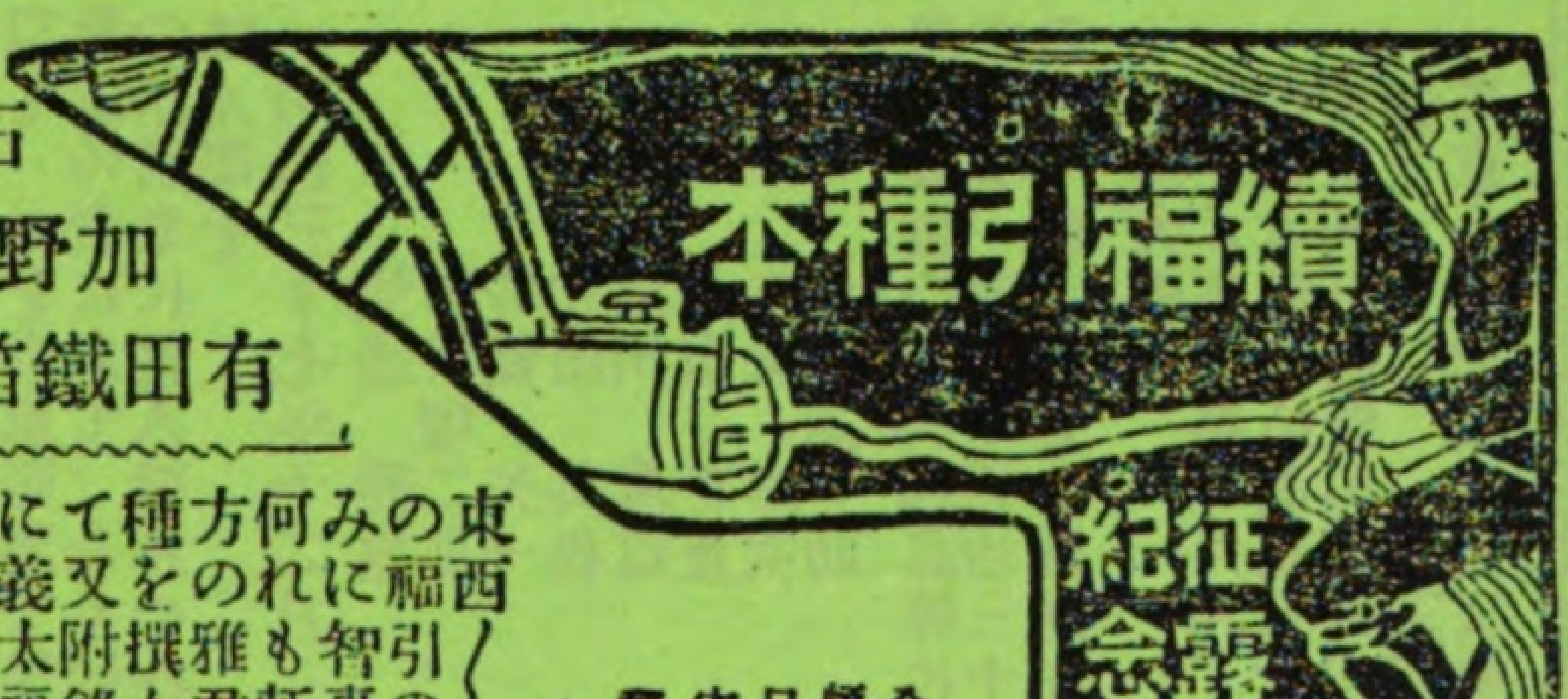
新治療藥ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして素人にも容易に服藥し得る樣緊館の多數の調保證す希ふ先

劑の實驗に鑑み丸劑となしたる者にて其有効確實なるづ試に劑だけも用い見よ必ず大効あり

劑六十日分七圓・郵券三錢送說明書進呈 劑廿日分三圓 二劑四十日分五圓 三

東京本郷湯島四丁目十五 發賣元 オリエンタル藥舘



石橋思案外史序

加野孤雁君
有田鐵笛君 共編

東西〱罷り出ました新版新案の福引の種本は日露時局を當込みに智惠の有丈け捻り出したる何れも斬新奇抜の趣向に総て四方の雅君に檄し寄せ集めたる珍種を撰り取り見取りに取り添へて又附錄にはデン通を唸らせ中に義太福引坊ちやん方や孃ちやん方の御慰みには翁歌留多の稚ない趣向の福引と眼先を變へた御景物買つた門には福來る此辰年の胎みもの巳年の春ノ寶出しに一番花を咲かして見度い深山お買い下さらば編者の鼻も高砂野々宮サア〱評判蛇〱

全一冊洋裝三六版
繡美本……口繪秀方女史畫
定價金拾八錢
郵稅金四錢

東京日本橋區本町三丁目 發兌元 博文館

(十の二)

（丁の三）

太陽

毎月一回一日發行　**第拾壹卷第壹號**　一月一日出版發賣

茲に十年の長日月を重ね年々進歩發達せる本誌は**帝國の發展**を代表して東洋唯一の**證典**たらむとす年改まると共に生々たる**新面目**を備ふべし

口繪増加（從來十二頁なりしを更めて）廿頁（アート刷四頁赤門）とし人物、建築、風景、藝術品等を美術的に印刷す殊に戰況は眞に迫るものあり本誌の特色を益々發揮すべし。

新年大附錄　日露國勢比較便覽

地理、國體、政治、陸海軍財政、產業等百般の事項を對照す

論說

文藝

歷史地理

其他各欄皆斬新の材料豐富にして讀書界に貢献する所偉大なり

毎月一回一日發行　正價一册拾錢　前金●四册金壹圓拾五錢●八册金貳圓貳拾錢●十六册金四圓貳拾錢●郵税一册參錢

（丁の四）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

實業世界 太平洋

毎月二回 一日十五日發行

第四巻第壹號

一月一日出版發賣

本誌は本日を以て第四巻第一號を刊するに際し、時代の要求に鑑み更に紙面改頁を施し、以て實業界の先覺者たるの世評に背かざらんとを期す。即ち

一、從來菊版百六十ページなりしを擴張して四六二倍版（縱八寸五分横五寸五分）百十二ページと爲す。

二、口繪寫眞銅版を四ページと爲し總てアートペーパーに印刷すべく其精彩驚くに足り正にこれ天下の珍。且つ本文中に寫眞銅版を插入すると從前に比して頗る多く苟くも事の實業に關する者にして眞を後世に傳へ得べき者は悉く本誌を飾るの料となるべし。

三、内容は大略現今の如きも特に材料を精選するヿ嚴に、加ふるに本誌特有の熟誠を以てし。一言一句據る所あり一語一章悉くこれ信すべき者、この自信あり抱負あり、實業界の事一として記されざるなく、實業家及其子弟の必讀雜誌たるの實を擧ぐべし、特に今春よりは、海外移住を獎勵する爲めに海外事情を増加し、將來實業に身を投ぜんとする青年子弟をして處世の途を誤らざらしめんが爲め、朝野の名家泰西の碩儒實業家の處世要訓を說くと詳かなるべし。

右の如くにして年頭第一に讀者諸氏に見えんとする第四巻第一號の要目は如何。

寫眞銅版

- 最近の男爵澁澤榮一氏の家庭
- 農界の大恩人津田仙氏の家庭
- 勸業銀行總裁 高橋新吉氏の家庭
- 海外の成功者米國の馬鈴薯王

論說

- 男爵 平田東助君
- 日本郵船株式會社長 近藤廉平君
- 日本勸業銀行總裁 志村源太郎君

● 三大汽船會社長の人物比較研究
● 高橋勸業銀行總裁の經歷平生
● 明治農界の大恩人津田仙氏
● 最近の澁澤男爵の生活
● 海外の成功者米國の馬鈴薯王
● 世界第一の美術粧飾品商の成功
● 最近十年間の我經濟膨脹比較表
● 酒田本間家の家風
● 豪家の夫人に必要なる資格
● 新年に於ける商家の慣習
● 巳年生れの實業家
● 知名實業家の年禮逸話
● 新年に因める商賣
● 小僧須知商業談
● 前米國大統領の青年と艱難
● 矢野次郎氏の商業子弟訓
● 三好工學博士の工業子弟訓
● 横井農學博士の農業子弟訓
● モルガンの投機秘訣
● 韓國渡航者は必讀すべし
● 實業家の結婚政策

新年附錄 韓國實業地圖

（三度刷縱一尺八寸横一尺六寸）

更に添ゆるに新年、大附錄を以てす、濱田四郎君編する所、港灣、航路、海底電線、鐵道線路等は勿論、領事館、電信局、郵便局の所在、物産、韓國貿易品一覽表、韓國在留邦人分布圖等一目韓國實業の大勢を知るに足るべし。

發行日

毎月二回一日十五日 年刊二十四冊▲外に臨時增刊發行四六二倍毎紙數百十二頁▲外に寫眞版四頁

定價

●壹冊正價金拾貳錢郵稅壹錢五厘

前金

●六冊金六拾八錢●十二冊金壹圓參拾八錢●廿四冊金貳圓六拾圓外に要郵稅

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（丁の五）

中學世界

每月一回十日發行　**第八卷第壹號**　一月十日出版發賣

中學世界は發刊以來已に七春秋を閲し玆に八歲の春を迎へたり、而して時は方に皇軍外に捷ちて國威世界に輝き我國前古未曾有の盛時に屬す、本誌亦倘一大發展を行ひ將來世界の舞臺に活動せんとする我青年諸氏の伴侶たるを期せざるべからず乃ち年の改まると共に紙上更に一刷新を加へ時勢の趨向に先鞭を着けんとす。
全誌文中の挿畫は梶田半古、藤島武次、山中古洞、中澤弘光等諸畫伯の揮毫に係る。

◉表紙（石版四度刷）藤島武次
◉水彩畫（須磨の月且）三宅克己
●鉛筆畫　岡田三郎助
●毛筆畫　川端玉章
●新案繪葉書　久保田米齋
●寫眞版　新年大附錄寄稿家八氏の肖像、歐米各國學校及學生風俗斬新材料夥多

記事

●評論……文學士　大町桂月君
●論說……文學博士　井上圓了君
●名流談叢（澁澤榮一君、海老名彈正君其他）
●人類學立志談……理學博士　坪井正五郎君
●朝鮮幽囚の歎人……文學博士　金澤庄三郎君
●氣界の自然美……理學士　石川成章君
●地理談……理學士　山崎直方君
●人生の競爭力……鳥谷部春汀君
●露國史談……長谷川天溪君
●國文談……文學博士　芳賀矢一君
●生物界……農學士　井上正賀君

●航海用具……法學士　佐竹郭公君
●野の國學……笹川種郎君
●數學……竹貫婁文君
●支那語講義……金井保三君
●衛生と不衛生……糸左近君
●士卒の勇士……押川春浪君
●骨牌の勇將……巖谷小波君
●大戰の朝……田山花袋君
●三好博士の學生々活……濱田四郎君
●歐洲の劍道……木村稍隼君
●英和對譯……米文學士　高島捨太君
●獨和對譯……水野繁太郎君

新年大附錄

歐米學生氣質

●米國の學生　小松緑
●英國の學生　濱口擔
●佛國の學生　黑田清輝
●獨逸の學生　津輕英麿
●墺國の學生　大村仁太郎
●伊太利の學生　伊東半三
●伯耳義の學生　櫻田助作
●露國の學生　古澤幸吉

定期增刊＝は各季に一回發行す、而して其春季增刊は「明治戰史」と題し維新以來我國內の戰亂及び日淸戰役中に就き大戰鬪十數目を選んで登載すべし

發行日＝每月一回十日發行　**正價**（一冊廿錢 郵稅貳錢）●四冊金七拾五錢 ●八冊金壹圓四拾五錢 ●十二冊金貳圓八拾錢 ▲外に要郵稅

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（丁の六）

全部 紅葉全集 完成

紅葉山人 尾崎徳太郎先生遺稿

(丁の八)

裝幀 洋裝大判總クロース製、金文字、金摸様表紙、極美本

正價 一册金壹圓八拾錢 小包一册送拾五錢

期間特賣 ●一月二十日迄の御注文に限り全部價金九圓小包送料全部八拾錢●

册數 全部六册總紙數五千五百餘頁

第壹卷
●色懺悔 ●新色懺悔 ●巴波川 ●わかれ蚊帳 ●戀の蜆 ●二人女房 ●關東五郎 ●新桃花扇 ●猿枕 ●拈華微笑 ●二人むく助 ●夏痩 ●風雅娘 ●文ながし ●南無阿彌陀佛 ●七十二文命の安賣 ●此ぬし

第貳卷
●伽羅枕 ●おぼろ舟 ●紙きぬた ●夏小袖 ●むき玉子 ●戀の病

第參卷
●三人妻 ●俠黒兒 ●心の闇 ●袖時雨 ●男ごゝろ ●むらさき

第四卷
●隣の女 ●不言不語 ●三箇條 ●冷熱 ●青葡萄 ●八重襷 ●鷹料理 ●浮木丸

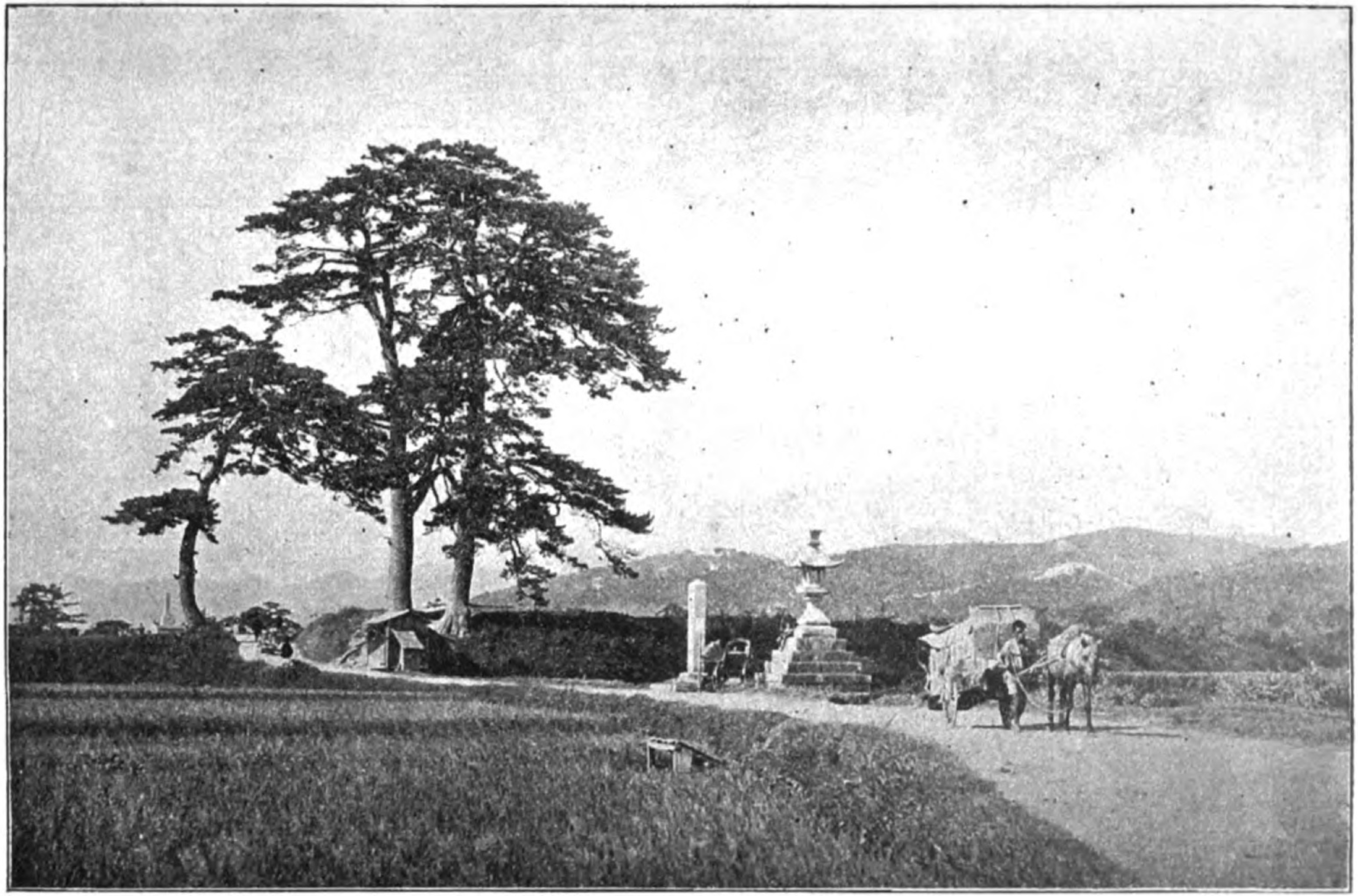
第五卷
●多情多恨 ●安知歇貌林 ●千箱の玉章 ●裘牡丹

第六卷
●金色夜叉 前編、中編、後編、續金色夜叉、續々金色夜叉、新續金色夜叉 ●煙霞療養 ●紅葉山人傳 ●全著作年表

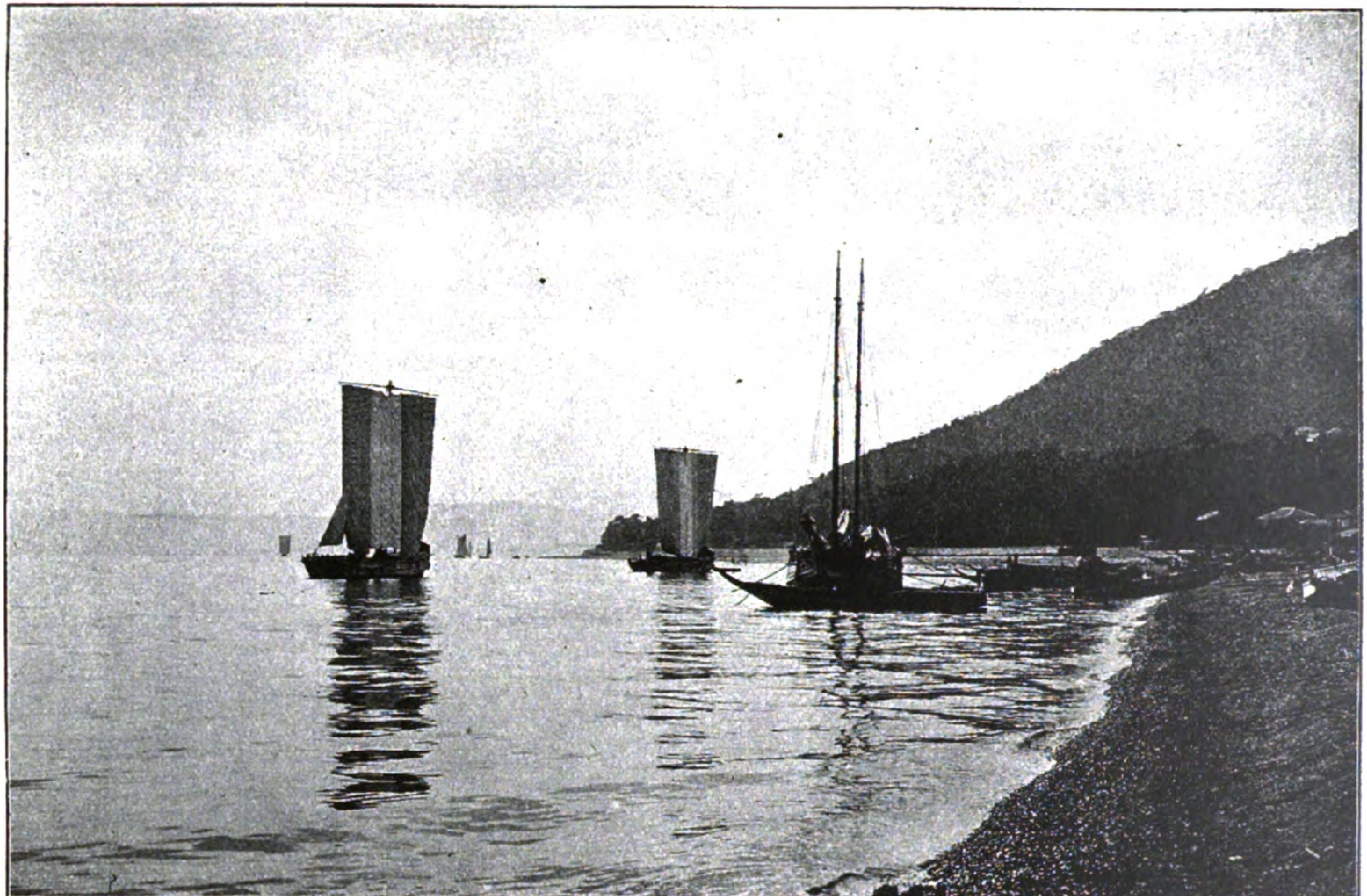
巖谷小波山人 石橋思案外史 泉斜汀君校訂

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

田舎路



新年の海





（戊の二）

博文館發行

日露戰爭實記

新年本誌の大改良

本誌は新春の初刷より大改良を施し大飛躍を試みんとす、是れ戰局の發展に伴ひ吾人戰記を編む者の當さに盡すべき職分なり乃ち下に其大要を擧げて諸君に告ぐる所あらむ

發行　毎月三回　三、十三、二十三日發行

正價　壹冊金拾錢　郵税一錢五厘

前金　●一ヶ月三冊金貳拾八錢五厘●三ヶ月九冊金八拾參錢●六ヶ月十八冊金壹圓六拾錢●一ヶ年(三十六冊)金參圓拾五錢▲外二要郵税

口繪寫眞‖從來黑木軍に從て二人まで敵の捕虜となりたる從軍寫眞班は今は在滿洲軍に從つて益ます活動し其撮影寫眞は盡く本誌に寄送することとなり別に旅順方面にて新たに本館より寫眞機を齎して從軍したるものあれば嶄新なる戰地寫眞無盡藏に本誌の上に現はるべし

戰爭實記‖本欄の冒頭に掲げつゝある有賀博士の戰時評論は博士が戰地に於て特に本誌の爲めに執筆せらるゝものなれば戰時に於ける公法上の光明は獨り本誌によりて發揮せらるべし戰記は益々精密を加へ特派員の戰場通信と相俟て愈光彩を放つべし

戰士實話‖是れ新春初刊より新設せしもの、上は將軍より下は兵士に至る迄、其戰歴中の最も有益にして最も趣味ある實話を收錄し以て戰況の足らざる所を補ふべし、是れ蓋し本誌として誇るに足るものならん

世界の反響‖各國の新聞雜誌中より戰局に關する批評議論にして參考となるべきものを摘譯し讀者をして坐ながら世界の形勢に通ぜしむべし

日本魂‖名譽ある諸將士の人物、閲歴逸話並びに勇戰健鬪の狀を詳叙して其勳功を標榜し戰勝の偶然にあらざるを知らしむべし

戰時文藝‖從來の戰時文學の範圍を擴張し詩歌俳句の外、新に講談を加へて出征軍人が忠勇義烈の美談を傳ふべし

戰時叢話‖戰陣に關する諸般の事を收錄し、讀者をして不知不識の間に軍事智識を養成せしむべし

陣中片信‖戰地よりの通信は斷簡零墨と雖も捨てがたきものあり、乃ち悉く之を本欄に收め讀者をして戰場の事情に精通せしむべし

軍國時事‖毎十日間に於ける軍國重要の時事を網羅し他日の參考として必ず欠くべからざるものたらしむべし

新年大附錄日露全戰局面大地圖

斯道大家の描寫に成れる詳密精細なる大圖を附す、是れ萬人の必ず一閲せざるべからざるものなり

(戊の三)

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

少年世界

毎月一回一日發行　**第拾壹卷第壹號**　一月一日出版發賣

本誌が世に出てより今回巳に滿十年を經たり爾來月進日歩、少年雜誌界の覇權を掌握するに至りしもの實に我敬愛なる少年讀者諸君の愛顧の致す處されば本誌は三十八年の第一一卷を期して非常なる大發展を試み以て天下の少年諸君が多年の愛顧に酬ゆる處あらんとす、若し夫れ其の改良の要點ゝ如きは一月一日の本誌が如何に盛粧して諸君の机邊に到るべきか冀くは諸君が大なる滿足を表して本誌を迎へ給ふなるべし、國定教科書に準ずる科目を彩麗なる繪畫と平易なる筆意を以て記述するもの實に本誌の獨壇なりといふべし

新年大附錄

▲**新案大聯隊旗**　八頁大寫眞版

大附錄として特に本誌記者の考案になれる本誌八頁大の繪畫は決して世間の企て及ぶ能はざる新意匠を凝らしたるもの之を壁間に揭げて給とすべく之を机上に開きて千思万考を要す

（虎の圖）

表紙畫

工學博士　下瀬雅允君肖像

口繪

博物標本畫　四猪野久馬君筆

少年十二月戰時の正月　尾竹竹坡君筆

皇孫殿下最近御尊影　二頁大寫眞版

寄稿三名家の肖像

分捕砲隊の活動

毎月一回一日發行　年刊十二冊　定期增刊年四回

正價一冊拾錢　郵稅壹錢五厘　前金四冊參拾八錢　八冊七拾五錢　十六冊壹圓四拾錢　外に郵稅一冊壹錢五厘

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

女子文壇

投稿歡迎

○美文○雜文○消息文
○短歌○俳句○新體詩
○小説○はがき文其他
内容規定は本誌を見よ

見本壹冊拾錢也

▲選評家▼

日本女子大學教授 文學士 鹽井雨江先生
女子高等師範教授 文學士 尾上柴舟先生
佐々木信綱先生
巖谷小波先生
廣津柳浪先生
山中古洞先生

女子文壇

◀第壹號▶

壹月壹日發行す

毎號 三宅克己先生水彩畫及密寫眞版口繪挿入

發兌元 東京京橋區大鋸町十一 女子文壇社

大賣捌●東京堂●東海堂●北隆館●良明堂外雜誌書店へ御申寄に賣捌所なき時は直接「發兌元」又は其の「大賣捌所」なりとも御便宜御注文の程奉希上候

女子文壇

毎月一回壹日發行 春秋二回増刊 懸賞毎號あり

定價 金六錢 拾冊前金五拾七錢 壹冊郵税壹錢 郵券代用壹割増

女子文壇第壹號要目

○表紙畫（石版數遍刷）……山中古洞
○表紙題字（石版刷）……三宅花圃女史
○卷頭題字（木版密刻）……吉田晩稼

▲美術口繪▼

○初日の出（水彩畫七色刷）三宅克己
○選評諸家肖像（寫眞版）
○女子文壇發刊之辭……

▲名家文壇▼

○軍人婦人の任務……坪谷水哉
○獨逸哲士の婦人觀……長谷川天溪
○男女の別を正しうすべし 從七位 小川直子
○女子文壇の發刊を祝，……高橋邦三
○賦の糸口（一、其名目）大和田建樹
○國文評釋（竹取物語一）文學士 中内蝶二
春のうた……伯爵 東久世通禧
○破窓の寒梅……文學士 鹽井雨江
○水車小屋 佐々木信綱
○あゝ一年（先師一週年忌）文學士 尾上柴舟
○湯の宿……大塚楠緒子
○冬季吟……巖谷小波

○家庭と下女との關係……潮月
○御題お伽噺 木村小舟

▲美文▼（當選文）

○美しい水、清い水……佐々木きく代
○初春……鳴野みさ子
○山里の秋の夕暮……山下娟婦子

▲消息文▼（同上）

○雪見に招く文……ゆかり女
○虚飾を戒むる文……呉たけ子
○出征の兄に遣す文……山本菊子

▲雜文▼（同上）

○案山子……杉原孝子
○家庭日記……小山かく子
○冬の朝……平川遊幾子

▲小説▼（同上）

○巖上の初日出……渡邊紫雲女史
○初戀……高橋つる子
○追分節……小島せい子

▲新體詩▼（同上）

○野[illegible]……文枝女史
○樂園賦……大島菊子
○星……山田露子

▲短歌▼（同上）

○元日（中村まつ子、○入江秋子、○雁（作山美子、○萩谷ちよ子）

▲俳句▼（同上）

○亂題 古見梅露、千代延俊子、野口花子）
其他編輯だより、雜報、投稿規定、懸賞等は本號に載す

（戊の五）

☞歳暮年始

葉書帖

POSTKARTEN ALBUM

葉書百五十枚挿込用大判總クロース頗美本

實價金八拾錢　小包郵税二百匁

葉書保存用として武内桂舟君が歐米最新式を參酌し大に改良を加へたる新意匠にて最優美に最堅牢に裝釘せるを以て机上の裝飾書架の珍とすべし

發行元　東京日本橋本町　博文館

進物好適品!!

日本葉書會出版

美術繪葉書目録

▲日露戰爭繪葉書
1 海戰之部第一輯　石版極彩色（六枚）金拾五錢
2 陸戰之部第一輯　木曜會圖案（六枚）金拾五錢
3 旅順の海戰　寫眞彩色刷（十二枚）金拾貳錢
4 在韓之我陸軍　附録軍歌（十二枚）金拾貳錢
5 海戰之部第二輯　渡邊審也畫（六枚）金拾五錢
6 陸戰之部第二輯　和田英作畫（七枚）金拾五錢

▲旅順陥落紀念　中村不折畫　石版極彩色（六枚）金拾五錢

▲東京名所繪葉書（上下）コロタイプ着色（各六枚）各金拾參錢

▲今樣美人葉書（上下）同（各六枚）各金拾參錢

▲花鳥繪葉書　野口小蘋、跡見花蹊女史筆（六枚）金拾五錢

▲戰役紀念葉書　秋冬　石版極彩色コロタイプ（六枚）金拾五錢

▲戰地寫眞葉書　寫眞版六色刷（十二枚）金八錢

▲日本美人　水野年方畫　石版極彩色（六枚）紙包金拾五錢　箱入金貳拾錢

▲婦人と小兒　梶田半古畫　石版極彩色（六枚）紙包金拾五錢　箱入金貳拾錢

▲花と女　寺崎廣業畫　石版極彩色（六枚）紙包金拾五錢　桐箱金貳拾錢

▲家庭繪葉書　コロタイプ彩色（十二枚）箱入金參拾五錢　桐箱金四拾錢

▲繪葉書花暦　中澤弘光畫　石版彩色浮出し（十二枚）箱入金參拾五錢　桐箱金四拾錢

▲（洋畫）巳の歳繪葉書　七曜表付　（和田英作、五姓田芳柳、三宅克巳、山下藤太郎、久保田米齋、中澤弘光）畫（七枚）金拾五錢

▲（日本畫）巳の歳繪葉書　（川端玉章、寺崎廣業、梶田半古、尾杉月耕、水野年方、武内桂舟、跡見花蹊）畫（七枚）金拾五錢

▲新意匠繪葉書　頗珍品…………

博文館七大雜誌前金表

太陽
●毎月一回　一日發行
●外に定期增刊年四回
▲正價一冊卅錢郵稅一冊參錢○四冊金壹圓拾五錢○八冊金二圓貳拾錢○一六冊一ヶ年分金四圓貳拾錢●外に郵稅を要す

實業世界太平洋
●毎月二回、一日十五日發行
●外に臨時增刊
▲正價一冊十二錢郵稅一冊壹錢五厘○六冊金六拾八錢○十二冊金壹圓參拾五錢○廿冊金貳圓六拾錢●外に郵稅を要す

文藝俱樂部
●毎月一回、一日發行
●外に定期增刊年四回
▲正價一冊廿五錢郵稅一冊貳錢五厘○四冊金九拾五錢○八冊金壹圓八拾錢○十六冊一ヶ年分金參圓五拾錢●外に郵稅を要す

少年世界
●毎月一回　五日發行
●外に定期增刊年四回
▲正價一冊拾錢郵稅一冊壹錢五厘○冊金參拾八錢○八冊金七拾五錢○十六冊一ヶ年分金壹圓四拾錢●外に郵稅を要す

女學世界
●毎月一回、一日發行
●外に定期增刊年四回
▲正價一冊廿錢郵稅一冊貳錢○四冊金七拾七錢○八冊金壹圓四拾五錢○十六冊一ヶ年分金貳圓八拾錢●外に郵稅を要す

中學世界
●毎月一回、十日發行
●外に定期增刊年四回
▲正價一冊廿錢郵稅一冊貳錢○四冊金七拾五錢○八冊金壹圓四拾五錢○十六冊一ヶ年分金貳圓八拾錢●外に郵稅を要す

博文館發行 日露戰爭實記
●毎月三回三日十三日廿三日

日露戰爭寫眞畫報
●毎月八日發行

▲實記正價一冊拾錢郵稅壹錢五厘三冊廿　錢　厘九冊八拾三錢十八冊壹圓六拾錢卅六冊三圓五拾錢外に郵稅▲畫報正價一冊廿錢郵稅貳錢二冊九拾七錢六冊一圓拾錢十二冊貳圓拾七錢外郵稅

（甲種）博文館發行
圖書特別割引券

◉圖書御注文は此券を切取り御添付の事
●有効期限は明治三十八年二月十日限り
●期限中は定價の一割引を以て特賣仕候

●豫約募集中の圖書は豫約價の三分引とす
●館友は館友規定引の外尚圖書五分引豫約品二分引の事●總て前金の外無効とす

特別割引券
添呈

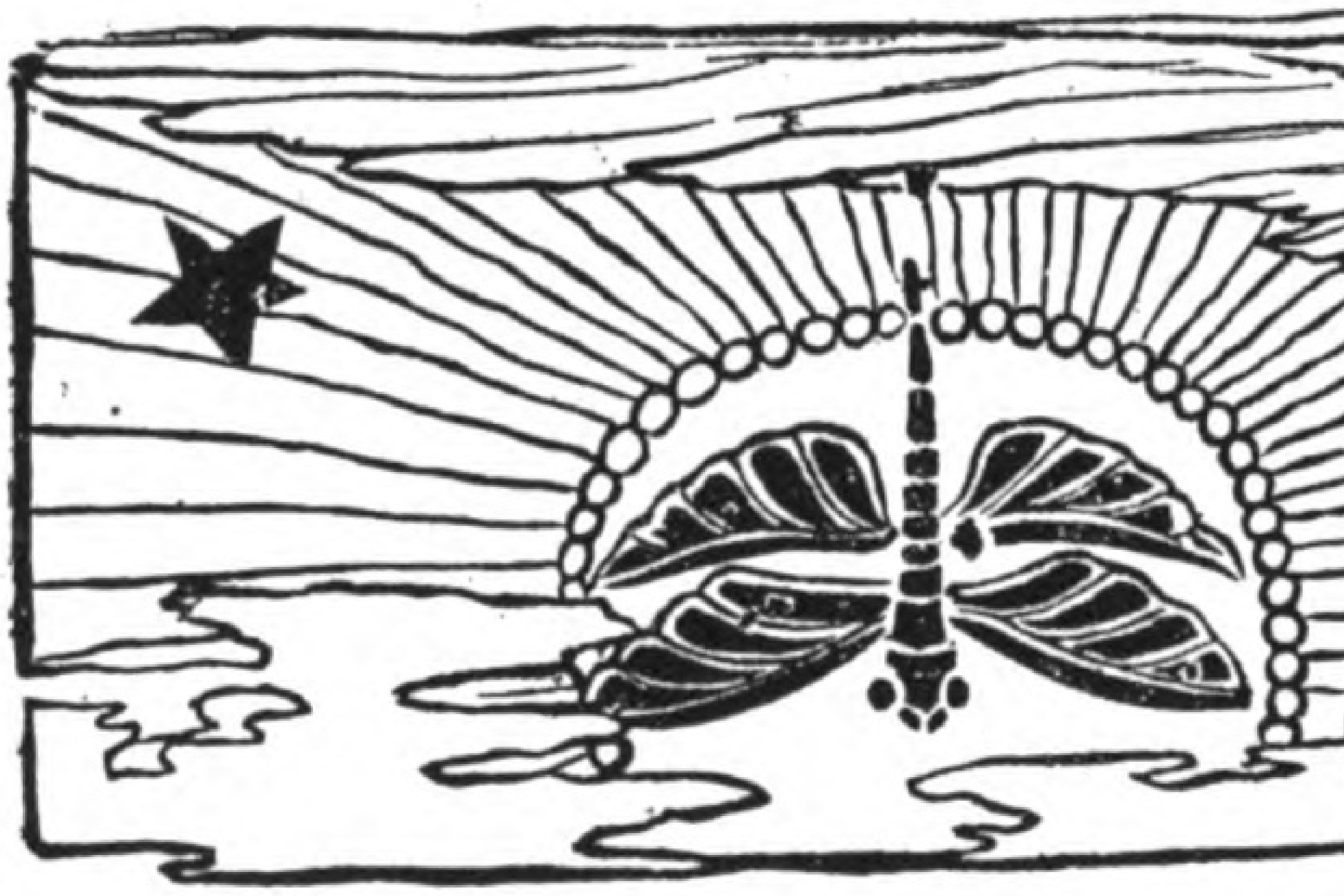
迎春の祝意を表し例年の如く圖書雜誌特別割引券を呈上し愛讀者諸君平素の御眷顧に酬ひんとす
●圖書御注文の方は甲種●雜誌御注文の方は乙種を添へ期限中御申込被下度希上候

（甲種）博文館發行
雜誌特別割引券

●雜誌御注文は此券を切取り御添付の事
●有効期限は明治三十八年二月十日限り
●期限中一冊賣は定價の五分引●冊數割引ある前金拂込は其金額の三分引とす

●館友は館友規定引の外割引せず
●前金御注文の外は本券の効用あらず
●御申込の節は博文館小賣係宛のこと

（戊の八）





第五卷第壹號

新年の感

海波をまき山嶽を震動し天地を驚かして飛龍昇天の勢を世界列國に輝かしたる辰年は早終を告て新に來たるは蛇のぬらくら者是外交の蛇の生殺になる前兆に非ざるなきか甚心懸りなれど、又よく思へば蛇は一寸にして人を呑まむとする氣ありといへば露國の大に比しては一寸の蛇たる日本の外交官も頭からグット呑てかゝる程其の膽を大にして煮ても燒ても喰はれざる露國の虛喝に驚く事なく詐僞の手段に乘らずよく敵の急所を覘ひて咬付いたらいつかなく放つ事なく終に大驚を發し閉口せしめて鎌首をオッ立どぐろを卷き、ザマを見ろといはぬ計に舌を吐くに至らば如何に愉快の事ならむ、斯く有てこそ國の存亡を賭して戰ひたる甲斐は有なれ去年以來幾十萬の軍人が骸をさらし億兆人民の熱血を絞りたるをよもや空しくはせられまじ失敗は成功の基としもいふなるを遼東還附の先蹤に懲りて今度こそは大丈夫ならむ願はくは朝鮮を彼兩頭蛇の如くあちらへもこちらへもぬらくらせしむる事なく一刀兩斷サッパリと往生せしめたまへかしといふ。

人事暦

一月

休日｛日曜日＝一日、八日、十五日、廿二日、廿九日
　　 祭日＝三日元始祭、三十日孝明天皇祭

▲元日(舊暦十一月廿六日かのえね)──宮中に四方拜の儀式行はせらる、文武の百官參拜す、民間には初日の出を拜せんとて高臺又は海濱に集ふもの多し、又た惠方詣とて歳の吉方に方れる神社に詣て一年中の祝福を祈るもあり、また七福神詣とて七福神を祀れる神社佛閣を尋ねて巡拜するあり、▲二日──初荷賣始、夕暮より「お寶〱」の呼聲かしましく寶船を賣り歩く、▲三日──元始祭、祖宗皇靈を祭らせ玉ふ、一日より三日の間は各家々にて朝毎に屠蘇酒を祝ひ雜煮餅を煮て食し、年賀の回禮、年玉配り等松飾の間を往來す、▲四日──初卯、龜井戸妙義社に初卯詣す、政事初め、消防出初式、▲五日──新年宴會、▲七日──七草の節句とて戸々若菜粥を煮て食す、元日より七日までは松の内と稱へ市中の賑ひ元日に異ならず、此間家庭の樂しみは家族相集ひ、親戚朋友を招きて双六、加留多、トランプの勝負を爭ふ、毬や羽子を遊びて興なか〱に深し、▲八日──學校始め、▲十六日──藪入、閻魔の賽日とて市中商家は丁稚、下女に一日の暇を與ふ、▲二十一日──庚申、滿月、▲二十五日──初甲子、▲三十日──孝明天皇祭。

季節──六日より「小寒」、廿一日より「大寒」。寒風凛烈、肌を劈す、年中の最寒時にして北又は西の風殊に強く、生物皆な冬籠りして、虫類深く蟄に入り生意なし、獨り早梅、春に魁けて開く、花は水仙、福壽草、椿を見るによろし。

農事──麥の穗漸く萌え出でんとして、農人播種に閑なれば、便宜各種の閑事業に從ふ。

遊覽──寒梅を探ぐり、雪見の風流を遣るも妙、初卯には妙義詣り、初甲子には大黑天詣り、初庚申には帝釋天詣り、上旬より中旬に亘り本場所出世角力興行、都下にては淺草觀音、蠣殼町水天宮、虎の門琴平神社等最も賑はふ。

食品──白魚と獨活と淺草海苔の清汁、鯉こく、鮒の昆布卷、小鯛の酢漬、蝦の酢味噌、牡蠣の卸生姜、鮒の甘露煮、鹽鮭の燒物、伊勢えびの魚田、大口魚、烏賊、章魚、雁、鴨、陸芹、蜜柑、鳥獸肉等皆此月の好味なり。

時論

日本女子教育の變遷

嶋田三郎

廣義に解釋する女子の教育は古來ないではない、さりながら現時解釋さるゝ「女子教育」を以て目する事は出來ぬ。或點より見れば我國には嘗て女子の教育と云ふとはなかつたと云ふても過言ではなからう。余の見を以てすれば、我國で眞の女子教育の形體を備へたのは明治の初年であらう。而して夫が殖民と云ふとと連帶して起つたのである、北海道に始めて開拓使を置き、米國に則りて大に全地に殖民を計るや、教育ある婦人を起さねばならぬと認めた結果、當時我國に駐劄して居つた米國公使デロング氏等の斡旋により、女子を海外に留學せしむるととなつた、其撰に入つたのは今の大山夫人、瓜生夫人、津田梅子氏等五名の少女であつたのは人のよく知る處ろである。これ當時に於ては實に破天荒の事であつた。

次てモールと云ふ米國の教育家が我が文部省の顧問となるや、鋭意女子教育の爲めに計營し、先づ女子高等師範學校を起し、教育ある模範的婦人及び教育者を養成することに努めました。又た一方に於ては基督教の傳導者として渡來した宣教師等は、各處に女學校を設立した爲めに、女子教育の事業は俄然として發達し、何れの學校も生徒が中々に多かつたのである、併し當時は全く米國風の教育でした。斯樣に日に月に進歩發達して居る矢先

に、更に此女子教育の必要、殊に外國風の教育を盛ならしめざるべからざる一の動機が來ました。これは外でない條約改正と云ふとてある。これ迄婦人は社會の一要素と認められず、唯男子の附屬物の如くなつて居つたが、外國と交際が繁くなり、且つ我國に不利な條約を改正し樣と云ふには、如何にしても是迄の有樣では六ケしいから盛に其教育をやりはじめたのである、それのみならず、風俗の上にも大に歐洲風に倣ひ、衣服は洋裝に改められたるもの多く、且つ舞踏の如きも、大に流行したのである、斯樣に一も西洋二も西洋故、此頃の女子教育は寧ろ風俗改良方法の一つと見做されて居つたのである。

すべて物が極端に走ると必ず反動の起るのは世の常態である、女子教育上にも又この有力なる反動が起つて來た、即ち歐化主義に全く反對なる保守的教育が頭を擡げたとてある。これが中々勢力が附て來た結果として是迄の教育主義に一大蹉跌を來したのである。我國は外國と異なる所がある、日本には日本の國風がある、されば唯だ徒らに外國のみを眞似るのは良くないと云ふのは其説の要領であつた、それ故今迄旭日東天の勢であつた米國流の教育は、遂に大に衰へて來たのである、これ實に明治十八九年の頃であつた、斯樣に極端より極端に急轉するのは、過渡時代の習慣亦た止むを得ぬ次第である。

暫くして折衷主義が起つた、唯だ外國風てはよろしくないと同時に保守主義もいけぬ、と云ふので、それから内外人の協同と云ふ風になつて來た、それが漸次進歩改善し、遂に今日に至つたのである。

大要斯樣な順序で我國の女子教育が發達して來たのであるが、一方には教育ある婦人を輩出して來る、一方には世の中も進歩して來た爲めに、社會が人類平等と云ふとを認めて來た、其必然の結果として、婦人の位置にも又自然に變化を來した、これ實に社會の教育の然らしむる所である、併し婦人が世に立て公共事業に立働くと云ふことはあまりすくないとて是も一部に限られて居る觀があつたのである。彼の二十七八年の戰役に於

て病傷兵の慰問、赤十字社事業のとなども隨分あつたが、未だ何となく男子の附屬物と云ふ樣な風は脱しなかつた。然るに本年日露戰端を開きてより、一般婦人の奮ひ起り獨立して立働く樣になつたのは、誠に目醒しき樣に思はるゝ、これ一は國家非常の時期であるから古き教育を受けた人も新教育を受けた新婦人も、共に運動する樣になつた、之れも社會の氣運の然らしむる所であらうか。

婦人の斯樣になつて來たのは上述の如く教育普及の結果ですが、今一つは婦人、家庭等に關する新聞や雜誌の多く現れたことゝて、是等は一方には教育された婦人の多くなつた事を説明すると同時に、婦人も亦たこれにより、大に教育せられたのである。さて斯樣に教育ある婦人か多く出て、獨立して社會公共の事業を立派になして行く樣になり來つたが、此際婦人自身も充分發悟して自ら信ずる所を行ひ、男子の助力を待つと云ふ樣な依賴心を持たぬ事にしなくてはならぬ、それと同時に男子も亦た之れに對し敬意を拂ひ徒らに冷笑的口調を用ゆるとなからん樣なさねばならぬ、一般の有樣を見ると婦人が萬一過失あれば滑稽的に或は冷笑的に批評して之を苦しむるが如き感がある、これ等の過失は男子には常にあり勝の事で別に目新しくもないが、唯だ婦人が之を爲れば稀にあること故、何となく物珍らしい樣に感じがあるからかも知れぬ、兎に角一般の樣を見るとまだく婦人の位置を認めて居らぬ者も隨分あるから、斯樣な同情のない批評も出て來るのであらう、どうか此際男子も婦人もお互に注意し、前にも申た樣に婦人は男子の助力を賴む樣な心を去り自ら任じて其局に當る樣に努むると同時に、男子も亦た眞面目なる精神を以て之に對し、兩々相待つて國家社會の發達を計らねばなりませぬ。



婦人の新勢力

女子高等師範教授　下田次郎

開闢以來日本の婦人が一番働いた年は逝いた、本年は何うであるか、今から一年の後が待たれる。何が日本の婦人を刺戟して斯くは働かしたかと問はゞ、言ふまでもなく戰爭である。しかし婦人はこれが爲に日常の仕事を廢しはせなんだ、爲るだけの事は結構仕て逾つたのであるから、詰り軍國に對して盡したゞけは餘分の働きである。人は氣の出し方で隨分働けるものである。

從來日本の婦人は働ける頭と手足をもちながら、あゝすな、こうすなて、思ふように活動が出來なんだ、それで日本の婦人はこの位の事しか出來ぬものと、人も思ひ、自分も信じて居つたが、なに働かして見ればなかなか働けるのである、現に今の婦人の働き方は何うであるか、立派といふの外はあるまい。是迄は婦人を束縛して、力を殺して居た、何とも損なことてある、是からは大に働かして、充分其力を伸ばさしめねばならぬ。

しかし若し今日の婦人の活動は戰爭の勢に驅られた一時の附け元氣てあるとすれば、左程有り難くはない、此元氣此活動は戰爭が濟まうが濟むまいが、日本のある限り續かねばならぬ、室咲の梅のように、暖氣に喘されて咲いたものではいかぬ。しかし幸に今の婦人は遣る氣てある、非常な意氣込てある、戰後も逆戻りの氣遣いはないようてある、そうなくてはならぬ。この機を外さず、婦人は是迄抑へ付けられた腰腰を伸ばして、家庭は勿論、社會、國家の爲に働き出さねばならぬ、今は婦人の活動を迎へて居る時てある、今遣り損へばお仕舞てある、その代り、今旨く遣れば婦人の價値はグツト上り、長へに家庭、社會其他に於て高い位置を占めるこ

とが出來るのである、今は實に婦人の浮沈の瀬戸である。兎に角婦人が家庭以外に、國家、社會あることを意識して、其方にも働き出したことは、お正月より何より目出度いことである。償金や土地の獲得は、戰爭の直接の利益で無論大ではあるが、それよりも、斯うしては居れぬ何でも働かねばならぬといふ氣に、男子と共に婦人をもならしめた間接の利益の方が大きいかも知れぬ。

神武天皇即位此方二千五百餘年の間、生れる時もあらうに、今の此代に日本に生れ合せた婦人は、果報なものである、何時の代、如何なる時か今日の如く日本の婦人が自由に働くことが出來たか、日本が是迄にない大角力を取り、世界の大關にもならうといふのに、婦人計りが元の夢を見て居つては困る、何でも元氣を振り立てて、今の時世相當に働かねばならぬ、男子もその積りで働いて居る、婦人もしつかり遣つて貰はねばならぬ。實に昨年位日本の婦人の働いた年はないと言ふた、しかしそれは是迄の中であつて、此後を含んでは居らぬ、今年は戰爭の有無に拘らず昨年よりも一層働かねばならぬ、人は進む爲に年を取るので、老る爲に年を迎へるのではない。

働きにも色々ある、例へば兵卒は戰線に出て鐵砲を擊つのが役である、將校は兵卒を指揮して鬪へばよい、大將は戰局を案じ謀略を廻らして、軍に運動の方針を授け、命令を下すのが任である、その中一番身體を働かすものは兵卒で、將校此に次ぎ、大將は左程働かぬようである、しかし身體は働かさぬが、その代り頭を使ふて居る、如何に個々の兵卒が勇敢でも、之を指揮する將校なく、統一する大將がないならば、戰は出來ぬのである、熟ら今の日本の婦人を見渡すに、繃帶を捲き、靴足袋を編み、被服を縫ふが如き「兵卒」の仕事をする者は幾らでもあるが、婦人の活動を指揮する「將校」は少く、大規模に劃策し、深謀遠慮を以て、他を統一して行くといふ「大將」の器に至つては、情ないが殆んどないのである。陣笠連は餘る程あるが、采配を振る人がない、

今の日本婦人には棟梁の材がないようである。馬車に乘つた樂ら相な婦人は澤山あるが、それはほんの樂ら相なので、實際は樂くも何ともない、何か重大な相談となると、何れを見ても「山家育」で、役にたゝぬ。從來の教育は女子に手足を動かすことを教へて、頭を働かすことを忘れて居た。それで命令を受けて機械的に働く婦人計り多くて、大きく、深く考へる婦人がない、無論大多數は手足を動かす方で、それがなくては仕事はできぬが、それ計りでは困る、大將が居らねばいかぬ。それは從來婦人を視ること餘りに低く、待つ所餘りに小なりし結果に外ならぬのである、西洋殊に英國には此棟梁の材たる婦人がなか〳〵ある、男子の手を藉らずに、婦人が寄り合ふて、婦人の指揮の下に大きな事を行ふて居る、我國にも會長とか會頭とかに、よく婦人の名は見へるが、多くは看板の人形で、裏面の男子に操られて、無意味に踊つて居るのである。自分は看板でなく、本當に力があつて、大規模に我れある働きをなす婦人の出ることを希望して止まぬのである。

しかし物には由て來る所がある、幾ら氣ばかり大きくても實力が之に伴はねば、出來るものではない、即ち婦人の教育を高め、其素養を作ることが必要である、大學の門戸も行く〳〵は女子に開かれねばならぬ、兎に角今日よりも一層學識あり思慮あり特色のある婦人が出ねばならぬ、男子のみに教育があつて、女子は話せぬといふ文明は片輪である、一國の文明の程度は其女子の精神の開明の度が最もよく之を代表する、一體今の女子は何ういふ氣で教育を受けて居るか、何ういふ氣もない上の空で學校に行つて居るのが多いのでないか、そういふ氣だから學校が濟むと學問は人のことのようになつて仕舞ふ、何うも男子ほど女子は學問に氣が入つて居らぬ、深い奥のある強い性質の婦人が出ぬ所以である。

我國の婦人は自重心が足らず、餘り自分を安く見て居る、我國では「自分は女だから」といふことが屢々誤用さ

れ、濫用され、又惡用される。「自分は女だから」「女らしくする」なら、此上はないが、實際に「自分は女だから」の次の言葉は、「どうでもよい」にあらずんば、「とても駄目」である。これ自ら重んじ自ら賴む代りに、自ら見限るものである。これは婦人の謙遜ではなくて、自貶である。自貶は品位を墜し、人を意氣地なくするものである、謙遜は美德であるが、自貶は惡德である。

嗚呼婦人に棟梁の材はないか、袴をはき、書を脇挾める幾萬の靑年女子の中に、一人の精神上の女王たるものはないか、「偉人」は唯男子の爲に作られた名詞ではない。戰を以て幕を開ける明治三十八年は、如何なる女子の奮戰力鬪を見るであらうか。自分は今から刮目して待つて居るのである。

婦人の新職業

羽仁もと子

私の爰に婦人と申しますのは、主に女學校の卒業生を指して居るので御座います。近來大小女學校の卒業生て職業を求めて得られぬ向が、非常に多くなりました。その原因は數年前に比べて、著しく女學校の數が多くなり、卒業生も年一年、餘程の速力を以て增して行くのに、一方に於て、女學校卒業生の仕事といへば、その大部分は今もなほ、女敎師と定まつて居るからでありませう。勿論銀行や會社でも、ポツ／＼婦人を用ゐるやうでありますが、目下の所では、その俸給も仕事の種類も、共に高等女學校以上の卒業生を滿足させることが出來ない樣子で御座います。それゆゑ電話交換手などは元より、銀行會社等の仕事も、まづ當分は高等女學校の

卒業生以下の婦人を、吸收する所と見ねばなりません。また婦人記者といふヿも、近來此所其所に云はれて居るやうてありますが、本業の餘暇に筆をとるといふやうなのは別として、専門の婦人記者は、差當りその需用が餘程少いと思ひます。假りに多いとした所て、この職業は、今の多數の日本婦人には、最も出來難い仕事てあります。ナぜなれば詩人や小說家などは、多少違うてありませうが、普通の記者に最も肝要な資格と云へばまづ何よりも常識と見聞の廣いヿてありませう、そしてまたその智識も、種々の方面に最もよく行渡つて居らねばなりません。この様な種類の婦人を出すといふヿは、今の日本婦人の境遇と女學校の教育には、殆ど六ヶ敷いヿてあります。これが即ち婦人記者の志望者と、また多少實際に試みかけた人々をして、成効なしに終はらせるヿの多い、根本の源因てありませう。て私の愛に女學校卒業生の新職業と申しますのは、新聞雜誌記者幷に、銀行會社以外の仕事てあります。

それは他てもありませぬが、近頃資産のある家て、種々家庭の事務をしてくれる、婦人を求めて居る所が澤山あります。そして皆適當な人を得かねて居るのてす。といふものは、教育のある婦人の側に求めずに、矢張普通の仲働きの氣の利いたものてもと、いふやうな方向にのみ、探索の目をむけて居るからてあります。そしてまた職業を求めつゝある教育ある婦人も、多くの家庭の中に、好箇の働き場所のあるヿを、氣附かずに居るからてす。私は差し當り、自活する必用のない婦人ても、他日家を持つための準備として、この職業に從事するとか、餘程便利てあらうと思ひます。そしてまた收入を得る目的の外に、ある種類の婦人にあつては、立派なる一箇の事業として、從事する程の價値ある仕事だと思ひます。

學校出、殊に女教師などをした婦人の、家事に疎といふのは、決してその人々の天性てはなく、全く永い間の氣の持ちやうと、習慣のためて御座います。即ち今の所て婦人の職業は、殆ど女教師と定まつて居りますゆゑ

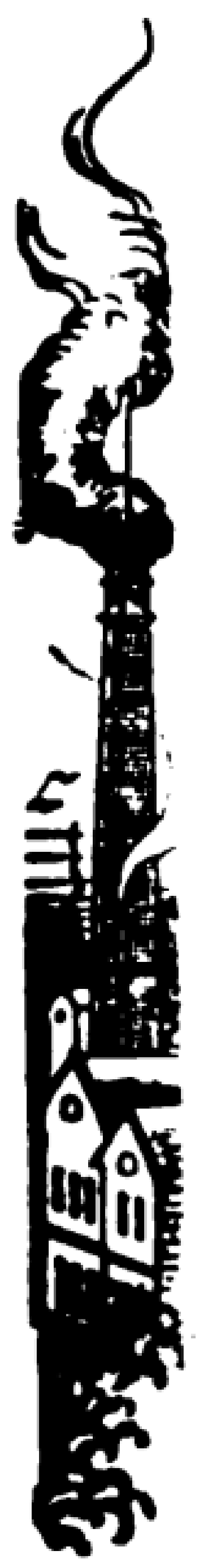
學校に居る間も、その積で勉強し、愈々教師になると猶のこと、その注意が家庭を離れて、自然教師といふその仕事に、必要な方面にのみ傾くからのことであります。若しも教育ある婦人の職業が、家庭の方面にも、教師に劣らず澤山あると云ふことになりますなら、卒業の後職業に從事する必要のある女學生は、まづ必ず考へるでありませう、自分の性質は教師と家庭の仕事と、果して孰れに適するであらうかといふことを、そして愈々家庭の仕事を擇んだならば、學校にある間より、學科の種類をはじめ、その他の事に至るまで、自然未來の職業に都合よき方に、多くの注意を拂ふやうになる譯で、これらの婦人が卒業後、女執事として多くの家庭に入り、その仕事に從事しながら、追々熟練の功を積み、益々その家庭に重寶せらるゝと共に、他日自ら家庭をなしたる時のために、最も有用なる經驗を得ることが出來ませう。なほこれらの仕事を希望せる人々が、學校卒業の後に於て、半年もミッシリと、特に料理や裁縫及ミシンの使用法等を學んだならば、殊に完全にその職務が果し得られるでありませう。

更に以上の如き女執事を、雇ふ側の方々のために考へて見ますのに、或人は、家庭の事務や仕事に經驗のない女學生などを頼んだ日には、役にたつやうにするまでに、此方の骨折が一通りであるまいと、思ふかも知れません、併しながら、一週間とか二週間とか、試みた上て雇入れをきめるなら、萬更不向きな人を頼む恐れはありますまい。已に當人も家庭の中の仕事を望み、此方も試みた上て、まづよいと決めた位の人ならば、普通の無教育な仲働きをならすよりは、ドンナにか樂てせう。そして猶無教育な婦人なら、如何にならした所で、日常の雜事以上に間に合うものにはなれませぬ。之に反して教育のある人て、その人柄にさへ信任が措けるなら主婦の代理として、交際の一部を擔當させることも出來、また留守をまかせるにしても、教育のないものに、十言の云ひ置きをするよりも事理の分つた人に一言頼んで出る方が、却てよく自分の意志を汲み分けてくれると

いふやうな譯であります、そしてなほその婦人に、料理裁縫の心得もあるならば、仕事配りや賄方も、或程度まで任せて置くと、自身の病氣その他の事故ある場合にも、大層重寶でありませう。

そしてなほ主婦たるものゝ、この女執事に對する心得を云ひますならば、まづ第一にわが家庭のため、またその女執事の將來のために、一方に於てはこの婦人を、家事の見習人であると思ひ、自身は師範の位地にあるものとして、充分の親切を以て、教へ導かねばなりません。そしてその待遇も、從來の雇人ほどに不自由なとでなく、何曜の午後とか午前とか、一定の時日に外出を許し、その時間には、買物に行くなり、友達を訪ねるなり、或は稽古に行くとも、演說を聞きに行くとも、當人の自由にまかせ、なほ相應と思はるゝ部屋一つを與へ成るべく愉快な生活をさせるなら、必ず喜んで忠實に骨折るでありませう、俸給などは、その人の伎倆幷に仕事を托する度合によつて、追々增して行くやうにし、始めは凡そ普通の女學校出の最初に小學校に雇はれる位の振合(その中より食費を減じて)で充分でありませう。私は少し主婦が骨折つて、これらの女執事を半年もならしましたなら、仲働きと分りのわるい男執事と、たしかに二人前の用事が出來て、至極經濟的でもあらうかと思ひます。

なほまたある事情のために、生涯結婚せぬ人、または再緣を嫌ふ寡婦などが、この種の職業に從事して、充分に熟練の功を積みましたなら、その雇はれて居る家庭に於ても、二なく重寶せられ、昔日の老女のやうな位地にもなれませう。そして獨りかゝる種類の婦人のみならず、近き未來に於て、中流以上の家庭に、今風の教育ある女執事の需要が、必ず盛になるに相違ありません。(完)

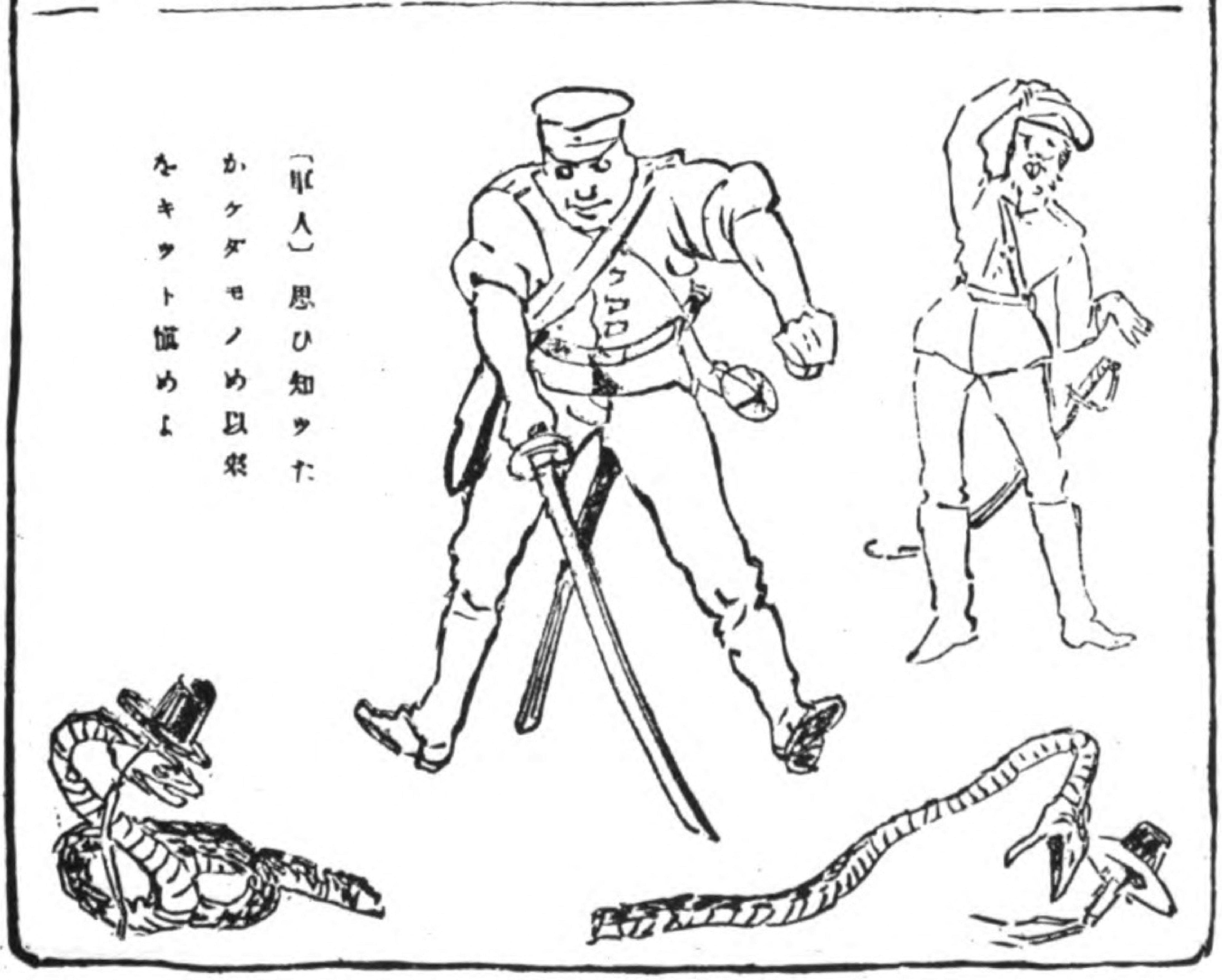


13 巳歳の漫畫 (1)



〔蛇〕おのれ剛慾非道の荒鷲め咬み付いたら放すものか
〔鷲〕アヽ苦しい〱どうか勘辨して呉れ
〔蛇〕ソレ見ろ思ひ知ッたか大馬鹿め
〔鷲〕アヽヒドイ目に遭ッた馬鹿々々しい


〔兩頭蛇〕ドチラへも動めて置かればならぬこれでなくてはオレの身が立行かぬから


〔軍人〕思ひ知ッたかケダモノめ以來をキッと愼めよ

栗野公使夫人

露京滯在中の生活

婦人記者

昨日までは朗かに澄み渡りし小春日和の今朝は少しく雹を雜へ、一時雨パラ〳〵と色付ける木梢を掠め溫度俄かに降つたので、滿洲出征軍の冬營に一方ならぬ感謝を爲しつゝ赤坂檜町に栗野前駐露公使夫人を訪問致しました。實に十一月六日の午前の事です。白木の冠木門より小砂利を敷き詰めた廣道に轍を印しつゝ、矮柏に熊笹をあしらつた植込を廻つて御玄關より伺ひ、和洋折衷の應接間へ導かれました。其處で先づ眼に着くのは御夫婦の油繪肖像で、就中洋裝夫人の朱唇は笑を含んで來客を歡迎せらるゝ趣を認め得られたのです野津兒玉兩大將の出征送別會の大寫眞を西の小壁に揭け、各國貴紳の寫眞を此處彼處に飾られ、或は屛風に挿まれてあります。書棚には洋書許多を載せ、女神の塑像を始め、象、牛などの陶製置物を卓上及ひ床の間に位置面白く配置され、中央の卓子には英文戰爭記二册を積まれてありました。廣き御庭の芝生は一面に白茶色の絨氈を展へたる如く、頃日霜を帶び初めし紅葉は稚兒の掌を開いて、雨後の秋光を受け、赤、紫、黃、綠、一層の輝を呈し、周圍に參差せる松、櫻、八ツ手などを越えて、一樹町の家並、山王の森を東南に



望む景趣に恍然として我を忘れ居るところへ、南側の硝子障子を靜かに開いて入り來られし夫人は、鼠色小紋鹽瀬の小袖に紋羽二重の被布を召され、白い小菊の模樣ある藍鼠縮緬の半襟は、細やかな白い頸元に照合よく、面長で鼻筋通り、涼しい眼眸に慧敏の光を湛へ濃く黒い髪は油氣の少い前髪の婆娑として束髪に結ばれ、スラリとして丈格好は洋裝の風姿嫵御立派ならんと想はれました。記者は先づ御夫婦油繪の筆者を御尋ね致した所、夫人は莞爾打笑まれつゝ——

▲肖像

これは五年前に羅馬で描かせましたので、餘程若う御坐います。ハイ筆者は伊太利人ですが、此時丁度初めて拵えた着物を着て撮つた寫眞で描かせました、出來上つた折には、少しも肖て居りませんで、全然自分ちや無いやうでした。それから一日だけ寫生させました所が、餘程肖て參りましたので、畫工が今一度寫生致したいと申しましたけれども、忙しいのでツイそれなりて仕舞ひました。一躰日本人の肉色は、大層むづかしいものだと畫工が申して居りました。

▲海外の御住居

栗野は最初米國へ參つて、それから伊太利へ轉じました時、私を呼び寄せましたので、私は丁度明治二十九年に彼地へ參りました。それから佛蘭西に移り、又露亞西へ移りましたが、露西亞は二年と二週間で引拂つたので御座います。何處へ住ひましても、染んで見れば同じ様で、立つ時には矢張り名殘が惜まれますよ。畢竟住居に名殘が惜しい氣味もあるので、今度なども公使館が立派に普請が出來た所でしたから、各國公使の夫人達も、貴女は日本へ歸るので嬉しいでせうが、折角立派になつた御家が亂暴になるだらうと思ふと殘念でなりませんなどゝ申され、私も善い心持も致しませんでした。

▲令息

私は六人の男兒を持ちましたが、一人だけ缺けましたので、二十歳を頭に十八歳、次が十六歳、十二歳、末が十歳で御座います。長男は熊本の高等學校へ入學

致して居り、次男と三男は、飯田町の曉星學校へ通學して居ります。而して十二歳と十歳のは福岡の栗野の母の許へ參つて居りますが、私共が歸朝しましたので近々母諸共に出て參る筈で御座います。外國へは次男と末男とを連れて參り、あとは母と私の妹に任せて置きました。次男は長い間關節炎を患つて難儀致し強く痛い爲めに泣いてばかり居ましたので、栗野が役所の用を了つて歸る時になると、泣聲を思ひ出して厭な心持になると申すくらゐ耳に附いて居りました私も其爲めに方々へ轉地療養に連れて參つたりなど、隨分心配致したのです。それで外國へも其見を連れて往つた次第ですが、幸ひに彼地へ參つてからは、攝生が度に適つたと見えて、大きに宜しくなりました。日本に殘して置いた四男は脊髓病で、私共が洋行する時にも、迚も六づかしいと諦めて立つたのですが、間もなく病死の報が參りました。併し子供の事ではあり、外國人に吹聽すると面倒だと栗野が申して默つて居りましたから、平常の通り夜會にも招待され、芝居へも誘はるれば行かねばならぬ次第で、隨分心苦しう御座いました。



栗野公使夫人橇旅行の仕度

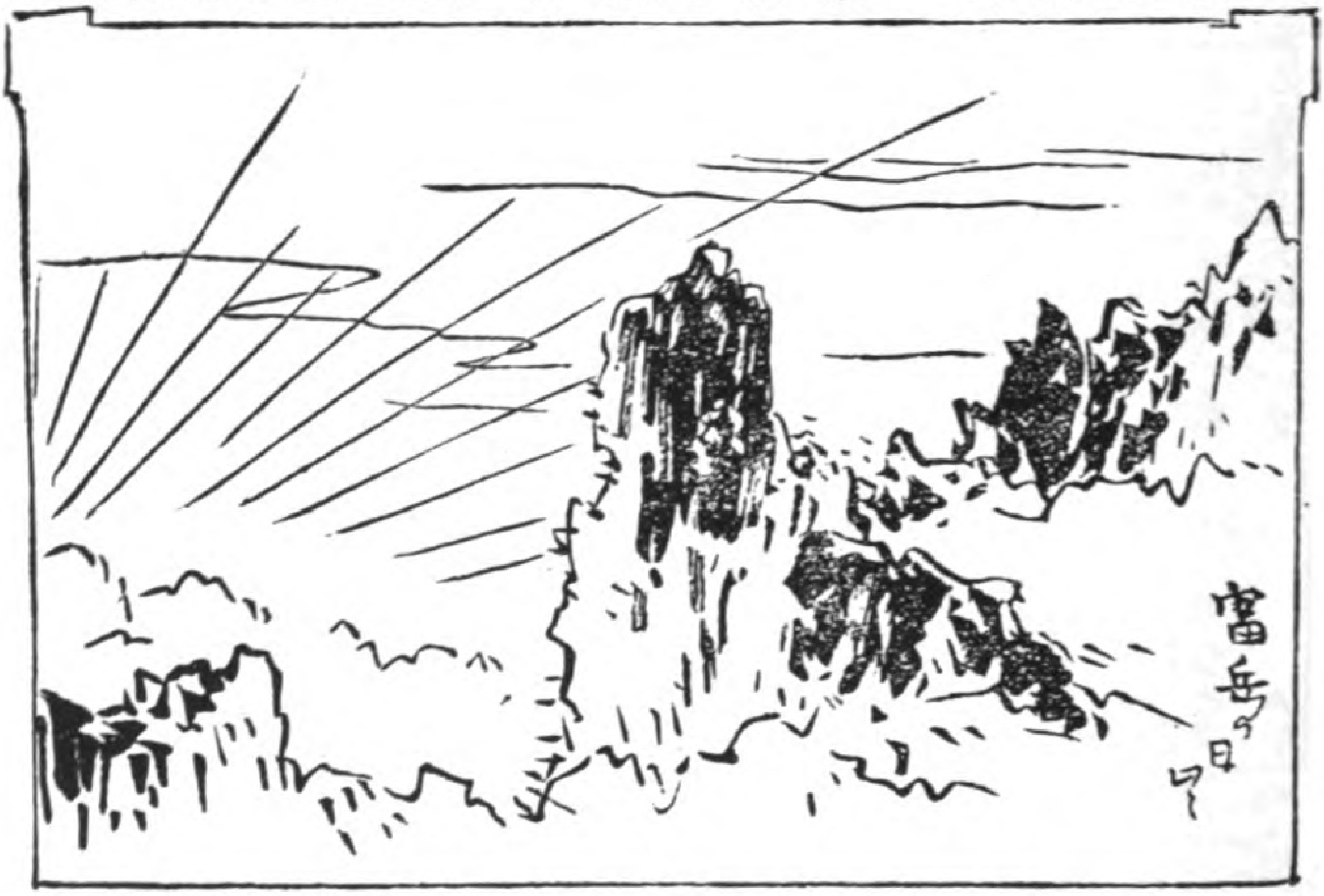
▲露の雇人と別る

日本からも下婢を連れては參りましたが、彼地の事情を知る爲めに露國の下婢をも使つて居りました。露西亞では總躰男より女の方が善い人間があるやうですネ私共で雇ひましたのは、代々日本公使館へ雇はれて居つた夫婦者で御座いましたので、雇ふ時には多分人擦れた使ひ難い女だらうと思ひましたが、使つて見ますと實に珍らしい氣立の善い下婢で御座いました。冗口は少しも申しませず、一心に働いて主人を大切に致すと云ふ風で、私が毎度交際の爲めに夜分遲く歸宅致し、時として二時頃になりましても、チャント起きて待つて居り、馬車の音がすると楷子段の處へ立ち迎えて居るので、私が「汝は朝が早いから先へ寢るが宜い」と度々申しましたけれども、「イ、エ奧樣こそ御交際の御場所で嘸御氣骨も折れ御疲れでせうと思ひますと、却々先へ寢られませぬ」と申して居りました。下婢の夫は少し足りない人間の上に酒も飲みますので、下婢は其償ひの積りで尚更多く働くと云ふ風な夫思ひで御座いました。夫を門番のやうな役に使ひ、下婢夫婦の部屋は別に與へて置きましたので、大層喜んで居つたのです。他の處へ奉公しては、萬事斯う云ふ都合にばかりも參りませんし、給料も日本公使館ほど取れませず、第一夫婦者を雇ふ家が容易にありませんから、奉公して居て意氣地のない夫の世話が出來ません。それですから、今度私共が引拂ひますのを、如何ほど落膽したか、愈々引拂ひに就て雇を解くと話が定まると、ワイ〱泣いてばかり居て、實に可愛想で御座いました。他の男の雇人達も力を落して別れを厭がりましたが、中にも一番氣の毒でしたのは馬丁で御座いまして自分の着物を持つて來て返さうとしましたから、其樣な物は皆御前に遣ると申して、尚ほ金子を遣はしました所が、大の男が大聲あげてワア〱泣き出したので傍に居た者は皆貰ひ泣きをした仕末で、栗野も弱り果てゝ頭が痛くなつたと申しました。

▲家庭教師の悲歎

連れて參つた子供の教育の爲めと、私が少しばかり語學を習ひます爲めに頼んだ家庭教師は、生れは露西亞

ては無いさうですが未亡人なから
て、何の公使が露西亞へ行らし
つても、此教師を御雇ひになつ
たのです、永らく日本人と染ん
だ故か、非常に日本贔負で露西
亞嫌ひの婦人で御坐いました、
事件(國交斷絶)が薄々知れまし
て以來は、それとなく暫く稽古
を休んで、家庭教師の來るのを
斷つて置きました處、愈々發表
してから、他の知己には逢ひま
せんてしたが、此人だけは是非
一度參りたいと申すので、一寸
逢ひましたのです、公使館へ參
つて私の顏を見ますと、物も言
はずにフラ〱と倒れて氣が遠
くなりましたので、吃驚して藥
を飮ませなどしました所、漸く



正氣に返りそれから、種々悲し
い事を言ひ出して別れを惜み、
何ぼ公使館附の日本軍人に上げ
て與れとて、小さいコップを出
し、是れは私が日本軍人の勝利
を祈る證です、何れ御歸國の上
は戰地へ向はれるてせうが、陰
ながら武運を祈つて居りますと
申しました。此家庭教師は頃日
一人の娘を連れて、養生の爲め
に瑞典へ旅行して居るさうて、
先達て寄越しました長い手紙に
何時までも瑞典へ留りたいが、
或事情の爲めに露西亞へ歸らね
ばならぬと書いてありました。
又此度の戰爭は何卒日本の大勝
利に歸せんことを神に祈つて居る
と、如何にも眞情を籠めて申し

越したので御座います。

▲二月五日の夜會

二月は御承知の通り露暦の一月で、毎年此月には宮中に演劇が催されるのですが、五日の晩に丁度演劇があつて、私共も參つて居りました所、何時も必ず二時頃迄かゝるのに、其晩は早く切り上げ十二時に仕舞になりました、私共は無論承知はして居りましたが、彼地でも其邊の考があつたので、演劇も寂しく早く切り上げたものと見えます。歸りの時刻の狂つた爲めに、各國の御客方の御迎馬車が間に合はず、電話を掛けて呼ぶやら暫くゴタ／＼しました。私共も出る時に大抵十二時頃に迎ひに參るやう申し置きましたが、馬丁はナアに二時でなければ御仕舞にはならぬと極め込んで居りましたので、矢張り長時間宮中で待つて居つた御仲間で御座いました。

▲瑞典の大歡迎

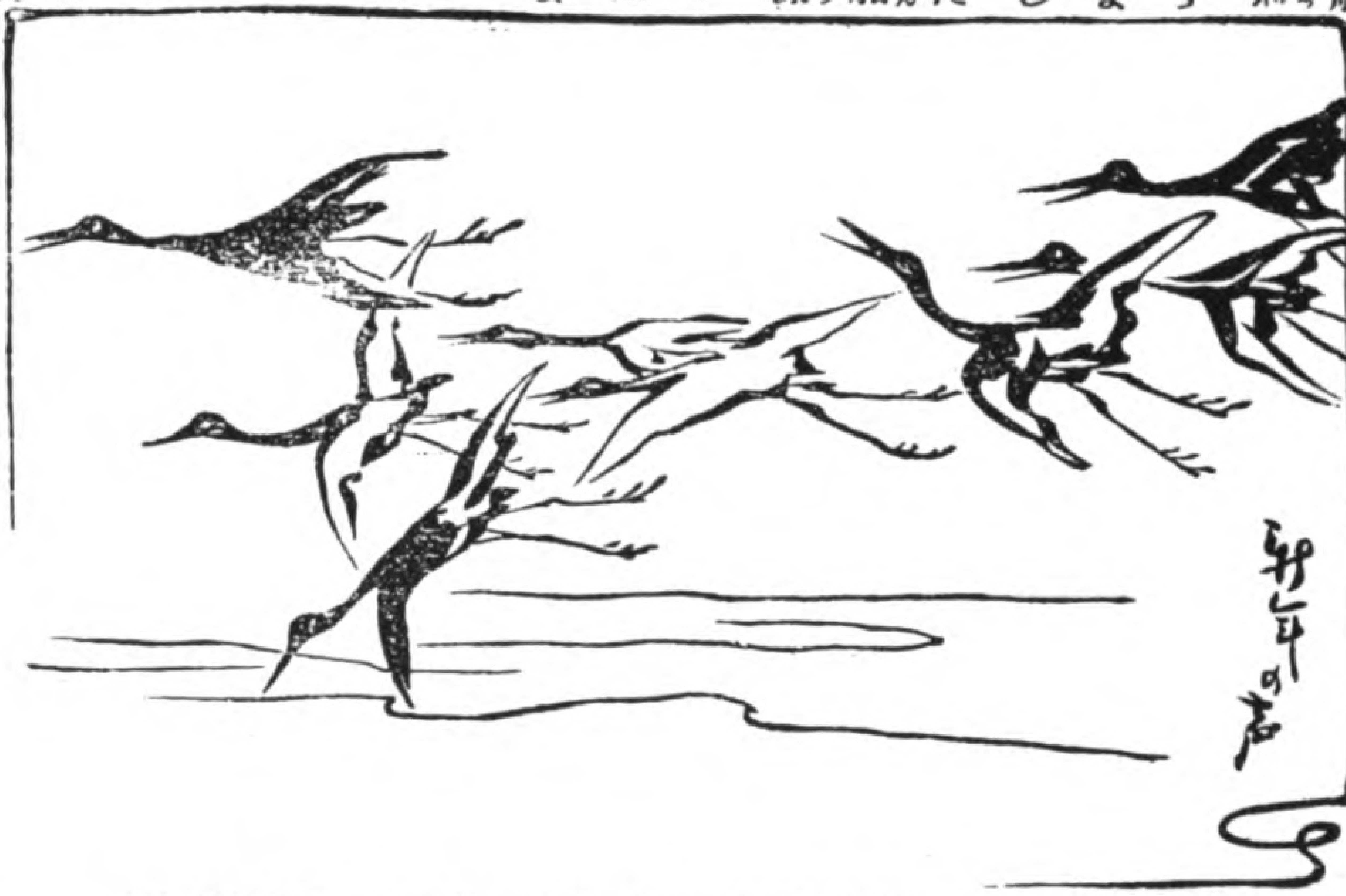
國交斷絕は六日の發表で、引拂ふたのは十日の晩で御坐いました。見送りたいと仰しやる方も多く御坐いましたが、露國の知己は申す迄もなく、他國の方々にも栗野は一切斷つて出立致しました、彼地を寂しく立ちました代りに、瑞典へ着くと停車場に澤山の出迎人が詰め掛けて居り、恰も海軍勝利の報が傳はつた時なので、汽車を下りると多勢が日本大勝利萬歲を唱へ、中には日本語で萬歲を叫ぶ者もあり、却々盛な事で御坐いました、滯在中ホテルの前には何時も黑山のやうな物見人で、チョット出ても寫眞師が眼鏡を向けますから閉口致しました。私共が何處かへ出掛けると、歸りの時間を大抵計つて、待ち構へて居るのでして、一度或處へ參らうとして馬車に乘ります時、馭者が毛布を膝へ掛けるのに手間取つてイクラ促してもグズ／＼して居りましたが、其間に撮影されましたと見えます。私共は幌馬車でしたが、書記官方は開け放して多勢に顏を見られ、實に弱つたと話しておいでゝした。撮影させたのなどは、多分馭者が賄賂を取つたのでせうと、皆樣と笑つたので御坐います。

▲航海

ゼネヴアからアデン迄乘ました船は、滊鑵が損じて居つた相で、通常の速力に石炭を焚く譯に參らず二日間の航程に五日間もかゝりました。夫から諸方に立ち寄りましたから、五月に漸く長崎に着いたので御坐います。私は何時も滊船に乘りたては、少し氣分が惡い樣ですが、直に慣れて何とも御坐いません、從來格別荒に遭つた事は無いのですが、一度だけ船長室まで波のかゝつた事がありました、併し丁度夜分で私は善く寐て居ましたから存ぜずに濟みました。

▲露西亞の冬

十一月の末頃から翌年の四月までは結氷致す位ですから、寒いには違ひありません。それで彼地の人



が『貴女は氣候の好い國から御出ですから、嘸辛いでせう』と言はれますけれども、ストーブで部屋は暖かにしてありますし、外出には暖かい外套を着ますので、格別寒いとも存じません。ハイ外出は馬車か橇ですが、私共は主に橇を用ゐました。訪問などの際に橇に乘ると暖かい處から急に寒い處へ出て、又暖かい處へ入ると云ふ都合で身體に惡いと云ふ說もありますので、其樣いふ方は馬車を御用ゐてすが、私は橇の方が淸々として面白いので御坐います。橇乘の外套はチト格好は惡う御坐いますが、實に暖いものです。

記者は此時夫人に請ふて外套と帽子とを拜見しましたが、濃紫

色の琥珀地樣の物に澤山裏毛の附いた重い暖かい召物てした、夫人は着用して見せられましたので、チヨツト寫生しました。

冬は二重張の硝子戸を閉て切り、毎朝掃除の時十五分宛開け放して空氣を通すだけてす。が、私は開けるのが好きて、三十分宛開けて置きました。冬は何樣も空氣が惡い故か、午過ぎになると、頭を壓し付けられる樣になつて欠びばかり出て、睡くなるとが多く御坐ます。私ばかりかと存じましたら、皆樣も左樣だと言はれました。

それに日の短いので何も致す間がないのてす。併し露西亞は冬が交際の季節となつて居て宮中て夜會や演劇の開かれるのも此季節なので、賑ひは冬に在るので御在ます。てすから日本から彼地へ見物に御出てなさる御方には冬に遊ばせと皆樣に御勸め致しますのてす。

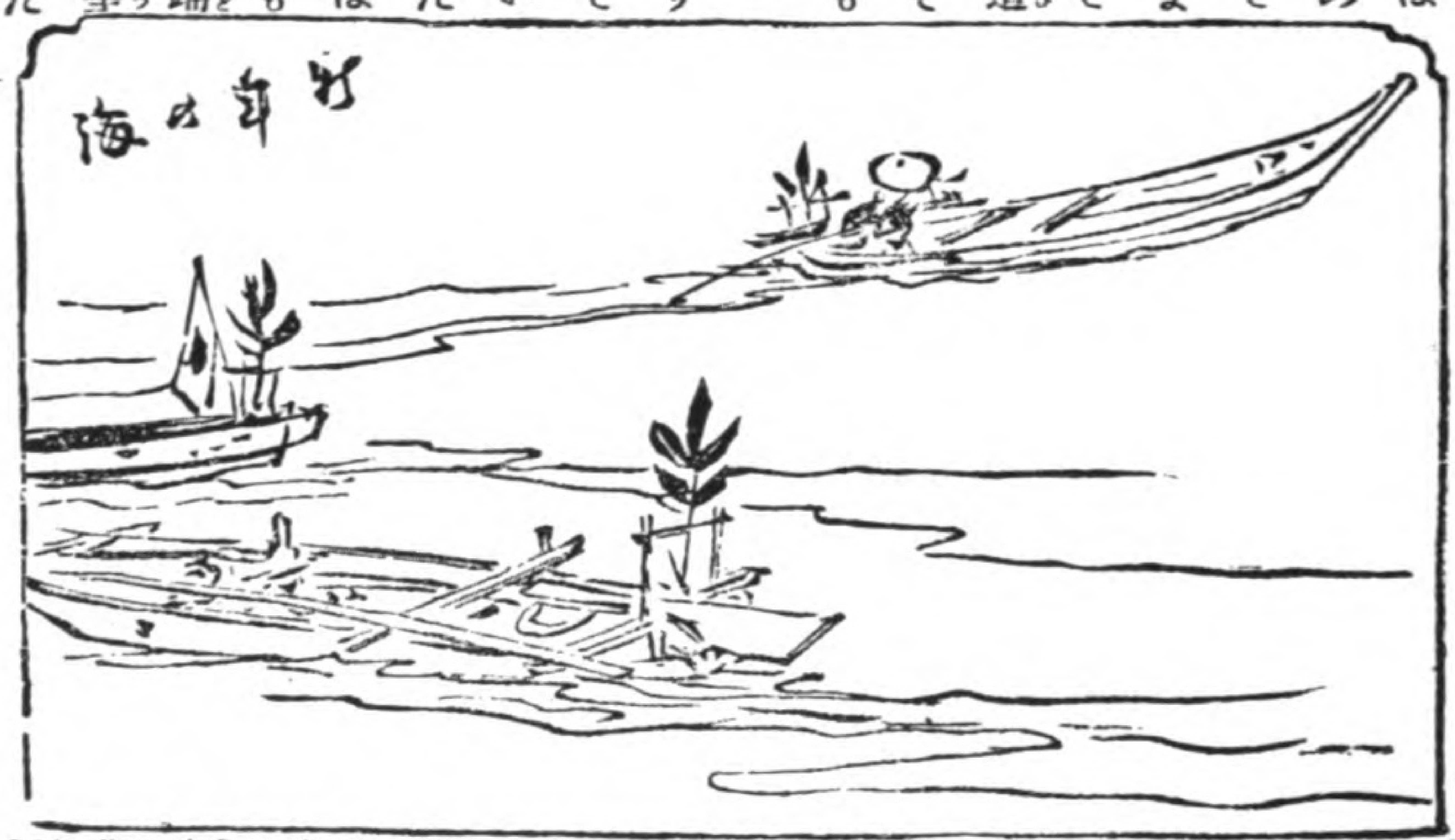
▲御赴任中の生活情況

彼地へ參ると、如何しても朝寢になります。冬は大抵九時頃に起き、朝食を濟してから、兩人て運動（橇に乗つて）に出て歸ると、晝御飯を食べ、栗野は事務所へ出掛け、私は三時まて雜用を執りまして、三時から訪問の仕度にかゝるので、冬は交際が實に忙しいので御坐います。滯在の方々は公使館へ寄り集つて、睦じく御話しするのが何よりの樂みて、毎日のやうに何方か御出になるのてす。遠く日本を離れた人々は、誠に交情が深いものて、少し御出てが遠ぬく方があると、心配して尋ね合ひました。休日には萩の餅など拵えて樂むともあり、何に付け彼に付け日本の風習が戀しくてなりません。私も栗野も日本料理好きてしたから、一日に一度は乾度日本食に致しました。露西亞の奉公人達は日本料理ても何ても善く食べますし、鰻など大好きてした。穢い御話してすが、御客の殘した物ても皆喜んて食べます。

▲演劇

演劇を觀ませんと交際上に困ります。外國の交際場裡ては演劇の話が善く出るので、「私は今度のを未だ見ません」と申しては間が惡いから、據ろ無く始終參りました。始めて觀た際は、分らぬながらも、只だ立派な

のに感心したので、彼地の婦人達は劇場へ上品な言葉遣ひを覺える爲めに參るのですが、豫て脚本を讀んで置き、其本を持つて參つて見て居ます。けれども役者の言葉が速いので却々聽き取れません。役者の言葉遣から音聲は、實に上品なもので、それを覺える爲めに一つ演劇を幾度も觀るのが宜いと申しますけれども、私は忙しいので一度づゝしか參りませんでした。川上貞奴は露西亞ても豪い評判で、貞奴の演劇を觀ないのは恥と云ふやうになつて居ました純粋の日本風の踊は彼地の舞臺では引立ちませんが、貞奴は日本式にも西洋式にも拘らず、自分の才氣で踊つたので、大層喝采を得ました。皇帝からはダイヤモンドの澤山入つた



立派な時計を戴き、其他の方々からも立派な活花を貰ひました。貞奴は毎日ホテルから公使館へ參つて、私とは極懇ろにして居りましたが、藝を鼻に掛けず夫を大切に致し、誠に感心な者です、川上は本當に善い妻を持ちました。それで川上夫婦は日本に是非演劇學校を建てたいと云ふ精神で二年間ばかり米國で研究して來る目的ださうです。

▲露國の階級的

皇太后を初め皇妹殿下などは、公使達と如才なく交際なされ、皇后陛下の御運動も橇でなさる時は、何方か判らぬ位で、極御手輕なものですが貴婦人の素性など、日本に較べると非常に嚴ましう御坐います。

惡口でも御坐いませうが、クロパト

キンの夫人は元洗濯屋をして居た女だとかて、宮中へ入ることを許されません。此クロパトキン夫人やサハロフ夫人とは始終交際して居ましたが、皆好い人達で御坐いました。二月五日の晩には宮中で此夫人達に會つたのですが、今考へますと、妙な感じが致しますよ。

▲婦人交際の席

彼地の婦人は随分よく喋舌りますネ。中にはお客として招待されて居ながら、オ、熱い／＼熱くて耐らないとか、食事が長い早く歸りたいとか、随分勝手な事を邊り構はず申します。併し着物の噂などは餘り致しません。喫烟も近頃漸々盛になつて、男子の喫烟室へ婦人が入つて喫んでることが好くあります。唯だ公けの席では喫みません。

▲化粧

露西亞上流の婦人は却々贅澤で、衣裳など實に立派に拵えます、化粧は巴里邊よりズット厚化粧で、コッテりの方ですネ、若い女より年寄の方が白粉が濃いので中には眼の周圍へ紅をさす者もあり、口紅も濃く附けます。紅は日本のやうに際立てゝ附けず唇一ぱいに塗りますから、天然に美しい唇のやうに見えます、而して爪などの掃除は實に奇麗なもので御坐いますよ。

▲髪

私が外國へ參つた當坐は、始終髪を洗ひました、所が下婢が之を氣にして『其樣に度々洗ふては髪か惡くなります、三個月に一度洗へば澤山です』と申しました、それで髪の油の良いのを少し付けますと洗はずともサラリと致して居ります。歸つて參つてから、日本の女中の頭髪の臭ひが氣になりますので、成るべく油を少くお附けと申し附けて置くのです。如何も油の多いのは惡い臭ひが致しますからネ……。

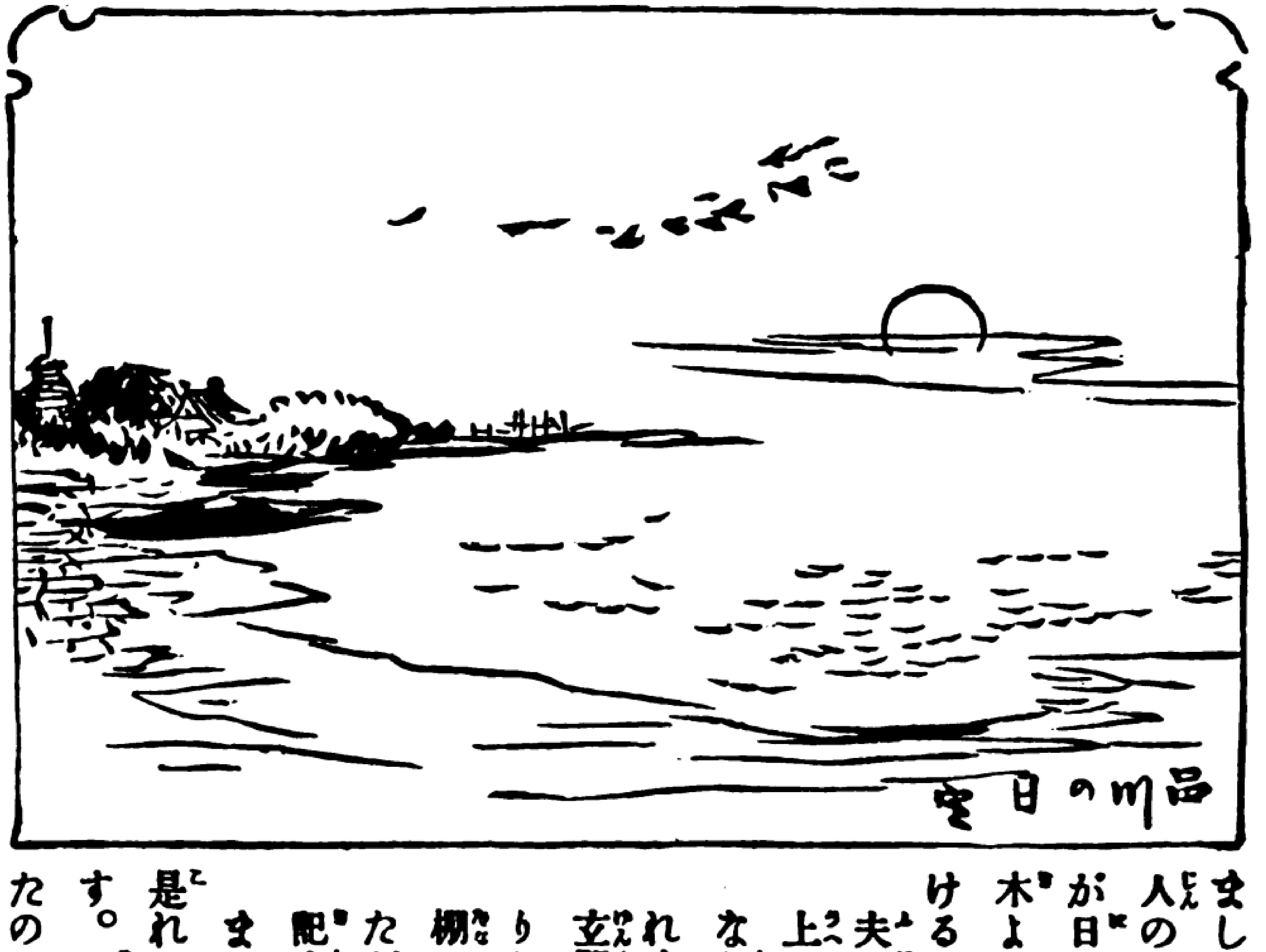
▲商店の佛語

露西亞の上流社會で佛語の出來ない婦人は殆どありません、而して晴着の新調は必ず自身巴里へ出掛けて註文致すので、随分贅澤のやうですが、露西亞は物價が高いから、巴里まで出掛けても割に會ひませう。衣服髪飾化粧品の流行は、悉皆巴里のを採りますから、上

等の商店では皆佛語が出來るのですが、下等の店になると露語だけしか通じません。私は露語が善く出來ませんから、下等の商店へ買物に參つた時は指て直段の問答を致しました。

▲琴、活花

私は琴など全然忘れて了ひました上に、彼地の座敷では引立ちませんから、只だ飾つて置くばかりてしたが、御客が聽かせて呉れと仰しやる時は、少しばかり誤魔化し彈き致した位て御坐います。活花も日本流に活けましても格別引立たぬ上に觀る人にも解りませんから、私は鉢へ小石を盛つて牡丹など大きく活けまして、それを卓子に飾り



ましたが、不思議にも大層外國人の氣に入りました。一般に庭が日本のやうに廣くないので庭木よりも室内の飾り花に金をかけるので御坐います。

夫人の御話は、一々耳新しい上に趣味豐富て、寡聞無趣味な記者に多大の利益を與へられました。辭し去るとき、御玄關の次の間に長さ二間ばかりの精巧な模造軍艦が硝子戸棚に入れて飾られてありましたが、送り出てられし夫人は記者の問に左の通り答へられました。

是れは吾妻艦の雛形て御座います。吾妻艦は佛蘭西て出來ましたので、チヨツト栗野が註文致

したやうな處から、此雛形を與れましたのです。先達て帆綱が一筋切れましたが、私共には譯が判りませんから、海軍大佐の御方に附けて頂きました、「斯様な物を家に置くのは惜しいものだ、何處か多勢の觀る場所へ出すが宜い」と、皆様が仰しやいますけれども、子供達が秘藏に致してチヨツト手離しません。

夫人英子は舊福岡藩士奥村伊右衛門氏の長女なり慶應二年を以て生れ明治十四年を以て栗野愼一郎氏に嫁す夫人の風姿秀麗に談話流暢にして交際場裡の花たるをば江湖の公評なれども其情誼の眞摯にして眼底涙あり皮下血あるに至つては夫人と最も親しき友人及び久しく使はれたる婢僕の深く感激するに止まりて暢々たる交際社會の遍く知らざる所なりと云ふ。

郡司大尉夫人　占守島家族生活

十二年の星霜を占守島に送られたる郡司大尉夫人は、今や異域の月に萬斛の鬱懐を訴へつゝある良人の起居を思ひ詫び、七人の子女引き連れて一先づ歸京して居られるので、記者は夫人を訪ふべく其寄寓せらるゝ築地一丁目の報効議會事務所へ伺つたのは、十一月十六日の午前でありました。剝製海馬の首を正面に掲げられたる玄關から案内を請ふて、事務室の側から入疊の御座敷へ通りましたが、剝製の大鷲、袋入りの刀劍、寫眞機械などを床の間に置かれ、谷子爵夫人機械の寫眞を掛額にしてあつたのです。此時椽側に御子の守をして居られた夫人は直に出て來られましたが、紺堅縞の手織木綿を召して、眠れる嬰兒を十文字に脊負ひ、萌黄木綿の裏を付けた二子のねんねこ半纏をかけ、襟を紐でチヤンと結んで甲斐〴〵しい御姿、「斯様な失禮な風で」とシトヤカに一禮された御物腰を見上ぐれば愛のこもれる眉目、締りよき口元、中肉の脊格好、自から秀麗の姿貌を備へて居られますが、撫であげぬ束髪に艶なく、汐風は稍黒める肉色に何となう憔悴の跡見ゆるは御胸の惱みも察せられ、記者は何とも言はれぬ感に打たれました。夫人は始終俯目勝て、御聲も低い調子ですが、精細で飾りなき御談話の中に堅忍不抜の御氣象表はれ、記者の敬慕を深からしめました。

▲御子達

子供は九人持ちましたのが二人だけ缺けましたので、長男は二十一歳、長女は十五歳、次男が十二歳、三男が十歳、次女が八歳、三女が五歳、今負つて居ますのが四男で當年五月生れて御座います。長男は一度擇捉まで連れて參り、十三歳の時、航海術を練習させます爲めに、擇捉から箱館の間を航海致す五陽丸と申す滊船へ乘り込ませ、ボーイ同様に種々な働きをさせて置きましたところ、乘客が普通のボーイだと思つて心付など呉れますので、本人は不平て耐らず半年ばかりて止めました。それから上京させまして教育を郡



司の同胞に頼み、唯今では小石川の妹(延子女史)の方に厄介になつて、神田の外國語學校へ通學致して居ります。長女も以前から東京へ出して置きましたから、此度は十三を頭に五人の子を引連れて歸つて參つたので御坐います。子供は島で育ちましたから、行儀も何も心得ませんて、親類共へ連れて參ると「これでは困る」と申されます。この背の子供が生れて三週間目に郡司は東察加へ出立致しました。

▲良人遭難の噂

郡司遭難といふ噂を聞きましてから、迚も此世に無いもの慘殺された者と思ひ諦らめましたが、何に致せ足手纏ひの子供の多いよてす

し、會員方の厄介になるばかりては氣の毒てすから、一先づ歸京して親類共と相談致さうと存じ、九月二十九日に愈出帆と定めて居りましたところ、出帆期日の三日前午後二時頃に圖らずも、三島寅吉が歸つて參つたので、皆なはマア不思議な人が來たと申すやうな次第て、初めて巨細の事が判りましたのてす。東京へ歸つて參ると郡司の噂が却て占守よりも盛んて御坐いました。

▲三島氏の艱苦

三島は郡司より一月ばかり前に捕虜となつたのですがペトロポウロスクでは自由に大工の職をさせて置きましたから、初めて郡司を見た時近寄らうとしましたのを、警吏が遮つたさうてす。併し先づ郡司の無事と云ふとだけ判つたので、何卒して占守の私共へ知らせたい一心て機會を待つうち、東察加に置いてある日本の帆船を引揚げに行く役を言ひ付けられ、他の日本人に露人が一人附いてボートてペトロポウロスクを出ましたので、三島は天の賜與と喜び、途中て上陸して露人にアルコールを澤山飮ませ、醉ひ倒れたのを置き去りにして、一生懸命に脫けて參つたのですが、海上に十五日ほど掛つたので、糧食は盡きて仕舞ひ、身體は疲れ果て、島へ上つた時は腰が立ちませんてした。三島は今申す通り、實に非常な艱難辛苦を凌いて大切な報告を致して呉れましたので、會の爲めには大功を立てたので御坐います。若し三島が歸りませんければ、今日まて矢張り生死の程も判らずに居るので御座いますから……。

▲占守島へ上陸の當時

郡司は御承知の通り二十六年の三月二十一日に出發致しましたが、私共は子供の病氣の爲め後れまして、五月に出立致し、擇捉に暫く住居致しまして、二十九年の九月に一行は五陽丸に乘つて占守へ渡つたので御坐います。占守には郡司が越年した小屋がありましたので、差し寄り皆な小屋へ入り、流れ寄る材木を集めて其上へ板を渡し、筵を敷いて其上へ寢て居りましたが忽ちの内に住家を建てました、其働き方は實に豪いも

のて、あのくらゐ働らいたら、何様な事でも出來やうと思ふ位でした。家は一軒二室を二家族で住むとに致し、女は子供を合せて五十人ばかりありましたから、會員の世話一切から畑を受持つて居りました。

▲野菜

畑は一軒に一つ宛を持つて居りますが、島で出來る物は定つて居りまして、先づ馬鈴薯、大根、人參、蕪菜、春菊、菠薐草なども可なりに出來ます。是等の物は毎年五六月に種を蒔き、十月末に取り上げる都合です、豆類は少しも出來ませんので、一度私が莢豌豆を蒔いて見た事がありましたが、如何も可けませんでした

女子大學の一日

◎女子大學における當日十五日の報告會は、實に教育會の美事であつた。

◎會の趣意は實業界の巨擘森村市左衛門氏が五萬五千の金を寄附せられたるに就き、其が動機と成つて其他の創立員諸氏よりも六萬有餘の金を同校に寄附せられた、

◎茲に於て是迄の組織を改めて法人組織となし、又た教育部（師範大學、幼稚園）を新設する事と成つたので、朝野の貴紳淑女を招待し、其を披露するとの事で在た。

◎成瀬校長の演説は森村氏の美擧を嘆称し「是れ金錢の寄附にあらずして精神の寄附なり」と言ひ、大隈伯も亦た起つて森村氏の爲人を称した。

◎次に米國公使は「女子教育の効果は男女の其よりも偉大なり」と述べ、續いて澁澤男の會計報告、久保田文相の祝辭も在つた。

◎會は是にて散會を告げたが、會衆は何共言ひ知らぬ美しき感念に打たれて、斯の如く一世の輿望の上に立つ同校の隆運に向つて祝意を表するのであつた。

肥料は初め人糞ばかり用つて居りましたところ、昨年一人の妻君が考へ付いて昆布を用ひましたが、大層結果が宜しう御坐いました。磯草が肥料になるとは豫て聞いて居りましたが、却々効能があるやうです。昆布なれば磯へ參ると山のやうに溜つて居りますから如何程用ふも自由で御坐います。

▲船の便りは年に一度

占守島へ内地船の便りのあるのは、一年に僅か一度限りで、毎年五月の末か六月に御坐います。それですから支部て送つて與れます物は、大切に保存して翌年便船の來るまでに不足を生ぜぬやう能く注意しなければなりま

せん。新聞などは一年分を纏めて寄越しますので、始終舊聞を見て居るので御坐います。今度の戰爭も五月に北海道の漁船が立寄つた時、初めて聞き知つたのでそれまでは少しも存じませんでした。

▲米

米は白米と玄米を送られ、冬籠の間は米と麥を半々位にしましたので、經濟上ばかりでなく、衛生の爲めにも斯う致しました。併し勞働を始める期節には、麥飯では腹持が惡いので、米飯ばかりに致したのです。一躰郡司は成るべく内地の物を待たずに間に合して見たい目的なので、暫く馬鈴薯と海豹の肉ばかりに致して見ましたが、身躰の具合の惡い人があり、私共も辛抱が出來兼ねて、何うも米を廢す次第に參り兼ねたのです。

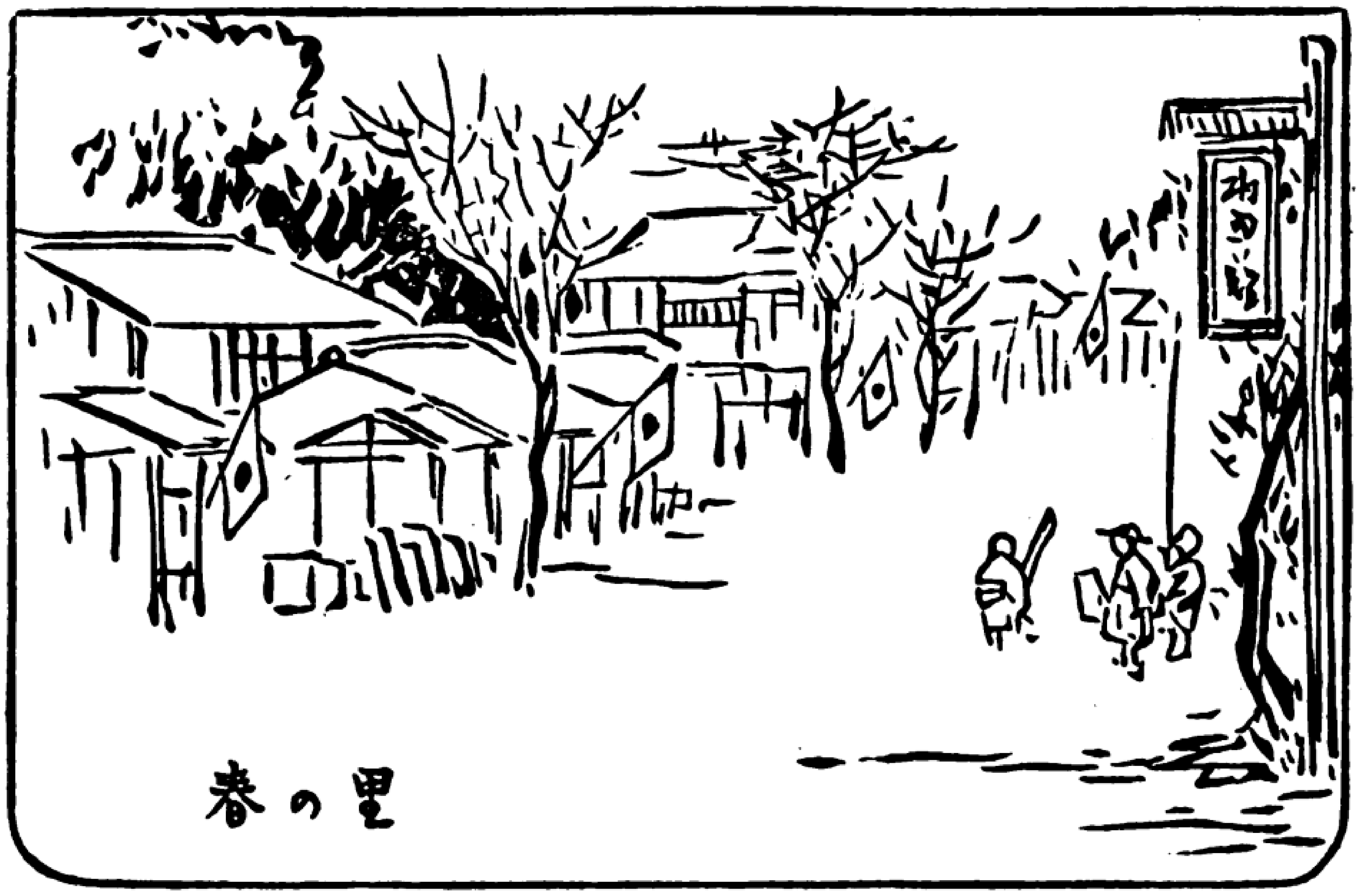
▲薪炭

島にははんの木と五葉の松が多いのですが、風が烈しいので皆な丈が低う御坐います。燃料は此等の木を伐つて用ひますから、澤山圍爐裡の側に積んで惜氣なく焚きますし、炭も各自に燒いて作り、雪籠の際には、大きな炬燵へ十能で四五杯も入れて寒さを凌ぎますが山は木を伐る爲めに漸々遠くなるので御坐います。島には又流木が可なり寄りますから、乾かして薪に用ひますが、舟で捜しに出ると、却々大きいのを拾つて來ます。これは北海道から流れて來るのもあり、時として外國から流れて來たらしいのもありますので、會の倉庫は此流木を集めて建てました。

▲水汲み

半丁ほど隔つた清い流れを汲んで飲水に致し、洗濯なども皆此處で致します。水の質は餘程好いさうで、時としては、六月頃に臘虎、膃肭などを獵しまする帆船が二三十艘も立ち寄つた時は、此水を汲み込んで參るのですが、中には分析して見た人もあり、充分良水だと認められたのです。長い間この清潔な流れを用つて居つて、今度東京で水道の水を用ひますと、何ですか氣味が惡いやうです。夏の間は水に不自由致しませぬが、雪が降り出しますと、何より此水汲みが難澁で御

坐います。雪は毎年九月の半から降り初め、五月まで解けませんので、其間は何處へも出ませぬが、水汲ばかりは仕方が御坐いません。吹雪の際は丁度大風が砂を捲き揚げたやうに一寸前も見えないので、ホントに御話のやうで御坐いますよ。それですから明日は酷く降りさうだと云ふ時は、澤山に水を汲み込んで置きますが、チヨツト溢れた水も氷る位ですから、手桶の水も忽ち氷つて敲くか火の上へ載せるか致さなければ用へぬので普通の手桶では直に毀れて了ひます。それで石油の空鑵の臭氣を抜いて柄を附け手桶の代りに用つて居りました。嚴冬には道



路が善く氷つて、草履でも歩けますが、雪解になると道路が非常に悪いので、矢張り水汲みに難儀なのです。浴湯なども、雪の間は水汲の不便の爲めに思ふやうには出來ません。

▲雪中の履物

雪中の履は「ケリ」と申して、海豹の皮で拵えた靴様の物を用ひます。これは鯨の筋(麻の如き物)で縫ふと丈夫ださうですが、滅多にないので、私は矢張り糸で縫つて拵えましたから、如何しても弱う御坐いました此「ケリ」の下には「ケヅルンペ」と申す毛布を畳して靴形に作つた物を穿き、尚足袋の二足も穿くのです。着物は角兵衛獅子の袴様の物を穿き、外套を着

て水汲に出ましたが、占守では御互に何とも思はず、平氣で居ましたもの丶、內地の方に見せたら宛然ポンチ畫のやうで御坐いませう。

▲冬籠の狀況

雪のない六日から九月の半までの間が、最も忙しい期節で、畑も作り、炭も燒き、獸肉の鑵詰や魚類の干物鹽漬などの貯藏食品を拵え、海邊に出て潮を汲み昆布を取りフノリを製し、其他種々雜多の用事を致して越年中の仕度を悉皆此時に整へて了ふので、婦人達が一生懸命に働くのは此時で御坐います。冬籠の間は無退屈だらうと仰しやる方もありますが、其間は又細々した用事があり、それには又皆な子供もありますので、相應に忙しく徒然で困るとは少しも無いのです。一番困つたのは乳呑子の襁褓でして。雪の歇で居る時は、表へ出して置けば少しぐらゐ乾きますが、大概は炬燵の周圍へ欄干を拵え之に懸けて乾かしました。

▲肉と魚

海馬の肉は赤く、海豹のはドス黒う御坐います。海馬海豹の肉も食べつけますと可なり旨う御坐いますが、熊の肉が一番味が宜しいので、鑵詰にすると宛然牛肉のやうです、熊は雪解の前によく捕れるので、偶には白熊もありますが、主に羆で御坐います。魚の漁れますとは實に非常なもので、三里ほど隔つたベツトフ川で鮭、鱒、紅鱒など澤山に漁れ、鰈、かじかなどの雜魚は幾何でも漁れるのです。飲料水に用ふ流れへも押されて出て參りますから、御晝飯の副食などは子供がチヨツト鉾で突き捕つて來る位で、實に面白いやうに漁れます。ですから鹽に漬けたり干物にしたりする外に、鰹節も紅鱒を三枚に卸し四つに切つてゆで皮を除つて製しました。少し下品ではありますが、ダシも善く利きますし、却々風味が宜しいので、これに慣れてからは、支部から送つて呉れる眞正の鰹節は、餘り上品過ぎて味が無いやうに思はれました。

▲油

海豹の油で揚げ物を致しますが、好い味で御坐います。又石油の缺乏た時には、海豹の肉の油身を小さく切り

鍋で煮て燈油を製し、襤褸切れを撚つて燈心に致しましたが、可なり明るう御坐いますが、油烟のひどいのと臭いのに閉口致しました。

▲貝　類

貝類ではシヲリ貝が多う御坐いまして、鳥貝に似た物ですが、中に眞珠が入つて居ますので眞珠貝とも申します。此他陣笠貝やミル貝も漁れ、荒の跡にはミル貝が岸へ打ち上げられます。味噌醬油は年々支部から送つて呉れますが、追々に工夫して成るべく島の物で間に合せたいと考へ、醬油を作つて見ました。前に申す通り、豆類は一切出來ない處ですから、眞珠貝をゆがいて其液へ鹽昆布を入れ、善く煮詰めてから醬油の空樽へ入れて振り混ぜましたところ、チヨット醬油に似寄つた物が出來ました。

▲砂糖と菓子

年に一度限りの便りですから、島にない物は何品でも切り詰めて少しも無益に用はれません、砂糖なども私の方でチヤント會員に一人前一ヶ月百目位渡しますが大概充分な見積りで御坐います、子供が御坐いますと、全然菓子なしでも居られませんので、海豹の油でかりん糖を揚げたり、麺包を拵えたりして食べさせます。便船の期も支部の會計の都合なぞで、如何かすると後れるとがありますから、明治三十二年には砂糖が二個月ばかり切れて了ひました。其間子供には豆を煎つて鹽を振つて遣りましたが、よくしたもので子供は承知して何とも申しませんでした。

▲祝　日

支部から心付けて送つて呉れます菓子は、保存の出來る蓬萊豆などですが、平常は大切に仕舞つて置き、祝日や佛事の際取り出して、會員が樂んで食べるので御坐います、衣服も祝日には袂のあるのに着換へ、中には髪を結ひ合ふ者もあるので、長い年月の間ですから、若い婦人などには此位の事をさせて差支ないと存じました。髪油は元より備へませんから、鐵砲油の上前を少しはねて年に二三度つけたのです。

▲音　樂

郡司も音樂は皆の心を引き立たせるのに必要であると申して居りますが、却々未だ其樣な場合には至りません。中には三味線の出來る人もありますが、器械が無いので、何樣な音樂も聽くとは出來ません。

▲產婆

出產する人があると、お互に取りあげて濟ませるので、私も昨年も二人ほど取り揚げました。自分では幾人も產んで居りましても、產婆は初めての事ゆゑ、何てすか氣味が惡う御坐いました。併し御方便で皆產も輕く、子供も彼地で產れるのは餘程大きう御坐います。又子供の發育が一體に內地よりズット宜しいやうですよ。病氣にかゝる人も稀で、偶にあつてもチヨツトした腸加答兒ぐらゐて直に癒ります。寒い割に風も引かず、一同至て壯健に過しますのは空氣が好い故てありませうか、又一つには彼樣な處へ往つて事業ても遣らうと云ふ氣力の盛んな故でもあらうと考へます。

▲小學校

高等女學校出身の妻君が御座いまして、子供の敎育を受持つて居ましたから、曲りなりにも小學校程度だけは履ませるとが出來、誠に都合が宜しいのです。

▲住めば都

彼樣な孤島で、何樣に生活に不便かと人樣は想像なさるでせうが、最初の內は事業の爲めとは云へ情けない事だと思ひましたものゝ、住めば都と諺に申す通り、十二年も暮して見れば、其れ相應に便利な點も見出され、唯今では結句住みよい土地と思ふやうになりました。總ての物が勞力さへすれば一文いらずに得られますから、志の堅固な人がミツシリ働いたなら、乾度面白い結果があるに相違ないと思ひます。久々にて東京へ歸りましたところ、何から何まで金錢がかゝり特に炭薪のお高いので氣が引けまして、占守で山のやうに積んで用つたのを考へると勿躰ないと存じます。總ての事がうるさくて〳〵、占守の生活の方が餘程氣樂でございます。

▲島の風光

住家は小高い地に建てゝありますが、直ぐ海の側です

から、荒の時は鷗が飛びかゝる位て物凄う御座います。併し平生は海が極穩かで、雲の色まで面白く、景色は何にも譬へられません。

▲歸京の航路

今度占守島を立ちましたのは九月二十九日で、陸前の鮎川濱まで着するのに十三日かゝりました。汽船なれば五日程の航路ださうですが、帆船ではあり特に荒に遭ひまして、強い時はペットから轉がり出るやうに搖られたので、船に強くない私は實に弱つて了ひました。併し子供逹は案外平氣で船の中を駈け廻つて至極元氣で御座いました。

夫人は背負はれし嬰兒のお目の覺めたのを卸して乳房を含ませ

贈物の注意

人に物を贈らうと思ふなら、まづ先方の嗜好や、爲になるか爲にならぬかを考へてするのが肝要で、別けて年末年始などに物を贈るに、先方の身分境遇に頓着なく、形式のやうに、酒、ビール、鰹節、砂糖、菓物など、成るべく體裁の良いものを選むで贈るのは、賞めた事では無い、是では贈るもの丶好意が見えず、又貰ふ方も折角の贈物に對して其眞心をうけ入れて呉れることが薄い、されば成るべく先方の役に立つもので此方の眞意の籠れる物を贈るべきである、年末の贈物が先から先きへ廻り〳〵て、終に自分から出た品物が、思も依らぬところから舞戻る等の滑稽が屢々ある、一考すべきことではあるまいか。

つゝ話し續けられましたが、緣側に愛らしい聲で、御母樣は御話してすから靜かに爲さいよと言はれたのは年長の令孃と覺しく、聽て障子を開けて、かぶろりの令孃二人は靜に一禮し、母君の左右に行儀よく座られました。記者は此御姉妹を見て、夫人が良人に事へて忠實に、會員に對して懇篤に、事業に勵精に、孤島の生活を艱苦辛酸と思はれなかつた御心を解し得ましたが、さて斯る寂しい孤島を花の都より住み心地好しとまで愛さるゝ今日に於て、災厄の降り來つて心ならぬ御歸京をなさつたのは誰しも同情の淚に咽ばぬは無からうと存じます。

▲今後の生活

私は長野縣で慶應元年に生れたので、父は井上好武と申します。七歲の時出京致し、十九歲で郡司に嫁しましたのですが、兩親には早く別れました。兩親に早く別れましたのが私の不幸の始りで、是迄に隨分種々な難儀を致しました。今度不意の災難で歸りますのは如何にも殘念で御坐いますが、致方が御坐いません。兩三日の内に向島の兄弟の近所へ家を持ち、自活致す積りで御坐いますが、何分にも御覽の通り子供が多う御坐いますから、兄弟の厄介にならねばなりますまい、それが誠に心苦しう御坐います。

郡司大尉の御兄弟と申せば、文學界に雷名の轟ける露伴氏を始め、文學士幸田成友氏あり、音樂界に其人ありと聞えたる幸田延子女史、同幸子孃もあるのですから、心苦しいとは仰しやるものゝ御心細いとは申す迄は御坐いません。

春の化粧

春は陽氣の盛りに成行く時節なれば白粉を濃く塗れば處々にむらの出來て外見惡しく且つ春風は顏の色を惡しくするもの故まづ蒸湯にて顏を洗ひ、少し冷めたる處ろにて頸筋から耳の後をこつてりと塗り、それより顏にうつり額と鼻と口元の四方なびつたりと塗り、中のばしにして眉刷毛にて額よりのばし始め、それより口元の四方を刷き、この餘りにて目の邊を刷くべし、始めより目の邊を刷くはわるし、又鼻と口元へは濃く塗り頰と目の邊は薄きがよろし、それに紅を少し手掌に取り、眉刷毛にて目尻と眉前の間を薄紅に塗り、又眉刷毛を湯にて濡らしザツとしごきて顏より喉のあたり襟までを刷き、且つ鼻をよけて濕手拭にてソツと押へ、乾きたる時に眉刷毛に浮白粉をつけて鼻と口との邊りを刷き肉理へ白粉の浸みこむ樣にすれば、次第に美しく艶を出し、のぼせても處まだらになる事なし、そして耳ばかりへつけ、[illegible]分手掌にて濃く塗るを以て春化粧の仕方とするなり。

隨感錄

長命延壽の藥

女徐福

おのれ龍田姫の錦に浮かれいでゝ、旅路に廿日餘の日を送りて、やう／＼に歸宅したれば、留守中女學記者よりの催促狀屆きをれり、一月の發刊に何か書くべしとの注文、每度御用は有難きも長途のつかれ、一兩日は休息せざるべからず、扨何事をか書かましと、面杖つく／＼考へても、是と思ふ趣向も浮ばず、長く思案の日數もなければ、此度の旅行を利用して婦人に旅行をすゝめんとす、抑々旅なるものは、昔は憂物つらき物として、艸枕憂寐の床といひ、萬葉にも家にあれば笥にもる飯を艸枕、旅にしあれば椎の葉にもる、とよみて實際やどるべき家もなくて、荒野に艸枕せし事有りし也、船路も又梶枕浮寐の夢などいひて、逆風に逢ては幾日も／＼風の直る迄、同じ處に船がゝりせし事土佐日記をよみても明らか也、されど可愛見には旅をさせよの世諺もあり、今は全く反對にて、旅はうき處か面白きもの贅澤を極るもの也、家に在ては芋粥をすすり、木綿ぶとんにくるまる者も、旅宿に着ては燒物汁椀付の膳に向ひ、さつぱりとしたる夜具に寐て、手を打ならして人を呼び、平日に數等上の一夜を快く眠るべし、況や中等以上のはたごを拂へば、二の膳附の

御馳走あり、夜具も又綿和らかなる上等にして、王侯貴人に異ならず、名所舊跡のある處何國に至るも必二階三階の大旅館ありて旅客を優待し、昔の艸枕は夢にだもみるべからず、海上又定期航海の滊船ありて、風の順逆に拘はらず、非常の大荒に非ざる限りは、期日を違ふる事なく、多少の動搖は有と雖、難破の恐れある事なければ、安心して眠るべく、幸にして海の平穩なる時は、甲板に出て四方を見晴せば、胸間の欝をはらし、眼界を弘くして自然自身を壯健ならしむるの功あり、家内に在て家事にのみ鞅掌する婦女も、時有て旅に出、山川、海岸、廣野の限りなきを見れば、自然衛生の旨にも適ひて、知らず／＼身の健康をます事疑ひなし、吾好む處に引附るに非ねども、世の旅程身の爲に有益なる物はあらじとぞ思ふ、われ元來旅道樂にて、年々歳々何方にか出遊して、或は嶮峻の山嶽を攀ぢ、海拔數千尺の上に立て宇宙の廣大なるに心を伸し或は水天髣髴たる海に航して、怒濤の巖礁に碎くる男壯活潑なる樣をみては、よる年波の老も忘れて、若がへりたる心持ぞする、もし弦齋居士が百道樂の一として、旅道樂をかく事あらば、其材料となるべき事隨分に澤山あり、今年は時局に憚りて春夏は何方へも出ざりしかども、扨此戰爭もいつを限りと計りがたし、若き者ならば平和回復の後をもまため、老少不定とはいへど、先老人よりを順番とするに、よしや命は有にもせよ、身は年々に衰へて、耳も眼も疎く成ゆき、足さへいたく弱くなりぬ、今年出ずば來年は又幾分か衰へ增らむ、汽車の上下も人の助をかるに至らば獨行も成まじければと、自己が勝手の道理を附けて、又もや家を浮かれ出、天長の佳節を期し上方にゆかむとするに、東海道も珍しからねば、此度は先上野より、信越線にと志し、碓井の紅葉より始めて長野に至り、善光寺に詣て、篠井より横に折れて中央線を鹽尻に至り、夫より通し俥にて木曾の谷々を見めぐるに、紅葉今を盛にて錦おりなす中を分て、かけ橋の舊跡、寐覺の床、小野の瀧なんどを見つ、凡紅葉の名所世に多しと雖、只一局部に非ずして三十幾里に渡れる山谷の廣き間の事なれ

は、京都なる高雄嵐峡に似たる處あり、又は日光塩原等の面かげを浮ぶる處もあり苟も此木曾谷の秋を知らずば紅葉の異景を見たりといふ勿れといはむも過言には非ざるべし、まとに我世の思ひ出、克てそ來つれと嬉しく心ゆく事限なし、中津より又汽車に乗て多治見に下り、當國に名高き虎溪山永保寺を見る、又汽車にて名古屋より官線に乗替て彦根に至り、更に近江線に移り、八日市に下りて永源寺に至る虎溪永源寺共に紅葉は未早かりけり、さはれ木曾の紅葉をあく迄みたれば爰らは物ならず事狭少也、かくて大津には水原氏先祖代々墳墓の地あれば、馬場より下りて墓参し、夫より疏水を舟にて下りて、京都にいたり、吾が生家に着



ぬ、何よりも先第一番に父母の墓に詣しつ、京都の紅葉は例年十一月中旬なれば、しばし逗留して染るをまつ程、舊知己の誰彼を訪つとはれつして、日を送る此間天氣よからず、十四日に空晴たれば、先高尾栂尾を始に西北の紅葉を尋ね終に嵐山に出、興にけよぞ紅葉も人も繁なりける翌日はしぐれたれば出ず又の日小春の空の暖かきに乗じて東山をめぐるに今日は時候の狂ひて霜早かりければ、京都の紅葉は多く痛められて色あしく、黄ばみたる儘にて散もあり、又た東京の如く茶褐色に焦ちゝれたるが多きぞ口をしき、されど適に京都也、色よき處はた尠なからず、祇園、清水東福寺等はいと色よし、猶北南にも名處は多くあれど

志ざす外の散策なん事を思へば心急がれて、皆見殘しつ、大阪に至りて築港を見る、夫より難波停車所に至り、南海線にて岸和田に下車して、聞及ぶ牛瀧にゆかむとするに、短日にて今よりはゆかれずといへば、是非なくて一泊し、翌朝牛瀧山に登る、紅葉は音に聞程にも非ねど、餘りによき處多く見たる眼移りの故もあるべし、かくて岸和田に戻りて紀州に至り、紀三井寺岡公園和歌浦を見物す、和歌浦の風光明媚の所に病院在赤十字社の白衣着たる軍人の散歩する多く見えたり名高き根上り松、今は枯てなし、松原にちいさきが根の上りたる唯一本あり、田鶴も今は一も見えず、公園内に動物園の如く鐵柵の中に雌雄の二羽淋しげにたてるはさすがに此浦のしるしなるらし。

車夫はいふ、おのれ童なりし比は紀州侯より鶴を捕事を禁じられしかば、多く群居て田畑を荒し、百姓は皆困じたりし、明治と成ては年々に狩盡して、今は一羽もをらずとぞ、翌日は一番汽車にて高野口に至り、夫より山駕にて登る、九度山の谷川岸のさまも又一風ありておもしろし、高野山の規模宏大なるを見れば、弘法大師の萬世に傑出せる高徳なる事知らるゝかし、滿山ならねど處々色よき楓あり、櫻の古木も處々にありて花の春ぞゆかしき、夫より奈良に出て、春日神社手向山など千しほの紅葉松杉の綠に色はえて美くしなんども愚なり、猿澤の池、南圓堂など其他名ある處を見めぐりて、是より關西鐵道にて加太、笠置渡りの谷川の秋色を見つゝ、伊勢に入る、四日市なる知る人を訪ひて、爰より船にて歸らむ事を計るに、廿四日の午後二時出帆といへば、けふよりは二日の間あるを空しく俟も退屈なり、宗廟に詣てばやと思ひて龜山に逆戻りしつ、參宮線に乘かへて内外の宮居にまうづ、いつもながら神々しく尊とし、神苑の紅葉眞に今を盛なり、しばしながめありきて二見に至り一泊し、明日旭の登るを見て、歸らむとするに、爰にも電車開通して今出づといへば、急ぎてのるに乘客は吾唯一人なり、をかしや此文明の利器を何故に人はのらぬにや、處の人は儉をしみにても有べし、旅客五六組も同じ二見に宿れる

を皆俥を走らして一人ものらぬぞ怪しきなど思ひをるうちに、早山田停車所の手前に着ぬ、かくて四日市に歸りて船の切符を買はむとするに、下等のみにて上中共になしといふ、さる事もやと思ひて三日も前に問合せたるに、中になけれど上下は有と答へしかば、上等にても可と迄申置つるにといへど、其時は買給はねば今はなしといふに、爲方なくて汽車ならば下等も忍ばめ、船の下等は獸類同等に扱はるゝが嫌なれば、又汽車に乘て例の如く酢詰に押されつゝ苦しきまゝに、船の上等ならば樂々と寢つゝ晴たる景色を眺て歸らむものをと、心中愚痴をこぼしつゝぞ歸り着ける。



之れは是道の記の概略也、長きをいとひて歌などは皆省きつ、到る所の人々我が獨旅なるを見聞きて、よくマアと感ずるあれば、又怪し氣に首をひねりて何か事情の有ならむなど友とち低話者あり、又老ての獨旅扱々達者な婆樣よといふも有、皆當らず、吾身一向壯健ならず近頃足を怪我せしよりとかく運動の不足に成り易き故にや、胃病起りて今は持病となりぬ、他に出て新鮮の空

氣を吸へば快さを覺ゆるが故に、勤て旅に出る也、持病起る時は中食など給られぬ事多けれど、旅には却て埒明也。差支となる事なし、老て獨旅すればとて何の事情かあらむ、唯性質の旅道樂にて遠近となく漫遊するのみ、然るを人の出來ぬ事を爲が如くエラィと譽るは追從なるか、何がエラィか譯がわからず、當前の金を拂ふて汽車、汽船、人力、山駕あらゆる物に乘廻れば、處にても行かるゝをや、老女の獨旅何がエラかろう、少しも誇るべき事はなし、唯だ日本數百年の昔より、女子は家内にのみ在て、獨旅など出來ぬ者と思ひ詰たる因襲の久しきが此開明の御代となりても猶脱離き人多き故に、然思はるゝのみ、西洋人は婦女にても海外に迄旅行する者多し、殊に我日本は國中皆公園也と感賞して、遙々の海を航して來り見る者多かるを、其結構なる國に生れながら我土地の外を知らぬとは餘りに云甲斐なからずや、私房金ある後室、御隱居樣達、家にのみ居て嫁いびりし、或は母子喧嘩を止てチト何方へか出掛て見給へ、旅は中々面白し、第一身體の爲なり、心を伸れば壽命も延る、陽氣な人は吉野初瀬の花かけて伊勢參り、信心者なら善光寺、高野山も有難かるべし、法華は身延、眞宗は御本山參り、よしや天輪王の命でも、大和迄參詣するならば、宅に計り燻ぶて若い者と衝突のみするのに、増る萬々也、出つけぬ人は旅といへば大造にオックウがれど旅の恥はかき捨とさへ云へば見えもへちまも入る物ならねど、古き絹物を着てゆけば途中にて破損じて困る事あり、麁末にても新らしき木綿裏をきるにしかず、成べく持物をすくなくして金は少し多きをよしとす身に結附らるゝ物の外は蝙蝠傘一本にて汽車に乘れば乘替にも便利也、何はもたずも金さへもては少しも不自由を感ずる事なし着のみきの儘にて飛出すを最上とす。

かゝる事をかきつくれば此戰爭のたゞ中に餘りに氣樂と思ふ人もあらめど、既に時局に省みて過し春は一回の出遊費を恤兵部へ献金し、毛布も幾枚か差出したり爲べき事はして娯むべき事は樂しむに何の憚る處かあらむ、金錢は湧き物也、かせげば溜る物、溜て虎の子

として秘藏するとも人の命は明日をも知られず、ころりとゆかば何にもならず、死て後金を殘して子孫に悅ばれんよりは生前思ふ儘につかひて自ら悅ぶにしかず平日は克稼ぎて來年も又命あらば献金もすべし旅にも出てむ、斯いへば大道金滿家らしいけれど決して富裕なる身分に非ず只今日を送るだけは倅より仕送れども年々歲々諸品高直になる故にいつも〳〵一ぱいにて動ば不足する事は有れど餘りたる例はなし、されば隱居も安閑としては居られず、身に應じたる業を營み、傍ら人に



物をしへなどして、月々得る處幾ばくならねども、心掛て節儉貯蓄すれば、一月や廿日の旅費位は出來るを思へば、誰にても志だに確乎たらば、さして豪富に非ずとも今日に差支ぬ程の身分ならば、一年に一度や二度の出遊費を積まれぬ事はなかるべし、積まれぬは積まぬ也と斷言するに憚らず、我身に試して明白也、但し旅行を勸むればとて父や夫にねだり、我子に迷惑を掛て迄行給へとは申さず、唯自ら稼ぎ自己の力の及だけ宛近縣なりとも旅行して、山海の奇を探り、眼界を弘して心氣を

養ひ、身を壯健になしたまへと申のみ、吾年々よく出遊すれど、其費用は一文も伜に出せし事もなく、友に借たる事もなし、我物を吾遣ふ、誰に氣兼も遠慮もなければ、思さまにつかひ果して家に歸れば、元の空手又改めて稼ぐのみ、恰も江戸ッ子が背越の錢はもたぬと威張が如し、此愉快なる味を〆ては又止らるゝ物に非ず、世間幾多の婦人達金力有ても暇のなき、又暇は有ても金の自由にならぬ人は是非もなけれど、中には豪富の夫人令孃殊に御後室樣にして、金も暇も十分に有ながら、年が年小病がちにて、嚔鼻一ッ出も醫者を呼つけ、少し熱あればやれ氷嚢よ看護婦よと騷ぎ立て身邊藥壜の絕し事なく、朝は八時九時迄も寐て起出れば牛乳鷄卵の外を食せず、飯といへば粥の如きに非ざば毒也といひ、夏は大磯の別莊に暑を避け、冬は熱海に寒さを知らず、其往來には上等の寐臺車に横たはりて侍女、家令御供すれば、邸内も同樣少しも旅らしき旅に非ず、今少しお手輕にしてあちこちと廻りたまはば病も自然となほるべし、此莫大の入費を以て我輩如き旅行をなさば、狹き日本は廻り盡して、洋行せんも難きにあらじ、或は豪家の老婦人にて子孫繁昌して在ながら、年來の習慣去がたく、所帶の事を氣に掛て、息子や嫁に任すを危ぶみ自己在らずば、一日も此家政を如何せむと、臺所に眼張るあり、息子嫁とて生得の白痴にも非ざる以上は、いつ迄呉下の阿蒙ならむや、任さねばこそいつ迄も出來ぬなれ、任してみよ始にはよしや一二の失策ありとも、其うちには慣て出來るもの也、高尙なる學術は天稟の才に非ざれば出來ねども普通一家の經濟の如きは多少の上手拙は有にもせよ、誰にでも慣さへすれば出來る事也、然のみ懼忒にも及ばじ、夫よりも危險は人の命也、老健決して賴むに足らず、萬事吾一人心得居りて、若急病にてころりとゆかば何とかする、跡の子息や嫁は不熟練にて夫こそ[illegible]じられた物ならずや、一日も早く所帶を渡して我は隱問となりて見物すべし、始は窮櫃き事も有べけれど、心長くそしへ習はすれば終に安心の場に至るべし、[illegible]に一ッ心得べきは人の心の千差萬別なる事也、親子に

ても兄弟にても心計は同じからず、其好嫌と物の勝手は各々違へば、實子也とて我に比しき事はなきに、況や嫁に於をや、親も違へば育も違ふを、强て家流に何事も爲せむとするは姑の無理といはざるを得ず然れど是は姑に向つて小事。嫁たる者が父既に他家相續に來れるからには、萬事是迄の習慣を去つて、始て此家に生れ出たる如く思ひ、萬事其家風に背かず、古風ならば古風てよし、因循なりとも敢て我身の耻にはならねば、何の頓着する事かは、唯一より十迄姑の心を心として、女學生風の理屈は



暖氣にも出す勿れ、生意氣理屈がいひ度ならば不緣の基の道火線也と恐れて省み愼むべし、我世と成家政の權を握るに至りて愛に始て其學び得たる學問を應用して諸事に改良を加ふるも決して遲きに非ず、時の至るをまたずして事を急げば十人か十人ながら失敗せずといふ事なし、努々忘れて惱りて事を爲損じ給ふな婦は姑の流義に違はじと勤め、姑は人各々自心の異なれる道理を思ひて、萬事を恕すれば家内和合して風波發らず、愛に於か安心して留主をも任し、旅へも出て命の洗濯をし、留主居の若夫

嫁も氣樂にて悦ぶべし、双方都合よき事なれば旅をも勸め申す也、又旅行せんとは思へど、よき連なければといふ人多し、さる人は獨行を心細しと思ふにや、言葉敵なくては淋しとにや、されど旅は路連、世は情と諺にもいふ如く、獨行決して心細き事もなければ、話相手は至る處にあり、汽車中船内宿屋にても甚しうるさしと困る事はあれども、淋しと感ずる事はなし、ホンの道行ぶりの連なれば、嫌と思はゞのく迄なれど出發よりの友にては然うもならず、内心困る事もある也、友といふ者もよしあしにて、眞に心の合ふ無二の友は千萬中の一人なるのみ、雨夜の星よりも稀なる物也、人の心は面の如し、一見似たりと思ふ共、精しくみれば各々異なれり、運命も又各々同じからず、昨日は無二の心友も、けふは境遇により場合に從て心の移り替る事なしとは保し難し、唯吾と比しき者は世になしと信ずるぞ違はざりける、故に人に交際せんと思はば心を廣くして大概の事は咎めず、氣にせず、約束も當に爲べからず、信じ過れば腹立事多し、とかく物事なる様にてもならぬ物と覺悟すれば、心騷がず怒すくなし、世の中は謂相持也、一方いかに勤るも相手よりも勤めざれば表面のみにて眞實和合する事なし、此事先にいふ嫁姑の間のみならず、夫婦兄弟朋友の交とても又然也、其勤めを面倒也懊惱と思はゞ寧友を求めず人を當にせずして吾一個にて事を計るにしかず、是われが好て獨行する所以也、先友を誘はむか、吾出發むと思ふ頃は先方差支有りと云ふ、友の都合よき時には我方に勝手あしき事あり、一人既に如斯、况や二人三人をや、よく〳〵拍子の揃はねば出發すら六かしゝ扨道中にても各々心同じからねば、我ゆかむと思ふ處も友は欲せずと爲があり、友の見たしといふ處我は數度見て非ずもがなと思ふ事あり、左せんか右せんか、吾は左右共と思ひても友の何日迄に、是非歸らねばならぬ爲に口惜しく見殘す事あり、殊に旅馴ぬ連なれば船は勿論汽車にさへ醉ひて苦しめば、捨ても置かれずいらざる處に泊りなどして思はぬ費のかゝる事あり、且又我は胃病の爲に中食を拔く事多きも友あれば、當

に附合はざるべからず、たとへ吾は食ずとも其間を空しく俟合はせて、いたく時間を損する事あり、獨行なればゆくも止るも食もくはぬも自己がまに〳〵、汽車の隣席道ゆきぶりに先方より物いひ掛られても其人柄を看其言葉を察して地理に明るき人と見れば其所に附ての事を問ひて、大に行先の心得になる事あり、或は毒氣なき瓢輕人と雜談して罪なきとに笑ひ興じ、眼先のするどき人、一癖有氣に氣味わるき人等は、先方より物いひ掛られても之を敬して遠ざかりをれば難なし元來連に非されば是を撤に憚らず、然る事も何事も獨行なれば進退爲易く、はぐるゝ事なく俟合す事もなし

友あるが爲に氣を採む事多し、旅馴たる人はよけれど愚なる友はなきぞ中々に心易かりける、今や開明の御代に逢ひて一方には婦人にても蒙古の教師に聘せらるゝあり、あはれ吾も今廿年計も若からば外國語を硏究して海外諸國をも漫遊せんに、今は老去て身は物の用に立たず、海外は思ひもよらねばせめて内國中にても猶年々に旅行せん、世間多くの婦人たち引込思案を止めてせめて一二夜がけにてもチト出掛て見たまへ、手掌大の家内にのみ齷齪しても一生也、すべき事して樂しみても一生也、同しくは娯しまん哉。（完）

教育家の夫婦

何れの男女學生を問はず、其の學校にある間は、孰れも理想の家庭を畵きつゝある者なるに、扨いよ〳〵一家を搆えての理想家庭は大に攻究す可き問題なり、と某教育家は語れり、一例を擧ぐれば某高等學校に教職を執れる人あり、其の令夫人も亦某高等女學校に教職を執りて國語と家事とを教授しつゝあるが、夫妻とも午前七時ごろに家を出てゝ午後の三時、乃至四時頃に歸り來るの例なるが良人は良人の居間に、細君また自分の部屋に閉ち籠りて出てず、女中の聲に促されて漸く夕食の卓に就けば、又た舊の如く各々の居室に引き込みて再び出てず偶々學術上の問答あるも、啻だ議論するに過ぎず果ては右を左と言ひ、白を黒と爭ふのみ、斯れは妻君なるもの出ては家事の講義を生徒に授くれども芋の煮方も御存じなく、而かも御自分は更に念とするなく、極めて乾燥無味の家庭を作り居れりと是は勿論極端の一例なれども世間に此の例乏しからず、されば今日の處ろ夫婦の「ともかせぎ」は大に考ふべき事ならん云々。

一是一非

大町桂月

離緣を描ける小說

小說よむべからずとは、天保時代の僻思想也。當年の所謂戲作者の小說こそ青年の男女を誤るもの多かりけめ、今や、見識ある作家少なからず、逍遙、露伴、蘆花、春雨、弦齋などの作の如きは、余は、むしろ青年の男女のよまむことをすゝむる也。その他の作家の小說も、讀んで可なるもの多し。近く文藝倶樂部に出てたる鈴木秋子の『かたゝがへ』も、女子の一讀すべきものなるべし。

たゞ一夜のことならば、氣にくはぬ女に酌してもらつてもよく、蟲のすかぬ男に侍してもよかるべけれど夫婦は、一生の伴侶也。夫婦の氣のあはぬほど、世につまらぬことはあらざるべし。濱江は、柔順なる女也。誠實をつくして、その夫にかしつけり。されど、夫には、その心とほらず、夫は、却つて妻の愛を得ざる不幸の身なりと歎息せり。濱江は終に夫の虐待にたへかねて、終に自から夫の家を去れり。誠心をつくすに、何故に夫は我を愛せぬかとは、啻に濱江の疑問なるのみならず、多數の人の疑問なるべし。

濱江の老婢、之を解釋して曰く、『藤樣を見さつしやい。いつも、にこ〳〵と嬉しさうな顏して、自分の旦那樣に、口きかつしやるのに、お前樣のやうに、遠慮らしい風は、なさらぬだ。女衆にきけば、能う、喧嘩おつぱじめさつしやるやうだが、明る日は、昨日よりも、えら仲がよくならつしやるさうだと、なア、喧嘩さへもせぬ夫婦が、何になりますだ。構はつしやる事はない、言ふだけの事言つて、喧嘩の一つぐらゐは、さつしやい』と。この言、一理なしとせず。夫婦の間には、敬意を失ふべからざれども、婦が夫に事ふるは、人が神に事ふるとは異る也。如何に誠意をつくせばとて、餘り遠慮にすぎ、たしなみ過ぎて、陰氣くさくな

り、他人行儀になり、眞面目にすぎて、枯淡乾燥、夫婦の情愛はなかるべし。如何に親愛なるも、親子兄弟の間には、なほ多少の遠慮あり、朋友の間には、榮辱利害の念あるものなれば、夫婦の間には、遠慮もなく恥と思ふこともなきが常也。男は、世に出てゝ功名の爲めに、心にゆるみなけれど、その妻に對しては、氣をゆるして、氣張る所は、少しも無し。氣に入りたる妻なら、猶更也。されど、社會に出てゝ、能力すぐれたる人も、妻には、のろくして、めだれぞ見られ、與みし易しと思はれて、妻の尻にしかるゝもの少なからず。夫とても、人にもよれど、概して餘りかたくなり過ぎて、氣のつまるやうなのは好まざるべし。俗に、男好きのする顔といふことあり。顔のかたち、いかによくとも、うまみなくして、のつぺりせる顔は、人を動かさゞるべし。顔に、すき、きらひあるのみならず。其動作、其氣質、其智能など、あらゆる點に至る迄、それ〴〵好きと、きらひとありて、きらひな



食物は、のどを下らざると同じく、きらひな人は、見るもいやなるべし。人の情といふものは、痴なるものにて、好きな人には、冷遇せられても、なほこひしく、嫌ひな人が誠實をつくせば、つくすほど、益いやになるもの也。まことに、男女間の愛といふものは、複雜きはまるものにて、顏の美醜のみにては、無論、判斷が出來ず、氣質のみにても、判斷が出來ず、誠心をつくす、つくさぬにても、亦判斷が出來ざる也。察するに、濱江の夫は、陽氣にして、快濶なるを好めるなるべし。之に反して、濱江は、あまり、おとなしすぎて、内氣にして、陰氣にして、うま味なさすぎて、その夫とは、所謂性があはぬなるべし。かくて、終に破裂したるが、破裂せずとも、お互に、いや〳〵と思ひながら、夫婦となり居るもの、十中七八はあるべし。むかしより、年齡をくりて見て、土性と木性だから性が合ふの、火性と水性とだから合はぬのなど、婚姻する前に、必ず詮索せしならはしなりしも、げに故ある事也、されど、生れたる年月にて、眞の氣質がわかるものに非ず。年齡にて、性を見むとするなどは、今の世では、愚にもつかぬ事也。さればとて、寫眞を見てわかるものに非ず。見合ひをして、わかるものに非ずまた交際あるにしても、男同士か女同士かならば、よくわかれど、男では、女の短慮が氣がつかず、女でも男のあらが目に入らず、お互ひに。誤解し易きものなれば、知り合へる中にても、果して性が合ふか合はぬかは容易にわからぬもの也。

子は、夫婦の間のかすがひ也。濱江もし子ありしならば、夫婦間の情愛が出來しなるべし。出來ずとも、お互に、辛抱するやうになりしかも知るべからず。萬事、我が氣に入りたる夫を得、妻を得むは、希有の事なれば、夫も妻も互に忍ぶべきは忍ばざるべからず。また、一旦氣に入りしも、長く住へば、互に缺點がわかりて、愛情幾分が冷却するもの也。現在と、近きものとは、醜也。たゞよそより一寸觀察したるのみにてあの妻君は、よき妻君なりとか、あの旦那は、よい旦那なりとかとて、現在の境遇に、愛想をつかすは、人

情の常なれど、こは、とんでもなき間違ひ也、嫌ひな食物とても、食ひつけれぱ、うまくなるべく、好きな食物とても、常に食へは、いやになるべし。女房が氣に入らぬから、浮氣をするとは、世の俗人の口にする所、又俗人のよく同情を寄する所なれど、これ物を食するに、たゞ好き嫌ひを問うて、毫も滋養の有無、害毒の有無を問はざるに同じ。よろづ女房によりて慰藉を得むとするは、慾張りすぎたる話し也。氣に入らぬ妻なりとも、下女代りと思はゞまことに調法千萬なる下女ならずや。下女代りと思へとは、妻を下女あつかひにせよとにはあらず、餘り多きを求めずして、あきらめをつけよとの意也。

離縁には、關係なけれど、この小說の中に、濱江の友の藤子が、離縁の最近因を問ひしに、「氣はづかしくて、云へませんが、思ひあきらめねばならぬ耻辱をうけました」とのみ云ひしが、その何事なるかを問はず、何でもなきやうなれど、品性ある貴女の例、自からその間にあらはる。これが敎育なき女ならば、云へないとつて、まア、どんな事なのと、すぐに金切聲あげて、問ひたがるが常なれど、毫も追問せざる處、さすがに、藤子は、品性ある貴婦人也。

女子の自敍傳

今の年若き人は、知らざるべし。景山英子と云へば明治二十年頃、自由黨の萬綠叢中紅一點、妙齡婦人の身を以て、大井憲太郎氏等の志士と共に、國事犯をまで企て、獄に投ぜられたるとありて、名聲、一時、天下にとゞろきたりしもの也。その後、杳として、消息を知らず、世に忘れられしが、この頃、福田英子といふ名にて『妾の半生涯』といふ自敍傳をあらはし、再び世の注意をひき起せり。福田とは、その嫁したる夫の姓を名乘れる也。憐れむべし、當年、女傑とうたはれし人も、老いては、自から傳をものするにあらずんば世人の口に上る能はざるまでに、これといふ事業なきなり。

元來、儒教の餘弊、民をして由らしむべし、知らしむべからずとて、啻に人民を愚にしたるのみならず、女子をも愚にし、深く室内にとざして、卑屈無氣力、たゞ命これ奉ぜしむるやうにしたりしかど、これ日本女子本來の面目に非ず。天孫降臨の際にも、皇軍の先頭にたちて、外交の衝に當りしものは、鈿女命也。夫征伐すれば、妻之に從ひ、その中にも、上毛野形名の妻の如きは、敗餘の夫に代りて、新勝の大軍を破りたりき。降りて、德川時代のはじめに及ぶも、御茶の局春日局の如きは、政治上、軍事上に活動したりき。爾來三百年、儒教盛になりて、女子益〻意氣地なくなりしが、幕末の騷亂起るに及びては、野村望東子の如き女傑あらはれ、西郷、高杉などの豪傑と提携して、勤王に盡瘁したりき。明等の前半、世は太平なれど、民權自由の論、民間に勃興して、岸田俊子まづあらはれて、政治上の運動をなしたりしが、英子の如きはその風を望みて起ちたるもの也。鈿女命や、御茶の局や、望東子や、俊子や、英子や、みな時勢の生みたる所也

俊子英子の當年の擧動、必ずしもおてんばなりとは云ふべからず。たゞ時勢の如何を顧みるを要す。今や、政事上、女子の活動しうべき餘地なし。されど、敎育事業や、慈善事業や、女子の活動に待つべきもの少なからず。また現にこれらの事業に從事しつゝある才女も少なからず。英子の如きも、當年、爆裂彈を抱きて荒仕事をなさむとせしが、その元氣、今に衰へず、自から記せる處によれば、日本女子恒產會を起し、かねて、角筈女子工藝學校を起せりとの事也。女子としての活動、その宜しきを得たるものといふべし

女子が世に活動するにつれて、大に用心すべきは、男子との交際也。望東子の如き老女にありては、用心するまでの事もなけれど、妙齡の女子は、動もすれば浮名を流す、英子の如きも、亦之を免れざりき。自から記する所によれば、さる名士にあざむかれて、その妾となり、間もなく見棄てられたりとの事也。げに、君が一日の恩の爲めに、妾が百年の身を誤るもの、この英子のみにあらず、智者も愚になるは、男女の關係

也。近時、女學生の浮名を流すもの少なからず、娘をもちたる親の心配、さてこそと察せらる、寄語す、閑あらば、この書をよみて、前者の覆轍にかんがみ給ふべき也。

女子にして國事犯をなしたるものは、英子にはじまる。恐らくは、空前にして、絶後なるべし。女子にして自叙傳をものしたるも、亦英子にはじまる。英子が身をあやまりたるは、女子一般のいましめとするに足るべく、當年の國事犯と、今日の教育事業と、事



柄こそかはれ、徹頭徹尾、女子の爲めにつくし、國の爲めにつくさむとする元氣、萬難を經て毫もかはらざるも、亦女子の龜鑑とするに足るべき也。

女子と歌がるた

新年には、男女の入りまじりて、百人一首の歌がるた取る習慣あり、男女交際するに由なき日本にては、これが唯一の男女交際の機會也。香水のにほひの魂にしみ入る思ひするもあるべく。氤氳たる口氣にふれて體のぞく／＼する

もあるべし。

すべて勝負事は、負けても、どうでもよいはにては勝ちたるものも張合なし。概して、女子は、負けると、くやしがるものなれば、女のまじる方が面白かるべし。記憶力を養ひ、精神と動作とを敏活にする點に於て歌がるたの益あること、西洋のトランプの比に非ず。戶外に於けるベースボール、これ尤もよく男子を敏活にする運動にして、室內に於ける歌がるた、これ尤もよく女子を敏活にする遊戲也。歌がるたを取ることの機敏なる女は、まづ、ぐずに非ず、にぶき人に非ずと見て可也。

家庭と食物

食物の調理は、家庭に於ける一大事業也。うましと思ふもの食へば、精神までが愉快になり、また消化し易し、少し食ひすぎても、害にならず、食物は、馬鹿にはならぬもの也。

世には、香物のつけかた、肴のにかた、やきかた、汁の甘さ加減など。食物の事をやかましく云ふ人もあり。食物には無頓着なる人もあり。われ食物をやかましく云ふを、下司根性なり、贅澤の沙汰なりとのみ思ひしが、今は、その誤れるを知りぬ。余や、元來下司のうまれつきなる上に、貧家に生長し、靑年時代を食客となりて過したれば、食物にすき、きらひなく、何でも、あてがひ次第にて滿足す。されど、余の一身を以て、他を律すべきに非ず。言はゞ、われは、味官の發達不十分なるもの也。從つて、料理のよしあしも酒のよしあしも、こまかにはわからざる也。味官の發達せる人にありては、さうは行かず。拙なる料理のものを食ふは、非常の苦痛なるべし。從つて、食物をやかましく言はざるを得ざるべし。かゝる浮世の餓鬼道の亡者を濟度するが、妻君の功德といふもの也。余の知れる人に、西洋料理をよくする妻をもてるものあり自慢して曰く「これ余の家の寶也」と。げに、さもあるべし。世に、もし妻君合格試驗なるものあらば、料理は、何よりも先きに試驗せらるゝものなるべき乎、

新春年玉用

買物案内（勧工場調）

品名	説明	価格
羽子板	海陸軍人を初め紅葉狩忠臣蔵納當こ人立等いろ／＼あり	中上物六十銭 極上物[illegible]圓
突羽子	黒白赤黄青等五色の羽子五個を竹の串に挿したるもの	一本 壹銭五厘
毛毬	絹糸かゞりまりの箱入麻の葉ホ斜かゞり等目もあやに美し	小三ツ入十五銭 大一ツ入廿五銭
寿語六	廣瀬中佐軍歌双六占領地振分双六清近事滑稽名畫双六等	石版摺廿銭 綿絵摺卅銭
いろは加留多	小さき小供の指さして日はく犬も歩けば坊やも遊そぶ	紙箱入二十銭 桐箱入三十銭
百人一首歌かるた	香箱形桐箱入極上金裏張貫製けんどん形栗箱（甚神代杉）入	二圓五十銭 一圓二十銭
海軍唱歌カルタ	四面海に圍れし」讀めば我が敷島のあきつ島と取る趣巧	三十銭
軍人笑	在來の福わらひを軍人の顔に直し之に目鼻を付けて遊ぶもの	壹枚 八銭
錦絵	戦争画を首とし、美人風俗、俳優似顔等いろ／＼	三枚續ニテ 二十五銭
折本	年方画の茶湯輝方の千種國延の江戸錦、春汀の子供風俗	壹圓 四五十銭
モミ絵	錦絵の地紙を縮緬風に揉みたるものにて仲々優美なり	壹圓八十銭ヨリ三圓五十銭

品名	説明	価格
艦隊積木	積上げて艦隊の形をなすもの、意匠斬新にて最も面白し	一組 七十銭
絵葉書挿	布織一枚挿の上等物にてクロース製のブックにて	十五銭 二十五銭
端書入	神代杉の箱に松竹梅の模様あり、頗る上品のもの	三十五銭
巻煙草入	春模様の漆ある貼介塗	一圓三十銭
戦捷ネキタイ	海陸の戦争模様や聯隊旗軍艦旗を染出したるもの	七十銭以上 壹圓五六十銭
草束	束髪用簪として女学生間に流行するもの、至極清楚	四五十銭
名刺入	紫紺の鹽瀬に色紙を染出し數羽新年の山を現したるもの	五十五銭
信玄袋	江戸紫の鹽瀬に數羽に因み光琳の山と松を金銀にて現しあり	二圓五十銭
銀貨入	巳年に因みて總體を蛇の形にして巳の入る金をあしらひあり	二十八銭
銭入	表を聯隊旗にし裏に海軍旗を見せたる軍國的意匠のもの	九十銭
勝軍利	是も袋入にて形も色も栗を形取り勝の字を白く抜きたり	四十銭

The "Jogaku Sekai" English Columns.

Conducted by Isoh Yamagata.

A Word of Salutation.

Omedetō! Omedetō! A happy and Prosperous New Year to you, my fair Reader! I beg to announce to you that I have been asked by the Editor of this magazine to write regularly for these columns, and that I have gladly consented to do so. I know very well that I am but poorly qualified to undertake such a task, but I shall try my best not to disappoint you and the Editor. I must, however, ask you not to expect too much of myself,—to instruct you thoroughly how to read, speak and write English correctly, besides amusing and interesting you a great deal. For, how can I achieve such a task, when I am allowed only four or five pages and that in a monthly magazine? The best that I can do for you will be nothing more than giving you a very little help in your study of the English language.

* * *

Long Live, the Empress!

Having so far explained to you, dear Reader, my position towards

女學世界英文欄

山縣五十雄擔任

挨拶の辭

おめでたう、おめでたう、幸福にして且つ繁榮なる新年を祝し奉ります、我美しき讀者よ、私はこゝに謹みて貴孃に御知らせ致しますが、私は本誌の編輯の方から常に此欄に筆を執ることを依賴され、私は又喜んで之を御引受け致しました、私は自分が此のやうな仕事には甚だ適しない事を知つて居りますれど、出來るだけ貴孃幷に編輯の方に失望を與へぬやう盡力するつもりであります、然し御願ひしておかねばならぬのは餘り多くを私に期待せられぬ事であります。—多くの興味と樂みとを供する上に、正しく英語を讀み、語り、且つ書くことを充分に御敎へするであらうと期待せられぬことであります、何故なれば、僅に四五頁しか與へられずして、それも毎月一回發行の雜誌で如何してそのやうな仕事が出來ませうか。私が貴孃の爲めに爲し得る最上の事は、貴孃が英語を御研究になるに當りて極めて僅かな補助を呈し得るに止るのであります。

* * *

皇后陛下萬歲

さて、親愛なる讀者よ、かく貴孃に對する私の立場を說明しまし

you, what shall I write on next? I think I can do nothing better than joining you in the fervent prayer, which I am sure you will offer at this particular season of the year, for the health and happiness of our gracious Empress. You know very well how good Her Majesty is, and I need not dwell here at any length on her purity of character and boundless love. Indeed, I doubt if there lived any lady who could claim to be an equal of our Empress in the possession of all the noble womanly virtues. Happy is the nation which possesses such an Empress. Long live, the good, noble and beautiful Empress of Japan!

たが、次に何について書きませうか、一年の此特別の季節に當りて貴孃は必ず我仁愛なる皇后陛下の御健康と御幸福とを熱心に御祈になりませうから、私も之に加はるに如くことはないと私は思ひます、貴孃は如何程陛下が御善德に富ませられ給ふかをよく知つてゐでなさいますから、私はこゝに長々しく陛下の御人格の清くましますこと、はた陛下の御慈愛の限り無きことをいふの必要はありませぬ、實に私は貴き婦德の總てを備ふるの點に於て我皇后陛下と同等であるといふ事の出來る婦人が嘗てあつたかといふ事を疑ふのであります、かゝる皇后陛下を戴ひて居る國民こそ眞に幸福であります、善良高貴且つ美しき我日本の皇后陛下の萬歲を祈り奉ります。

* * *

Imperial Poems.

Every act of Her Majesty is the reflection of her virtues. It would fill volumes if all the works of love Her Majesty has done for the welfare of the Japanese people, especially for that of the Japanese women, were put into record. But nothing expressed so clearly her angelic goodness of character than hundreds of beautiful poems composed by herseif. Her majesty is a gifted poetess, and in the purity and sweetness of sentiments expressed, and in the beauty of diction used, I think she is superior to the talented Queen of Roumania,

御製の歌

陛下の御行は一々陛下の御盛德の反映であります、もし陛下が日本人民の幸福のため、特に日本婦人のそれの爲め、爲し給へる總ての愛の仕事を記錄に止めたならば數卷を充たすでありませう、然し陛下の天使のやうな美はしき御性格を表はすに數百首の御製の歌に優るものはありませぬ、陛下は天賦の詩人にましまし、其御歌に表はれたる感情の清くやさしきと其辭の美なるに於て、私はカーメン、シルヴイヤといふ雅號で世界の文壇に名高いルーマニアの天才ある女皇にも勝つてゐらせらるゝと思ひます。

who, under the *nom de plume* of Carmen Sylvia is widely known as a poetess in the literary circles of the world.

* * *

"Wisdom's Goal."

Professor Lloyd of the Imperial university has recently translated into English one of the Imperial poems, known by the name of "Mizu wa Utsuwa." The English translation is entitled "Wisdom's Goal," and runs as follows :

"The water placed in goblet, bowl, or cup
Changes its forms to its receptacle ;
And so our plastic souls take various shapes
And characters of good or ill, to fit
The good or evil in the friends we choose.
Therefore be ever careful in your
choice of friends,
And let your special love be given to those
Whose strength of character may
prove the whip
That drives ever to fair Wisdom's goal."

I hope that Prof. Lloyd or some other master hand will translate many more of the Imperial poems and publish than abroad. In that case our Empress will become as celebrated as Carmen Sylvia as a poetess, and the whole world will simply adore her.

* * *

The Queen of Our Ally.

Speaking of our Empress, I cannot pass on without mentioning something of the Queen of our allied nation. Queen Alexandra is also a very good and virtuous lady and in her younger days she was reputed to be the most beautiful woman in Europe. Her Majesty is as much respected and loved by

水は器

帝國大學のロイド敎授は近頃御製の歌の一つ「水は器」といふ名て知られて居るのを英譯されました、其英譯は「智惠の目的」と題してあり、原歌は下の通りてあります、

水は器に隨ひて
　　その樣々になりぬなり
人は交はる友により
　　善きに惡しきに移るなり
己れに勝るよき友を
　　擇びもとめてもろともに
心の駒に鞭うちて
　　學びの道に進めかし

私はロイド敎授か若くは他の大家が御製の多くを反譯し、外國て出版さるゝことを希望する者てあります、然らば我皇后陛下は詩人としてカーメン、シルヴイアの如く有名とならせ給ひ、全世界の人は陛下を渇仰崇拜するてありませう。

* * *

我同盟國の女皇

我皇后陛下の御事を記し奉りて、私は我同盟國の女皇について何か言ふ所なくしては進むことが出來ませぬ. アレキサンドラ女皇も亦頗る善良有德の貴婦人にましまし、我皇后陛下が我等に深く敬愛せられ給ふと同じく其臣民に敬愛せられ給ふ、貴孃はアレキサンドラ女皇は日本の挿花術に秀て給

her subjects as our Empress is by us. It will interest you to hear that Queen Alexandra is an expert in the Japanese art of arranging flowers. Some years ago, she engaged a Japanese lady as her tutor, and learned from her all the secrets of this branch of womanly accomplishments. It is stated that her room in the Windsor Castle, where Her Majesty usually lives, is always adorned with flowers arranged in Japanese fashion.

ふと御聞きにならば定めし興味を感じになるでせうが、數年前陛下は日本の一貴婦人を聘し給ひ、此人につきて此女の技藝の一つの秘術を悉く會得し給ふたのであります、平常御住ひになるウインザー宮城中の陛下の御居間は常に日本風に挿したる花で飾つてあるといふことであります。

* * *

The New Year and the War.

War is hell, as General Sheridan said. How happier this New Year would be if there were no war! How much more delightful playing cards and other New Year's pastimes would be, if our minds were not occupied with the thought that in Manchuria and on the Yellow Sea our brave soldiers and sailors are experiencing all sorts of hardship, having to fight not only with a stubborn foe but also with intense cold and violent snow-storms! Think also of thousands of widows and orphans, who have lost their husbands and fathers on account of this war. It should really be one of the most cherished duties of every woman to do her best to prevent war, and if unfortunately war is going on, as at present, to alleviate the miseries of it.

新年と戰爭

シエリダン將軍の言ひし如く、戰爭は地獄であります、もし戰爭がなかつたならば此新年は如何程幸福が多いでせう、もし我等の心に 滿州及び黃海に於て、我勇敢なる陸海軍人が、只に頑强なる敵とのみに止らず、又酷しき寒さと烈しき風雪と戰はねばならずして、あらゆる困難辛苦を嘗めて居るといふ考がなかつたならば、どれほどカルタ遊びや其他の新年の樂みが面白いでせう、又此戰爭のために夫を失ひ父を失ひたる數千の寡婦と孤兒とを思つてごらんなさい、實に戰爭を防止するに全力を盡すこと、もし又今日の如く不幸にして戰爭が行はれて居るならば、其苦痛を輕くするに全力を盡すことは、婦人の最も大切なる義務であります。

作法

手紙の書方

黒柳勳

一面識のない人から受けた信書が優美に巧妙に將た輕快に書きなされてあつたなら、先づ其人の風采を想望し貴いやうななつかしいやうな感が起つて、拙い文も巧に見え、少許の瑕瑾も見立たずに讀み過ぎてしまう、之に反して蚯蚓流や折釘流で書いてあつたなら、忽ち不快の念にうたれて拙い文章が愈拙く見え、一寸の瑾が三寸となり、何となく其手簡の主をさげすむ樣な心が起るものである、實に書は貴女的裝飾の一である、親愛なる、幾多の諸孃よ、孃が貴女たらんとして日々施しつゝある白粉と香水との費を節して、希くは先づ筆と墨とを求めたまへ、書簡を美しく書かんには第一手が勝れてゐなければならぬが、書式即ち書き樣も大切な事である、羽二重の半襟は品質に於ては立派であるが、あれては冠婚葬祭の席に列することは出來ない、木綿でも羽織でさへあれば、不端ながらも差支はない、書簡もこれと同じく文字は如何に立派でも書式にかなつてゐなければ手紙としての價値が乏しい、文字は左程でなくとも書式に合うて居ればよい。習字のことは三頁や五頁で述べつくすことはできないから、後日に讓つて置いてこゝでは少し書狀の書き方を述べやうと思ひます。

（一）相手の如何によりて書き方に注意すべきこと

普通の應對に長者に對する時と下樣に對する時とは其態度話し振に別があつて長者に對して『オハイリクダサイ』と玄關で跪くべきを下樣に對しては裏口で『マーハイレ』となるのは通例だ、手紙を書くにも此用意が肝要である、若し此用意がなくて下樣に對して敬つた書き方をしたならば、あだかも下樣を玄關に迎へて跪くと同樣で却つて嘲弄の意とも思はれるのである、又長者に對して同輩以下に向ふやうな書き方をしたな

らば甚だ失禮て忽ち自己の品位を失墜するのだ、故に手紙を書く場合にはまづ相手の貴賤を察し自己との關係如何を考へ相當の禮を具ふべきことをわすれてはならぬ。

(二) 場合によつて書式に心すべきこと

相手の如何にかゝはらず、場合と事柄の如何とによつて多少書き振りを斟酌せればならぬ即ち冠婚葬祭等の儀式に關するものは謹愼に、娛樂を目的とする花鳥につけての往復は輕快に、通常の消息は親切に、商用又は重要なる書簡は緊縮に書くべきもので、吉凶に關するものは特に表情につとめればならぬ。

(三) 文字を叮嚀に書くべきこと

楷は羽織袴、行は通常服、草は浴衣姿であらう、故に通常の消息には行書が最も適當で草の走り書きは禮を缺くことを免れ得ない。且つ草書は字躰の變化が甚だしいので思ひがけない誤謬が生じて、用事の達せざることが往々ある、然るに今の人少し文字書ける時はたちまち筆を鼻にかけて草書を走らせたがる、女學生の如きは殊に然りて干海老の樣なクシヤ〳〵とした文字を書いて鵞堂流だの親愛流だのなどといつて鼻うごめかして居る、鵞堂、親愛共に斯道の大家、其流を酌むはよろこばしいが猫を描いて虎を得たりと心得たり、まだ門にも至らずして自ら其眞髓を得たかの樣に思つてなぐり書きする氣障さ加減といつたら實に嘔吐を催す位だ、それよりはむしろ何の流でもよいおとなしく叮嚀にかいたのは如何にも淑女らしくてしをらしいのだ走り書き亂れ書きが優美と心得て居るのがをかしい美人の亂れ髮は一寸見られるが醜女の亂髮蓬々ときては誰しも御免だ、現今の女學生は醜女の亂髮を得意がる流ではあるまいか。

手が拙いからとてわざと亂れ書きする自暴自棄の連中、草書が胡麻化しがきくからとて自己の拙を覆はんとする狡猾の輩などは、むしろ憐むべきであるが、古より三眞相應などゝいつて眞面目を貴ぶ手紙を認むるに、やけ糞だの胡麻化しがきくのとは何たる申し分ぞ。

(四) 文字を誤らぬこと

現今女學生の書いたものを見れば誤字が夥しい、これは國語科に於て字義と字畫とに注意が足りないからだが、手紙を粗末に書くから起こるものも澤山ある、手紙の文字に誤字のあるのは實に其人の品位に關するものである、書く人は左ほどに思はぬかもしれないが、讀む身になつて見

ればたちまち底を見ぬいて淺學の鑑定をつけ、自然其人を輕侮する念の起るものだ、これではカラーが如何に高くても香水の香が鼻を突いても金縁眼鏡でも、すそ模樣でも、紳士たり貴女たることはチヨツト覺束ないわけだ、余は嘗て某女學校を優等で卒業した某から、山鳥の尾の長々しい手紙をもらつた事がある、手蹟は當世の起作流で、すら〳〵と書き流した鹽梅は實に立派であつたが、文字總數一千二十七字の中で正確の文字が僅か六十五とは實に驚かざるを得なかつた。

(五) 墨つぎ

墨つぎの巧拙は手簡の品位を左右するものであるから、墨が涸れたら何處でも繼げばよいといふ亂暴ではいけない、昔はいろ〳〵面倒な法のあつたものであるが明治の今日、それまで研究する必要もなかろう。

濃淡の配合をよろしくするのは第一に心得べき事である、句の初に墨を含ませ句の切るゝ所まで書きつられ、更に次の句にとり懸んとする時に墨をつぐので、句の中程ではなるべく墨をつがぬやうにする、又濃淡の兩行に相竝ぶことを好まないから、時には二句三句墨を繼がずに書くこともしなければならない、句頭句尾の置き所も注意すべき一ッである、即ち例の字が行の最下になつたり、候の字が行の最上になつたりするのは見苦しいものであるから、こゝ大に工夫を凝らすべき價値がある、今左に其方法を述べませう。

（イ）文句の伸縮　文句が長くて其行に書き切れず、句尾が次行の上に上る憂あるときは、句中の冗字を省き、句の緊縮をはかり、文句短くして次句の頭行の下に來らんとするときは、之に差支ない文字を加へて句を伸べるのだ。

（ロ）假名と漢字との轉換　假名で長すぎるときは漢字に、漢字で短すぎるときは假名に書き換ふることである。

（ロ）字體の伸縮　これは最も大切な事で即ち某の字を長く書いたり短く書いたりするのである。

（ニ）字の間隔の伸縮　これも熟錬を要すべきもので、字體の伸縮と相伴つて行かれればならぬ。

(六) 墨色

手紙の墨色は實に女子の粉粧と同じく濃淡程よくしなければならない、長者に送る文又は吉事の文簡はなるべく厚化粧即ち墨の濃いのがよろしい、凶事にはむしろ素顏即ち淡墨が禮である、凶事に淡墨を可とするのは人の不幸を聞き驚きあわてた樣をあらはしたので、悠々と墨をする暇もなき人情を元とした習はせであらう。

(七) 行と行との間隔

行と行との間はひろからず、せまからず、程よくしなければならぬ、字の両端が互に觸れあつて居るのは體裁のよいものでない、又あまり隔たりすぎて其間に車の通行する様なのは手紙の長さが徒に増して三錢の切手ですむものが六錢の無駄をしなければならぬやうになる、間隔は文字の大小によつて無論多少の斟酌をしなければならないから幾寸幾分と定むるわけのものでない、先づ字の大小に從ひ其字行の占領する廣さと同じ間隔を置けばよろしい。

(八) 文字の大さ

馬鹿に大きいのは廣い紙面で僅かの用事しか書くことは出來ない、又極端に小さいのは如何にも小膽らしくて體裁もよくない、字の大小については余も定見はないが天地六寸の卷紙に對し一行十字を書く位が適當だと思ふ。

(九) 姓名の書き方

本文を書き終つた時は年月日をかき、次に我名を書き、後宛名を書くのが順序である、我名は本文を去ること近きに過ぎず遠きに失せず、程よい所を撰び本文と同じ字體で同じ大さ若くは稍小さき字で、紙の中央より書き下し、最下の字は本文の最下の字と相竝ぶやうに書き終るがよいのである。

宛名は我名から二行ばかり隔てゝ本文と同じ高さの所から、書きはじめ、樣の字は我名の二字目と同じ高さになるやうに書き終るがよろしい名の字は決して訛のないやうに眞面目に愼んで書くべきもので、草の走りがきなどは失禮である、けれども本文を行草に書きながら宛名だけ楷書でかくのは却つて人を馬鹿にして居るやうになる、要するに本文と同じ字體で謹んで書けばよろしい。

(イ) 尊長者に對しては苗字だけを書いてもよろしいが自己のは姓名を書くべきである。

(ロ) 親友には相手のも自己のも姓だけでも名だけでもよろしい、しかし相手のを名、我のを姓に書くはよろしくない人のは姓己れは名元より差支はない。

(ハ) 両親又は血族上の長者に對しては自己のは名ばかりでよい、宛名はかゝずたゞ尊稱ばかり父上樣とか叔母樣とか書くべし。

（二）目下に對しては己の名先方の名だけ書けばよい。

（十）殿と樣

宛名につける殿と樣とは古來混用した樣であるが、今では其用方が一定して居る、殿は公文即ち願書屆書公官署の照會回答文等に用ゐられ、又證文受取などに書かれて、普通の手紙に用うることは甚だ稀である、普通の手紙では目下に對してのみ之を用うるので我と同等以上の人に對してはなるべく用ゐぬがよろしい、若し用ゐるにしても行草のいづれかに書くべきものである、樣は手簡には專用せらるゝが公用文には大の禁物だ、以上の如く兩者の用方大に異つて居るにもかゝはらず、公文は大抵目上に宛てることから誤りて目上に對しての私信に往々殿を書き、又親しき人であるからとて公用文に樣を書くことがある、これ等は實に愼むべし。

樣には楷行草等さまざまの體あれば、其略し方によつて敬の程度がちがふ、楷は貴人に書くべきで、草は我と同等若しくは以下の人に對して書くのだ。

男子水魚の友に對しては、何々兄、何々君と書くのであるが、女子の名に君を用ふるのは甚だ氣障だ、花子の君、梅子君などはこの頃往々見受けるのだ。

（十一）前後のあけ

前のあけは普通二三寸を置くのであるが其のあけ方の廣いほど前方を敬ふ意となるのであるから、相手の如何によつて多少心すべきものである、四寸より廣く一寸五分よりせまいのは體裁上よくないものであるから避くるがよろしい、手紙を書くに常に度器を携ふわけにもゆかぬから、目分量で三寸ほどあけて書きはじむるがよい、余は拇指を除き他の四指をならべ置くだけの廣さに定めて居る、後のあけ即ち宛名の後の餘白は前のあけと同樣の心得でよろしい。

（十二）月日

月日は我名の上に本文の字よりやゝ小さき字で書くのが通例であるが、本文と我名との間に書くも差支ない、何れにしても本文より一字ばかり下げて書くがよい、我名と宛名との間、又は宛名の後に書くことは面白くない、明治年月日とかくは仰山すぎる樣な心地はすれども後の備忘とし

ても又書中の今日、昨日、去年、來月、等の語に對しても、月日丈では物足らぬ點があり、殊に後日の證跡となるもの、又は重要なる書簡は月日丈では不都合を生ずる場合もあるから、成るべく丁寧に書くがよろしい、書簡をしたゝめて、時刻を知らせる必要があれば、午前、午後、何時と書き込むべきであるが、常の手紙にはあまりわづらはしい、近隣の人又は日々あふ人などに送る手紙殊に要事の如何によつてはたゞ月日だけても日だけてもよい。

（十三）連名のこと

連名で手紙を送るとき、こなたのは目下のものゝ名から書きはじめ、目上のものゝ名をあとまはしにす、これは目上の人の名を宛名に最も近くするためで禮儀にかなつたことである、併し今は大抵目上から書きはじめ目下ほど後に書くことになつて居るからあながちどちらがよいと定めるわけにもゆかない、宛名の連名なるときは目上のものから書き漸次目下のものに及ぶのである。

（十四）追啓

追啓とは尚々書のことである、これは文中に書き漏したる事を補ふものであるから、本文を心して書く人は尚々書は不用なるわけである、然るに今はわざ／＼此條を設くることゝなつて居る、これは今人の輕卒加減を意味して居るのであるまいか、さはれ養生の注意などを一寸書き加へたのは如何にも用意周到で親切らしく且つ愛嬌あるものであるから、余はむしろ書かんことを望むのである、處が何にしても本文の附屬物であるから、手紙全體の體裁を損せぬ様に少し小さき字で本文より少しさげて書くべきである、其書き場所は三ヶ所ある一は宛名の次一は本文の終一は本文の行の間にかくのだ。

（十五）脇付

宛名の側に脇付といふものを書き添ふるのは習慣である、これには凡そ二種ある、其一は尊前閣下、玉机下、座右、御許、貴下、侍史、足下の類で先方の人を敬ふ意に用ゐるもので、書簡の中にもまた封筒の上にも書き添へる例である、其二は平信、無事、返事、貴酬、急用、至急、親展、御直披などの類でこれは書中の用向の點について先づ先方の人に注意せしむるために記すものである。

其一の方は用ゐなくとも差支のないものであるけれども、從來の慣例に從ひ之を用ゐたいと思ふ人は、尊敬すべき人には侍史を用ゐ、親愛すべき人には御許を書くがよろしい、其二の方は無論用ゐる方がよろしい、無事を報ずる書簡には無事、返事には返事、急用には至急、他見を憚る

ものには親展を用ふる坐下侍史などの語を用ふるは尊敬の意味に兼ぬるに先方の自ら通讀することを求むるか、又は其家人書生等が讀んでも差閊ないかを表はすものであるから、誤らないやうにしなければならぬ、即ち坐下、机下、膝下などいふは直に其人の手許に差出すといふ意味て、侍史は其お側の人まで差出すといふ意味である、親展、直披、侍史、人々御中などはその開封者を指定するもの故最も注意してかゝればならぬ、又先方の家人書生などが開封して差閊ない手紙には決して親展と書いてはいけない。

（十六）散し書

ちらすといふことは正しくないことゝをもはれるから目上に奉るもの、又は眞面目を要する手紙は之を用ゐぬがよいと思ふが、女子の手簡に散らしたのはやさしいものであるから、普通の書簡には差支ありますまい、さてその散し樣には左の樣式がある。

（イ）藤花樣　上に揃へ下不同、譬へは藤花の咲き亂れたる樣なるべし。

（ロ）石立樣　上不同に書いて下を揃ふ山水の立石の如し。

（ハ）小筋書　二行揃へて書くなり。

（ニ）雁行樣　行の頭を段々下りに雁のつらなり飛ぶ形の如くするなり。

（十七）姓名を誤ることなかれ

男子には少いことであるが、女子には往々我名を正しく書かないものがある、現今の女學生には往々處でなく片ッ端からウソ名を書きたがる、これは手紙の上のみに限らない何につけても然り、子を以て見ればわかることであるが親が子に命名する時の苦心といつたら一通でない、何にせんか彼にせんかと迷つて迷つて終に決するかさなくば、遂に人に賴んで命じてもらふ、人に賴むのも決して無責任で賴むのでなく、苦悶の末遂に人に決してもらふのだ、お竹お梅おきくおなみお秋、お金、お鶴などいづれも其物の德、形、色などを擬つて我子もかくあれかしと希ふ心から、吉祥ある文字を撰んで命ずるのだ、然るに其有りがたい名をわざと正しく書かぬなどは、實に以の外の事である、市町村の戸籍役場には、戸籍簿があつて人々の生れた時に屆出てた名が正しくのせられてある、而して相當の法律上の手續を經なければ一點一畫も左右することの出來ないもので他の字と轉換したり、又他の字を附け加へたりすることは猶更ゆるさない、今かりに諸子が法律に關したる事件、即ち結婚とか相續とか登記とか訴訟とか將た死亡とかの手續をして見よ、其姓名の文字一點一畫誤つもすむべきものでない。（完）

武裝の正月

近藤正一

吾人は新年を武裝せざるべからず、セメテは新年の家庭丈にても武裝せしめたく思ふ、而して吾人をして軍國新年行事は斯の如くありしとてこれを後世子孫が誇るの榮を得せしめよ。我國民は開戰以來旣に全く精神的に武裝し居るなり而してこの赳々たる尙武的精神は種々なる形式を以て種々なる方面に發展顯現し居ることを知らざるべからず。

カキー色の背廣服は流行にもこれを徵すべく、戰爭の意匠が凝したるものにあらざれば半襟や花簪の如き些々たるもの迄も實は口惡しと云ふに就てもこれを察することを得、獨りそれ等のみにあらず、公會の席上に於ける裝飾の意匠、學校生徒の遊技や唱歌や、若し子細に觀察せむには吾人が步調までも開戰後は何となく活潑雄猛の氣を帶びて見ゆるも恐くは神經の作用のみにはあらざるべく。

國家の年中行事とも云ふべき天長節の觀兵式の如き旣に純然たる武裝的形式を以て行はせられ、外務大臣が例として行ふ天長節の夜會の如きも亦全く平時と趣を異にして何所となく軍國的晚餐會の如き有樣なりしなど、云ひ得べくんば武裝せる會食とも名くべけむか。

吾人は玆に於て世間の主婦・取分け上流の婦人達に對つて新年の家庭を武裝せしめて、長く征露の紀念を元旦の行事の上に留めしめられむことを望むゆへんなり。

新しく年の立かへるは芽出度に相違なし、晴れ渡りたる東天に晃々たる旭日のさし上れる景象を見ては何人か新猛淸健の氣を起して嬉しく又樂しきは云ふまでもなく況して來るべき新年は吾人が殊に屬望期待せる樂しき新年なればこの元旦を迎ふるに於て何の嬉しからざることあらむ、何の樂しからざることあらむ、ことなくば、大白を傾けてこの齊帝を迎へたく思ふは四千萬衆悉く同一の所感なるべし。

然りながら試に思へ吾人の同胞は指も墮つると云ふ滿洲の平野に沍寒と戰ひ强敵と戰ひ屍を越へ血を踏みて奉公に餘念なきことを元旦なりとて敵は逆襲せずと云ふを期すべからず、新年なりとて攻擊の機はこれを怠ることを許さず、若夫これを思ひ彼を思へば豈陶然として四海浪靜なりの枝も鳴らさぬ時つ風などゝ謠ひて太平的の新年行事に嬉笑することを許すべきならむや、況んや出征軍士の親たり子たる人、

又妻たり女たる人に於てをや、吾人はこの人達に對しても斯かる冷行を敢てするに忍びざるなり若夫れ、

　兒等はみないくさのにはに出はてゝ、翁やひとり山田もるらむ

の御製を拜唱するに至ては何人が擊壤鼓腹して太平の壽杯に醉倒するの不臣なるを知らざるものあらむ、然しながら習慣は習慣なり儀式は儀式なり況んや凶事にも凶禮あるを思へば、有望なる新年を迎ふるに當つて吾人如何ぞその儀式行事を全廢せよと云へるが如き無趣味論を唱ふるものならむや、只々禮は時の宜きに從ふと云へる確言に從ひて時節相應の行事儀式を以てこの新年を迎へたく思ふの微意に外ならざるなり。若夫れ世に無血性なる閑人ありて徒らに舊儀慣例なりとて、四の海浪靜かならざるに太平を謳ひ餅腹に惰氣を催して滿洲の吹雪を餘所に見るの痴態を學ぶが如きは吾人はこれを見て恰も火事場に於て舞踏し、不幸ある家を訪ふて賀詞を述ぶると大差なきを信ぜむと欲す。

資金を浪費せされば禮は舉らざるに非ず、綺羅を飾らざれば行事は行はれざるの理なし、故に軍國の新年式は飽く迄も素朴なれ、飽迄も嚴肅なれ、然して些の浮華驕奢の氣を帶ばしむる勿れ。

　公のたてまつりもののおろそかなる以て宜しとすとは列聖の殊に宸念に置かせ玉ふ所、況んや吾人が一家の私禮私儀に於てをや、これ有事なるこの歳末に當て吾人が世の主婦達に殊にその注意を求めむとする所なり。

今試に吾人が理想として世の同意を乞はむとする迎年の式に就ての希望を述れば、

一　松飾全廢の事

都大路は物淋しき感もあらむ、又景氣惡しくも見ゆらむ然りながら古人も發生的の機緘は零落の内にあり、衰颯的の景象は盛滿の中に存すると云へば、この松門も七五三飾も無き落莫なる闃に自ら雄大なる軍國的新年の氣象の伏することを知ることを得む。

一　雜煮餅廢止の事

これ或は實行し難しとの誹もあらむ、若し實行し難くばセメテは白米の餅を廢して粟餅黍餅にせよ粟や黍は素より不味なるには相違なきも吾人の同胞はそれだにも口にすることは難かるべし即ち之を味ふて同胞の上を偲ばまほしく思ふなり。

一　三ケ日の晴衣は勉めて質素なるものを着する事

內地にあるものが粗服を着したりとて戰地の同胞が暖かきにはあらず暖かならずと云へども之をなすはこれ人情の至誠なればなり元日に晴

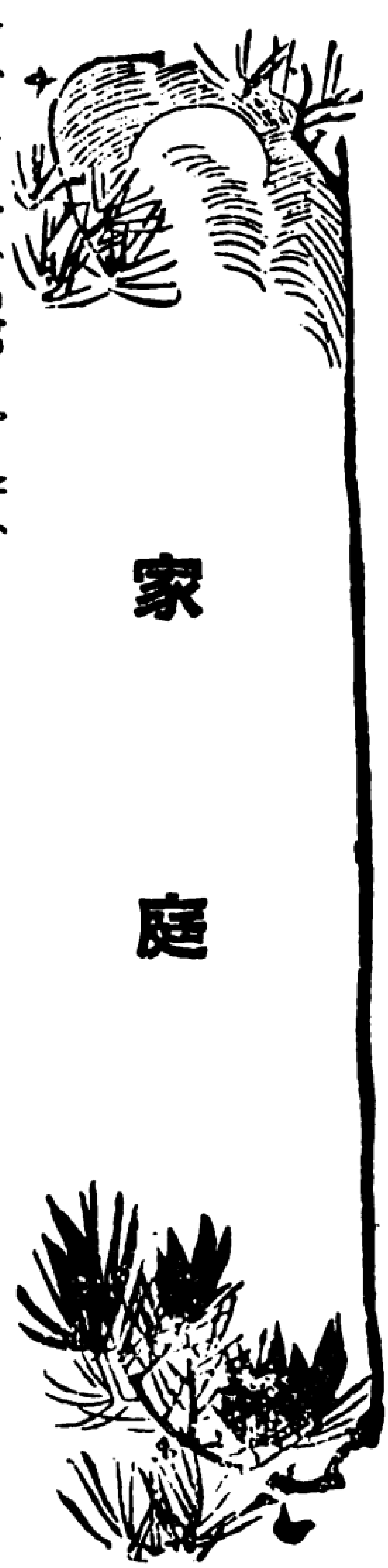
衣を著する勿れとは云はず、只禮を行ふに欠けざるの範圍内に於てし度く思ふ迄なり。

若夫れ中流以上の家庭などに於て客間や居間の裝飾の必要ある家に在ては勉めて文弱浮華を去て渾大雄壯眞に尙武國の新年らしく飾れ蓬萊の三法に代ふるに軍刀太刀を以てするも可らむ、鶴龜の掛物に代ふに武裝せる將軍か勇健なる兵士の姿を描きて展するも可ならむ、破魔矢破魔弓を柱掛にするは尤も面白く寒梅を花瓶に挿みて神州武士の困苦に耐へて操節愈高きの意を偶するも又妙ならむ。裝飾の意匠の如き素より多種豐富なるべきも要するにこの精神を以て家庭を武裝せしむべく工風すれば足れるなり。

斯の如くして新年の儀式を質素に靜肅に擧くれば從つて少からざる費用を減ずべく假りに一戸に一圓つゝを減じ得るとすれば都下のみにても優に百萬圓以上の餘財を殘し得るの道理ならずや、若しこれを全國に通じて計算すればその金額決して少々にあらざるならむ、即ち之を恤兵の費に充て或は有用の事に用ふれば豈に一擧にして兩全の策ならずや、これ吾人が世の主婦達に對つて之を勸告するゆへむにして、又殊にこれを上流の婦人に望むものは普く世の模範となり、世間を益せられんことを思ふが故なり。

博進社印刷工場の火災

本館各雜誌の印刷所なる小石川區久堅町博進社印刷工場は舊臘二十一日午前一時工場の一隅なる鎔鑄場より火を發し新工場を除くの外建物諸機械とも烏有に歸したるも幸ひに最新式の輪轉機械及附屬品は新工場と共に燒失を免れたれば從來同工場にて印刷せる國定敎科書の印刷は差支なく進行すべくまた各雜誌は半ば印刷の後に燒失したるもの多きも幸ひに東京活版印刷組合にては深く同情を寄せて特に委員を設け年末最も多忙の際に各同業協力して印刷を擔當し能く本館各雜誌の發行を全うせしめられしは本館の最も感謝する所なり、また燒失後の印刷工場は直ちに建築業を以て東都第一の淸水組に托して再築に着手したれば落成して舊の如く事業を進行するも遠からざるを期す、其間の印刷も各印刷製本の準備既に成りたれば何れも舊來の發行期に後るゝこと無きなり



家庭

二十世紀改良家庭

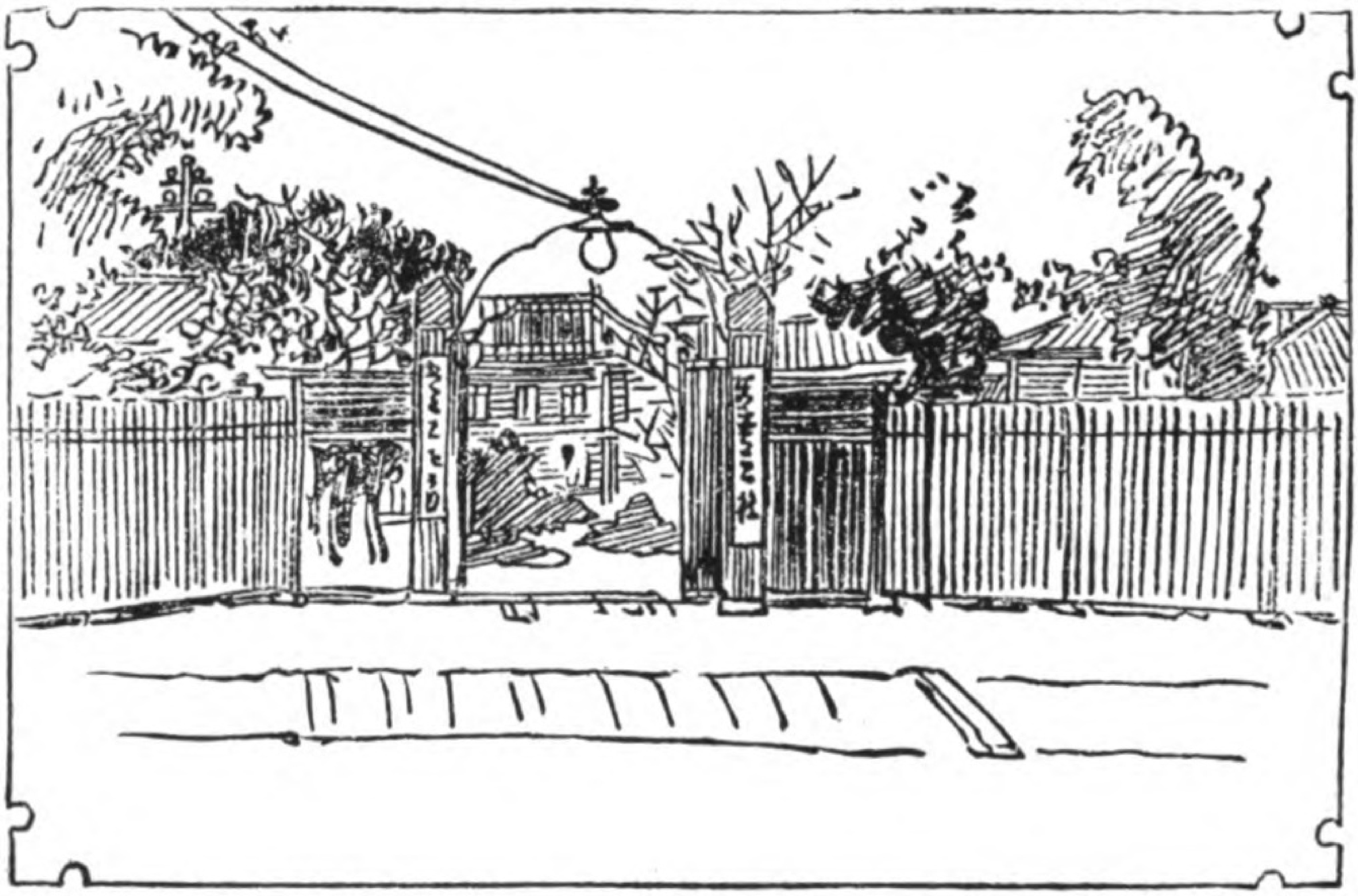
佐々熊太郎夫人談
中村鈴子記

一口に模範的家庭と申しても、生活の程度によつて實際眞似するとの出來ぬのがあります、けれども專賣局員佐々熊太郎氏の生活法は上中下推しなべて參考にもなり眞似も出來るので、其家庭の整理は夫人いね子氏の功であります。夫人は農學博士玉利喜造氏の令妹なので、乳母日傘で育てられたに關らず、十七歲の妙齡を以て熊太郎氏に嫁がれ、多勢のお子達を手一つに育て、良人をして毫も内顧の憂なからしめられたので、夫人を知る者は誰一人舌を捲て感歎せぬは御座いません。夫人が克己力に富めるは申す迄もなく、却々才氣ある方ですから、獨創の工夫を運らされ、人手と時間の節約を圖られるのです。先頃麹町區平河町の靜かな御住居をお尋ね申し、くゞり門を入つて案内を乞ひ改良筒袖を着た束髮の十七八の女中に導かれ、迂回して御庭先へ出て、竹の欄干を渡し一部を扉に造られた御椽先から八疊の應接間へ伺ひました、此室には椅子四脚に小卓子を備かれ、御床の間には東照公筆「孝者百行之基」六字の一軸を掛け、征矢數本と一輪挿の花瓶など違棚に並べられ、盆栽が整齊雅潔に飾られてあり崖を築山に利用した御庭に綠樹繁り、池邊の柳に藤の絡めるなど、却々に風情があります。夫人は丈の高い肉付の良い快活な風采て、フラネルの筒袖の單衣に黃縞銘仙の羽織を着けて出て來られ、隔意なく裨益ある

家政談をして下さいました。四歳位の令息と二歳位の令嬢が始終夫人の傍で遊ばれたのをお守り成されながら、記者の問に御答へ下すつたのは殊に感服致したので御座ます。

▲家庭訪問者踵を接す

當節は家庭々々が大流行で、私方のやうな詰らぬ家へ皆様が御出でに成り、話しを聴かせて呉れとか、臺所を見せて呉れとか仰しやる方が御座いますが私は從來別に大層變つた仕事を致したのでは無く、ホンの尋常の仕事を日々繰返して居るだけて、却々皆様の御參考になる次第は御座いません。昨年も家庭雜誌の堺さんが入らしつて、私のつまらぬ話を悉皆お載せに成り、實際研究したければ、



東京市第二高等女學校（小石川竹早町）

二時間の暇を費して、佐々の家へ行つて御覽なさいと御書きなすつたものですから、御尋ね下さる方が大層殖えたやうな次第で……當年の暑中休暇には女子師範學校の先生や生徒さん方が多勢連れて御出でに成り、私は洗濯物に糊を付けかけた儘御挨拶に出るやうな始末で、私は何故斯様に御訪問を受けるのか、自分では不思議で可笑しいやうな心地が致します、唯だ私共は秘密のない家ですから、何方が入らしつても何處から何處まで御覽に入れ、又自分の考へ付いた事は悉皆御話し申して、皆様の御意見を伺つて居るのです。

▲多勢の子達に保姆を置かず

十六歳を頭に七人の子供で、可なり客の出入も多い家ですが、

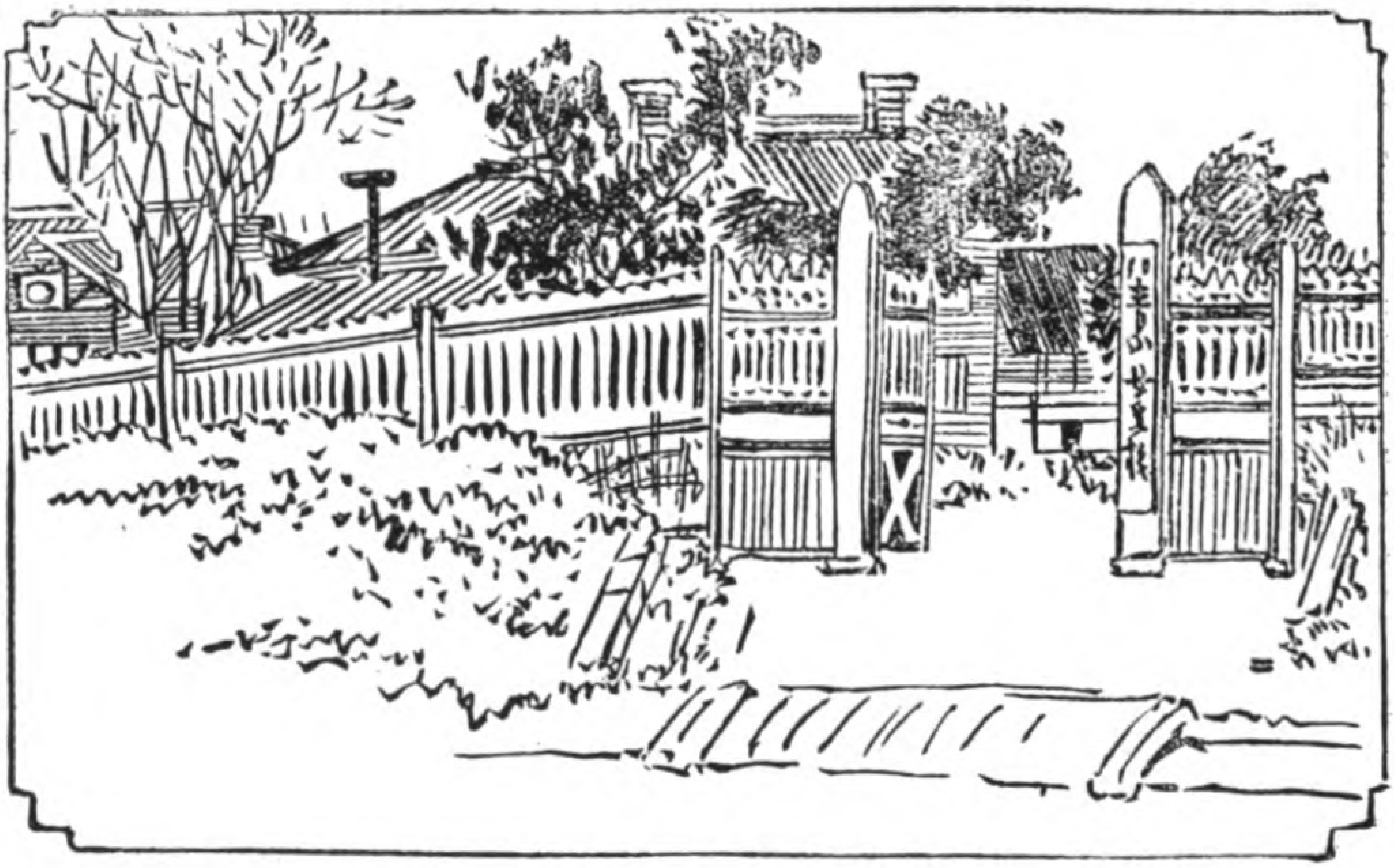
唯今まで一人の下女で間に合せて居り、昨年初めての女の兒を持ちましてから、今一人下女を殖したのです。尤も家政見習をしたいと仰しやる娘さんを頼まれるとも御座いますが御兩親の在らるゝ方は假令出りなりても御兩親が教育なさるに越したとは無いと存じますネ。それで私は大抵片親ない娘さんを御預り申すのですが、人樣の御娘は實に心配で堪りません、併し此娘さん達も下女も誠に能く私の申すとを守つて呉れまして、何時勝手を見廻つても整然として居り、褒め言葉を抑制して居られなくなります。私は多勢子供を持ちましても、子供に就て少しも困ると思つたとは御座いません。多勢の子供に手の掛らぬのは年上の兒から順々に年下の兒を世話致させ、赤子も始終寢かして置き、抱いて外へ出る癖を付けません、抱つこて外面と云ふのは手のかゝる習慣ですネ。つかまり立ちをする樣になれば、帳場格子を拵へて圍つて置き其側で私も下女も仕事を致します。子供は親が側に居れば、其樣に他へ行きたがりません。子供を外へ出すと、善い事ばかりは覺えませんから、私共では幼稚園へも遣はさずに庭や家の内で互に遊ばして御座いますが、運動も隨分致しますから、至極丈夫に育つて居ります。其代り何方が御出でも、御覽の通り子供の守を致しながら御話致すやうな次第で、御客に菓子も子供が欲しがりますから差上げません但子供に遣す時分になれば、御茶菓子を出して後を子供に頂かせるやうに致して居ります。

▲寢床

寢床の上げ卸しも九人の家族では朝晩十八度の手數ですから、僅かの時間でも積れば勿躰ない程の暇つぶしになります。それで私方では船の寢床のやうな積層ねの床を作つて取りつばなしに致して御座います。子供の寢室は六疊の兩隅に三層づゝの寢床を置き、丈の高い者を一番上に、それから順々に下へ寢かしますので六人が樂に寢られて六疊の中央に尙十分空いた處が出來ます。下へ寢がした頃は八疊の室狹しと轉げたものでしたが、寢臺にしてから、チャンと行儀よく寢るやうになりました。夜具は毛布を白布でくるんだものばかりで綿を用ひませんが、冬は寢臺横手の欄間を閉めると暖かで、夏は寢床の上から蚊帳を被せるばかりで少

しも手は掛りません、夜分年下の兒が眠くなつて轉がつてゞも居ると、上の兒が抱いて寢床へ入れて遣ると云ふ風で、互に世話をさせ付けますと、兄弟の情が實に深くなつて、偶に旅でもした時は、其案じるよ一通りでありません、寢床は始終取りばなしの代りに一週に一度づゝ、各自の蒲團を頭へ載せて乾しに出しますから、少しも不潔にはならぬのです。

其寢臺は頗る輕便の物、七圓五十錢で新調せられたとの事です。寢臺の緣側には机と椅子が四組列べられてあり。長男次男は日比谷中學、三男四男は麴町小學校へ通學される



青山女學院（青山南町）

さうで、其復習用として整然學校式に設けられてあるのです。偖この寢臺に隣れる三疊ばかりの室に六段の棚を設け學校用具類を載せて置かれるので、上段は丈高き長男の持分、順々に年下の持分とし、各自の紙筆墨書物などが位置正しく置かれ、墨汁壺はそれぞれの釘に懸けてあり、下層は學齡未滿の御子の領分なので、御伽噺などが積んでありました、最も注意深さに感服致しましたのは、棚の最下部なる菓子折の中へ、繃帶、油紙、ガーゼ、傷藥等を小別けして入れ置かれ、男兒ばかりて毎日のやうに小さな怪我を

しますからとて、自分で繃帶するとを教えらるゝそうです、爾して此棚も煤竹と唐紙の縁を買つて來て手輕に板を渡し手づから作られたとの事です、尚ほ仕事室には棚幾つかを設けて小布を載せてありますが、其小布は部類別にして「たとう」に包み、其横側へ品名を平假名で記してあるので、例へばさらさ、しろもめん、ふらねる、かすり、かたあて、こしあて、と云ふ如く何人が搜しても直ぐ判るやうに整頓してありました。

▲裁縫の時間

私共では四時半に一同起き出て、八時半には悉皆片付き、御飯の跡も三十分で片付きますから、私も下女も一日に十時間位は充分仕事する餘裕があるので、子供の洋服から足袋まで一切家で縫ふとが出來ます。子供の多い家は是非ミシン縫か必要なので、私も稽古は致しませんが、洋服を解いて見たりなぞして、漸々出來るやうになりました、私は十八歳の時からの子持て、初ての兒などは無我夢中で育てたのです、自分の

派手な物など直して厚いフキの綿入を拵えました所、汚して乾す度に裾が乾かず、裾の乾くまで乾すと肩の色が剝げて了ふのに驚いて、それから子供の着物へは一切綿を入れぬ事と致し、綿ネルばかりを用ひ始めました、寒い盛りには綿ネルを重ねれば暖かで、洗濯にも輕便で宜しう御座います、多數の衣服を裁縫すると切れ端の整理が面倒で、チョット小布を搜すのに却々時間を費して困りますから、御覧の通り一目して判るやうに部類別に致しました。私は一度懲りたとを繰り返す勇氣は御座いませぬから、直に工夫して改良して了ふのです。此小切疊紙も風呂敷の古いのなど貼つて私が拵えたので、斯う致して置けば、何樣な小さい切れ端でも保存し得られて、チツヨトも錯亂する心配はありませんし、私でなくとも下女が容易く整理するとが出來ます、愈々仕方のない切れ屑は、棚の下に吊してある大きな袋に溜めて、御產の時に用ひます。煮て消毒さへ致せば、何樣な切れ屑でも綿の代りに產褥團の中に入れられますから、斯樣な事も平生下女に善

く教えて置きます。

▲衣服の整理

私の母親は嚴重な人で、相應に召使も居りましたが私などには、五歳から着物を疊ませ、又下の物たけを洗はせましたので、乳母が餘りな奥さんだと怨んださうです。私も子供達に自分の事だけは人の厄介にならぬ樣にと仕込みますので、多勢でも人手が要らぬので御座います。それで誰にても整理のし易いやうに棚を設つて、丈の順に各自時々の着類を載せ埃のかゝらぬやうに布を掛けて置いて遣りますと、其處から出し入れして、何時もチヤンと片付けてあります。箪笥は引越の時毀して懲りましたから、僅か二個だけにして、後は悉皆幾個かの支那鞄へ詰めて置きます。二階の長持には客前の夜具を入れてありますが、尋常に置くと蓋の上へ何か積んで出し入れが億劫になりますから、横にして簡便に出せる樣にして置きます。總て物事を億劫がるのは、整理の付け方が宜くないから起るのだと存じます。

▲洗濯、襁褓

着類の汚れたのは、衣服棚の下に在る行李の中へ入れさせ置き、土曜日に洗濯すると定め、雨天でも此日に洗つて漬けて置き翌日乾すのです。洗濯は大抵木綿と綿ネルばかりなので、大釜で煮ますから、石鹸も入らず時間も費えません。襁褓は三角形にして釦で留め普通の長い襁褓一枚を厚く疊んで其下へ挾んで置きますから、イクラ動いても落ちるとなく、汚れ物も決してこぼれませんし、又洗ふ襁褓も僅かで濟みます。盛りの時でも、一日に三度と定めて間に暇を費しません

▲臺所

臺所は成るべく狹いのが好きです、此家は流し共四疊敷ですが、尙廣過ぎると思ひます。何處の家に住つても、臺所の中央を絶ち切つて竈元と流しの下はタヽキにして了ふので、流しは亞鉛で張つて中央を仕切り直其中で洗物をしますから輕便に濟みます。渋草に居つた時は、水道が無かつたので、井戸に筧を作り管を地面に伏せて流し元へ通し、私が筧へ水を汲み込んだ

のて、これを手造りの水道と私が名付けました。水道の設が無い家では、手桶で運んで瓶へ入れ、又桶へ移して洗ふと云ふ風に何度か無益の手數が掛りますから手造りの水道に限ります。筧を造るに金が費ると仰しやる方もありますが、幾月か心掛けて取り除けて置けば、筧ぐらゐ僅かの金ですから乾度出來ますし、結局一人ぐらゐ下女の手が省けるやうになります。

臺所拜見中、食器入れの戸棚は小奇麗だと存じました。戸棚の中に幾つか小分けの棚が設け、椀、皿、茶碗等を積み、横手には竪に仕切を付けて罎、徳利類を置き、匙、肉叉、小刀なども抽匣へ仕舞はず、皆戸棚の側面に細木を渡して掛け列べてあつて、誰にでも一目に悉皆の食器が判るから、多勢の來客を饗應するのに、一人の女中で少しもマゴつく心配は無いとの事。

飯櫃を奇麗に磨くには、十五分位も費した上に、往々磨砂が殘つて、白粉でも付けたやうに不潔ですから、白い瀬戸物の飯櫃に改良して了ひました。多勢の子供に一々御給仕は手數ですから、大きい茶碗に一度分を盛り付けて遣はし、御菜も大きい皿に二種でも三種でも盛つて食べさせます。

▲日々の小費を下婢に任す

一週間分の豫算をチャンと立て、一人の下婢には、魚、鳥、牛肉、野菜の入用金、一人の下婢には、石鹸、洗濯曹達などの雜品の入用金を預けて置き、皆下婢の手から仕拂はせますから、客のある際には一々奥さん奥さんと呼びに來る世話はありません。土曜と日曜祭日には少しばかり肉食するとに定めてありますが、來客でも多かつた時は、下女の方で間の入用に手加減を致すと云ふ風で、それは嚴重に致して居ります。五月に淺草から此方へ引移りましたが、此邊の商人は現金を厭がりますので、下女は私から受取つた金を袋へ入れ、仕拂ふべき金を又別の袋へ取り除けて置くと云ふやうな次第で、却つて面倒で困つて居ります。

▲豫算と支出の嚴重

月俸二十四圓の時分から今日に至るまで、其時々の收入

に隨つて精細な豫算を立て、豫算通り正しく支出して規則を亂したとは御坐いません。何でも今月の月給を來月に費ひさへすれば間違ないので、申さずとも判り切つたとですが、唯だ之を正しく守ると守らぬとで經濟に違ひが出來るのだと思ひます。一家の豫算は大抵何處樣も定まつたものですが、私方では家賃、米、副食物、被服、交際、車代と云ふ種類に小別して一々袋へ入れて置きます。所得税なども月割にして取り除け置きますから、決して一時に骨の折れるとは御坐いません。米、醬油、鰹節、炭、薪等も皆月割にして溜め置き、買ふ時は問屋から澤山



跡見女學校（小石川柳町）

求めますので、大層經濟で御坐います。米は深川の米屋から取寄せますが、一圓に付て一升廉う御坐います衣類は矢張り豫算額を合せて、夏物を冬の初め、冬物を夏の初めに求めますので綿ネル、小倉など皆一度に一卷づゝ買ひますから、豪い贅澤のやうですが、一卷を皆さんで分けると餘程廉價に付きます。臨時費は豫算通りに行き兼ねるものですが、臨時費の多い月は他の費用を節約して行けば、超過せずに濟むやうな次第で、一躰私共の生活は、手一杯に割り詰めてあるので、お恥しい次第ですが、貯金と申すものを致しません。其代り國元の親が何時

大病でも直に飛んで行かれるやうに用意して置くので私は僅かばかりの利子の爲めに貯金して、親の急に間に合はぬ樣では何にもならぬと思ふのです。此つまらぬ家庭に唯だ一つ褒めて頂きたいとは、主人始め家内中日々面白く愉快に生活すと云ふだけなのです。

▲御主人の氣樂

宅では昔から家の經濟には氣樂なもので、一切私に任せきり、これに就いて心配を致した事はありませぬから、自然公の事業に身が入るので御坐いませう。淺草の官宅を引拂つたのも、矢張り專賣局の爲めには代へられぬ、何でも自分の事は如何でも宜いと云ふ主義なので、官宅から見ますと座敷も庭も餘程狹いのです。それで一個月二十圓で借り受けて入りました所が、子供等は此御庭は箱庭の樣ですねと評しました、其樣な氣風の人ですから私も昔から活計に付て相談したとは御坐いません。併し近頃は總ての經費が膨脹するばかりで、車代など實に大層に掛りますから、決算書を見て呉れとイクラ申しても、見ませんので便所に參つて紙を寄越せと申した時、其決算書を持て行きましたら、始めて目を通したものと見えて、自轉車を買はうかなぞと申し出しました。

▲共同長屋の立案

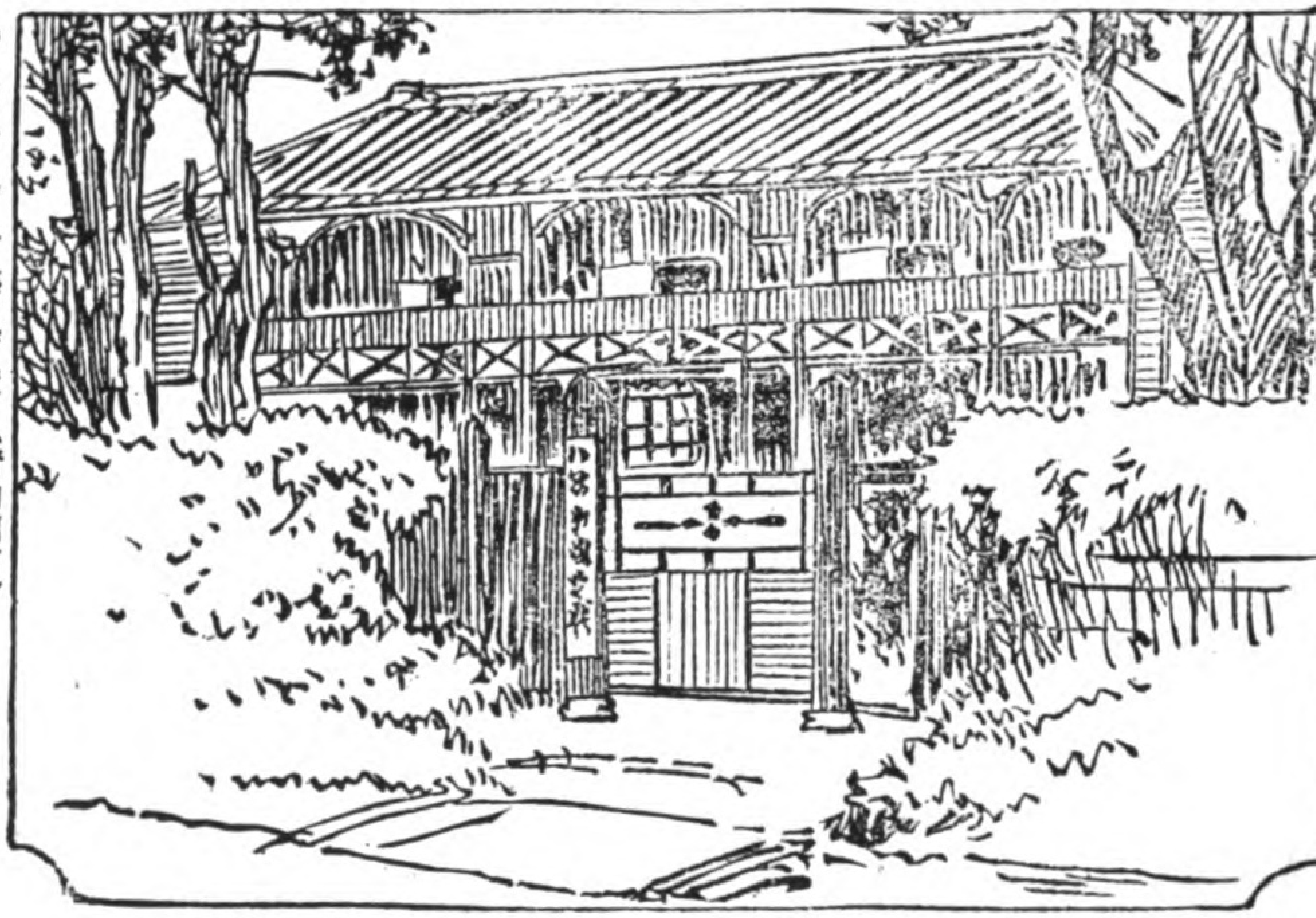
私の行つて居る整理法は、何樣な狹い家でもユックリト住へる積りで御坐います。それで私は局へ勤める薄給の人の爲めに共同長屋を造つて私共も其長屋住居を一處にして見たいと思ひ、資金の都合さへ付けば是非遣つて見る積りですが、其長屋は八疊に四疊半づつの家を周圍に建て廻し、例の寢臺を置いて座敷を廣く用ひ、雪隱は共同にして家より離し、順番に毎日掃除する事にして、臺所も共同に一ケ所造つて、矢張り順番に御飯を炊いて配る樣にしたらば、互に手が省けて而して清潔に住へませう。又米、副食物、薪、炭などは、一纏めて澤山買い入れて皆で分ける事にしたら經濟でせう。而して私共は中央に住つて世話役を受持つたなら宜しからうと考へて居ります。これは此主意を贊成して意氣相投ずる者ばかり住ふ處と定め、生

活の手數を省いて、成るべく澤山に稼ぎ、遊ぶ時には、全長屋の者が寄り合つて快活に樂みたいと云ふ趣向ですが、未だ資本に就て工夫中なので、有力の方に賛助して頂きたいので御座います。

▲着々家庭改良を望む

熱心の奥さんは、日々小しづゝ、改良を計られ『昨日は棚を釣つて整理しました、今日は流し元を仕末付けました』と、毎日御出での度に御覽の事を一々實際に行ふ方が御座いますので、何卒少しでも善いと思つたとは、直に行つて頂きたいと存じます又資本のかゝる造作は前にも申した通り、取除けて貯金致し、數月でも一年でも積んだら、必ず出來ませう。改良する精神さへあれば、假令直には出來ずとも、日を重ねれば出來る道理ですネ。役所へ勤める方の細君方の中には、ミシン縫は數えて頂いたが、手ミシンを買ふのにチヨツト差支えると言はれる方に月賦にして收めるやうに致して上げて居ります。

最前より何方かの奥樣が見習ひに來て居られましたが、記者に向つて話さるゝやう『此御家では、夜分遊びの時間には、皆さんで面白さうに遊ばれ、旦那樣と奥樣が角力取なぞ成さるとが御座いますよ。ですから旦那樣でも御子供衆でも御宅を一番愉快な處となされて、決して外へ遊びに御出でならないのです。』



青山女子手藝學校（青山南町）

家政

衣服の經濟

鳥子

浮華流行を追ひ身分不相應なる虛飾を爲し、家計の困難するも顧みざるが如きは、もとより堅く戒しむべきことなりと雖ども、身分相應の服裝を爲すはまた必要のことなり、既に他人と交際を開く以上は、それ相應の服裝を爲さゞれは却つて不利なるところあるのみならず、場所柄に依ては他人に對して禮を失することもあれば、己れの力に適ふ財力を以て、服裝を爲すは決して惡しきことにあらざるなり。

然れども、美を好むは人情の常なり、況して婦女子の如きは一層此の念熾にして、一年に一度か、二度着ざるほどの衣服を藏するは婦人の常なり、尙ほ甚しきに至つては、一年に一度も肩に掛けたることなき衣服を數多持ちながら尙ほその上にも新調したがるは婦女子の常なり、畢竟着ると着ざるとに關せず、只多く藏するを以て榮えとするものなり、日本の婦女子のみならず、何れの國にても婦女子にはなべて裝飾に心を盡したがるものにして、家費の多分はこの衣服に費すものなり。

抑も婦女子の服裝に心を用ひんとするの有樣此の如きものなれば、常に注意して節約を行はざるべからず、己が分限は守らざるべからずと心得居るにも拘はらず人の情として動もすれば子女の愛情にひかされ他人の子女が美服盛裝せるを見て、己れの子女にも之れに等しき美服をつくり與へんとて、後日家計の困難を引き起すことあるは間々ある弊なり、他人の子女にも之れに等しき美服をつけ與へんとするはまだしものことなれども、己が身代の如何をも顧みずして自ら身分不似合なる者を爲すに至るものあり、實に淺間敷きことならずや。

畢竟此の弊に陷るは、そのこれを防ぐ道を盡さゞればなり、節儉は善事なり、爲さゞるべからず、虛飾は惡

事なり、戒しめざるべからず家政を整理せざるべからざることとは、苟も普通の智識を有するものは皆な知れる所なれども、之れを實行するに至つては唯智識を有するのみにては爲し能はざる所なり、要はその方法の如何にありと知るべし、されば今その弊を避けんとせば自家の月入若くは歳入の總額を以て夫々費用豫算を立つると同時に、家族が一年中に要する衣服の費用を豫しめ定め置くべし、旣に家族が一年中に要する衣服の費用定めおかば、其の中にて夫々の衣服を調製すべし、斯く豫じめ家費の内にて衣服費を定め、其中にて適宜に使用せば、決して家政を紊す憂ひなく、亦た身分相當の服裝を爲さすことを得て、人に對して耻づることなく又禮を失することもあらざるなり



△新調の心得

浮華流俗を追ふは固より戒しむべきなれども、身分相應のことを爲すは決して惡しきことにあらざるのみならず、又場合によつては之れが必要ありとすればその衣服の新調は、最も意を用ひざるべからず。

大凡衣服の調製時期は、春と秋との兩度にして、まづ春期に於ては、夏向きの衣服を調へ、秋季に於ては冬

向きの衣服を調ふ、この雨期に方て衣服を新調せんとするには、能く〳〵世上の風潮に注意せざるべからず同じ金錢を抛つて調製するものならば、流行後れの衣服をつくるが如きは、尤も拙なきものといふべし、限りある衣服費なれば能々注意するにあらずんば後悔することあり。流行後れか若しくは己れの意に滿たざる衣服を調製したるほど馬鹿々しきものはあらじ、現在尠なからざる金を費して調製したる衣服を持ちながら之れを着るを欲せずして、尚ほ古き衣服を着けんとするに至ることあり、此の如くんば始めより調製せざるの優れるに若かずと雖ども、畢竟輕卒にして流行の品柄を見出し能はざるに因るものなり、又經濟の點より云ふときは、成るべく品質のよろしくして永久に用ひ得べきものを擇ばざるべからず、固より廉立ちたる人の前へ出るときに用ゆる衣服は、常に着するものにあらざれは、その品質よりは寧ろその縞柄、模樣、見榮恰好の如きを擇むべきなれども、之れに反して不斷着は見榮、模樣、縞柄を擇ばんよりは寧ろ品質、丈夫なるものを擇ばざるべからず、何となれは不斷着は常に立働くに用ふるものなれば品質の善きものにあらざればば忽ち破損して用に堪へざるに至るものなればなり、此等の事柄は主婦たるもの最も注意を要する處なり。

△衣服の保存法

都て家内の事務に任ずるは婦人の務めにして、衣服の保管の如きも亦その職務中の一なり、而してこれを保管するには尤も丁寧なる注意を要す、之れを粗末にするほど不經濟のことはあらざるなり、衣服に皺をつくるは啻に見苦しきのみならず、自然地合の破損を來すに至るは必然のことなり、又衣服の濕氣を帶びたるものをその儘たゝみ込むが如きは、更に一層甚だしきものなれば、脫ぎ去りたる衣服は必ず先づ竿或は衣桁に掛け、暫時新鮮の空氣を通はしたる後ち、折目正しくたゝむべし、夏分は自然汗など衣服を汚すこと多ければ、之を拭ひ空氣を通はす等、一層注意を要すべきなり。

凡そ所持の衣服を簞笥或は革包等のものに藏め置くに

は、四時の衣服を區別し、又同時に常服と麗服とを別ち置くべし、決して同一の抽斗等に數多の衣服を混入すべからず、大抵麗き衣服なれば普通の人は多くも三四枚を限りとするものなれば襟と裾とを交互に入れ皺の付かざる樣注意すべし、長持などに數多の衣類を重ね、其上に布團、蚊帳を入るゝものを往々見掛くることとあるが、こは衣類を損するの最も甚だしきものにて、深く注意すべきことなり。



又た簞笥、革包其他衣類を入るゝものは成る丈け濕氣の通せざる場所を擇みて之れを置くべし、衣類の濕氣を帶びたるときは斑點を生じ、且つ色合を變損するのみならず、又大ひにその地質を損傷するに至るものなり、元來桐材なるものは最も能く濕氣を防ぐべき良材なれば、簞笥長持等の類は成るべくこの木材を以て造りたるを擇ぶべきなり。

如何なる衣服にても久しく簞笥の中に貯へて出すことなければ、濕氣を

呼び往々地合に黴を生じて終には斑點を見るに至るものなり、殊に梅雨の季節には最も濕氣を呼び易し、故に古來の俗に土用の頃に至れば快晴の日を撰び、總べて衣服を竿に掛けて日光に乾かし梅雨中の濕氣を除く之れを土用干と云ふ、衣服保存法として是れ甚だ必要の事なり、但し此の土用干も秘藏の衣裝は室内にて風通りよき處に掛けて干すべし、室外に暴露する時はつよき日光に照らされて粗惡なる染色は往々變ずることあり、土用干に就て風を入れたる衣裝は之を取片付くるに順序を正たし平生數しば使用するものは上に置き、常に用ふることなき衣裳は箪笥の底に藏むべき、勿論なれとも其久しく筐底に、藏めて出さゞるときは、動もすれば黴を生じ容易すく除き難きものなれば、必ず上より強く壓さゞるやうに注意すべし又衣服の間へは樟腦を紙に包みて挿み置くときは濕氣を掃ふの効あるものなり。

△洗濯の方法

衣服の垢じみたるは、最も見苦るしきのみならず又甚だ衛生に害あるものなれば、能く心を用ひて數しば洗ひ濯むべし、如何なる人にても總べて新しき衣服のみを着ることとは出來がたき故、稍や古くなるまでは之を着ざるべからず、而して其の古くなるまで着るには必ず其の未だ破れざる前に垢じむこと多き故に之を洗濯するは一家の主婦たるもの丶肝要なる責任なり、殊に夏時熱き日には一日着る時は、既に汗に汚れ然らざるも惡臭を發し、他人と同席するときは忌み嫌はるものなれば、殊に戒めざる可らず、又衣服の垢じみ又は汗の爲めに汚れたるときは、身體の毛孔を塞ぎて體中汚物の蒸發して飛散するを妨ぐるものなれば、衛生の上には甚だしき害あり、戒むべきなり。偖洗濯を爲すには、木綿物と絹物とによりて大に注意を異にせざるべからず、木綿類は其質堅牢にして幾たび洗濯するも容易に破損する憂ひなしと雖も、之に反して絹類の洗濯は能く注意して之を爲すとも倘ほ稍もすれば色を損じ易し、去れば少しの汚れありとも洗濯せざるを宜しとす、若し止むを得ず洗濯するときは、先づ淸水に浸し

搾らずして再び麩糊の煎汁に浸たし竿にかけて日光に乾すべし、又絹類の洗ひはりを爲すには、豆腐の搾汁又微温湯の中に洗粉を入れ輕く洗ひて日光に曝し然る後麩糊の煎汁の中に浸たし貼り板にはりて又日光に乾すべし、此の事は甚だ熟練を要し其爲す事拙なれば絹類の寸尺を伸ばし又は縮ましむべき故注意を要するなり。

絹類に油のつきたるを除き去るには水一升に鹽一合を入れ能く煎じて少しく冷やし、油つきたる所に灑ぎて洗ふべし、若し水に入れがたきものは、礪石を粉にし先づ之を撒き布らして、其上に紙をしき、火熨斗を以て摩擦すること數回なれば能く除け去るなり。



絹布に肉脂の汚點を生ぜし時は、速かに其汚點の局部を押さへ、軟かなる新しき手巾の類にて摩擦すべし、此の如くするときは汚穢は其手巾に染みて脱けるものなり、若し一回にて消えざるときは數回手巾をかへて摩擦すべし、去れども破れ易き絹布には此方を行ひ難し。

絹類の小さき切れに黄色の汚點を生ぜし時は、先づ其品を盥のなかに入れ、熱湯を灑ぎおくこと久しければ

自ら消滅すべし。

絹布色地の小片に油又は垢のつきたるを除くには、松根油か若くは精製の石油(揮發油)を灑ぎ日光に曝して乾すべし、變色せずして脱す。

白き絹布を洗ふには、先鷄糞を水に入れ絹布を浸しおき、二時間を過ぎ能く洗ひ次に淨水にて洗ひ日光に干すべし。

木綿類　洗濯を爲すは甚だ容易なり、先づ木綿を盥に入れ、水或は微溫湯を灑ぎ、二三時間を經て椋質、洗粉石鹼等にて地をもみ汚穢をおとして洗ひ、然る後再び米糊をときたる水中にひたし竿にかけ日光に乾すなり但し色地は色損するのおそれある故須らく注意すべし洗ひ張りは絹類に異ることとなし。

衣服に溢液のつきたるを除き去るには、其の汚點の局部へ白砂糖をもみつけて能く洗へば落つると妙なり。

木綿物の黴を除くには、先づ木綿を石鹼汁に入れ、浸すこと暫時にして、能く揉み擦り、水にて其石鹼の氣を洗ひ流し、然る後コロールル石灰百匁を水二升五合に溶解して製したる晒液凡そ四合計りを水二升五合の中に入れ、其水五升毎に硫酸五勺を灑ぎ、木綿を浸すこと十分時にして取り出し、又水にて洗ふこと凡そ三回にして後水を搾れば、如何なる黴にても脱けざることなし。

ペンキの衣服に付きたるを落すには、布ぎれに石油を浸して拭へば容易に落つるなり。

血の衣服に付きたるを落とすには、大根のしぼり汁にて洗ふべし。

衣服に墨汁又は鐵漿のしみの付きたるを落すには、熱湯を盥に滿たし其上に鐵飯を置き、しみの所をひろげ灰汁少許之を灑ぎて摩擦すれば乾くに隨ひて落ち去るなり。

青赤などの白地の木綿を洗ふには、石鹼水に檸檬水、綠礬湯、又は酢を加へて洗ふべし其色少しもかはることなし。

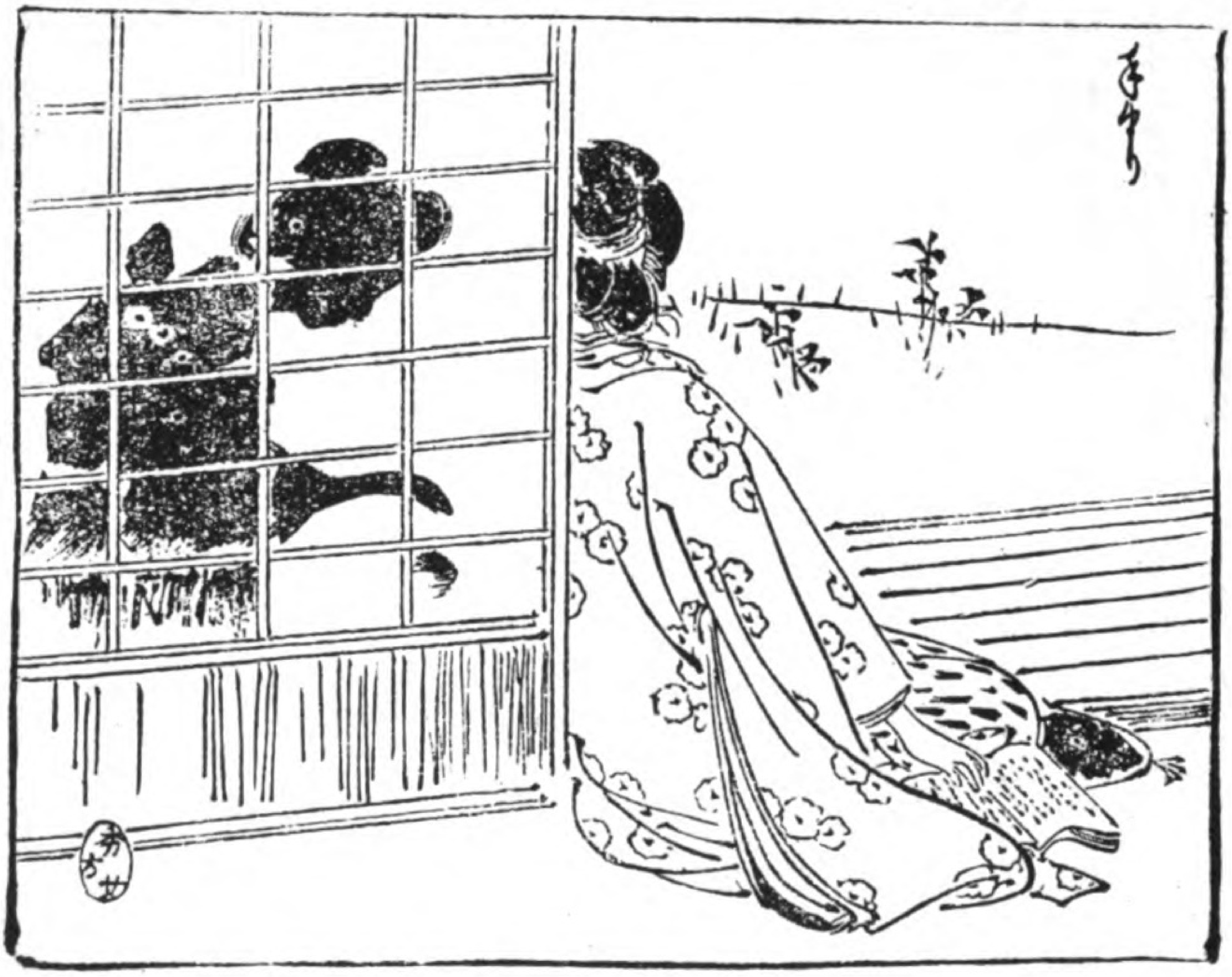
衣服に蠟の付きたるを落すには、火鉢の熱灰をすくひ、紙に包み蠟の上にあてて落とすなり。かくすれば蠟は

とけてみな紙の中の灰にすひこむなり。

衣服に泥の付きたるを落すには、先づ能く乾して羅紗か天鵞絨にて布目のとほり縦横に丁寧に擦るべし、たゞ一と通りもみ落しては、少しく皺がつくのみならず物によりては地合を損ずることあり。

麻布類の洗濯は、大抵木綿に同じ、帷子などの色地はしぼらずして唯竿にかけて乾すべし。

羅紗の油の付きたるを拔き取るには、薄きポッタースにて洗ふべし、又吸墨紙をあて其上に熨斗をかけるも



よし。

机かけの毛氈などを洗ふには、白石鹼の泡を刷毛にて擦りこみ、然る後浄水にて洗ひ落とし、其上を明礬水にて洗ひほすべし、色の甚くさめたるにはゴム水にて繪具をとき、刷毛にて塗るべし。木綿及び麻の手巾等に酒又は薬物の汚染を生じたるときは、先づ其物を盥の中に入れ熱湯を濺ぎ置くこと久しければ、自然に消ゆるなり。

毛織類の洗濯は素人にて爲しがたし、宜しく洗濯屋に命ずべし、若し已むを得ずして自家に於て洗濯すると

きには、微溫湯に石鹼を入れ、毛織類を浸し兩手にてきびしく揉み能く汚穢を洗ひ落し、又きびしく之をしぼり竿にかけてほすべし、若し絞ることきびしからざれば、織地みぢかく縮むものなり注意すべし。但しこれを絞るには搾木をかくるをよしとす。革の手袋を洗ふには、先づおのれの手に嵌めて恰かも手を洗ふが如く微溫湯に浸し、石鹼をつけ兩手をこすり洗ひて手より拔き取り、室内にて乾し、再び手にはめてこするべし。

花毛氈を掃除するには、茶の煎じがらを撒布し箒にてはき、能く塵埃を取り去るべし茶の代りに又新たに刈りたる靑草を代用するも可なり、又紙を細かに切りて代用するも可なり。

此の如く總て絹類及び木綿、麻布、毛織類を洗濯するには椋實、洗粉、米泔汁、豆腐の搾汁、灰汁、石鹼、硫酸等を用ひ、白地には石鹼、硫酸の類を用ふるをよしとす、色地は色の褪じ易きものなれば洗粉、豆腐の搾精及び椋實等を用ゐるをよしとす。其他苛性曹達、重炭酸曹達、なども洗濯に用ひて効用多し、然れども苛性曹達は其性激烈にして地合を損じ易し、又白地は「コロールカルラ」を溶したる液の中へ浸し置き、稀硫酸にて洗へば純白となるべし。

活花十二ヶ月

梅月園主人述

池の坊活花の規則として「眞」「添」「體」の三つを本としこれに程よく「あしらひ」を加へて生けるなり。此の眞、添、體は他の流にては天、地、人などの名をつけたり、さてその配合は如何樣にするやといふに、水際より少し上より斜めに前に出てゝ居るを「體」とし、それより凡そ同じ高さ丈け上にありて斜めに後ろに而かも「體」の反對の側に出てゝ居るを「添」といふ、其の眞中に高きは「眞」なり、又あしらへ」には位置によりて「體向ふ」「胴」「内添」等の名あり、それより「副」の右にあると左にあるとによりて右花、左花といふ、床の右へ或は左りへ寄せて置くなり、

梅花（一月の活花）

梅は葉蘭のごときものと違ひ、其の木振にて「眞」「添」「體」にて見立ざるべからず、而して梅は其木質が堅くして矯め直す事困難なる故、始め切る時能く木振を見立てゝ切る事なり、偖てこれを活くるには、まづ「體」を取り前にいへる「體」の位置に體よく靜かに置き順次「胴」「眞」に活け及び「添」を挿して後其の大體の形を見、形よくば之れに動かぬ樣「止」を入れ其れより足下に隙まなきか、小枝の十文字になりはせぬかを注意し若し之ある時は矯め直し、或は靜かに切り取る事なり、



此の隙ある事小枝の十文字になる事は此の梅に限らずすべて活花の大禁物なり、猶池の坊活花の原理並に順序は來月の誌上より掲載すべし。

新年室內裝飾

△廣間　普通の客間としては少しく手廣に過ぐるかも知れねど、これは主人が年賀の客を迎へる室であるゆゑ常よりも少し廣し、叉和洋折衷の裝飾をなしたるも洋裝の禮服をしたる客を接遇するに便利な樣にとの思付てある。

△室の大さ方五間、日本建の大廣間て、飾るに椅子テーブルの洋風器具て、西は長さ二間と奧行一間の大床間を有し、その他の壁。北の方二間ほどは壁て其餘は襖が立て居て次の室に連接す。

△床の間、鴨居上、その他の壁並びに襖は銀砂子の上に金泥もて梅花を散し、模樣のやうに畫きたるを張り、床より上三尺許り金泥もて靑海波を畫きたる腰張を張る、敷物には緋色の絨氈。

△床飾　裝物は探幽筆富士山、表裝、白茶金襴象牙軸、花は朱檀製高卓の上に古銅方形式大花瓶は梅花を枝數多く挿む、花臺の少し手前右の方へ寄つて鏡餅を飾る。

△西方の壁の上に梅花の散らし模樣ある緞子張、塗椅子五六脚と同じ裂張の長椅子一脚、北方の壁の前には光琳風梅花の蒔繪ある書棚を紫檀の高案上に置き、棚の上には香の具一式、歌がるた、古今集、梅花譜など程よく飾り、書棚に並びて純白の卓被を被ひたる長方形の卓を置き、組重と銚子を盆の上にのせ、銚子には梅花の枝を挿す、且つ室中所々の案上に梅花、福壽草、松などの盆栽を置く。

庖厨

新年の料理

△雜煮

これはむかし大名方の普通用ひられし物なれば一般の家庭に如何とおもへども御參考までに記す、鳥雜煮、鉢肴、缶詰も同樣なり雜煮を作るには(一)餅を器に入れ熱湯をそゝぎ蓋をして置く、普通には燒て用ゐるも正式にあらず、固き時は白湯にて少し煮て和らかにす

る。(二)串貝、干鮑の事である、湯煮をする時蓋を加へる、和らかになりし時小口より切つて下煮をする。(三)芋を丁子形にきる、湯出て下煮をする。(四)鏡大根を圓形にきり湯出て下煮をする、これは盛る時に餅の下敷にする。(五)豆腐を算木に切り串をうち魚目のつく様に四方を燒きこれも下煮をする。(六)若菜は葉ばかり摘み湯でゝ下煮をする。

以上下煮の仕方は鰹魚節と醤油にて味をつけるばかりてある、又雑煮の汁は濃き煮汁と醤油(鹽少々加へ隠し鹽にする)にて作り、椀へ盛り上へかけ、これへ鰹節をうすくかき上へかけて侑む。



△鳥雑煮

もし正式にするならば以上雑煮の内へは鷄の肉を加へる鷄は多く鹽漬のもの故、ザット湯煮をして切身にして加へる、鴨も鹽漬のものならば同様なり、されど鴨は生の物多きゆへ、その時は味淋酒、醤油にて鹽梅よく下煮をして用ふる、但し普通客へ侑めるには以上の雑煮にては材料多き故若菜の外一二種見計ひて用ふるは適宜なり。

△鉢肴

(一)甘鯛を三枚におろし切身となし、タマリにつけ布巾でふきて蒸すなり、別に玉子をゆで、黄味ばかり取り、裏ごしにして鯛の上へ

かける、又一方甘鯛を鹽にして鹽の利いた時分、酒へつけて蒸すなり、別に小松菜を細かにたゝき、鹽の熱湯をかけ、前の鯛の上へかける、これにて黄と靑との二色となる。

(二)牛蒡をザット湯煮して皮をむき、この皮を味淋、煮汁、砂糖、鹽にて風味をつける、この皮の中へ擂身又は玉子を入れて合せ、これを五本つくる、中央に魚の擂身を塗つた牛蒡を心とし、このまはりへ前の五本をつけて美濃紙につゝみ蒸すなり、小口より切れば梅花形となる。

△重詰

▲厚燒玉子　魚の擂身を拵へ、魚の身百目に鷄卵十二個、煮汁、醤油、煮きり汁三合を加へてかき合せ、玉子燒鍋へ入れ、上へ庖碌を蓋としてこの上に火を強くし下火は弱くして燒く、手にて押し燒加減を試み卸し、適宜に切りて用ふ。

▲より干瓢　干瓢をザット湯煮し、煮汁、味淋、醤油、砂糖少量を加へ風味を付て捩りて一寸位にきりて用ふ。

▲松風慈姑　メリケン粉百目、砂糖百目、つく薯四十目、慈姑十個、鹽十匁、鷄卵白味ばかり四個にて解きて板へ厚さ二分位にのして玉子燒鍋へ板を上にして手て板を押つけながら燒く、五六分時經ると焦げ目つき居る故板からへぎ、再び板につきて居る部分を燒き、短冊、又は色紙形にとりて用ふ。

▲土佐煮芋　小芋の皮をむき湯煮して味淋、醤油、だし、砂糖にて風味をつける。

▲ほうれん草の煮浸し　葉ばかり摘み、湯煮して水へとり、絞りて細かに切り、鍋へ入れ煮汁、味淋、醤油、にて味をつける。

正月の吸物

△貝の柱の吸物　はしらを洗ひ、水をきり、椀に入れ、(大匙一杯位)清汁の沸え立たるを掛けるなり、あしらひには三つ葉か、淺草のり、但し三葉は生にて一寸位に切るべし。

△鴨の吸物　鴨の身を薄くきり、骨はよくたゝき丸め、

ざつと淡味をつけ、（略には生のまゝ汁の中に入れて煮るもよし）鹽松茸をたてに薄く切、水に浸し、鹽出をなし、三つ葉又は芹を一寸位に切、常は清汁にて吸口は柚子、又其内に餅を小さく長角に切り一寸焼て二ツ三ツも入るれば雑煮の兼帯ともなるなり。

△蛤の潮吸物　蛤を貝のまゝ一夜水に浸し、（之を砂氣をとり去るため）鍋に湯を沸立て蛤を入れ蓋をし、蛤の貝開きたるを度合とし、持鹽にて淡ければ少々鹽と醤油を注して加減すべし、吸口は胡椒、山椒、欵冬の薹は尚更よし。

寒中貯藏の品々

△鹽鮭　鹽鰤の酒漬北海道産物の鹽鮭、九州産の鹽鰤を鹽だしせざるまゝ水にて洗ひ、三枚におろし、皮共に常の刺身よりも少し厚く切り（あまり薄く切る時は焼て酒に浸せば形ちくづるゝなり）入り口の大きなる硝子瓶、又は壺に、上酒を一升の割にさらめ砂糖半斤程入れ、よくかき廻し置き、前の鮭、又は鰤の厚切刺身を金網を火にかざして黒こげせぬ様に焼くなり、かくて焼きたる魚を温き内に順々に瓶又は壺の中に入れ凡酒のひた〳〵になるまで焼鮭を一杯に入れて箸にてよくおしつけて瓶又は壺の蓋をして目張をなし置き正月の肴に小皿に盛りて出せば鮭より鹽氣出て、酒と砂糖と含みてその味ひ妙なり。

△小鯛の酢つけ　小鯛を幾尾にても鱗と腸とを取り全體のまゝ鹽を強くふりかけ、半日程置きて後、その鹽をしためて生酢を充分にかけて又半日其まゝに置、其酢をしためて此度は更に器に入れかへ、三杯酢を甘くこしらへ、鯛の上にかけ翌日より食すべし、骨もあたまも柔かになりて殘りなく食はるゝものなり。

△ごまめの鱠　田作のかしらを去り炮烙にてよく煎りよく兩手にてもめば二つ割になるなり之れを湯の中に投じ、暫時置き柔らかにして又取出し置き大根と胡蘿蔔、鱠卸にておろし鹽にてもみ能くしぼり、前のごまめを入れて二杯酢にて交合すなり。

△芥子大根　大根又は蕪を極薄く輪切にし、二三日間

日に干して乾たる時芥子をかたくねり干たる大根を引き延し、其中へ入れ、小ゆび位の太さに卷きこん布にて結びその卷たる大根を浸すために三杯酢を少し（大根に吸取るだけ）器に入れ、右卷きたるまゝ暫時浸し置き取合せの肴とすべし。

鷄肉料理

△鷄のさしみ　鷄の脯肉を白煮して後薄く片肉となし、芥醬油にて食べる淡海にして滋養多し。

△鷄糸　鷄肉を白煮して一線に切り、芹を加ひて芥醬油にて食す、又白煮せず糸に切り、筍の纖と酒醬油にてから炒りに炒りたるも中々によし。

△すき燒　鍋の中に小さき凹處ありて、此の凹處に醬油と砂糖と混じたる汁を入れるなり、而して此鍋を火に掛け、鷄肉を鍋の中にて燒き、此汁をつけて又燒きよき位に燒きて食ふなり、尤も肉は極上等を撰ぶべし味甚だ佳なり。

△鷄鍋　淺き鍋にて煮る、添へ品として松茸と葱、芹を入れる。

△鷄松　兩腿の筋骨を去りて肉を切り、目を付け玉子の蛋清に饂と松子とを加へ、肉に塗り、油にて揚げ、鉢に入れて酒、醬油、水少し、香蕈、葱などを加へ鷄の骨や皮にて蓋し、蒸籠にて蒸す。

△薩摩汁　鷄肉を酒に浸し置き、大根の輪切、葱の五分切、豆腐の油揚など合せて鍋に入れ、醬油及味淋にて煮、柔かになりしころ、前の鷄肉を入れ尙能く煮るべし。

△味噌煮　鷄の肉を一寸位に切り、鍋に入れ、酒、醬油、砂糖にてよき鹽梅に煮るなり、大抵煮終りたる時に、兼て擂鉢にてよく擂りたる味噌を加へ、掻き交ぜ之を皿に盛りて出す、又味噌を付て燒きたるも味よし

△がめ煮　こは九州地方にて多く行はるゝ料理にして肉を一寸位ゐに切り、尤も骨交りにてもよし蓮根、葱さと芋、大根、牛蒡、こんにやく等を大抵鷄肉位ゐに切り、大鍋に鷄肉と共に入れ、酒、醬油、砂糖にて煮皿に盛りて出すなり、此料理法は高尙なる料理にあら

ざれども、味は殊の外宜し、又之れに胡椒を撒りて食へば一層の風味あり。

△鶏ロース　雛鶏の羽毛と皮とを剝ぎ、よく筋を去りて麵粉をつけ牛酪にて鳶色になるまで煮て更に肉汁に入れ、再たび焚て牛酪と檸檬の絞汁を掛けて出す。

△ミーストアウル　鶏肉を細かに切り、桂子に肉豆蔲又は葱を刻み入れ、一時間程緩に煮て肉汁を作り、麵麭粉に鶏卵を解き交ぜ柚皮など入れて煮るなり。

△炒鶏　これは鶏肉の支那料理なり鶏肉を骨ともに一寸位ゐに切りて鍋に油を敷きて火に上ぼせ、半ば煮えたる時栗、薯蕷　葱を加へ、酒、醬油をさして煮こむ。

△手綵鶏　これも又支那料理なり、鶏の胸の肉をとり之れに鹽を加へ湯煮をして絲の如く裂き、皿に盛りてゆで鶏卵の黄味を裏越にて掛くるなり。

△口麻鶏　雛鶏の柔らかき肉を能く煮て味を附けるなり、而して白胡麻を炒り擂盆にいれて之を擦り、鶏の煮汁を水飴にて漉し煮立て前條の肉に掛け、火腿を細かく切りて其上に置きて食するなり。

初春の粧ひ

◎女　物

色合は錆鼠鶺鴒羽、藤生璧、栗梅、黒等にして裾模様は總じて白上げにて竹に水仙、光琳風の四季の柴船藪椿、光琳の波、梅に水仙、菊水なんどの江戸褄なるが地は羽二重が流行し居れり價は三枚仕立上り七八十圓羽二重なら、七十五圓、地質を小紋縮緬にて二枚襲になさば四十五圓、縞御召を撰まば地色は栗皮茶などにて二枚組んで三十七八圓、無地御召紋付とならば地色は鼠、栗梅、栗皮茶等總べて濃き色のもの喜ばれ、裾廻しは羽二重として二枚組三十七八圓、反物にては吉野織却々の流行にて一反十三圓以上縞御召十二三圓扶桑御召十三圓以外。

▲帶　唐織にて地色は錆白茶、海松茶など青味を含むもの好まれ價五十圓より、繻珍ならば丸帶にて十圓より二百五十圓まであるべし、博多は十四圓より、唐板織又は半箔入の純子ならば三十圓より。

▲長襦袢　紅の紋縮緬又は金絲入縮緬にて大きく絞、綸模様又地色を白にして紋の模様を見せたるなど華美なるもの喜ばる二十圓より、友禪縮緬ならば十五六圓にてあるべし。

▲羽織　は紋縮緬紋附(九分)にて地色は薄茶、柄は縦横の縞格子など好まれ價は十三四圓、小紋縮緬ならば鼠か薄茶の類には十一圓より裏は繻珍にて八九圓なり

◎男　物

紋付は黒羽二重替り裾に鼠羽二重の下着無垢とし鼠羽二重の胴着同じ襦袢とし一組六十八圓、白よりは鼠の方好まれ居れり、黒羽二重の袷羽織は十五圓以上、黒斜子は十三圓以上にして紋は五ッなり縞物ならば反にて風通糸織十一二圓位、米澤風通九圓位、富國織十二圓位、大島紬十五六圓より、米澤琉球五圓より八圓迄伊勢崎銘仙五圓より七圓位迄、秩父縞三圓五十錢より五圓五十錢、愛知縞一圓五十錢より、瓦斯飛白二圓位高尙紬一圓八十錢より、紡績大縞一圓七十錢より武藏紬九十五錢、綿秩父一圓七十錢より。

▲羽織地　紬糸織といふが一反廿五六圓位なるが流行し居れり縞は大名巾通し三筋萬筋色は紺、鼠、茶鐵色等にて裏は繻珍にて八九圓位尤もこは商人向に迎へられ居るなり。

▲帯　繻珍か博多にて地色は茶に金、茶に鼠の細き模様を現はしたるもの多く七圓より十一圓位迄、上物は綴錦にて端に三角形の模様を見せ地色は茶鐵納戸にして價は十六七圓。

▲袴　兩面織にて二十圓より、茶亭地にて十五圓より仙臺平にて十圓より十八圓、博多平にて十二圓より、裏は琥珀にて八圓内外なり。(白木屋呉服店調)

◎裝　飾　品

▲指環　赤磨き又は艶消金を用ゐて腕爪とも最も細き所謂佛國形又は玉寳形とし最上質の金剛石、眞珠、薄色ルビー等を裝へるもの流行せるが、中には結婚季節に際せるを以て上流社會の結納又は土産として金剛石入指環の常用非常に增加し居れるも、寳石の入らざる金製無地指環は需要者皆無の姿となりたり、又十二

三歳以下の少女用は純金厚肉幅廣の彫刻附にて、薄紅色ルビー其他の寶石入に限るもの丶如く、其他兼用品と稱し一個の寶石入花形を指環、帶留、簪、襟留等に隨意兼用し得るもの需用多し。

▲帶留　綴織又は鹽瀬にて金物は寶石入の彫刻附。

▲簪　は寫生の丸彫又は花鳥紋崩し等にて寶石入とし髷にも束髪にも用ひ得るものあり。

▲櫛笄　は金蒔繪透し彫にて遠州形と稱するもの最も優美高尙として持囃さる。

▲紙入　鹽瀬の縫潰し。

▲煙草入　は縫取物多く特に女持は利久又は叺形と稱するに限るが如し。

▲手提類　千代田袋敷島袋等孰れも盛に使用せらる。

▲襟針幷にショール留　洋服手釦等は戰捷紀念品の流行盛んにして要するに目下上等品は寶石の美を競ひピン類、銀貨入、進物用煙草入等は槪して戰捷紀念の名あるもの尤も流行す。

▲半襟　地質は矢張縮緬山繭格子等なれど色は至つて濃きもの流行し、廿歳前後の若向にはオリーブ色、鶸葡萄、梅鼠、三十歳前後向にオリーブ色、鶸葡萄、小豆、四十歳前後は濃葡萄、消炭色、濃鼠錆茶等の澁き色にて模樣の勅題新年の山に因み山に梅、或ひは松等種々あり其他軍人茶とてカーキー色を取りたるものも流行せり直段は模樣物にて四十錢より二圓迄無地物は五十錢より一圓七十五錢迄外に刺繡物二圓より四圓まで尙ほ女學生向としては白セルペット十七錢位にて廉價丈夫向きとて賣行よし。

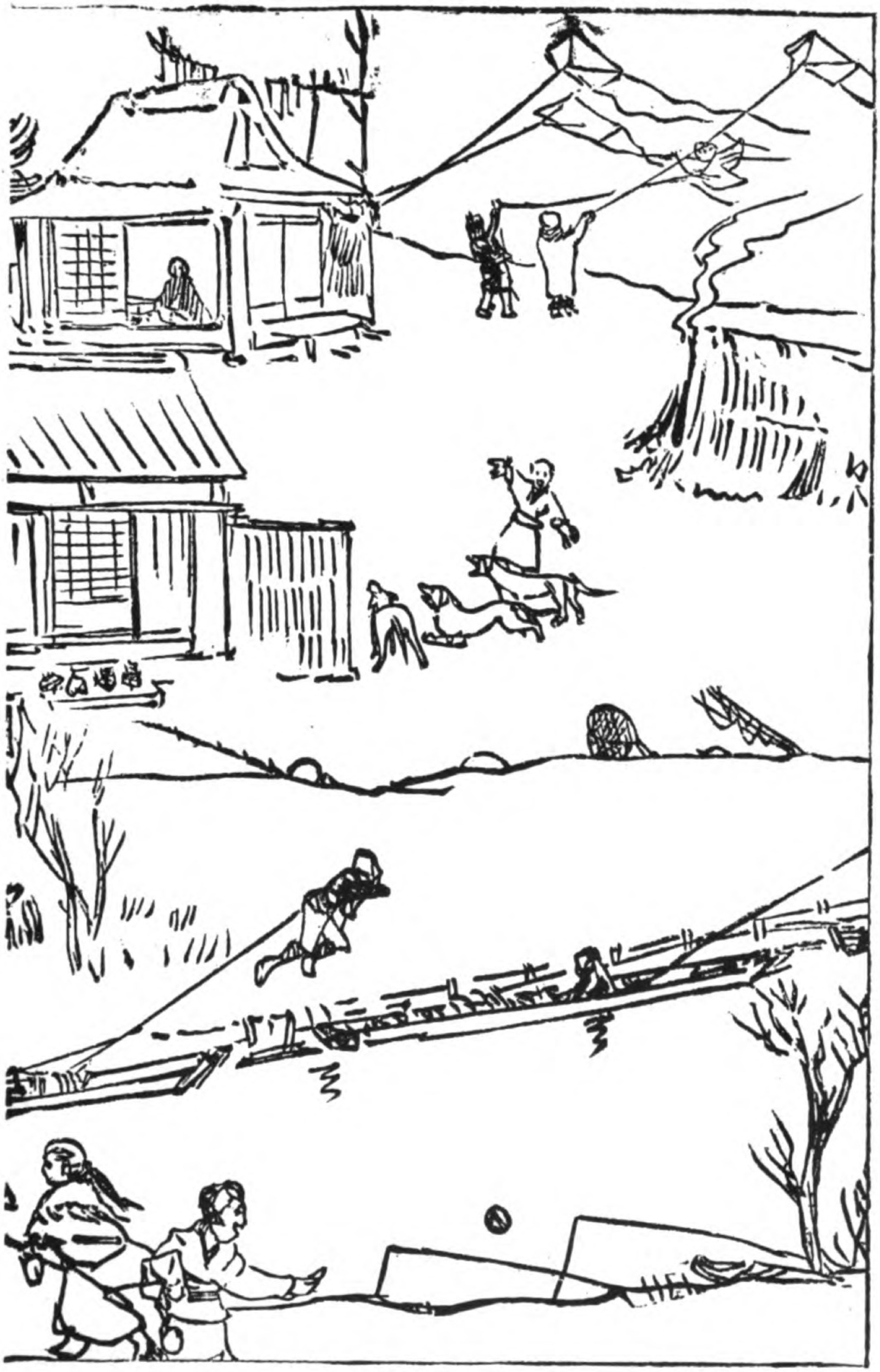
▲下駄　女物は新小町と稱するもの流行し臺は高き方にて、朱塗は金蒔繪をなし、表は南部鼻緒は繻珍にて、

其相場

都形小町　三圓五十錢より五圓まで
二段小町　二圓五十錢より三圓まで
小町好み　一圓より二圓七十錢まで

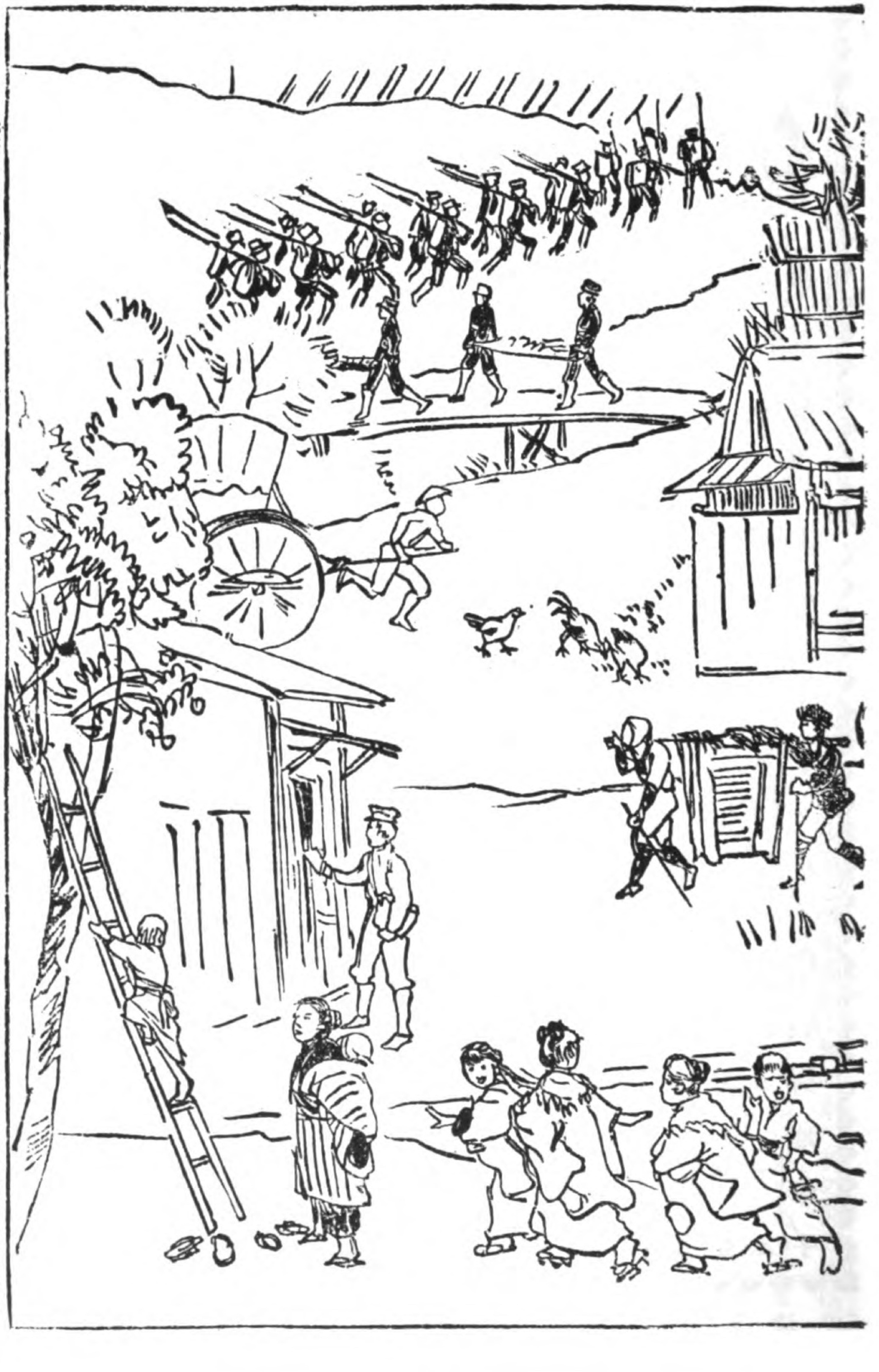
此他婦人向として流行しつゝある吾妻草履は本テン、紅梅織、繻珍の鼻緒附にて上二圓五十錢並八十錢。

懸賞繪



さがし

此圖の中に人が幾人居りますか當てごらんなさい當つた方には先着者五名に限り金參圓づゝ圖書切符を上げます。(〆切一月三十日)



女學世界
春季增刊

小天地

一月十五日發行

自然の機微を寫すもの之を詩に求めざるべからず、人情の冷熱を描くもの之を小說に求めざるべからず、乾燥なる文字幾萬卷、牛に汗し、棟に充つるも人生との交渉なくんば更に何等の趣致あるなし、されど苟も人の心性に同情を表し、血あり涙ある筆を以て之を敘せば、鬼神も爲めに泣かざるを得ず、夫の花の爛熳たる未だ必ずしも美觀と云ふべからず、風に傷み雨に惱みて更に一段の美となるが如く、無垢の少女も世上の變故に遭ふて操行の美益美に、始めて處世の眞趣味を解するに至らむ、本誌が家庭小說を編するの意實に玆に在り、讀者亦た此の心にて讀まば、數外の數を得る蓋し少からざらん。

目次概要

小說

雜錄

衛生顧問

〔嗜好食品に就いて〕(問)女として酒を飲んでも可いものでせうか、可いものとすればそれに就いての心得ともなるべき事を簡短に敎へて頂きたし。(東京の活潑女)

(答)新年の問題としては誠に適當であるから第一番に答へます。娘時代は體格の如何に拘らず飲まぬが宜いと思ひます。假ひ之を少量に飲めば、精神を興奮し、或は愉快にし、血液の循環を盛んにし、消化を助くるなどの功はありとはいふもの丶、若い折は情が盛んで意思の弱い時ですから之を適度に飲むと云つても、矢張感情ばかりが强くなる傾きがあります。况んや嗜好品を適度に飲むといふことは青春時代には到底出來ぬことだらうと危ぶまる丶のであります。然れど既に一家の奥樣となられ夫と共に一日の業を終つたる後の晩酌位は其體質に依つては却つて望ましいことでは無いかと思ふのです、即ち體格肥滿或は逆上性或は卒中的の方などは少量と雖も宜しく無いが、其の他の人は平均五勺以内の範圍に於て飲まる丶のは差支ありませぬさうして之を飲むには其の時を撰ぶが肝要であります即ち飲んでから色々の事務を取るなどは宜しくありませぬから、晩餐の折に飲んでそれより平和に遊ぶ時に限るのです、五勺といふ量は何から割出したかといふに、日本酒五勺の中にはアルコールが平均十五瓦程含んでゐて十五瓦は興奮の度であるからであります、ビールならば此の四倍用ゐて差支ありませぬ、

(問)葡萄酒を少し宛飲めよといふ醫者の方もありますが私は少し用ゐても頭痛を感じます、これでも矢張用ゐた方が宜いでせうか。(熊本のヒステリー女)

(答)我國に於いて葡萄酒を飲めと命ずる醫者は極端に言へば竹庵先生で無からうかと思はれます、何となれば我國の葡萄酒は博覽會に賞譽を得んために出す其物の外は大抵贋であつて、仲には毒物を含んだのさへあるからであります、然るに醫者先生之を試驗もせずに買つて飲めよと命ずるのは不深切の至りと謂はねばな

りませぬ、船來の葡萄酒でさへ贋物があつてそれが仲仲巧妙に出來てゐて分析術ですら鑑定し難いから老練なる鑑定家の舌を以て判斷する位であります、我國の商人中にはその贋物の贋を拵らへてペーパだけ船來品のやうにする奸物がゐますから藥劑官の保證を得たる葡萄酒で無くば常飮せぬが宜しくあります。

(問)煙草の利害得失を敎へて賜はれ。(大阪　愚女)

(答)煙草の利とする點は興奮、鎭靜の二作用を兼ねてゐて、種々の黴菌を殺すの功があるのであります。詳しく言へば、勉學或は仕事などに倦んだ時フーと喫一喫すれば其の鬱を散じて精神愉快を感じ又業に就くことが出來ます、次に精神興奮として眠られぬとか、或は疑義百出心の悶へる時に服一服吹かせば何と無くそれが慰藉となつて又平和な心になります、次に虎烈剌や結核患者などに近寄らねばならぬ折これが煙を吹かしてをれば患者は甚だ迷惑であらうけれど喫者はこれが爲に傳染せぬ幾分かの豫防となるさうです。煙草の害とする所は度を過し易いために、その成分たるニコチンは血中に行つてその循環を鈍くし、胃に入つては消化の力を妨げ、口内に在つては粘膜を害し、氣道に入れば咳嗽を發し、その他眼力を弱らし、神經を痲痺せしむるなどであります、そこで其の利害を衛生といふ秤にかけて結論すれば斯うです、これから尙發育の見込ある少壯者即ち二十四五の年輩までは斷然吸はぬが宜いし、又大人とても今まで吸はなかつた者が新たに始める必要は勿論ありませぬが、併し數年來習慣になつて來た方は左の喫煙十五則に依つて用ゐられたならば害無くして功あらうと信じてゐます、

喫煙十五則

(一)二十五歲以下は身體軟弱で中毒し易いから吸はぬが宜い。(二)口中に長く煙を留めてはならぬ、これニコチンが唾液に溶解し易いからである。(三)廉價の煙草は概してニコチンが多いから上等を吸へ。(四)濕つた煙草は多量のニコチンを吸收し易から乾いたのを吸へ。(五)空腹時に吸つては宜しく無い、これ中毒し易い。(六)空氣の流動宜しき處で吸へ、

これ中毒し難い。(七)日本產を吸へ、外國產はニコチンが多い。(八)酒を飲みつゝ煙草を吸ふな。二物相待つて害を與ふるものである。(九)刻みならば二服紙卷ならば半本、これ以上は害がある。(十)短い煙管はその煙が眼に入るから宜しく無い、從つて紙卷もパイプで吸へ。(十一)深夜喫煙せぬが宜い、深夜の喫煙は必ず口中を傷む。(十二)咳嗽の出る時吸つてはならぬ、氣管支加太兒になり易い。(十三)過激の運動後は避けねばならぬ矢張中毒し易い(十四)喫煙者は日々數回殊に就寢の時に口を嗽ぐが可い、これ口中にニコチンの殘留を防ぐためである(十五)長い時間止めてゐた揚句は少量を吸へ、これ中毒が劇烈に來るからである。

(心の病氣に就いて)(問)失戀の結果殆んど病人のやうになつてゐる女がゐます。如何處置したら宜しいものであります。(九州なる某の母)

(答)漸次に事業の樂しむべきことを知らせて此の心を彼に移すのです。例へば慈善の事務を取らすとか或は學問技藝の面白さを感ぜしむるとかいふやうに導くのであります。私の知つた人にも斯樣なのがありましたが西洋音樂を敎へた爲に治つたのがあります。

(問)僻み根性の妹をもつてゐますが何かなほす工夫ありますまいか衞生顧問の範圍外かも知れぬけれど何うぞ敎へて頂きたい。(加賀の心配女外三人)

(答)それに對するには極めて公平なる處置をして一點疑義の無い樣にせしむるが肝要であります、何か一つ己れの僻みてあつたことを悟らしむれば大いに功能のあるものであります、決して小刀細工で治さうと思うてはなりませぬ、それでも容易に治らぬ人には宗敎に導くか、或は樂しき旅行せしむるのであります、旅行して山川風土の移り變てゆく面白さを覺ゆると心自ら美麗になるものであります。その外風流な道に樂ましむるも宜いてせう。

(藥の功能に就いて)(問)肝油を肺病者に用ゐて宜しいものでせうか。(房州萬屋の隱居)

(答)肝油は强壯劑ではありますが胃の消化を妨げ下痢

し易いものであります。殊に我が國人の如き脂肪食に堪へぬものには適しませぬ、明治の初年は醫者社會に用ゐられたけれど功少くして害多いから今では餘り用ゐぬやうになりました、肺病の如き胃の弱る病には必ず用ゐ玉ふな。

(問)薔薇水薔薇油の功能を問ふ。(瀬戸内外中の鳥かんな)

(答)何れも香料が主なる功能で多少皮膚の飾を善くするとかニキビ、ソバカスなどの皮膚病豫防になりませうが併し薔薇水の方は効少くして薔薇油の方が善いけれども油は仲々高價で純粹のは一瓦即ち十二三滴で五拾錢もしますから隨分贋物があるさうです。薔薇油を少量の酒精に溶し額或は腋下などに塗れば芳香馥郁として實に贅澤な化粧品であります。

(問)感冒の藥として安知歇貌林安知必林が善いと聽きましたが買ひに行けば劇藥だから賣れぬと申しますが何かこれに代る善い藥があるならばその分量用法とを併せて敎へ頂きたし。(京橋の林子)

(答)幾つもありますけれど最も簡單で且つ粉藥でも用ゐらるゝし水に溶かしても用ゐらるゝのは賣藥なれど安知必林散でせう、賣藥の癖として功能は幾つも竝べてありますが歸する處解熱藥で、感冒に最も功あるのです。大抵の藥舗にありますが本舗は何時ぞや申しました順天堂藥局であります、分量は袋に書いてあります。

(問)砒石劑の功能を問ふ。(山陽の閑庚女)

(答)砒石劑即ち亞砒酸や法列兒水は變質强壯劑として神經痛、結核、淋巴腺、貧血、糖尿病、及び皮膚病に功あります、毎度言ふことなれど色白藥として用ゐるは危險であります。

【色を白くする方法】(問)色を白くする方法に就いて毎度先生の御説法もありますが、凡人の情として黑いよりは白い美しい顔になりたくあります、色の白い者必ずしも弱くて黑い人は屹と强いとも限られぬやうですから、果してあるものならば何卒敎へて玉はれ。

(越後の好美女)

(答)これを答ふる前に私の失敗談を白狀してかゝらね

ばなりませぬ、少し長くなるけれど御參考のために聽いて頂きたい、或る十八九の極めて色の黑き少女が訪ね來り、先生何卒一生の御願ですから私の貌を白くする藥を敎へて頂きたしと黑い顏に紅葉を散しての願ひ我も甚だ氣の毒に感じ、然らば、とて亞砒酸（〇、〇〇五）還元鐵（〇、一五）甘草末、護謨漿（適宜）右三丸となし一日三回食後一丸宛といふ處方箋に三週間分を與ふべしと記して之を藥舖にもちゆき調劑を賴まれよ服み終つたら又御出なさいと言ひ渡した。すると彼の少女は直ちに三週間分の藥を買ひ調へ家に歸つてその日より服み初め、間がな隙がな鏡を出しては白くなつたかと眺むれど依然として黑い、一週間を過れども何の功能も無いやうである。更に十日に亙れど矢張同じことである。そこで熟々思ふには、彼の醫者奴が人を馬鹿にしてゐやがる、何だこの樣な小さな丸藥僅た一粒宛服むのだもの功のあらう筈は無い、忌々しい藥だ事そのこと五粒宛服んで試ようと自棄的に殘りの藥を一日の中五度に服んで了つた、すると五度目に胃部劇痛を覺え七顚八倒苦しんだ揚句に皮膚冷くなるから親達は大いに驚き早速醫師を招きて診斷を請へば砒石中毒なりとて其の療治をなし漸く一命を救ふたが、偖その砒石は何處から求めたかといふ問に娘は包みきれず白狀したれば親は人力車を飛ばせて我が家へ怒鳴りこんだ事がある、これより我は決して白色藥として亞砒酸を紹介せぬのである、其他の藥は知り不申候、但し彼女は顏色幾らか蒼白くはなりました。

〔白帶下の治療法〕（問）妾事今年廿三歲になりますが十八歲の頃より子宮から白い粘液樣の物斷えず出腰卷をぬらします當地の醫士に診察を請へば白帶下なりとて色々療治も受けたけれど何の功もありませぬ、何とか素人治療の無いものでせうか（長野縣の白帶下女外百三十二人）

（答）スポイトといふ器械を以て百五十倍の石炭酸水を用ゐ一日に三四度洗ひ、硼酸二瓦を屈利設林五十瓦に溶しこれに綿を浸しその綿を少し宛子宮に貼てゝおき、内服藥としては沃度那篤僧謨（〇、五）と苦丁（一五）と白糖（適宜）と水百瓦とを混ぜて一日三回に分

けて服むことを續けて御覧なさい但しこの沃度鐵糖漿は一週間毎に（〇、五）を増し、二月も用ゐたら暫時休むが宜いです、序でに注意すべきは此様に自宅で藥を調合しようといふには天秤を買ひ求め醫者か藥劑師に就いてその使用法をお聽なさるが可い。

喘息の療法（問）喘息の全治法は無之候や若し無くば一時的療法にても敎へを乞ふ（田舎女　九人）

（答）醫師でさへも全治せしむるといふは仲々困難とする所であるのに况んや素人療法として全治せしめらる譯では無いが兎に角强壯藥を兼ねて沃度鐵舍利別といふ藥を一日三回食前毎に二瓦宛一杯の水に浮べて服むことを續けて御覧なさい但し之を用ゐるには「メートルコップ」といふ水藥を秤る器で秤って服むことが必要であります。一時的療法としてスルフヲナールといふ藥（〇、五）を白糖と混ぜて服み眠る工夫をするのですこれを一日に三四度用ゐても差支ありませぬ。

通經藥の事（問）月經不順で困りますが何卒正式にあるやうにする藥を敎へて下さい。（東國にて日本乙女）

（答）その不順になつた原因にも依るが原因の不明瞭なしかも左程病氣といふ程でも無くば、日本藥局蘆薈莉刺巴丸を月經のあるべき一週間前から一週間續けて毎日食前毎に二丸宛服んで御覧なさい。

（問）蘆薈莉刺巴丸は現在授乳させてゐる母が用いても差支ありませぬか。（同女　外二人）

（答）乳を授けて居れば月經の無きは當然なりされば用ゐぬがよし。

（問）中將湯は通經藥として宜しきものでございませうか。（越前の田舎の女）

（答）嘗て新聞にもその無功能なることを歌はれた位であるから幾分功あるにしても日本藥局法蘆薈莉刺巴丸に及ばざること甚だ遠してあります。

點眼藥の妙法（問）視力に差支ありませぬが時々眼が痛むのですが點眼藥は何が善いでせうか且つ眼鏡をかける必要ありませうか。（京都の公卿女　外六人）

（答）硼酸二瓦を溫湯半合に溶し、之を以て眼を洗ひ左の藥を點眼するがよし大抵の點眼藥は左の中の一つを

含んでゐぬといふことはありませぬ。

皓攀　〇、一　鹽酸古加乙涅　〇、五　水　六瓦

右一日五六回點眼（但し水は蒸餾水に限る）

眼鏡をかける必要ありません。

（問）眼を使つた後點眼して寢る藥を敎へていたゞきたし。（東京の勉强女　外二人）

（答）矢張前答の如し。

（問）時々眼内に充血いたしますがこの點眼藥を敎へて下さい。（播磨の細眼女）

（答）矢張前々答の如し。

（胃病の名藥）（問）醫者は慢性胃加答兒ぢやと申されまして色々治療も致しましたが依然として苦い酸い液を時々吐いて食事進まず胃部に痛みを少し感じますけれど貧學のため思ふ樣に醫療も盡されませぬ就いては養生法は能く聞きまして頗る嚴重に守つてゐるのでありますから唯その持藥を敎へ賜はりたし。（神田の紫式部）

（答）固より診察の上ならでは確然たることを答へ難いけれど左の藥は有功無害であるから二週間試みられよ

含糖百弗聖　三瓦　マルチネ　〇、三

撒酸　〇、一　白糖　適宜

右能く混ぜ合せて三包に分け食前一包宛。

（問）消化不良症には何ういふ藥が宜しうございませう。（水戸の一老婆　外五人）

（答）前答の如し。

（問）胃癪にて月に一度位宛苦しみましてお醫者樣に皮下注射をして貰ひますが時によるとお醫者の居られぬ時がありまして困難いたします斯る時の處置法を敎へて賜はりたし。（仙臺近邊の女學愛讀女）

（答）この問は誠に衛生顧問に適つた嬉しい問であります、そこで私も喜んで答へますが上等の日本酒一杯（一勺）をグッと一口に飲んで御覽なさい、常に大酒の方ならば今少し多く飲むがよし仲々功があります。

（讀者の希望）（問）私は女學世界を看初めてから僅かに四五ヶ月にしかなりませぬ一日醫者は何時頃から始まつてゐますか、其の目錄を敎へて下さい。（飛驒の見度女）

（答）四年來講じてゐますから此の次に其の目錄を此の

顧問欄に載せませう。

(讀者の不平)(問)私は先々月髪毛の薄きについて御尋ねいたしたれど今に載せて下さらぬは何ういふわけでせうか。(甲斐の　少毛女)

(答)顧問欄には出してゐませぬが顔の話や其の他にて爾來度々述べたれば略したのであります。

(讀者の喜び)(問)私は一日醫者の子宮内膜炎の療法を守つて三月間行ひましたが非常に快よくなりました、守れば何人にも宜しいでせうか。(尾張の喜悦女)

(答)大抵宜しからうと信じてゐます。

讀者諸君の中には我の問に對して何の答へもせぬを甲斐の少毛女の如くに言はるゝ方もあらうけれど來月よりはこの顧問欄を今少し多く書くことの許しを編輯局より受けて御滿足を得らるゝやうに致しませう

手袋の直段

男子用はキッド厚皮上三圓、並一圓八十錢次は皮裏附上二圓六十錢、並一圓五十錢、カシメヤ、メリヤス上一圓五十錢、並六十錢、木綿上八十錢、並三十錢、婦人用はカシメヤ、メリヤス、中八十錢、絹糸中一圓七十錢牛手袋銀モール附中八十錢。

新年笑話

細君物語

さゝなみ

一　吾妻コート

一昨年の暮からねだつて、やつと去年の暮に成つて吾妻コートを買つて貰つた、ある小官吏の細君、春は四日目にこれが着初をして、親類緣者へと年始にまはり、序に元の學校朋輩の、その家の貧しきに、これはまだ緣付かずに居るのを訪づれた、畢竟例のを見せびらかす爲めなので。

やがて暇を告げて歸る時、玄關まで送つて來た友が、

「アラ　いゝのねヱ……今度出來たの？」

と、後から着せかけての質問、元よりそれを待つて居た此方は、着惡くさうに幾度も袖を氣にしながら、

「安物だから仕樣が無いワ。」

「でもほんとに立派ねヱ…失禮ですが幾何かゝつて？」

「急いだもんですから出來を買つたんですが‥‥これでも十六圓なのよ」
「まア、何處で?」
「松屋ですよ。」
「まア貴女も松屋?」
と、今更の樣にコートに見入りながら、
と呆れた此家の娘は、我知らず口の中で、
「古着屋ツてエものは、ほんとに儲けるんだねエ。」と呟やいたのがつひ聞えて、
「何ですツて?、それぢやア貴女? このコートを買はうと思つたの?。」
「買う所か‥‥これは私が賣つたんですワ。」
「まア‥‥それおまア幾何で?」
「‥‥八圓にしか取らなかつてよ。」
細君急に小聲に成り。
「實は十圓だつたのよ。」

二　我子大切

むやみと我子を大切にする細君、何所へ行くにも必ず連れて出るはよいが、まだ二歳未滿の小娘は、いくら親が云ひ聞かせておいても、一々用便を知らす事は出來ず、ある時客に行つた先の細君の、愛想に抱いてくれた膝の上へ、したゝかむさい物を洩らして、而も平氣な顏である。母親驚いて子を抱き取り、
「オヤまア此人は、何と云ふ御行儀の惡い事です。奥樣に御謝罪を申さないのですか。」
と、云ひながら仰覗に臥かせて、その麁想の仕末をしたが、
「生憎襁褓を忘れてまゐりまして、まことに濟みませんが、一寸これを拜借致しますよ。」
と、云つて襁褓の代用に、我兒の尻の邊を拭つたのは今しも外づして棄てられた、その細君の前垂であつた。

三　若がり

むやみと若がり度い細君、まだ子の出來ぬを結句僥倖にして、時にはまだミッスかと思はれる若作り。實家の姉の子のはや十歳近きが、自分を叔母さん〳〵と

呼ぶを氣にして、好い子だから他人樣の前では、「姉さん」と呼ぶ樣にと賴んでおいたすると、その子點頭いて、見事その通り云へば、褒美に玩具を買つて貰ふ約束、連れ立つて淺草を散歩すると、やがて細君の知人に出會つた。知人はこの甥を見て、
「まアお可愛い‥‥これは貴女の‥‥？」と問ふに、
「ハイ私の‥‥」と云はうとしたが、流石に弟とも云ひ兼ねて居ると、甥はすかさず引取て、
「アノ‥‥僕の叔母さん‥‥。」
と、云ひかけて、周章て丶、
「アノ‥‥ほんとに叔母さんの姉さん！」
叔母さんの姉さんでは、叔母さんよりもまだ年上の譯細君の眞赤に成るまい事か！

四　「やどが」夫人

「やどが〳〵と二言目には亭主の噂で、陰では「やどが夫人」と呼ばれた、ある政治家の細君、ある婦人會の席上で、例の「やどが」が始まつた。それはそのやどなる者の地方遊說に連れ立つたと云ふ、其時の噂であつたが、序に茶代廢止の談に移ると、
「どうもその宿が、やはり茶代廢止だもんですから、やどは元より茶代廢止說なので、大層やども喜びまして、早速宿の亭主を呼びまして、やどがいろ〳〵話を致しましたら宿の亭主も大層喜びまして、まだ宿の女房を呼びにやり、やどは私に紹介せましたりして、ほんとにあの宿位、好い宿はなかつたと、やどとも申して居るんで御座いますよ。」
と、相變らず縱板に水、後の方で聞いて居たその會の世話方の紳士私かに、舌を捲いて、
「今の丈でもやどが十一出た、成るほどやどが夫人だわイ。」

五　友達が惡いから

亭主の道樂は、皆友達が惡いからとのみ、細君は一圖に思ひつめて居るが、それでは友達が迷惑なので、わざと夜に入つてその家を訪づれ、例の通り亭主の歸宅の遲さに、細君少からず業を煮やして居る所へ、わざと眞顔で。

「御主人はまだお歸りになりませんか。」

とは、蓋し自分の同類で無いのを、それと無く辨疏する氣であつたが、却つて不興の眦を上げて、ぢつと睨めつけた細君、

「わざ〳〵瀨路に居らしつたんですか。御遠方を御苦勞樣！」と斗り、ツーンと横を向いてしまつた。

六　妻閥の疝氣筋

さる大名華族の末の令嬢、將來有望と云ふ噂を力にある新學士の許に緣付いたが、その學士の勤め先の課長は、元自分の藩の小身者なので、其名も呼棄にして居た男に、夫の手前頭も下げねばならぬせつなさ。時には此事を訴へると、學士も心苦しく、果は自分の腑甲斐無さを感じて、私かに他の口を運動した揚句、遂に斷然辭職と決心し、その表を懷にして、或る時社長の手許まで出すと、社長は頻りに其の才を惜み、全躰何が氣に入らぬか、何うしてそんな氣に成つたと、根掘り葉掘りの質問、學士も今は包みかねて、實はかやう……の次第と、汗を拭きながら云へば、社長も氣の毒がつて、遂に此の學士をば、わざと他の課へ移した然も一足飛に課長に擧げた。さても妻閥と云ふものは、飛んだ疝氣筋にも利くものかなと、同僚共の内證でヒソ〳〵。

七　何の爲の音樂好き

音樂會、運動會の度每に、始終顏を合はせて居た若紳士を、緣あつて夫と呼ぶ樣に成つた細君、その後は美しいその姿を、つひに此等の會場に見せず。まああれほど音樂好きに見えた夫の此頃はその案内狀さへ、其儘反古にしてしまふ樣に成つた。

或夜二人は、長火鉢ならぬテーブルに、紅茶を啜りながらの差し合ひ、細君まづ口を切つて、

「郎君此頃は、もう音樂は御嫌ひに成りましたの？。」

「何故？」

「でも切符が參りましても、皆御返へしなさいますぢやありませんか。」

「それぢやアお前は、矢張り以前の樣に行き度いのか」
「いゝえ、さうでも御坐いませんが…。」
「それ御覽な！今更出るにも及ぶまいぢやないか！。」
と、凝と顏を見てぢろり、細君も何故か莞爾。

八　禮は細君に云はせて

そんなの方には成るべく席を讓る樣にと、會社の注意まで見ながら、更に席を立つ者も無い電車の片隅に、今やつと乘つた斗りの、年三十過ぎた蓄髯の男と、二十三四のその細君であつたが、二人とも歳暮の鮭と云ふ外見で、革にぶら下つて居るのを見兼ね、感心な一人の若者、やをら席を立つて細君に向ひ、
「何卒此方へ！」と云へば、細君は一寸會釋したが、まづ夫に向つて、
「郎君明きましたよ。」
と、さりとては夫孝行。夫は
「フン！」と云つた斗り、その席へドカリと坐つた。
禮は細君にのみ云はせて。

流行の髷

化粧上髮容は極めて大切なるものにて何髷にても己れの容貌及び軆格に相應しき恰好に結ぶべきは勿論なれども、其形は成るべく時の流行に後れざらんことを要す、扨現今廣く行はれつゝある髷を擧ぐれば、丸髷、島田、束髮、銀杏返し、桃割、唐人髷等の數種なり、就中桃割以下は少女の髷にして、其形に左したる變遷なしと雖も、其他は形狀の變化頗りにして、昨年の流行も今年は早に不流行となれるが如き有樣なり。先づ丸髷の流行形を云はゞ、昨今は總體に形の稍小さくして山の高さが持囃され、其恰好頗る上品に見ゆ、島田には文金高髷、島田崩し、結綿、潰し、中高等の別あれども高髷なるは文金高髷、中高等とし此種の髷は束髮流行の爲め之を結ぶ者甚だ減少せるが如し。銀杏返しも髷の稍小さきが當節の流行なり、束髮にも亦數種あれど、近頃は花月卷と稱するが大いに持囃され、其前髮は幅廣にフックリと取り鬢尻はキリ〳〵と捲上げてフックリと附け、且つ髱の稍長きが流行風なり。扨又丸髷も島田髷も將た銀杏返しも鬢の張りて髷の納り加減なるは高尚に見え、之に反して鬢の形の納り工合にして髱の長めなるは所謂粋に見ゆるものなり。



富士山と科學

北海山人

此度の勅題が新年の山といふのであるから、山の話を致せば面白かろうし、且つ多少詞藻上にも參考になろうとの思付きであります。

山と申せば無論駿河の富士山が其代表者となつて居る所謂八面玲瓏、何れの方から眺めても同じ樣に白扇倒まに懸るの姿である、是れは山が圓錐形をなして居るからで、俗に謂ふ擂鉢を伏せて眺めるといふのが、至極當を得て居ります、さりとて日本國中の山が皆な富士の樣な形ではないが、我邦は元來火山國でありますから、從つて、富士形の山が多いので其故富嶽が山の代表者となつて居るのでしよう。

火山は大概は擂鉢の樣な形をして、登つて見ると亦擂鉢の樣な大きな孔が穿たれて居る、譬ひ今日噴火噴烟して居らずとも概して此の形であるのです、前述の通り我邦は火山國ですから何處へ行ても富士の末社があります、試みに一寸北から數へて見ると陸奥の岩木山は津輕富士と稱へ、陸中の岩手山は南部富士で、渡島の駒ケ岳は蝦夷富士、羽後の鳥海山が秋田富士、西へ行て伯耆の大山が出雲富士豐後の由布岳が豐後富士、海門岳が薩摩富士、由良ケ岳が丹後富士、四國にて讃岐富士、伊豫富士あり、大和富士は二上山のこと、近

江富士は三上山のこと、尤も此の内二つ三つは火山でないのがある、此の外富士と、名の付けたい山はまだまだ澤山ありまして、信州の淺間山、御嶽、上野の赤城、榛名、櫻島の御岳、下野の日光諸山なども皆な舊火山で何々富士と謂ふ價がある、世界中で最も美い火山は南米のコトパキシ山で富士より一層高い八面玲瓏の山で、裾野は蒼く中腹以上が千古の雪に包まれ、其頂から不斷白烟を吐いて居るて確かに日本の富士より見事でしよう、亞米利加富士といふ尊號を贈つても良い位であります。

火山は皆な長い裾野を遠く曳き漸々廣くなり絶頂に近くと非常に峻いのです、駿河の富士でも胸突八丁といふて登山者の驚く所があるそうして岩石は皆な燒石である、輕石か又は黒いポツ〳〵孔のある鎔滓の樣な石計りて、決して花崗石の如き白い質の石はないのである、遠方から見ると富士は蒼く見ゆるが登つて見ると眞に黒茶色の石塊の積重りてある、世人は或は白い砂て積上つて居る樣に思ふものもあるが、其れは全く反對である、富士形の山では、山勢が極めて簡單であるから、谷や瀧がない、もし谷や瀧があれば、其れは火山の區域に屬しないで寧ろ山の基礎に屬する地方にあるのです、併し我邦は四面が海ですから、海濱に立つ富士も隨分見られる、由布岳、由良岳等も海岸富士である、海岸富士の世界的の名所は伊太利のベスビユス山で、ネイプルスといふ港の灣底に聳えて居る、我邦の清水港から富士を仰ぎ見ると同樣の景色であるそうです。

靜かな湖水に影を映ぜる富士も隨分良い景色です、箱根蘆の湖、甲州河口の湖へ映れる駿河富士、日光の中禪寺湖の水面へ浮べる男體山の景、奥州、十和田湖に於ける八甲田山の影、何れも倒富士であります。

山高ふして水深しといふ山は富士形の山ではない、地質學者がいふ古生層で極めて古い時代から顯はれて居る岩山で、此間を流るゝ溪流が實に幾千萬年となく同じ谷を流れて、流るゝ水は晝夜となく、兩崖と底とを摩擦して時々刻々深く穿つのである、其故、恰も彫刻

をした樣に自由自在に山間を繞りて深く流れて居る、しかも兩岸は幾百丈の絶壁をなして屹立し、語を換へて謂はゞ溪が深く穿たるゝにより、殘る地盤が峻しい山になつて立つ譯である、木曾川の上流、甲州桂川、武州秩父などは皆な斯う云ふ風景であるのです。

かくの如く谷のために穿たれて殘つた山の中には隨分景色の奇拔なのが多くて、世間で有名になつて居ります、實際から申せば谷が大切であるが谷底近くに通へる路から見上げた景色が良いから、山となつて見られて居る、其れ故一段高い位置から眺めると一向價値のない風景で遠くから望むと畠の畝、同樣である。

實際を擧げて申すと甲州の御岳が其れであります、御岳と謂はゞ、嘸一角の山岳かと思ふと決して左樣ではなくて一の廣大なる山の麓である、しかも其本幹たる山岳は奥の院と唱へて遠く七里の奥に隱れ御岳といふて雅客が杖を曳く目的は山麓の御岳神社であるが、更に實際の眺望地は此の神社でなくて荒川といふ一の深い谷の絶壁で此處には花崗石が削磨されて或は聳ち或は倒れて奇拔なる景色を作つて居る所謂昇仙橋、石門などは是れである、木曾も亦、同じ筆法で實際の木曾の山と申すは御嶽や駒ケ岳であるが所謂、木曾山と唱へられてあるものは木曾川谷のことで、矢張幽谷の眺望である寢覺の床、命をからむ棧も亦、山でなくて谷底の削磨の結果である、上野妙義山、金洞山、金鷄山、榛名山なども亦多年風雨のため削磨されたる殘部の斷崖絶壁を指して居るので彼の、蠟燭岩、竹筍岩、石門、胎内潛りなどいふのは何れも此の筆法の勝區である、豐前の耶馬溪や讃岐の寒霞溪は同じ水流削磨の殘疊ではあるが、特に溪の字を用ゐてある、支那の風景には、かゝる山が多いと見えて支那風の畵には隨分見るところである、而して地質が軟い程、圖に畵いて奇拔な山が出來る。

日本の山は必ずしも火山か又は溪流の削磨のために殘つた絶壁山ばかりではない、其外に古い噴出岩の山と地球の皺から出來た山がある。

古い噴出岩の山といへば先づ花崗石の山で大古、地下

から噴出した岩であるが幾里となく廣大な地域を占めて居る、花崗石は非常に古い岩であるから長い月日の間風雨に曝らされて、細かく崩し今では表面からばらばらと白い砂に成り果て丶風雨毎に流れ落ちるそれ故樹木が生へない、否な一旦生へてあつた樹木でも段々根が弛ぎて枯れんとする、剩さへ關西では中古山林を濫伐した結果、山が丸て禿となつてしもうて遠くから見ると宛て雪の降り懸つた樣である、殊に三河伊勢邊から近江、京都、大和それより中國筋にかけて一帶に禿山である禿山の景は一向風致がない、其れ故同地方の人は大きな山の景を全く眼中に置かないで、唯一部分の風景のみを賞して居るのである。其小部分の風景は何うであるかといふと、花崗岩が露出して其上に黑松も赤松も生へて居る風景である、其れ故、關西の人が始めて關東へ來ると富士は勿論其他の大きな火山を見ても其規模の偉大なるに驚くのである。

關西の山と謂へば比良、伊吹、比叡山の如きは可なり高い山であるが、何分花崗石の山であるから禿である伊吹山は高さに於ては其邊で一等であるが大部分が石灰質で崩れ易いから是れも亦、禿山である、大和の春日山は不思議な山で周圍は悉く花崗石の崩壞した白砂の山であるが春日其物だけは火山質の硬い岩であるから充分木が生え繁つて居る所謂三笠山なる若草山並に花山、芳山等は並て禿である、天の香山や耳成山畝火山などは僅かに丘の毛の生たのである。

山の中で最も宏大にして奇拔なのは地球表面の褶袖で出來た山が一番である、それは日本の群島の骨を形作つて居る山脈であつて、或は所によつては低くなつて列島や半島になつても居るが日本の中央へ來ると所謂赤石、木曾の山脈となり莫大な面積を占め一萬尺近くの高さに達してゐる、就中最も有名なのは越中の立山である、之れに次ぐものは木曾の駒ケ岳、甲州の赤石、白根駒ケ岳、陸中の早池峯、何れも火山でない高山大嶽である、山の形は極めて不規則にして或は屛風の如く蜿蜒し、或は檜の如く乾立し麓は深谷のために穿たれて兩崖は絶壁となり、中腹は峻險にして楷の如

く、頂には古き岩質が崩壊して枯骨露はれ殘壘或は鋭くして鉾を立つるが如く、或は鈍くして牛の臥するが如く時として中腹に宏大なる平野を作りて矮草は毛氈を布き詰めた如く其風景の千變萬化せる有樣は實に登山者をして飽かしめない。同じ花崗石の山でも、これ丈け高いと充分に水分があつて、樹木が繁茂する、其れ故、禿げ山にはならない禿たところが僅か頂上少し計りである、先づ偉大なる山と謂はゞどうしても、かゝる褶曲的山脈を推さねばならぬ、西洋のアルプス



甲州七里村の富士

ロッキー、アンデスの諸峯中随分好い風光の山が東洋の人の耳目に映じて居るのも、槪ね前段に申した樣な褶曲的山脈の景である、山の眞の味を知らんと思へばどうしても此等の性質の高山を一度は登つて見んければ談が出來ないのであります。

是から山の草木に就て話を續けましよう、草木は氣候の寒暖によつて著しい違いがある、平地と高山とによつて甚しい差がある、凡て關西地方は氣候が一般に溫和であるから、松が繁茂する、松も黑と赤と二通りあ

つて、昨年の年頭に一寸陳べたこともあるが温和なる海岸には一體に黑松即ち雄松が繁つて居るが、北の方に赴く程、此の雄松が減じて女松即ち赤松が入れ替る東京より北に行くと黑松は著しく減退する關西地方でも山に入ると皆な赤松である、彼の瀨戸內海沿岸や、四國九州の低い山の樹は皆な黑松で枝振が極めて勇壯である、之れに反して京都江州邊りから岐阜に懸けては最早や山が冷たいから赤松である、赤松はピッシリと山を掩ふて隙間なく繁つて居る、京都東山とか岐阜の金華山とかは即ち皆な赤松で掩はれて蒼々として居る、之れより北へ行くと山に落葉樹が多い落葉樹は秋の紅葉の景が一段の興味であるが、新年には最早紅葉もあるまい、只見渡す限り枯れ木が林をなして立つて居る、山の裾には杉や樅が天を衝く樣な巨幹をなして密林をなして所謂黑木林を作つて居る、併し同じ黑木林の中にても遙に北方か高山に赴くと栂とか杜松などが非常に繁茂して日中も尙ほ暗きまで密林をなして遠くから見ると黑々して見ゆる、勿論黑木林は常盤木であるから寒中だろうが、新年だろうが益々蒼々といふ勢である。

終に一寸雪のことも添えて御話をしやう、所謂富士の千古の雪といふのは山か高いから夏でも溶けないからであるが、一體富士は其位置からいふと雪は比較的少いのである何程寒中でも裾まで白妙になることはないが、日本海沿岸は高山否低い山でもが、皆深い雪を蒙つて一體に眞白になつてしまう、中國筋の山は勿論雪の量に於ても寒の度に於ても雪を蒙ることが少い、唯高い頂計りが少々白い帽を戴いて見せる、山陰、北海、奧羽と來ては實に雪の分量の多いため高低の別なく、十一月頃から三四月までは丸て雪である、新年は舊でも新暦でも共に雪中の正月である。

動物の雌雄淘汰

博物學人

動物は、雌雄がなくとも生殖することが出來ます、

下等動物の如きは、一つ體が二つに分裂し、或は一つ體に芽を發し、或は雌ともつかず雄ともつかない三つの動物が合體して、更に多くの動物に分裂するなど、雌雄の特性を必要とすることはない、けれども高等動物にいたると、雌雄の特性があるから、兩性が合一しなければ、殆んど生殖することは出來ないのです。雌雄の接合がなくとも單獨に生殖することが出來れば、誠に世話がなくて、却つて動物界の便利であらうに、何故雌雄は生殖上必要であるか、何人も奇しく思ふ所でしよう。

凡そ動物が、此生存競爭場裡に於て、子孫を繁榮ならしんめとするには、種々の形態習性をつくることが利益であります。例へば、胴の長いもの短いもの、手足の長いもの短いもの、耳の敏きもの眼の鋭きもの、尾の太いもの小さいもの、爪の曲るもの齒の尖がるものなど、色々な形があると、生存競爭場裡種々の境遇に處して、或者は堪えられないで滅亡してしまうが、或者はよく其境遇は適し、そうして適者生存の理によつて、其子孫は繁昌することが出來るのです、種々雜多な形態習性といふことは、動物の生存上非常に必要である、學者の說によれば、雌雄は實に此必要によりて出來たであろうとのことであります。

抑も動物の形態習性は、親に似るものである、親が一人て子を設くるものならば、子の形態習性は、殆んど親の通りて、孫も曾祖も亦同一模型に外づれないてあらうが、親が二人てあると兩方へ似るから、親とは少し違つた者が出來る、今假りに形を以てすれば、五角形（或は赤色とすれば）の親一人て出來た子孫は、いつまでも五角形（赤色）てゐるが、五角形（赤）の親と、三角形（青）の親と接合して出來る子は、四角形（紫）となり。四角形の親と八角形の親と接合して出來る子は、六角形となる道理である。繰返していへば、雌雄とは、生存上種々雜多な子孫を設くる爲めに出來たのである。動物の雌雄は斯の如き理由に基くから、自然に於ては、近族間の配合をば成るべく避させてある。已むを得ざる生態により、一つ體に雌雄の兩

生殖器を具えたる、所謂雌雄同體の動物さへ自分の精子て、自分の卵子、受精することは殆んどなく、大概精子だけを交換するのである。人間や禽獸の如き高等動物が、近族間の配合を爲すと、子孫の體格は親程丈夫でなく、若しも強いて數代繼續配させると、子孫はだん〳〵纖弱となつて、遂には滅亡してしまう、然るに遠族間の配合により出來たる子孫は、大概丈夫である。禽獸の如きは、雜種を以て特に強健としてある。英吉利人の強壯なるも、畢竟大陸との往來頻繁であつて、他國人との雜婚多きによるといふ說であります。

動物は生存上の必要より、雌雄の區別が出來たのであるが、生殖を遂げんとするには、是非とも接近せねばならぬ。そこで造化は、愛慕といふを授け、互に接近せしめてゐる。電氣に陰陽の二性あつて、同性相擊ち、異性相容るゝ如く、動物の愛慕も雌雄間には互に相感應するも、同性即ち雄と雄、雌と雌との間には、殆んどはたらかないのである。これ等は吾々が常に觀る所の、鷄、或は犬に於て顯著なるものであると。

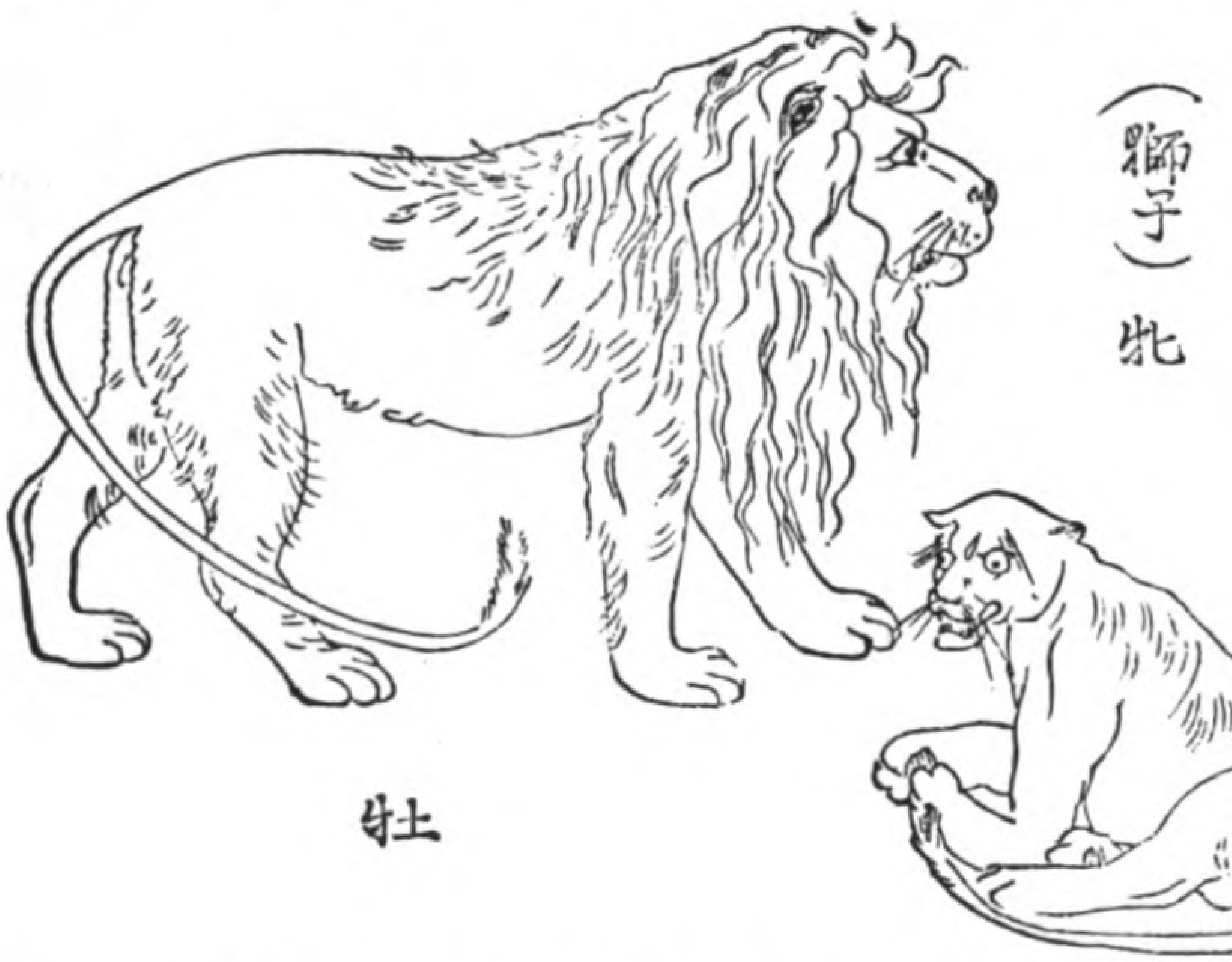
動物の雌雄をして、過もなく不過もなく、平等の數にあらしめば、世は至極無事平穩なれども、或は雄は雌より多く、或は雌は雄より多くあるが爲め、多數の者は、少數の者を得んとして、こゝに色情界の競爭起つて、世は無事泰平といふ譯にはいかぬのです。廣く動物社會を見わたせば、大概雄は雌より多い、鷄の如きは、雌の數やゝ雄より多いが、此鳥も一夫多妻であるから、實際雄の方が不足となるのである。斯の如く雄は雌より多い故、競爭は大抵雄と雄との間に起り、或者は武力を以て他の雄を壓伏し、獨り雌の愛を擅にせんとし。或者は色彩の美を以て、雌を歡ばせ。或者は良き音聲を出して雌を挑み。或者は芳しき香を發して雌を誘ひ。斯くて數百千年を經る間、武力は益々強く、色彩は益々麗はしく、音聲は益々美しく、香は益々芳ばしく進化したのである。されば彼の禽獸蟲魚の雄のみ、強力、美色、良音、佳香を有するは、生活の爲めにあらず、道樂の爲めにあらず、又吾々人類を樂ませんが爲めにもあらず。唯々雌を喜ばせ、そうして

雌の愛慕を得んが爲めてある。即ち是等の進化をば、動物學上雌雄淘汰と稱えて居ります。

雌雄淘汰は、普通體力―恣色―音聲―香氣―の數種に分たれてゐます、これから其一班を順次述べてみませう。

△體力

雌を得ん爲め、雄と雄との間に競爭の起る場合に、體力強壯なるか、或は特別に武器を有する者は、よく他の雄を壓倒して、自然と雌の愛慕を受けられるのです。て勝を得たる雄の子孫は、數千萬年の間、斯の如き淘汰によつて、體力益々發達し、武器益々銳利となり、今日の如く雌雄の體形に著しき變差を來



（獅子）

たしたのである。獅子の雄は、形虎に似て居るが、雄は頸に鬣を生やし、特に顏面頗る巨大で、牙鋭く、雌よりは遙に威嚴を備え。鹿の雄は、形雌より大きくて、枝叉の多い角を戴き、象の雄は、雌よりは餘程大なる門齒を具え、猪の雄も、雌より長き牙を有し、膃肭獸は、雄の體格雌の倍程も大きく、海中に游泳してる海豚の屬なる一角魚は、雄に限り、左の牙が七八尺にも伸長し、槍の如く敵を攻擊する武器となつてゐます。鳥類中鷄七面鳥、錦鷄、雉、山鷄等の雄は、其體格雌より大きくて、而かも足に鋭き距を生やし、雄が他の雄に會ふと、勝敗のつくま

て、互に鬪合ふて止まぬのである。昆蟲類中、飛生蟲の雄は、雌より大きくて、頭に丈夫な一本の角をたて。鍬形蟲の雄も、雌より大きく、上顎は長く伸長して、所謂鍬形とて、鍬の如き用を爲すのである。

△姿　色

雄が色彩や姿態を美にして、雌を喜ばせるのは、主に鳥類である。就中孔雀の如きは、羽毛頗る鮮麗で燦然たる金光を放ち、時々廣大なる尾羽を擴張して其美を誇り、特にマラッカやルボネヲ産なるアルカスといふ孔雀の一種は、屢々雌の前にて、翼を擴げたり。尾を起てたり、所謂舞を爲して其歡心を索めるさうです。スマトラ島に産する鸞鷄の雄も、翼が非常に廣く、尾羽は體の三倍も長く、常に羽翼を張りて、これよとばかりに見せびらかしてゐる。我邦普通に産する鷄、雉、山鷄などは、唯に體格の强大なるのみでなく、羽毛も頗る麗はしく、尾も甚だ長いのである。鷄の如きは屢々翼を擴げて雌を逐ふが、これ其美色を觀せんが爲めであらうと思はれる。新幾內亞に産する風鳥の雄は、奇異なる羽毛を生やし、頗る美觀であるが、雌の羽毛は遙かに劣つてゐる、此他鴛鴦、鴫、鵟、赤腹、伯勞、黃道眉などは、雄の羽毛雌よりは餘程綺麗である。昆蟲類中、蝶類の如きは、雌よりは雄の色彩が、一般に美しいのです。

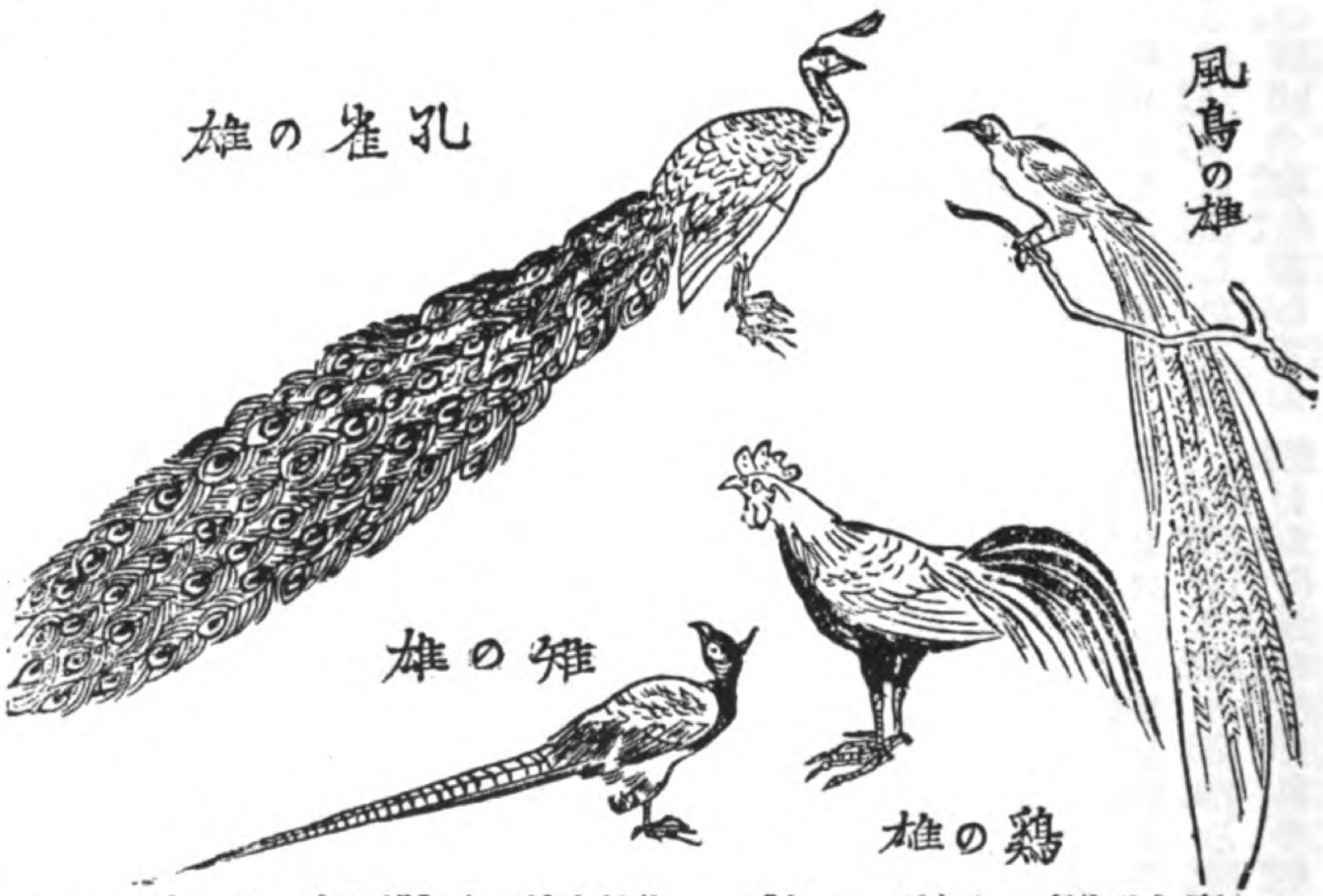
△音　聲

美音美聲を發して、雌の愛を受けんとするものは鳥類及び昆蟲類に多くあります。鳥類中特に燕雀類は何れも鳴管がよく發達して、巧に囀唱するから、一に鳴禽類ともいはれます。就中、天雀、時辰雀、鶯、黃道眉、鷽、金翅雀、伯勞、鶫、郭公、鳩などは、最もよく囀づる方です。昆蟲類中、音聲を發するのは、蟬類を直翅類である。蟬類の音を發する所は、腹の第一關節と第二關節の間にあつて、空氣の薄膜に觸るゝ際に發するのです。我邦に產する蟬類には、春蟬、蟪蛄、鳴蜩、蝒々、寒蟬、茅蜩、蚱蟬等、十餘種もあります直翅類中、蟋蟀、聒々兒、馬蛉蟲、金琵琶、金鐘兒、草天雀、鐘叩蟲、蟋蟀、螻蛄などは、皆音聲を發する

ものて、翅の縁を摩り觸れらして、音を出すのです。一體雄は、其雄が音聲を發すると、多くは其近傍に來て、熱心に聞きすましてゐる。雄は他に音を發する和手があると、互に競ひ合ひ、繡眼見、時辰雀の如きは、小さき喉の破裂するかと思ふ程、烈しく叫び出し、蟬の如きは、天地も震動せんばかりに雷同することがあります。

△香　氣

香氣を放ちて雌を誘ふことは其種類甚だ尠い、中央亞細亞に產する麝獸は、鹿に似たる動物て、雄の陰部の邊に一種の線があつて、非常に良い香を放ち。それから亞細亞阿弗利加に產す



る麝猫も、尾に近い脊の上に香嚢があつて、臭氣を發します。此他亞米利加に產する麝香牛、麝香鼠、麝香龜など、何れも香を出すのですが、其香には、吾〳〵が嗅ぐと嫌やに感じるのがあるが、彼等の雌には至極愉快に感ずるのでしよう。

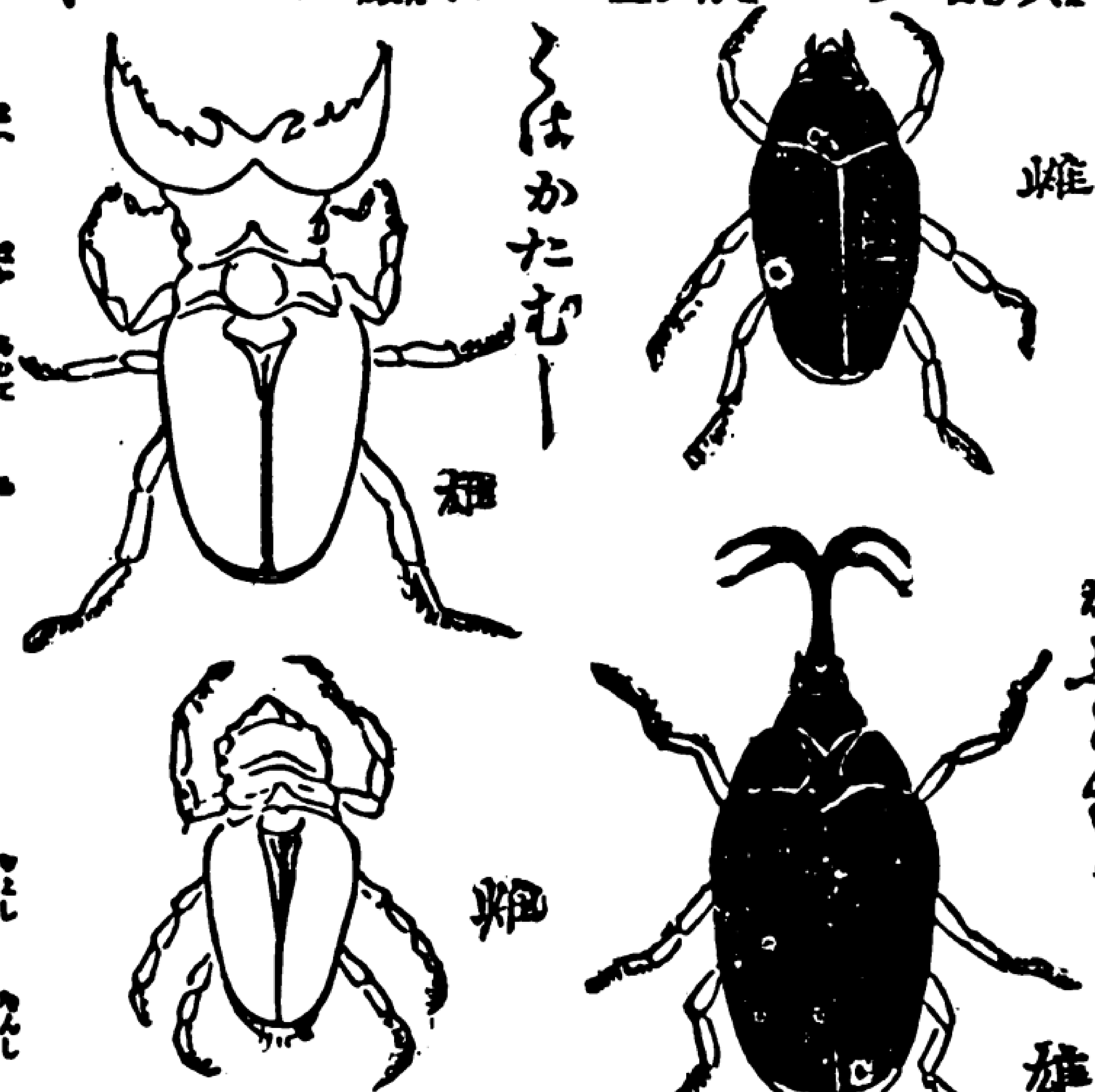
動物は子孫を蕃殖する爲めに情慾をもつて生れたので、隨分快樂もあらうが、また隨分苦みもあるのです。之が爲め、雄と雄との間に烈しき戰鬪を起し、肉を飛ばし血を流し、非命に終るものが尠ない。螢合戰蛙合戰といふは、即ち春情期に於ける、螢或は蛙の色戰にすぎないのです。一體雌は雄に比べると

頗る安全なれども、僅數の雌が、多數の雄に奪ひあはれ爲めに負傷をしたり、或は殺（人間にもある）されたりするのがあつて、恰も學校生徒が旗奪ひの際、四方からもみ合ふて、肝腎な旗を引裂いてしまうと同然である。て情慾を遂ぐるまでには、幾多の苦みに打勝たねばならんが、また容易に好配偶を得ることも尠くない、抑も情慾を遂ぐるといふことは、生物の最大快樂であるから、辨別なき動物は、日々情慾を擅にし、遂には生殖機能を害してしまう、子孫繼續の爲め、折角附與されたる妙器は、却つて種族絶滅の凶器と變じ造化の本意にもどッてしまう。夫故造化は辨別なき動物の爲め、春情期を定め、概ね一年中一二回（人間及び鷄を除き）の短時間としてある。此時期以外は殆んど情慾の觀念なしといッてもよい位、然るに此時期になると、情念抑ゆる能はず、平素貪る所の食物など顧みず、四方に漂遊し、唯に體質に變異を來たすのみでなく、精神も不穏になり、甚しきは狂氣に類したる擧動を爲すのがあるて。春情期終れば、冷然として

嘗て熱狂したることを知らざるが如くになッてしまうて、雌雄淘汰の結果は、春情期に際し、最も著しきものて、鳥の謡ひ、蟲の吟するも、其盛なるは多く春情期てある。鳥の羽毛の如き、平常よりも一層美色となるのがある。河流に居るタナゴ棘魚などの雄は春情期になると美觀を呈して來るが、春情期が終ると、退色して雌と同樣になッてしまう。北米ミシシッピー河に產する鰐魚の雄は、春情期に限り、下顎より芳香を發して、雌を招ぎ寄せ、歐羅巴に產する蠑螈の雄は、春情期になると、背の上に鰭の樣なものが出來る。蟇蛙は平常鳴かないのであるが、發情すると、喧しく鳴き呼ばり。金線蛙、雨蛙などは、此期節になると、兩頰に薄膜の嚢を膨らまして、一種の高聲を發して競ひ合ひ。犬の如きは、却ッて雌の方から臭氣を發して、雄に其發情したることを示し。蝶蛾の類にも、雌の方から香を放ち、雄を誘ふのがあります。

人間は、他の動物と同じく、雌雄淘汰の結果あるか然り大にあるのです。大古野蠻蒙昧の人間は、恰も獸

類の如く、武力によッて、女子を奪ひ合ひ、強い者は弱い者を制して、己れの好む女子を靡かせたので、當時の女子は、今日の如く富貴、名譽容貌などを望まずして只管筋骨逞くて武力勝れたる者を慕ふたのである夫故男子の體格は次第々々に發達して、女子に比べると身の丈高く骨太く、筋肉剛く、隨つて體量も重く力も強く、特に著しい相違は、鼻の下から頸の邊にある鬚である、鬚は最も威嚴に關するもので、若しムシャムシャと鬚を生してゐると、毛の中へ眼鼻口がある樣で、頗る怖しく見える。彼の鍾馗、毘沙門天の如き顏面は、鬚はない前に、他の相手を威嚇するとが出來る。て勇武の形質は、男子のみに遺傳



して、今日文明泰平の世に至るまで、男女の間に、餘程の區別があるのです。そうして他の動物の雄は、雌てさへあれば何んなものでも構はず、敢て其容貌色澤の美醜などをば、問ふ所でないですが、人間には美といふ觀念があるので、男子は美婉なる女子を好み、醜貌のよくない者は、往々男子の撰擇に漏れるそれから、人間の産兒は纖弱であつて、成長するまでには、隨分長い年月を要するから、女子獨りで發育するのは困難で、勢ひ好配偶を得、是非其力を藉らなければならぬ、そこで女子は男子の愛を買はんが爲め、容貌體質を美にするの必要が起り、數千年間の淘汰を受け男子

に比ぶると一般に體力小弱で、精神溫柔である、さうして顔貌優しく、筋肉軟く、皮膚滑かて肌白く、音聲も清らかて、何れも男子の理想に叶ふ樣になつて來たのです。加之白粉、紅、油などを施して自然の體色を補ひ、甚だしきは、腰を細め、足を縮め、自然の體形を傷ひてまでも、美に捧げやうとする者があるのです。彼の孔雀、錦鷄、山鷄などは、雄は雌より遙に美觀であるが、人間は男子より女子の方が、遙に美しき衣服を着け、麗はしき飾を附けるのです。て女子には無論美といふ慾念はあるが、大古の女子は主に體力の強き男子を嘉(餘儀なくされたのもあらうが)ふて居つたが、社會が進歩するに隨ひ、今日の女子は、體力の強健なるよりは、寧ろ爵位、財産、名譽を愛して來たので、男子の方でも、之が爲め、(全然女子の愛を受けんとするには非ざるも)や丶富貴名利に心を傾けるやうになつて來た。富貴名利を得んには、素より智識を要する故、男子は汲々として學術技藝を勵むのであらうが。古代の男女淘汰は、體力てあつたが、近代の男女淘汰は、腦力に變じたといつてもよいのでせう、て、動物の雌雄淘汰は、殆んど雄性間にのみ行はれてゐますが、人間の男女淘汰は男女兩性に行はれてゐるのであります。(終)

氷海の產物

天水生

氷海の動物には、獵虎、海豹、オツトセイ、海馬等種種あれども、就中珍奇にして文明社會より注意を向けらる丶ものは、獵虎なり、一枚の毛皮數千圓に價し、倫敦、巴里の流行社會、貴婦人社會に持囃さる丶に至つては一匹の毛獸も又黃金と其價を均くするに至る、されど今この珍獸の生活、生產の有樣幷に捕獲の狀況を語るも時節柄又一段の趣味なしとせず。

抑も獵虎は物を齧むの性あるを以て、動物學上、嚙獸類の一とされたり「あざらし」(海狗)に似てその尾は稍や長く、赤黑色なり、其性仰て物を食ふ、その毛皮

は極めて柔軟にして、之を摩するに順逆を辨ぜざるなり、以て衣服を爲すべし、世に之を貴重の物とす、此獸は固と一種特別の薫香を有するものにて之を「カストル」と云ふ、(カストル油とは別なり)麝香、靈猫香の類にして、其香氣の芬芳たるや以て能く其所在を辨すべし、而して其薫物なるものは、下窩の近傍に二個の肉核ありて之を藏む、大さ豆の如く、恰も睾丸を帶ぶると一般なり雌雄共にこれあり、往昔歐洲に於ては之を貴重の藥劑となし、止動病、氣鬱病、其他諸病に用ひて効あり就中子宮攣衝の症に奇効ありと云て專用せしが、醫術の進步に因て、今は漸く廢棄されたり、されど單に香料として方今專ら之を麝香の代りに用ひられ又獺虎を捕獲するの餌として用ひらるゝを以て、捕獲者頗る之を重んず、其肉は俗に膠膩極めて多く、北氷洋の獵者は好んで之を食すと云ふ、夫れ獺虎は湖河の邊疆、森林蔚蒼たる地に棲息し、木皮、灌木及蓮根等の水草を食じ、而して水邊に住するも聊かも魚類を犯さず、常に林中に奔走して敢て遠きに行くことなく、其狀頗る多忙なり、秋時草根木皮の類を貯へ、以て冬月を防ぐといふ人捕て之を馴養するを得可し、此獸は固と家屋の建築に能あり、其効妙人をして驚歎せしむ、又咀嚼の力極めて强剛にして能く直徑「十インチ」以上の樹木を嚙切り、枝葉を取つて家屋構造の資となし、又は食に供すといふ其家屋を構造するや、草木の枝根を聚積し、盛るに泥土瓦礫を以てす、其家屋は皆水邊に駢列し、其狀恰も半圓形にして、其周圍に間々土堤を築き、以て水害の變に備ふるものなり、一家に住するもの概ね十個乃至十二個にして屋內に寢所あり、食糧貯藏所あり、各々室を異にして一家屋蓋を共通するも、屋內往來の道なく、出入皆外門よりす其家屋は極めて堅牢にして試に人の之に登るも、能く陷ることなし、又啻に列風暴雨の患を防ぐのみならず猛獸の爪牙を豫防するに足れり、每歲霜雪の期に先ちて修繕を加ふ、其工事は必ず、夜間に於てすと云ふ。

△毛皮の品種　獺虎の毛皮の貴賤幷に衣服帽子の製作上に於て毛皮を三種に區別せり、第一は冬期に捕獲す

るものにして、夏期脫毛の後新毛更に生じ、膏膩肥滿せるものなり、皮革商人は最も此種類を重んじ、第二は夏期に得るものにして恰も毛脫し、腐肉腐敗せるものなり、第三は捕獲者の自用に供したる後、商店に賣るものにして、此類は自己供用のため、多少時日を經たるを以て、膏膩脫し、毛皮をして一層柔軟ならしめたれば、第一種と同等のものなれども、唯其毛皮に少しく新古の別あるのみ、而して各種の用途は帽子、外套、衣服の緣婦人用煖手套等なり。

△產地及捕獲　本邦にては、北海道千島(獵虎島)に產すと雖も、其額多からず、舊開拓使時代(明治十一年)の計算に二百七十枚なりしと云ふ、外國にありては古昔亞米利加の未だ聯邦を爲さゞりしとき「ホドソン灣」「ミシシッピー」河の邊岸、獵虎の巢窟たりしが、人烟稠密せるに隨ひ漸く減少し、方今捕ふる所極めて寡少にして、却て「カナダ」地方に得るもの多しと云ふ、又「カムサツカ」「シベリア」地方の諸洲には今猶、尤も多く之を產す、就中「ネビ」河邊を最上とす、其他歐洲北部の幽境に產するもの多く、英佛の如きは、昔時其棲息の地たりしが今は絕てこれ無しと云ふ。

千島擇捉諸島、獵虎捕獲の景況を聞くに、獵虎は長さ大約三尺より五尺餘に至り、水中にありて食物を求め其性は永く海底に止ることを得ず、必ず水面に浮出、頭を擧げて外氣を吸ひ、或は岩礁の上に眠り、又は昆布の茂りし上に寢ね、海中に生活すと雖も、遠く陸地を離るゝことを好まず、近年銃獵益々烈しきが爲めに海面の穩かなる日は三三里の沖に出れども、日暮に至れば、必ず舊の住所に歸來すと云ふ、其之を獵するものは毎年十一月より翌年四月までは、波濤も荒く遠洋に出て獵することを得ざれども、此の期節には獵虎も近傍に散布する岩上に眠るが故に、小舟を漕ぎつけ或は銃を持て狙擊し、或は挺を以て撲殺す、其尤も至難なるは數頭の獵虎岩上に靜臥するを望むに、尾を搖し頭を左右し、人臭を嗅ぐものゝ如し、故に下風に廻り人臭を吹き送らざるに注意し、岩に上らんとする時、氣を呑み聲を含み、唯手を以て指示し、恰も枚を銜ん

て敵營を夜襲するが如く、勇を鼓して上に踴躍するに若し一歩を誤れば、不測の淵に陷り、身體紛韲し、加ふるに寒氣骨髓に透り、手足凍へて進退自由ならず、其危難辛苦云ふべからざるものありと、然れ共獵虎は之を覺れば直ちに海に沒して遁れ、獵者の辛苦も忽ち泡沫に屬して獲る所なく亦た舟に下りて他に向はざるを得ず、是を岩礁の獵と云ふ、又二三月の間海水凍り、蒼海も忽ち銀世界に變じ、恰も白亞を施けるが如く、獵虎は之が爲に壓迫せられて、皆氷上に上り來る



とき、獵者は木槌を持ち氷上を追ふ、獵虎は只管水面を求めて遁れんとするも、氷塊皆密着して隙なければ、狼狽彷徨中終に撲殺せらる、若し水中に遁るゝも亦水際より頭を出して呼吸せざるを得ず、因て直に之を狙擊す之を氷上の獵と云ふ。

又外國船の獵虎を獵するを聞くに、帆舞船一隻每に、小舟三四隻を載せ、風に從て東西に往來し、風潮適宜の處或は獵虎の浮ぶを見れば、直に小舟三隻を下して先づ魚鱗の隊を作り、即ち一艘は中央にありて、二艘

は左右の翼となり、各々相離るゝこと一町或は二町にして、毎舟三人を載せ、二人は射手一人は楫手となり中央に獵虎を見れば、先づ銃を放ちて之を追ふ、たの急なる時は一人射て、二人は漕ぐ、若し左に脱すれば左翼は中央に位置を占めて、中央は右翼に出づ、左翼其位置を離れて、左右獵虎の脱するに備ふ、獵虎若し左右に備へあるを知りて、遠く一文字に脱すれば、三隻翼を張りて之を追ふ、其進退馳驅の迅速にして變化極りなきこと、老將の兵を督して戰ひ、敵をして逃れしむる能はざるが如く、實に功妙なりと云ふ、此他外國人の獵虎を捕獲するに切なること、數頭を見ると雖も必ず一頭にのみ注目し、其他を顧みず最初には先づ銃を放ちて之を驚かし、其當るを期せず、彼れ砲聲を聞けば直に水中に沒し、二分或は三分時間にして三四町の外に出づ、故に獵手の能く熟練せるものは豫じめ彼の水に沒するとき、其頭の方向一を瞬に認め、前後左右何れの方に出るやを識り、豫じめ身を轉じて待つに、彼れ果して其邊に頭を出すや、直に射撃す、彼れ其聲を聞けば呼吸するに暇あらずして、又直に沒す、獵手又前の如くすること、再三再四に及べば、彼れ力盡きて呼吸益々急に、彈丸益々烈し、二十間沒して頭を出し、十間沒して息を繼ぐ、舟漸く近づき彈愈迫り、力盡き氣疲れて、遂に擒となる、此の如くするが故に、獵虎一頭を擒にするに、多きは三百發、小さきも二百發の彈丸を費すと云ふ。

△貿易　獵虎より得る處の薫香は、貿易上に於て二個の嚢の連接せるものを以て、一個に算し價を定む、是れ其性を存するものなり、米國「ポストン」灣に於て捕獲する獵虎の薫香嚢は、十個の價大概一個の毛皮に當り、魯國産は米産より上品にして高價なり、毛皮は以て衣服を製すべし、就中帽子製造に大に適せり、千六百三十八年（我寛永十五年）英國に於て條例を發したる事あり曰く、米國獵虎の産年々に減じ、其得る所の毛皮隨て減少せるを以て、帽子を除くの外、其用途に禁止すと、而して千八百年代の初より、千九百年代の初期に至るまで、米國より英國に輸入の額毎歳二十萬個に下らざりしが、現時大に減少し、米國「ホドソンベー」商會より毎歳英國に輸入する額は八萬枚なりと云ふ。



骨牌のあと

尾上柴舟

「炭櫃に面さしくべて、蜜柑のみ吸ひたまふが、能にもあらざるべし。いて、此方寄りたまへ。心ゆくばかり物語もし侍らむ。只管に默したまふは、鐘撞きてとぢむといふ默寂の遊にも似たりや」と丸髷なる主婦の云へば、島田なるも、銀杏返なるも、束髮なるも、皆居直るめり。

骨牌遊の酣なりし跡とて、しづ心なく散り亂れたる札の數々、まだ取り收めむとする人もなければ、彼方なるは、白露に風の吹きしきし心もしるく、此方なるは末の松山浪こゆる風情あり。三室の山の紅葉は、襖のかげに亂れ、燒くや藻鹽の煙は、蒲團の下に橫折れたり、そを搔き分けつゝ、人々由良の門渡る舟の樣してより來れば、主人「なにがしの君には、今年の卒業論文の料にとて、平安朝の女詩人といふ題を撰ばせたまへるとか。三月といへば、はや、程もなきに、大方は整へたまへりや」と云へば、束髮なるが、いと口速く「おほ方の心構はしつれど、我國の如く、傳記、資料などの整はぬ處にて、完全の評論を試みむはいと〳〵難き業に侍り。彼の國のやうに、斷簡零墨悉くとり集めて、その系統も、その門地も、生死の年月も巨細に取り調べて、ことに、その平生の有樣など、目に見るやうに傳へたるにくらぶれば、事ふりたれど、雲泥の差違ありと、云ひつべし」と嘆かしげに云ふは、小石川あたりのなるべし。主人「平安朝の女詩人と云へば其數いと多きはあるが、まづ、君には、誰れをか、尤も、すぐれたりとはおぼす」と云へば、束髮すぐれたりとは、あまり、漠然たる御尋なり」主人「すぐれたりとは今の語の、理想とやらむ云ふ事と思しめて。そ

も君には、誰をば、理想の人とはしたまふ」と問ふ。「そは、いふまでもなく、紫式部にこそ。師の君の、何時も、しかのたまふは」と思ひがけぬ方より答るは御茶水あたりのにや、稚兒髷結ひたる君なり、島田なるが「げに、さに侍り。身の行よりはじめて、學問の才といひ、歌の才といひ、かくまで足ひ整ひたる人、また、世に出でむとも覺え侍らず。源氏の物語など、五十帖までも、うち續けるが、めでたからぬ節なく、をかしからぬ處なきは、げに、鬼神と云ふとも及び難く侍らむ」と云ふ、銀杏がへしなるも「その日記を見るに、甚じき事、いと多し。そが中に、一天下の人々の、神とも佛とも崇めまつりし入道殿下にさへ、槇の板戸を明けざりしなど、貞操のほど、後の世の女の鑑とも稱へつべきにあらずや。げに、安藤爲章とやらむが、七事具足とて讃めたゝへしは、まことに宜なりけり」とあと打てば、束髮なる人々のたまふことは、その理なきにあらねど、いづれも、陳套の說とやいはむ。おのれは、安藤爲章の儒學を基として、强ひて、女神などいふらむやうに、作り上げたるが、快からぬなり。まづ、彼の日記を見たまへ。女の才がるは、最しき事なり、我は、里亭の女の前にても、只、才がらじ、とのみ愼しむなど云ひて、そが次に、兄の惟規が父の爲時に、史記を習ひしに、兄よりもとく讀みとりたりしかば、父は「此子の男ならぬが口惜し」と嘆きたりし事。また、中宮に仕へて後は、一といふ文字をだに、書きえぬ樣つくりたるに、よき名は、おのづから隱れなくて、中宮の召して、樂府を講ぜしめたまひし事、また、ことに、一條の帝の源氏を見そなはして、「日本紀に深き人なり」とのたまひしかば、人々皆日本紀の局とあだ名せしことなど、こちたくしるし續けたるは、いはゆる矛盾の書き樣にはあらずや、このいづれをか、彼の人の本性とはせむ、日記は、人に示さぬものなれば、心にまかせて思ふ事どもを、憚りなく書きたるものと思ふに、いよ〳〵心ゆかぬなり。されどこの日記を見もて行けば、當時の才女と世に聞ゆる和泉、式部、淸少納言などを、人にもあらぬやう罵りた

る條あり。いづれ〳〵も、よからぬさまに云ひなしつるが中に、清少納言は、殊に、嚴しく嘲りて「したり顔なれど、眞名書き散らしたるも醜し。その行末、いかて、善き事あらむ、」とまて書きつくしたる、前の愼み樣にくらべて、讀みゆくに、面赤む、心地するや」とのろ〳〵しう云へば、主人「さはのたまへど、この人の行の淸らさ、その頃の女流の汚しを離れて泥中の蓮とも、稱へつべきにあらずや。これには、宣ふ節もあるまじ。いかに」と云ふ。束髮の君、赤き面猶赤めて「行よしとは、御堂關白との事をのたまふにや。これも、日記には、「たゞならじとばかり叩く水鷄ゆゑあけなばいかにくやしからまし」と云ひて、夜來たるを歸したる事はあれど、その後は、いかなりけむ、蜻蛉日記にある、わざと戸を閉して久しく男を入れて、なげきつゝ獨寢る夜のあくる間はいかに久しきものとかは知ると、云ひたる類にはあらしか。ことに、關白の梅を折りて、好色ものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ」と云へるを見れば、良からぬ噂もありし事見るべし、爲章は、源氏の女にて、この人の理想のほどは知らるゝやう云へど、これも、いかゞあらむ。源氏は、人も知る如く、猥雜なる事多く、女も、今の世にては、いかにと思はるゝ人さはなり。かゝる女を理想として、寫せりとせば、この人の行のほども推し測らるゝにはあらずや。かゝる人を、女子



の鑑なりなど讃めたゝふる人々こそ心得ね」と、例の口速く云ひ放てば、主人あまりなる、御おとしめや。猶のたまはく、式部の源氏書きたる躬にて、陥ゐたりといはるゝ處を、君も免れたまふまじ。さるにても、この人の歌は、いかにおぼす。「廻りあひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな」は誰も惡しとはのたまふまじ。「世の中に何思はまし山ざくら花見るほどの心なりせば、もおとなしやかならずや。猶北へゆく雁の翼にことづてよ雲のうはがき書き絶えずして、」となかめたる風情、逢坂の鷄の音にもまさりてめでたく、侍らずやと、云へば、島田なるが「げに、歌の方にても、彼の人は、清少納言の上に立つべし。少納言は名だゝる、家の子なりと云へど、歌は痛う劣れり。例の負けじ魂にも、これには、困じ果てけり、と見えて、庚申の夜、伊周公の歌、詠ませたまふにも題をも取らず、强ひられて、歌よむといはれし、人の子なれば、をかしからぬ歌よみて、父の名を腐さむは面伏なりなど、逃れたるなど、見苦しからじやは。されど、「文の方は、めでたき限りをつくし侍り。枕草紙短かし、といふとも、長き源氏にもつゆ劣れりとは覺え侍らず」とてしたり顔になれば、銀杏返しなるが、「枕草紙よしとはいへど、源氏には、かけても及びがたく侍らむ、桐壺のあはなるを、初めて、須磨明石の趣多きより、夢の浮橋の餘情極まり無きにいたるまて、事の心の中は云はず、衣服の色あひ上中下の人の擧動四時のうつりかはり、山のたゝずまひ、水の流など、いと詳らかに書きつゞけて、目に見、耳に聞くらむやうなる筆つき、後の世いかならむ人出づとも繼ぎえむとも思ひ侍らず、今樣の金色夜叉などの類、めだたしとこそはいへ、いかで、このすぐれて美はしきには及びなむや」と云ふも、またしたり顔なり。主人「清紫の二人は、さて、おきたまへ。赤染衞門と、和泉式部とは、いかゞおぼす」と問へば、島田なる「赤染衞門は、げに、紫式部の云ひけむやうに、まことの歌人と覺え侍り、子の擧周が病めりし時、住吉の神に我身もて、これに代へしめたまへと祈りて其幣に「かはらむ

と祈る命は惜しからでさても別れむことぞかなしき」と書きつけたりしに、白髪の翁の取りて入りたまひぬなどいふこと、大方は、妄誕ならめど、猶、この歌には、心なき人も泣きぬべし。げに、紫式部の「萬もの事につけて詠み散らさねど、聞えたる限りは、はかなき折ふしの事も、それこそ恥かしき口つきに侍れと」云ひたるは、げにとこそ覺ゆれ。」と云へば、銀杏返のたまふ如く、當時の歌人は、此人なるべし。和泉赤染を並べては云へど、和泉はたゞ、口疾く詠み散らしたるばかりにて趣なけれど、此の方は、溫雅にした作りたる節なく、素直なるが中に品高きところあり、「紫の袖をつら



ねてきるかな春立つ事はこれぞうれし」また「數しらぬ濱の眞砂の年をへて君がかぞへむ世をぞ見るべき」など云へる口つき、税所敦子の刀自にも似たりや。殊に、榮花物語などいふ大部の書さへつくり出でし、と云へば、そが學才の程も知らるゝにあらずや」と云ふめざましき面色して聞き居たる束髮「赤染の歌さる、事と侍らむされど、その家集を見れば、未しきものいと多かり。溫順なるのみにて、新らしく、珍らしき節なくたゞふるき形によりて、古き思想を詠み出でたるのみ。これに較ぶれば、和泉は、こよなき歌仙とてそ云ふべけれ、見るところ、當るところ、悉くその歌の種ならぬは

なく、云ふもの、述ぶるもの、皆歌ならぬはなし、和泉式部物語を見たまへ。をりに觸れ事につけたるが、新らしくをかしき事限りなし。ことに、書寫の性空上人にとて「くらきより暗き道にぞ入りぬべき遙に照らせ山のはの月」といひ、また、小式部を失ひて「とゞめ置きて誰れをあはれと思ふらむ子はまさるらむ子はまさりけり」と云へるなど、いづれも哀深く打ち誦するに、何となう涙こぼるゝ心地し侍らずや。今又赤染は、榮花物語つくり出でしとやうに宣ひつれど、それは、藤原爲業とも傳へ侍り、例の安藤爲章は、赤染が此の書つくりたりとせば、その年の程、百才をも越えぬべし。さるほけ人の、いかで、かゝるもの作り得むやと、云へり。さるを、これを引きて、其人の光を添へむとしたまふこそ心得がたけれ、猶、赤染の歌は、和泉より優れりといふこと、古き歌談なる袋草紙にも見えて、鷹司殿の屛風の歌などことにめでたし。和泉の及ぶところにあらず」と良暹とやらむ法師の云へりきとか覺え侍り。さばれ、人は何にとも云へ。われはたゞ和泉をこそ、こよなき歌仙とは信じ侍れ」と云ふ。

主人「君ののたまふを聞けば、赤染は古く、和泉は新しければ、よしと定めたまふやうなり。あれば、奈良より八重櫻を奉りしを受けて、直ちに「今日九重ににほひぬるかな」と歌ひ出でし伊勢大輔も、また、曾て逢ひにし人に、「逢ふ事はこれやかぎりの度ならむ草の枕も霜枯れにけり」と詠みて遣りし馬内侍も古めきたりて、却けたまふらむ。されど、歌は人の心々のひくにつれて善惡の差別おのづから異なるものなれば必ずしも、これは新らしければ善し。彼れは古ければ惡しかやうに、きはやかに云ひ定め難からむかし、よし今よりは歌の方をば置きて、その人の境遇生涯などにてげにあはれと覺ゆる方をのみ宣へ。紫清などは、大方云ひ盡しぬ。この外にて思し染たまへるのたまへ」と云へば、嶋田「そは更科の日記つくりたる菅原孝標の女にて侍るべし。父の上總の介となれるに伴ひて、四歲にて都を出て東路の果よりもなほ奧つ方に生ひ立ちしも、はや物語めきて哀れなり。物語のいと見まほ

しくて等身の藥師佛造りて、手洗ひなどして、とく京に上して物語見せしめたまへ、と身を捨てゝ祈りき、と云ふも、また、いと趣あり。十三にて京に上らむとて見るに、毀ちわたしたる家に日頃念じつる藥師佛の霧りわたりたる夕日を受けて立たせたまへるがあはれなるに、思はず打ちたれるたり、など云ふも、また、哀に悲し。」と云ふ。銀杏返しも「げに、あはれな望みこの人にこそ京に上りても、源氏一の卷より、皆見せたまへ、と祈りきと云ふに執せるほども著しや。田舍より上りたる



叔母の土産にとて、源氏五十余卷櫃に入れて在中將遠君淺水などをも添へて送りたれば、いと〳〵喜びて人も交へす。几帳のうちに入り臥して引き出しては見つゝ、后の位も何かはせむ、とまで思ひ染みたる數奇心今に譬ふべき方なくなむ。かく物語にのみ心を染めし果はたゞ、いはゆる空想にのみ走りて、心は、常に、此世を立ち離れたりけむ。今の世にても、小說のみ好む人は、高くもあらぬ理想の影にのみあこがるゝものなり。心せてはあるべからず」とて束髮の方、ふと見遣れば思ひあ

たる節やあらむ、苦々しき面色なり、島田はそをは知らで、「さなり。さなり。孝標の女の、猫の來て鳴くも侍從大納言の女のなりたまひけるなりと定めまづ屢々夢の告を異として、あいな頼にかゝりしなど、皆物語に耽りしが故なり。」かく空想にのみ耽り、神經過敏といふらむやうに成りにたる人、いかで浮世に立ちて時めきえらるべき。源氏、祐子などの内親王に仕へ奉りたれど心に合ふこともなく、處々の神佛に詣づれど、さるべき効驗も見えず。父の官も進まず。また、任國も遠ければ從ひ行きて、海山の景色に心慰めむ術もなく、浮舟の君のやうに、山里に居て、よき男通はせむと思ひしことも、今は空しくなりにき。そが中にさばかり、心に染むとも見えざりしとさすが賴みとせし夫も死せければ、つくづくと獨眺めわびし心よ、げにいかばかり悲しかりけむ。久しう訪はざりし甥の夜來たるに、月も出でゝ暗にくれたる姨捨に何とて今宵尋ね來つらむと云ひ出でしなど、讀みもて行くに、淚のみこぼるゝや。王朝の才女あまたあれども、その日記を見て、かばかり、あはれと思ひ染まるゝはなと侍る」と云へば、皆打ちうなづく。たゞ束髮のみは「のたまふ如く孝標の女もあはれなれど猶あはれなるは、平家物語などに出でたる女にこそあれ。建禮門院など尊とき御身ながら、西海の波にも沈み、大原山の嵐にも吹かれたまひしは、いかばかりの心地せしたまひけむ。これらの身位高きは小督、卑きは有子など數多ありぬべし。さると、あはれは孝標の女にのみ限りたるやうのたまふは受けられぬ心地し侍る。」と云ひ出づるよ主人「その論は、來し夜にしたまへ。稚兒髷の君は、とく夢に入りたまへるに」といふ。人々打ち驚きて、「雨夜ならねど、長々しき品定や。いざ骨牌取り收めて籠りいて侍らむ」とて彼方此方掻集むるほど主人「見たまへ。有明の月も待ち出でしはや」と云ふに、人々見かへれば、窓の障子あかうなりて、長月ならねど、高うさし上りたりけらし。

富士山　　下野　[illegible]子

朝日かげてりそふ富士の神山に
み雪かゝやき田鶴ぞ舞ふなる

娯楽

春の慰み 算術卜ひ

辻の翁

初春の遊びは、外では追羽子、内では歌留多、さて双六にも飽て何か面白き慰みはと求め給ふ時あらば、身の上の吉凶判斷新案算術卜ひを試み給へ、當るも八卦、當らぬも八卦、妙な易が出る處がお笑の種、二十世紀の御婦人には、最早三世相を信じ給ふお方はこれあるまじ、根據なき作り事に心を悩ますは愚の極み。爰に記す算術卜ひは、小生大いに所論あれど、お正月に理屈は禁物、唯々其方法だけを御傳授申すべし。

用ふる道具は榧か勝栗、最も適當なるは豆の類、大豆でも小豆でも豌豆でも可、乃至碁石でも、一度に數多く掌に掴めるものなれば、何でも手近にあるものにて結構。

さて、其仕方は、道具には豆を用ふるとして、其處へ五合か一升ほどあけて置いて、それを無意識に、自分が好むほど掴み、其數を調べて、其中から九粒づゝ數へては除け、數へては除け、遂に九が缺けなくなつて、八粒以下になつた時、其數に依つて判斷を行ふなり。之が即ち八卦の八卦たる處！

處で、一粒餘れば艮爲山の卦、二粒餘れば巽爲風の卦、三粒餘れば乾爲天の卦、四粒餘れば兌爲澤の卦、五粒は震爲雷、六粒は坤爲地、七粒は坎爲水、八粒は離爲火と云ふ卦になるので、餘りが無ければ其お方は大勝利、大圓滿、福々長者にお成りなさると、マア易の面では云ひますので。

次に示すのは即ち此判斷書、之に據つて一年乃至一生の吉凶をトふ、春の慰みには之に限つてよと、何處やらのお孃様が申されし。

(1) ☶ 艮爲山の卦

一粒の時は、暫らくは動かざる象なれば、急がず焦か

ず物事を定むれば吉、短氣は損氣なり、萬事人の說を聞いて、じり／＼に事を定むべし。
緣談取極めて吉▲願ひごとは扣へ目にすれば成就すべし▲待人來らず▲失物出でず▲旅行はよろしからず。▲產は重し男。
併し山の卦ゆゑ、先づ安泰と知るべし。

(2) ☴ 巽爲風の卦

二粒の時は、ふは／＼と動き定らざる象なれば、萬事變り易く、身も心も定らず、迷ふのは道理なれど、それに堪ゆれば次第々々に吉となるゆゑ、辛棒が肝要なり。
緣談變り易し▲願ひごとは長びけども末に叶ふ▲待人も來るゆゑ氣長く待つべし▲失物目つからず▲旅行も遲し▲產も餘り輕い方で無し女。
風の卦ゆゑ、吹き止む時節を待つが第一なり。

(8) ☰ 乾爲天の卦

三粒の時は、定まつて居ながらも眼の前にいろ／＼と心配ある象なれば、扣へ目にさへして居れば吉なり。焦ればとて其心配は除くものにあらず、もと／＼定つて居るものゆゑ、氣長く心を大きく持つべし。
緣談遠からず定るべし▲願ひごとも苦勞ありて叶ふべし▲待人は來らず▲失物は在所判明し▲旅行は當分よろしからず▲產は重し男。
天の卦ゆゑ大したものなり。併し天にも叢雲などの邪魔あれば、一時は苦勞あれど、遂には定まると知るべし。

(3) ☱ 兌爲澤の卦

四粒の時は、喜びの中に、またいろ／＼と苦勞事の起る象なれば、物事總べて疎略に取扱はず、沈着に處理するが肝要なり、他人のことに口出しなどすると損あり、我身一つを大切に守るべし。
緣談は吉▲願ひごとは人に爭ひさへせねば成就すべし▲待人來るとの便りあり▲失物は分らず▲旅行は注意せぬと間違ひ起るべし▲產は輕し女。
もと／＼澤の卦ゆゑ、餘り深い望みは叶はぬか知らぬが、水草と樂しむ位なお樂しみは確にあるべし。

(5) ☳☳ 震爲雷の卦

五粒の時は、成立の強い象ゆゑ、用心が第一なり、若し少しでも油斷あるときは、飛んでもなきことが起るべし。併し運は充分に向つて來て居る卦なれば、心を堅固にもつて、定まる時節を待つべきなり。

緣談は當分定らず▲願ひごとは成就▲待人來る▲失物は分るが後を用心すべし▲旅行は途中に變事あり出產は重し男。

雷の卦ゆゑ、用心せぬと奈落るのも疾ければ、お臍の仕末が肝要々々。

(6) ☷☷ 坤爲地の卦



六粒の時は、兎角後戻りしたがる象なれば、餘り急かず、着々と進み行くべし。辛棒さへ仕遂げれば大吉となる。

緣談確と取極めて吉▲願ひごとは先づ叶はず▲待人は來るも遲く▲失物は判明せず▲旅行は同伴あれば差支へなけれど一人旅は凶▲產は餘り輕くなし女。

地の卦ゆゑ、末々は大丈夫なれど、差當りいろ／＼の行路難あるは致し方なし。

(7) ☵☵ 坎爲水の卦

七粒の時は、深入りしては凶となる象なれば、總べて

人を力に進むべし。自分一人で萬事扱はふとすれば間違事起ると知れ。

縁談善からず惡しからず先づ中吉▲願ひごと駄目▲待人は途中まで來て來らず▲失物出でず▲旅行は差支へ無けれど船には乘るべからず▲産は輕し女。但し産後を注意すべし。

根が浮氣の水の卦ゆゑ、愼みが肝要なり、外面のみ見て深入りすべからず、

(8) ☲ 離爲火の卦

八粒の時は、壞破主義の象なれば、よく〱其身を注意して、忘れても人と爭ふことなどあるべからず。お婦人方は殊に、一つ間違ふと住居に離るゝやうなこともありと知るべし。

縁談見合すべし▲願ひごとは注意して行へ▲待人は來らず▲失物は分らず▲旅行は途中で變事あるべし▲産は重し女。

火の卦ゆゑ、此易が出たお方は御用心が專一、左なくば萬事破滅の基となるべし。やれ〱お氣の毒なことゝ

かるた遊び

松の門

正月の遊戯は歌がるた、双六、トランプ福笑ひなどいろ〱ありますが、いづれも興淺くして、乙女のあそびに適ませんが、花かるたに至つては、仕方にさま〱の手ありて興味ふかく、千變萬化して極りのないものでありますが、唯谷間にて賭博に用ひられしより高尚なる家庭の遊びとしては聊か憚かられて居た氣味もありました。けれど單に遊戯としてはこの位おもしろきものはありません、依ていさゝか其仕方をお娛樂に供しませうそも〱かるたといふは、遊戯に用ふる紙製の札にして、歌がるた。伊呂波がるた。花がるた等種々あり、其の他詩がるたと云ひ。發句がるたと云ひ。豚骨牌と云ひ。妖怪がるたと云ひ。軍がるたと云ひ一々枚擧せば其類百を以て數ふべし、いづれも千篇一律の制にして、其採り方に格別の變化なく、興味もまた甚だ深からず、ひとり花がるたに至りては最も變

化多くして、且つ興味あれば、其使用法は概略を示すべし、尤も此戯は彼の法官弄花事件以來、何となく人の感情にも奇異なる刺衝を與ふるに至れり、されば女子などの戯には、少しく斟酌すべきなれども、賭博にさへ用ひざれば家庭の娯樂として強ち不適當にあらじ。

▲起源　かるたは長崎にて天正年間和蘭人の玩びしより其他の人見倣ひて流行したるは寛永の頃よりとなり、「かるた」は元と西班牙語にて紙又は牌の義なりと爾來種々の「かるた」あるに至れりと云ふ。

△分配作法　組、花骨牌の數は十二個月に分ちて、毎月四枚、



都合四十八枚あり、之れを使用するには、一組三人を法とす、又人數多きときは、或は四人を以て一組とすることあり、されど大抵四人以上なれば、三人一組にして、相應の牌數を四人乃至五人に別ち、其内何人か休み、殘り三人にて勝負するを常とす、之を退といふ、即ち其分配法左の如し。

場（中央なり）六枚　手（各競技者）各七枚　三人一組。場八枚　手　各五枚　四人一組。退を定めて三人殘るときには何の組にても皆三人一組の分配法によるべし。

親定　組已に定まるときは親定をなす、親定は殘りたる牌の内

より、各一枚宛抽きとりて、其點數の最も多きものを親となして打出すなり、但し右抽きとりたる牌は、再び殘り牌の内に混じ、親より次席のものに渡し、次席のもの之を上下置きかへて、不正手段の行はれざるやう點檢す、之を「のぞむ」といふ。

示談　若し退けの番に當りたるもの手の好き時は、退の番にあらずして手のよきものと示談を遂げ、代りて出づ可し、其示談點數は一定の則なければ、其席にて豫め定むるを法とす。

交換　もし分配されたる手中の牌に、同じ月の札四枚あるときは、之を交換することを得、但し其交換をなすには、一應親に相談して、殘牌の中より四枚もらひうくべし。

點數規定　點數計算、其點數は總計二百六十四にして、三人なれば一人八十四點、四人なれば六十六點を標準とす、之に超えたるものを勝とし、足らざるものを負とす、たとへば三人にて九十八點と八十九點と七十七點とになれば、十八點のものは十點の勝、八十九點のものは一點の勝、七十七點のものは十一點の負とす。

牌の等級　花骨牌の點數は各牌同じからず、其上下差別は左の如し。

二十點。鶴。銀櫻、月。道風。銀桐。但道風は「ふけ」の時には無點に用ひたる特權あるものとす。

十點。鶯。時鳥。八橋。蝶。猪。盃。鹿。雁。尾長。

五點。短冊。一點は糟牌とす。

役　役に手役と、出來役との二種あり、手役とは、分配したるとき、其手中にある牌の模樣によりて、種々の等差あるものなるが、此は初心者のよく合點し得べきにあらざれば云はず、單に出來役のみを說明すべし、出來役とは各取り終りたる後に於て左の組合の牌を得れば、他の者より規定の牌を徵集するを得可き特權を生ずるものにて左の如し。

▲裏菅原――鶴。銀櫻。鶯。即ち梅松櫻三枚を揃へて得る時は各十五點宛を對手の二人より徵集するを得可し。

▲表菅原――梅松櫻の短冊三枚を揃へて取れば各二十

點宛を徴集するを得べし。
▲靑短　牡丹。楓。菊。短冊（紫短冊）三枚を揃へて取り得れば各二十點宛を徴集することを得べし。
▲三光――鶴、月。銀桐。の三枚を揃へて取るを云ふにて各十五點宛を徴集するを得るなり。
▲四光――鶴、鐵櫻。銀桐。月の四枚を揃へて取りたるときは對手より十五點宛を徴集するなり。
▲五光――又雨人四光といふ。前の四枚外に道風一枚を取り足して得たるときは各二十點宛を徴集することを得るなり。
▲五短――赤色の短冊五枚を取り得たるものは各十點宛を徴集することを得るなり。
▲七冊――同七枚を取得たるものは各十點宛を徴集することを得るなり。



▲月見――菊盃と月とを取り揃へ得るを云ふ。但し時雨の牌一枚たりとも手にあれば、雨降りといひて無効なり、月見は各五點宛を徴集するの特權あり。
▲花見――菊盃と銀櫻と取揃へ得たるものは各五點宛を徴集することを得るなり。但し雨降りの制限は月日と同じ。
▲忠臣蔵――道風と猪とを取得たるものをいふ。各五點を徴集することを得るなり。

▲正月——鶴と菊盃とを取り得たるものは各五點宛を徵集するの特權あり。

▲大島——鶴と雁と二枚を取揃へたるものをいふ。特權前と同じ。

▲小鳥——鶯、時鳥、尾長。の三枚を取り揃へたるものを云ふ。特權前に同じ。

▲鶯宿梅——又春雨と云ふ。道風と鶯と取り揃へたるものを云ふ。特權前に同じ。

▲有明——又「つきほど」とも云ふ。月と時鳥とを取り揃へたるものにて特權前に同じ。

▲入橋——道風と入橋と取り揃へたるものを云ふ。特權前に同じ。

▲梅月——月と鶯と取り揃へたるを云ふ。特權前の如し。

▲月役——番毎に月を定め、一月の番に松を四枚二月の番に梅を四枚と云ふ如く、悉皆其月の牌四枚を取り揃へたるものを云ふ。特權は各十點を徵集するものなりとす。

▲中梅——三人の中中なる番のもの梅の牌四枚を取り揃へ得たるを云ふ。特權前に同じ。

▲ふけ——何人にても牌數にて六枚以下點數十六點以下を取り得たるものは「ふけ」と云ひて、對手の內如何なる善き役を作るも皆無効に歸せしむ。而して一番の勝負を無計算にせしむる特權あるなり。

○取方　其取方は、(三人と假定し)先づ場に六枚を開きおき、他は殘らず之を伏せおく、かくて親番に當れるもの、場にならべると、手にある牌と合ひたるものの一枚を打ちて、更に伏せたる牌一枚をまくり見て、若しまくり見て出でたる牌に、場にある牌と合ふものあれば之を取る。次に中はまた親の如くし、末亦之に倣ふて中の如くす、合牌とは譬へば梅と梅、松と松と云ふ如く、同じ月の牌を云ふなり、而して此取り方の間に種々の權謀術數を行ひ、隨つて種々の秘訣あれども煩はしければ略す。

東京の正月

おむら

松の緑濃やかに緋飾かけたる姿は、我等日本人の爲には、新年、平和の標號なり、古年送りて、新玉の新衣を着たる新しき心の標號なり、我れ等が門松の間に立て御目出度をいふ時は、其處に伯父樣、伯母樣、兄樣姉樣、花ちやん、みいちやん、の優しき言語取換されて其處に同人種の感情は、無意無識の間に感通するなり、斯て同情と、懇親を生じ、言ふべからざる溫みを起して、新しき愉快は感ぜらるゝなり、若夫れ門頭の禮者にあらで、座敷に通る程の間柄に至りては、其懇情は一層深かるべし、先づ一家の主婦たる人は、年始客の爲とて去歲よりの心構へ、兼て奇麗に灰を篩ひ置る火鉢には、寒き折なればとて、今朝より切炭を積て火を起し、室內を溫め置も、客歓待の心なるべし。斯て客有れば、お手をおかざしなさいとて先づ之を勸め、次に暮の內用意せる、ごまめ、數の子、煮豆、勝栗など入し重詰取出して、雜煮とお祝し斗ですがと言て、鶴龜の盃に屠蘇波々と注て勸むるも、少しは我家の用意整へるを自慢心なるべし、客も其歓待を喜びて之を受け、一ツ二ツ重ぬる中心も自づからくつろぎて、お互に親しかりし懇しき昔の記憶など語り出るに及びては神聖なる幼稚の時代など想出されて、主客共に若返りたる心地、新酒の微醺と共に新年の愉快を感ずるなるべし。

△令夫人

令夫人、年頃四十五六、まだお召替遊ばさぬ朝の中、今化粧を終りて夫人の室へ入來りし年頃十七八の令孃を顧みて、梅子樣、お作が出來た歟へ、大層よく出來ました。其薔薇の插込の好い事、恰て實物の樣で、今にも匂ふ歟と思はれるよ、其でお早く衣服を着替てお仕舞ひなさい、これ竹や、梅子が着物を着改るといふから、お前も一寸來て手傳ておくれ、と言ながら夫人は令孃を伴ふて室へゆく、斯て衣服を着替たまふ、其間夫人は或は差圖しつ、或は手傳ひつ、帶の如きは二

三度締直しさへさせたまふ、斯て令孃の盛裝終るや、夫人はつく〴〵と其姿を眺めて、さも滿足したものゝ如く莞爾としたまふ、蓋し夫人の爲には、自己が盛裝したるよりも、娘の盛裝を見るが樂しきなるべし、下女の竹も莞爾とし、眞成にお孃樣は御器量が良から、御召替遊ばすとズッと引立て見えます事と、言ながらも其目は羨望に堪ぬものゝ如し、令孃も賞られて嬉しく、其間に夫人は傍の新しいショウルを手に取擧て見つゝ、一寸梅子や、まあ是を懸て御覽なさい、ほんに能似合ひます、父上樣が戰時の事だから、古いので間に合せて置と被仰つたのを、母樣が漸と口說て買て戴いたので、さあ〳〵と促し玉ふ、此方には男の兒が書生に手傳はせて洋服を着て居る、二人は新しき靴足袋を穿き、新しき帽子を被りて、學校へゆくのが樂しきなるべし、常に優りていそ〳〵とした風采身に溢れて見ゆ、夫人は兄弟二人が健やか氣に生長ち、二人揃の衣服を着て、今しも元氣よく學校へ出往のを、未來の望長き樣に感じつゝ、我身夫婦が行末の杖柱ともなる者達よと思ひつゝ、其元旦の學校行を祝福せるなるべし、斯て子供等の皆出行る後、夫人は奧座敷へ來て、嗚呼忙しい、漸と是でまあ安心した、さあ今度は私の召替歟、別に着替るには及ばないのだ、けれど誰歟又御年始に來ると不可いから、着替て仕舞ひませう、とて衣服を着替たまふ、されど午前は一人二人の年始客有るのみ、他は皆玄關へ名刺を置て歸り去るが多し、午後に至りては流石に親戚朋友などの座敷へ通りて、年始を演る者も有れば、夫人も自ら出て、酒を勸め、料理を供するなど、心使せらるゝ事なるべし、斯る間に元日も空しく暮て、夜となれば、子供等の朋友の集り來て、牌札やトランプの催しあるに、又其々と指圖やら、挨拶やらで夫人の心の休まる事は少かるべし。

△令孃

令孃、扨先の令孃は如何にしたまふ歟といふに、定紋付高臺の車に乘て我家を出たまふに、天氣は好し、車は早し、其心地好さは如何計なるらん、風は少し寒けれど、若やかなる血の身内を廻りて溫なれば、櫻色の

頰を風の稍冷かに吹てゆくも憎からず、我身の盛裝に滿足しつゝ、往違ふ他の令孃や女學生の姿など見るに孰れも我裝に劣るに愈滿足しつゝ、今宵某令孃方のカルタ會に招れつゝ有る事など思ひ出るなるべし、カルタ會と言ば、去歳の正月、某家の若殿に面會したる其よ、威有て猛からぬ御風采、活潑の御性質と見奉りしが、今宵も來給へば宜がなど思ひつゞくる中、其若殿の姿が、彼女の記憶の中に現々と呼返さるるなるべし、斯る間に車は其志ざす方の門前へと近附く、折しも彼方より走來る一輛の車有り、車上の主を見れば、是なん令孃の御學友にて、其御召物を見たてまつるに、今日を晴と盛裝を凝したまへる姿、美しからぬに有らねど、去りとて我に優りたりとも見えず、孰れ劣らぬ梅櫻、互に貌を見合せて莞爾、お目出度ございますと共に車を降り、昨夜より今朝の事など簡單に語り合ひつ、即て打連立て、新年の壽申さん爲め尊き師の君の御許へと參りたまふ。

△女先生

女教育家、年の頃、五十五六、先の年夫に別れてより今は刀自と云はるゝ御身、學は和漢洋の三つを兼ね、世の經驗も積みて、何事にも注意深く、他人にも深切にて、品性の高きは世の賞讃する處、某學校の主幹にして、兼て、某會の幹事とも聞えて、なか〳〵に勢力有る御方と知るべし、月給も婦人としては可成に取給へど、まだ嫁入せぬ令孃も有り、又修業中の令息も有る事とて、種々の御物入多ければ、生計は餘り豐なりとは見奉り難し、去れば刀自の爲には大晦日はなか〳〵の苦しみにて、人知れぬ心配したまふ事多し、遮莫其等の心配も昨日の中に片附きたれば、今日は氣も悠然とした心地、令息及び令孃と共に、心斗の祝酒を酌み雜煮を祝ふて、後片付を下女にさせ、其身は南側の小座敷に障子越の日を受て、年始狀の書殘を認めたまふ折しも、玄關に訪づるゝ人の氣色して、下女取次に出るよと覺えしが、即て持來る女名刺を見れば我學校の弟子なる、二人の令孃なるに、まづお座敷へと通し新年の祝賀を演たまふ、即て重詰など開て、配

し斗に屠蘇を勸め、尙四方山の物語に打つくろぎたまふ、其間も流石に敎子の薫陶を忘れたまはず、二人の令孃を戒めて言ふ樣、我々も新年に遇ふて、斯く新衣を着侍れど、若身にのみ新衣を着て、心に新衣を着ねならば、其は無意味の業に侍らずや蓋し心に新衣を着るとは、年の初に古年の古き非が事など悔改めて、新に心を入替へ、新しき心もて新しき年を迎ふるをこそ言ふならめ、斯ありてこそ新年も眞に目出度きものに侍らずや、御二人も其心して心に新衣を着たまへかし又今年は我國も大敵を前に控へて、國運も延る歟縮まる歟、實に大事の戰をして居る時なれば、御二人も餘計な浪費をしたまふな、去る浪費の金あらば、其金をもて毛糸でも購ひ、出征兵士の爲に、靴足袋でも編て寄附したまふてこそ宜らめなど敎へたまふ、斯て二人の令孃のまだ歸り去らぬ中、尙數多の令孃が入替り立替り、師の君へ年賀を申さばやとて來るにぞ、刀自は忽ち花の如き若やかなる無數の令孃にて圍まる、其有樣恰も子供夥多持る母親の如し、刀自の滿足想ひやらるかし。

△女學生

女學生、正月の最も樂しき時代は花は蕾人は靑春二八の年頃なるべし。其頃はまだ親がゝり、生活の苦勞も有らねば、正月は一月も前より待たるものなり取別女學生は、學校も短期ながら休業となれば、他の同年頃の娘に優りて樂しかるべし、其も父母東京に住みて、我家より學校へ通ふ者は、他の乙女と左のみ變る事も無らんが、遙々故鄕の地を離れて都へ來り、親類の家と歟、懇意の家と歟、若くは寄宿舍杯へ寄遇して修業しつゝ有る者の爲には、如何に東京の正月の愉快なるべき歟、彼等の爲には目に入るもの一ツとして新しからざるはなし、芝、上野、日比谷、淺草の公園は勿論、往路の松飾、綺羅を飾りて往來する都人士の風俗二日の日の初荷、八日の觀兵式、尙元旦には禁闕の邊百官の威儀を正して大內山參殿する姿の、如何に眩ゆき斗の盛裝なるべき歟、是等を見るさへ珍らかなるべきに。

△娘

さて又娘連の樂しみとしては劇場あり、寄席あり、種々の見世物興行あるべければ、彼等の淡々しき經驗なき目には、如何に東京の正月が樂しかるべき、蓋し彼等の心に起る可愛らしき問題は、第一が身の飾なるべし、即ち正月の晴着、髪飾、肩掛、下駄の類なり、さて是等の問題の解決せらるゝや、第二に起り來る問題は、羽子板の新調、かるた會の催、演劇見物の許可などなるべし、されど此は、皆父母の都合に因て定まる事なれば、其好結果を得ん爲には、恐らく娘政畧を要する事ならん、即ち始め先づ徐々と母を口說き落し、母既に承諾する以上は、母をして父を口說かしむるといふ政畧にして、此可愛らしき娘政略は、最も廣く娘連の間に應用せらるゝと歟、彼等既に年內此政略の妙用に因て、滿足に第二の問題をも解決し得たるべければ、正月に入りては早心に懸るの雲もなく、只々愉快に遊ぶの外用なきなるべし、斯て東京の市中公園、勸工場、寄席劇場、諸種の興行場は、島田銀杏がへし桃割の小天女が、翩々として袂を飜すの處となるなり。

都下雜聞

◎津田女史の英學塾を始め其他の女學校では恤兵部へ寄贈するつもりてスコッチの靴下を製造中てあるが、先日七百足だけ作り上げて差出したそうな。

◎この靴下一人前十四オンスの原料で、代價につもつて二十五錢だそうてす、手數は生徒が勉學の餘暇で編むのですから、せめて原料だけても義捐して戴きたいものです。

◎芝三田四國町なる月桂裁縫學校では毎月一回科外講演會を催し麻布の東洋英和女學校長ハーグレー女史を聘して修身講話を開演し父兄にも聽講を許す相な。

◎東京英和女學校と云ふは都下有數の宗教學校で校規頗る嚴肅、寄宿舍の管理も餘程嚴重だ相だ、生徒をして卒業後一年間指命の地に奉職させる如き確に一異彩だ。

◎同校長ハーグレー女史は是亦仲々の凡帳面家で而も温厚の質、此程松方伯の令孃が家庭の都合上寄宿を辭して通學生と成り度と由し出てた所、頑として曰く、

◎當校は寄宿生幾人通學生幾人と校則上堅く定めてあれば

中途で是を變更されては校規の紊亂を來す甚だ迷惑ですとて斷然請求を斥けた由教育界近頃の美談。

◎我國が多年善鄰の誘導に努めた結果支那學生の渡來するは喜ぶ可き事だ此頃來たのに李玄といふ少女がある芳紀は十七才、成績も良好で末頼もしとの噂。

◎倫敦で評判の高い女優がその得意の劇を演ずる時に着た衣裳は無數のダイヤモンドを鏤めたもので代價卅萬圓であるそうな、であるから平常貴重品として銀行の倉に保存してあるそうな。

◎流行もいろ〳〵あるが、この年末年首にかけての繪端書の流行ほど盛なものはあるまい、この流行の一ツは軍隊慰問用といふのが動機であつたかも知れぬ。

◎繪ハガキ界を見渡すと軍隊慰問用が一番多いが、家庭向、青年向も又中々で新案を凝らしたものが續々と顯はれる、中に就て、

◎妻戀坂の便利堂から出た家庭向繪ハガキは年方一派の合作で圖柄の優美、鮮麗なるはいふまでもなく紙質の上等は他に類が尠からう

◎又表神保町の浪花屋からも「海老茶袴」と題する繪葉書を賣出した是は女學校の敎場や裁縫室や運動場や自轉車練習等を寫した物で一寸好い思付。

◎繪葉書に對する時代嗜好は蝦茶を畫た物を愛して多く捌る相なが是は容易に寫眞を得られぬ故藝者に袴を着せ女學生風に仕立るのだと左う聞いては難有くない。

◎出征軍人家族慰問婦人會より戰死者の遺族へ慰問として贈る水色の大袱紗には次の和歌が黑く染拔てある曰く「日の本の御旗の下に武夫の道の栞と散る櫻花」

◎又た負傷者の家族へ贈る分は青文字で、「御國のみたてとなりて傷つきし君が功勳を誰れかあふがぬ」と認めてある、此際婦人の同情は家族に取て無上の慰藉。

◎救世軍で一職業婦を救濟して正業に就かせて居るが、今度又愛國隊といふのを設けて貧民窟の遊んで居る者に內職の世話をもし出征軍人を慰問すると。

◎幼稚園といふものは月謝が高いので中等以下の家庭では小供を出し切れないので自然と入園が少いが近頃保姆の中で小供に菓子を與へて親達の歡心を買ふのがあるそうなこれは餘程考ふべき事である。

◎鮭と鱈は冬季の好菜である、併しまだ料理法が一般に拙であるから切角の好物も臺なしにするのであるが、吸物の昆布鱈、つゝ切の煮附骨ぐるみの甘露煮の外。

◎鱈豆腐といふのは新案であるそうな、これは鱈を豆腐と一つ鍋に煮込み、煮やつことして鱈から出る鹽氣が豆腐に浸込むを度として食べるのである、すると鱈はあつさりとして至つてをいしい。

◎近頃婦人社會殊に女學生社會に眼鏡を用ゐる者あるより早晩流行を來さんとて都下の眼鏡業者は逸早く茲に目を着け婦人專用の優美物を製作せんと目下考案中の由。

詞藻



尾上柴舟撰

〔天〕富士山　　美作國眞庭郡一宮村　池田よし子

さくら貝拾つかれて砂にねて
　小松が末のふじの山みる

評、春暖き海邊の砂に臥して磯松がくれの富士を見る人、げにいかばかり麗しからむ、やさしからむ。

〔地〕對陣　　香川縣仲多度郡よしの　有信せき子

軍使行きぬ戰今宵小止みなり
　銃を枕に國の夢見む

評、強弩又強弩、疲れたる身は綿の如し、戰の小止むを待ちてしばし故郷の夢に耽らむかな。陣中の苦一に何ぞ此の如き。

〔人〕爐邊新年　　本郷區湯島新花町八九富方　草間瑞枝

みいくさに召されし孫のいさをしに
　とその香うれしうつみびのもと

評、昨夜報あり、兒の勝戰狀鍬爽の鍬をうくと、老親驚喜、手の舞ひ足のふむ處を知らず、今朝の屠蘇酒香高きことまた當に倍す。

秀逸

、、、〇對陣　　出雲八束郡秋鹿村高等小學校内　小林はる子

土窟に年を迎へて銃とりて
　敵まち居れば雪高う降る

、、、〇富士山　　埼玉縣川越久保町　松本しげ子

大神がいましめの炎は冷えたれど
　富士はとこしへ雪こもる山

、、、〇富士山　　弘前市茂森町　菅なか子

南椽に富士指さしてほゝゑめる
　男の見二つの春の美しき

、、、〇爐邊新年　　大阪東區清水谷西之町五七二　波多きく子

富士の軸床にかゝげィ爐によれば
　またあたらしき松風の音

、、、〇對　陣　　名古屋市南鍛冶屋町八十五番戸　玉村多歌子

ものみにと部下の二人を出しやりて
　あかずもかげを見る夕かな

、、、〇富士山　　三重縣津市櫻ノ下後藤新四郎方　前田美子

紫よ紅よ眞白よ朝日うけて
　夢さながらの雪の大富士

、、、〇富士山　　大阪西區新町通三丁目　山中ます子

あふぎみてたかしとかたる君の葉も
　いく世つもれるふしの白雪

、、、〇對　陣　　長崎鍛冶屋町二二　森山千代子

寒き星うつる大江の東西
　かはす軍馬の聲あはれなり

、、、〇對　陣　　越後糸魚川町　玉井よし子

戰機待つ渾河の夜營靄として
　胡笛に冴ゆる冬の夜の月

、、、〇富士山　　信州岩村田町　田中みつ

彩雲の三片二ひらはれのこり
　ほの〳〵あくる富士の神山

、、、〇對　陣　　石見國邇摩郡靜間村　宮内登美子

勇み立つ心の駒もひきとめて
　仇守りくらす塹壕の內

、、、〇富士山　　富山市旅籠町　富山久還子

東海の天をさゝふる富士の山
　富士の裾野のやまと島國

、、、〇富士山　　熊本市南千反畑町四一　安田文子

天津姬冬の宮居やよそふらむ
　日にけに白しふしの神山

、、、〇對　陣　　大阪東區淸水谷西之町五七二　芙蓉

穴に伏して戰（いくさ）まちまつもの丶ふの
　帽の上白う雪ふりしきる

、、、〇富士山　　小倉市西紫村九餘舍宅石井方　山本房子

天地の神やかためし萬世に
　ゆるぐべからぬ富士の大岳

、、、〇對　陣　　麹町區五番町十四加藤家與　神谷よし子

うち出てん日をのみまつと語りあふ
　沙河の陣營吹雪に暮るゝ

、、、〇對　陣　　駿河富士郡大宮町東町　龍野波子

水一重陣地をさかふ芝堤
　敵の步哨に手眞似して見る

、、、〇富士山　　岩見國邇摩郡靜間村　宮内登美子

姬神の大み姿を其まゝに
　天そゝりたつ雪の富士のね

、、、〇爐邊新年　大阪東區淸水谷西之丁五七二　波多きく子
壯男をいくさにやりて新年を
孫とかたらふゐろり火の下

、、、〇富士山　近江國栗太郡山田尋常高等小學校內　大木白帆
背と二人今朝初旅の汽車の窓に
見つるもうれし富士の白雪

、、、〇爐邊新年　山梨縣東山梨郡日下部村雨宮方　花縣きみ子
祝ひ來し兄弟三人爐のもとに
翁が昔の物語聞く

、、、〇對　陣　信濃上水內郡小川村　楠　つ　め
矢とはしる傳騎に明日ぞしのばるゝ
二月相峙する渾河のほとり

、、、〇對　陣　豐前國門司市濱月町二丁目　長田節子
波氷る沙河の大川前にして
敵をまちつゝ年を迎ふる

、、、〇富士山　き　み　子
さしわたるはつ日の影にふしのねの
雪の光もあらたまりぬる

、、、〇富士山　大阪四區新町三丁目　山中富子
わすれては土よりなりしふしの根を
くも非の物とおもひけるかな

、、、〇富士山　岡山市四中山下五二　橋本芳子
打なびく霞の上に見ゆるかな
紫匂ふ富士の神山

佳　調

（富士山、爐邊新年、對陣）

百萬の銀鞍動かず敵として露足はやし沙河の大野ら　●　陸中　河野幸子

月の前に劍捧てつゝうそぶけば木がらしさえて驟たばしろ　●　東京　染野かすみ

明け渡るうすむらさきの大そらにかすみて匂ふゆきのふじのれ　●　備中　河崎歌子

神代より降り重なりて重なりて光りいやます富士の白雪　●　備後　杉田淑子

たらちれのたかき惠にくらぶれは富士の高根も低なりけり　●　美濃　杉山清子

餅煮る榾朶の烟の色淡し新年祝ふ山賤の家　●　門司　長田節子

折々は味方うかゝふ影みえて霜にあけ行く沙河の大原　●　伊勢　佐々木らく子

ゆたかなる年のはしめを思ふとちかたらひかはす埋火のもと　●　美濃　梅田正子

ふしの嶺の雪くれなゐににほふなりいまや朝日の海をいつらむ　●　大阪　岡益子

● 前嗜のつゝ育すこくひとくかな沙河のほとりの夕暗の空　大隅　馬場昌子

● 富士のねにのほる初日ををろがみて今朝幸多きとしを迎へぬ　磐城　鈴木玉子

● 吾妻路をふみ見ぬ家は萬繪にみるも床しき不盡の神山　石見　宮内登美子

● 神代よりふりつぎにけん白妙の雪もてかざる富士のしば山　宇都宮　廣瀨しげ子

● あすを期する對陣十里風あれて戰雲低く日はくれそめぬ　下谷　遠藤貞子

● 仰ぎ見る富士の高嶺のいや高き心をおのが心ともかな　茨城　檜山美枝子

● あけの月に仰ぐ紫金の雲の上にあらはれそめぬ富士の白雪　信濃　高松蝶子

● 諸共とちかひし友をしのびつゝ胸にむちうつ沙河の川岸　大阪　波多きく子

● 討死の孫の勳章飾りつゝ老翁は爐に年を迎ふる　信州　小出春江

● 戰やみて敵しりぞきて賞讃れて夕もや淡し沙河の河づら　姫路　毛呂まさじ

● 朝霧は初日のかげに消えそめてけさあたらしき富士の神山　大阪　波多きく子

● ふしのねにいづる初日や富士のやまと男子をまづ照らすらむ　遠江　比奈地錦子

● しろたへの雪の冠(かうぶり)雲の帶みそらに立たす富士の大神　播磨　木村まさ

● ますらをがたてしいさをは日の本のふしの高嶺もなにならなくに　遠江　比奈地錦子

● としほぎに來る人もなき大雪に獨りかゝゆる桐の火桶や　岡山　行森奥

● 雲の上に立ちます富士の姫神のむかふ鏡は田子の浦波　筑前　北澤ゑつ

● 千早振神代ながらの雪のいろも今朝新しく見ゆる富士のね　大阪　小泉慶子

● おばしまに羽子の手止めて妹と初日かげさす富士の山見る　大阪　竹中房子

● 希望(のぞみ)ある初日に明くる田子の浦富士を仰げる漁師うら若き　能登　池野いさみ

● 爐邊に老母と二人屠蘇くみし夢のゆくへのさても戀しき　筑後　田鶴つら

● 氷ふむ靴の音にも夢さめてあかつきさむし沙河の大野ら　名古屋　石黒能布子

● 富士の峯に初日のほりし夢さめて且(あした)靜けき高樓の窓　越前　梅香女史

● 裾野あたり明けそめにけりいたゞきに朝日は照りて富士の神山　岐阜　棚橋ゆきえ

● なむとなく只なむとなくけたかきは神代のまゝの富士の芝山　熊本　佐武おり子

● 万代もかけず崩れぬ不二の嶺を動かぬ御代によそへてぞ見る　長門　田村喜代子

栄咲きて房繁くみかはす鑑のまとゐかたらふ聲や新年の中　●　埼玉　松本しげ

草の家のうからやからも鑑の邉に年をぞ祝ふ粟雜煮して　●　深川　長谷川壽代

來る春の花梱炭さしそへて新年いはふ埋火のもと　●　熊本　安田文子

何とのう只何とのうあふかるゝ神代のまゝの富士の芝山　●　岐阜　野津多摩子

千早ふる神代の雲ものこるらむかけずくづれぬ富士の大岳　●　石見　宮内登美予

そしはぎてゐませる神と諸共に國のしづめの富士の芝山　●　上野　新井まさ

たちなびく白旗雲の上に立ちて清く尊き富士の神山　●　越後　花いばら

うち向ひ日をふるまゝのつれ〳〵に矢文をかはす折もありけり　●　日本橋　里村たま子

ものみする敵の姿のうすれ〳〵雲にまぎるゝ渾河のほとり　●　きみ子

うなゐらかかさす手ふりもあらたまりあたり春めく埋火のもと　●　盛岡　田口英

斥候の銃のひゞきをきゝながら戰かたらふ塹壕の中　●　山城　林戸多美子

うごきなき影をうつして田子の浦の波にたゞよふ富士の神山　●　伊賀　服部うた子

村人ははやもより來て留守宅のいろりにぎはふ祝ひごゑ哉　●　伊賀　佐々木まさ子

長白もセフルも下になしはてゝ雲にそびゆる富士の神山　●　秋田　千夜子

敵陣をにらみて幾日武夫は月の光に刄とぐらむ　●　大阪　外山ふさ子

初日さす富士のみやまの白雲は我日のもとの光なるらん　●　大阪　藤野常女

富士の峯の雲に色さす初日かげことしも御世はしづかなりけり　●　美濃　下川みや子

新しきことしの幸を語らはむ鑑のほとり酒をくみつゝ　●　水戸　榊春子

ほから〳〵年の初日に夜は明けて雲井に高し富士の神山　●　長崎　高久子

三たりして祝ひしものをろのほとり今日のこの日は只母とのみ　●　三重　橋本春乃子

新玉のとしをむかえてはらからと火桶のもとにかたるうれしさ　●　埼玉　松本しげ

この夜中を合図かに戒むる野營の空に星一ッ飛ぶ　●　陸前　齋藤とよの

對陣の日かぞへぬれば徒らにしゝむらをどり骨なり狂ふ　●　大阪　しづ子

ひげ白き翁たゞ一人鑑のそばにとそくみ祝ふ宿の淋しき　●　宇都宮　大谷しづ子

肉動き神をどるらむつかのまもすめらみくにの軍人らは

倒れたる友をいたはる赤心にとけさらめやはあつき氷も ● 伊豆 高井すゑ子

榮いぶるゐろりのほとりまとゐして新年祝ふ山賤の家 ● 小倉 草枝子

爐の邊に夫の功を賞へつゝ心ばかりを祝ふ年かな ● 山口 稻守園子

必ずの勝と思へどさりながらこゝろにかゝる沙河のあたりよ ● 靜岡 上田新子

あた味方ものみの影はほの見えて沙河のほとりに嘶馬いなゝく ● 越中 奥田あや子

さしのほる朝日に匂ふ富士の峯は我皇國のしるしなるらん ● 越中 奥田せん子

年たてばことにたふとく見ゆるかな神代なからの富士の芝山 ● 小倉 すみれ

かゞり消えて脈たはしる冬の夜を霜營の勇士銃とりてたつ ● 信濃 高松榮子

はるかなるたけ雄か上をかたりつゝゐろり圍みて年をことほぐ ● 盛岡 田口英

かこみたる爐の灰に戰論を語きては勝る新年の客 ● 甲斐 　鳳

鹽竈の春と共に富士の嶺の名もいや高くなりまさるなり ● 備後 坪山貞子

初夢に見たるは同し富士なから去年は故郷にけふは戰地に ● 筑後 田備つら

● 大阪 立花しな

新玉の年の初日を峰にうけて雲間に高し雪の富士のね ● 安藝 頓秋子

たえ〳〵に魂ひゝきあふ冬の夜を月かげなからあられふるなり ● 宇都宮 大谷しろ子

折りくべし粗朶火かこみてたけならの物語する年の初や ● 神田 高宮安子

うづみ火のあたりははやも新らしき言葉の花ぞさきいでにける ● 博多 太田とも

野も山も死のかげみてる沙河の原たゝかひさそふ夜嵐の風 ● 肥後 紫子

空はれて一きはたかき富士のねは榮え行く代のしつめなるらむ ● 芝 佐藤しげ子

病む父をゐろりに近く招につゝ屠蘇一つぎに年を迎ふる ● 徳島 繁子

新玉の年たつ今日をことほぎてかるたとるかな爐かこみて ● 筑前 北澤はる

田子の浦波にうつろふ富士の山神代のまゝのみ雪消しな ● 松山 山崎道子

つはまをれし荒鷲一つ行くみえて富士の神山初日きらめく ● 佐賀 大塚つる子

鐘の三聲にあくる曉の雲間にみゆる初春の富士 ● 赤坂 森ふさ

目の前に敵をひかへて丈夫か今日の此日を祝ふ屠蘇かな ● 栃木 坂本てる

のどかなる年を迎へて幼子は爐かこみてかるたとるなり

● 神田　高宮安子

さほ姫のたちし霞の衣にもあまりてたかしふしの神山

● 三河　山口はなえ

進軍の令待ちわびて丈夫か力くらぶる陣營の中

● 三重　佐々木らく子

荒鷲もつはさひそめてあふくらむ雲にそひゆるふしの神山

● 下谷　立花濱子

月冴えぬ沙河の流れの音すみて思ひぞ深し對陣の夜半

● 長野　神津うな枝

嬉しくも缺けし人なく爐の邊に今年も屠蘇をくみかはすかな

● 熊本　安田文子

いとみ合ふ砲のひゞきのいや高し今かおこらむ突貫の聲

● 大阪　しづ子

いたゞきに白き冠を冠りて白衣ひきます富士の大神

● 伊豫　小島愛

もろともに明日をも知らぬいくさ人笑みてかたらふ敵まぢかきに

● 佐賀　大塚花代

屠蘇の酒盃にあたゝめて妻子らとのどけき年をむかへつる哉

● 宇都宮　大谷しく子

いつとてもあかざるものは富士のねの高根ましろきすがたなりけり

● 大阪　淺谷ちかゑ

まとゐするゐろりのそばの夜がたりにいつしか年はあけにけるかな

● 栃木　後藤梅子

いろりへに齒固めのもち祝ひつゝ益良武夫のうへをしぞおもふ

● 信濃　山田きく子

富士の根の氣高き姿見る每に心のちりは清められけり

● 名古屋　大平幸子

久方の空にそびゆるふしの根に御代をことほく年の朝かな

● 長門　木村いく子

神世よりゆるぎたにせぬ富士の峯の高根礎のつよくもあるかな

● 長野　宮崎岩子

彈丸はつき飢も寒さもせまれどもなどしりぞかん日本男子は

● 長野　黑田とし子

紅の空に眞白の富士見えぬ詩筆あらばと吾れはかこちぬ

● 名古屋　かれ子

舟人よしばし漕ぐ手を休ずや倒さに映る富士の麗ろゝ

● 近江　中川はる子

雲の上にゆたにそびゆる富士の嶺は東の洋のしづめなるらん

● 和歌山　木本歌代

たかき名はとつ國までもひゞくらむわか日の本の富士の神山

● 橫濱　むらさき

ふしの山仰けはみれの白雪に神代ながらの朝日匂へり

● 房州　清野公子

河岸に立つ哨兵の影きえて雲とふ空にかり鳴き渡る

● 陸前　西川はる

外國の人もしるらん日本の富士のみやまの高き譽を

● 河內　升田歌子

天翔る鷲の影さへ見えすなりて沙河の枯野に夕日淋しき

● 和歌山　木本歌代

とつ國の人に見せはやするかなる富士のたかねに出つる初日を

●　和歌山　木本歌代
こと國にたくひもあらぬ富士の根そうへ日の木の光なりける
●　岩代　城南さと
朝日かげ先つ富士が峰にかゞやきて關八州はやゝに明け行く
●爐邊新年　福島　大岩松子
加留多とる友まつ夜の更け行きて爐の火寒けく雪ふりいてぬ
●　奈良　今村千鳥
此處かしこ白き天幕のかけ見えて砲音もなし滿洲の原
●　羽後　鈴木まさ
新らしき爐を中に父母と年のはしめをかたりくらしつ
●　横濱　美水
うてさすりつるぎかざして命令の遲きをうらむ穴住居かな
●　小石川　今村富子
汽車の窓に腕を枕の夢さめてあけがたさむく富士仰ぎ見る
●　牛込　松波ゆき子
敵味方同じおもひに沙河ひとつへだてゝゆめむ明日の勝利を
●　和歌山　木本歌代
くもはれし富士のたかれの白雪をきよくもてらす初日影かな
●　本郷　西岡古代子
大宮の二重のみ橋をろがめば朝日にはゆる雪の富士の根
●　奈良　稲村うめ
たまの間しはしとたえて敵味方沙河を挾みて雪にこもるよ
●　尾道　樋野春子
夜もすがら敵を見はれる益荒雄のはだ寒からんしべりあの風
●　伊勢　岸田春子

しきしまの大和こゝろを姿にて天そゝり立つふしの神山
●　東京　田中千賀子
げにまことやまと島根の實なり氣高き雪の富士の姿は
●　越後　箕崎照子
里人はいろりかこみて軍かたり年のよろこびよそになしつゝ
●　島根　小泉芳野
杖とめてしばしやすらふ秋の野の尾花が末に遠き富士のれ
●　下谷　みき子
新玉の年たつけさの富士のれはまたことさらにさやけかりけり
●　安房　神作喜代子
富士が嶺の白うなりゆく見るにつけ思ひやらるゝ滿洲の原
●　長崎　久村雪枝
あけ方の大空に浮く高蒔繪金泥の雲白金の富士
●　安藝　松阪椿子
雪の上にこと葉も幾重つもりけん年のはじめの富士の神山
●　岡山　小山松枝
音にのみきゝしふじのれ女子もゆきふみわけてのぼる御代かな
●　土佐　浦　濱子
門松に初雪つもるゆたかさやゐろりのまとゐうばも若やぐ
●　岩代　菅野和子
柴たきて初夢かたるまどゐにも平和みゆる御代ののどけさ
●　岩代　菅野歌都美
日本の國の姿の不二の嶺は異國人も仰ぎ見るかな
●　仙臺　渡部光子
命をうけて敵陣さしてしのび行けば北風すさび月すごう照る
●　越後　武かほる子
山の上の篝火消えて月冴えて陣營寂し哨兵の影

都の兄君に

石井うた子

現に見えしこのかみの面影、遠き夢にして
さめて跡なき別れ路のはては雲居に消えにけり
あゝうらさびし山里の鳥の聲きく秋の空
思ひを運ぶ峯の遠風の行方を誰か知る
歌に名のある國なれど語らむ人もあらなくに
草花多き武藏野の都の空をしたふ哉
見ればなつかし浮雲の東の山を越え／＼て
我や行かむと束の間も忘れぬ方に行く雲よ

和歌叢園

立春海（〆切一月十五日）

梅村聞笛（披露二月五日）

冬鶯

◎賞品、天、地、人の外秀逸三十種に呈す

▲理想の家庭（〆切一月十五日）

當號二十日、不幸にして博進社工場不慮の火災に罹り爲めに投吟の大部を燒失したるを以て、更に殘部に就き撰評を試る事となしたり、こたびは名吟頗る多かりしに之を烏有に歸したるは遺憾至極にして偏に寄稿者諸子に謝す

懸賞文規程

投稿用紙　半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數栞に亘るものは必ず右方の上部一ヶ所を紙撚にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

留守宅日記

福島たつ

十一月四日　敷島の大和心を人問はゞ朝日に香ふ山櫻醍が軒端にかをる頃兄君出征し玉ひてより月は七度變りての今日妾がためには十七回目の誕生日となりぬ窓の南天にさわがしき雀の聲未だ聞へず舊曆幾日頃に當るらん有明の月影西の山に落ちんとして靜に々々夢路をたどるらん人多き五時過淡き光を地上に投げて朝風冷かに胸部を吹きてヘラ／＼と衣の袖寒けれど何となういましめ顏にやさしき星のまたゝき見あぐれば其月影何事をか天の秘事もらし顏なる汚がれし社會に汚がれし身も此五分時神の御前の人ともなりたらん心地して如何に淸き我心如何に深き我身ならん。扨も謹く霜白き此曉兄上がためにとて月に定めの母上が廣峯神社に御參詣の御供して行く程に登り十三丁道芝の露ふみ分て素盞嗚尊を祭り奉る廣峯神社の御前に入時頃着しぬ母上が御額にはさすがに玉なす汗を見まいらす勿體なさ今し二人の外には參詣の人もなく空は高く氣は淸く神風徐ろに梢を渡りて浮世の外の心地せらるゝやがて二人は專念國家の安全兄上が御武運長久を祈りまつりて立上れば松の木の間に差し込む朝日影山上の景色得も云はれず見下す彼方目も遙に潺々流るゝ谷水の音右手に聞きつゝ山を下れば眞白きは何鳥ならん可愛き聲を殘して姿は葉影に見えずなりぬ思ひ出づれば去年の此頃我宿へ來玉ひて程なき姉上と共に兄君に伴はれ立田姫が手染の糸に織りなさしたる綾錦着飾らしたる此山より彼方の峯つゞきひとしほ景色も增位の山に打廻りて一日を樂しく千草八千草咲き亂れたる野路つたひ家に歸りし事ありし等其時の樣を語ひつゝ一里の道を過しともおもほへず八代村の我宿へは十一時三十分歸り附きけり今日は兄上が出立の日とて母上が特に作り玉へる兄君が影膳も常とは變りて凡て兄君が好み玉へる品の數々床の花瓶には姉上が御手になりし南天に小菊のあしらひ優にやさしく活けられて紺糸の寫眞懸には如何に眺め玉ふらん兄君が溫和なる其御顏一文字にしまりし御唇よりは玉の御聲響くかとも思はれぬ今日は母上が御言の儘に兄君が御寫眞の御前に食卓を圍みて親子三人殊に妾が誕生日なればとて御心盡しの赤飯さへいと風味よく食後は樣々なる物語りに賤の女のおこがましけれど軍人の兄持つ妾は新聞とはいと親しく世上の噂とり／＼に兄君が許への送物靴足袋の四本針歩みおそきも可笑とて母上の笑ひ玉ひぬ折しも郵便の一聲は如何に三人が胸をつきて今日此頃道行く郵便脚夫が姿さへ懷かしく消ゆる迄見送るものを嬉しさに震ふ手にとり上れば戀しき兄君が水莖の跡徒らにおどる胸の鼓動我とおさへて讀み下せば變らぬやさしき御文の中に某地方面の激戰に野村少尉の名譽の戰死に反し死に損ひし不覺の我殘念の極等いつもながらの活潑なる勇ましき御言に母上の御滿足は云はずもがな姉上妾ゝ斯る兄君持しを嬉敷思ふにつけて野村樣の御留守宅こそ君國の爲めとは云ひながら稚き淸子樣信夫樣もあるものを奥樣が御心忍べば辛し慰め奉らんにも木枯の空とも見へぬ今日昔の葉なき心地せられぬるも名譽の二字は少尉が御靈の弔ふの價餘りありとぞ思はれぬ夜は姉上が野村樣への御文認め玉ふ側邊あみかけの靴足袋あみ終れば十時の鐘は寂よとてか東光寺の森をかすめて百家に足らぬ八代村里人が耳に響き渡りぬ樂しき今日は暮れぬ只此の小さき妾が日記に夢の如き跡を止めて!!!

三浦ひさ

隣の老翁が米搗く音に夢さむれば、小雨しと〳〵と枕に通へり。

薄ぐらき障子の陰にまとひして、此日の新聞紙くりひろげ、戦報のうはさとり〳〵に朝餉を了へぬ。今日は兄上の従卒なる君の、戦死したまひし日なれば、花にても供へ申さめと、木鋏もちて庭をめぐれるうちに、垣根の白菊を見出しぬ。オヽ此白菊！これこそ兄上の手植なり。いと惜しき心地はすれど、他の花よりも佛の君は嬉しと思ひ給はん。さらば、残さん花よ。これよりは淋しくて氣の毒なれども、一本は許せよと、妹に傘さしかけさせ、しづかに剪りとれば、傘の雫にうなじの冷かなるを覚えぬ。納屋の軒下にて雛に餌をやりたり。弟の雛卵を生みたれば、兄上に送らんと自慢せるはいとおかし。

雨ははれぬ。御の君を訪ひまつりて歸れば、母上は佛の御餉をいそしみ給へるにや、厨に柚味噌の香り高し。

午餉も復習も終えて用なきまゝ、小椽に出てゝ、泉水に散りし深紅の葉に、金魚の劣じと泳ぐ様を、見るともなく眺め居りしに、郵便!!の一聲。えへ兄上の玉章よと、あはてゝ玄關に行き見れば、又違ひ居りて、京なる友の玉章なり。いつにかはらぬ君の親切、涙にくれて拜讀し、返し文を書き居りしに。弟妹打ちつれ入り來りて、

「兄様の御手紙ぢやないの。なぜ兄様は手紙をよこさないんでせう。どんなになすつていらつしやるのでせう」。と。あはれ兄上を慕ふは妾のみかは。夜に入りては人の聲も聞えず、風の芭蕉葉を音訪づるのみなれば、淋しさはいやまして、兄上を慕ふ思ひのみぞいやまさる。折しもはらからにやおくれけん、天涯遙かに孤雁のなきゆく其聲。

村花咲子

△同四日。霜いたく降りて冷たき朝なり。母上と二人、寂しき朝食に、戦地の寒さなど噂しつゞ、今度の追送品の中に干柿を加へんなどのたまふ。九時過ぎ、津山の愛國婦人會より御慰問見舞品など厚きお情の程うれしく、何くれとなく温き御言葉のこして行かる、名刺に山田霧子、保名政代とあり、夕陽紅にして、山の彼方に銃の音す、新宅の武男様にやあらむ、

夜、日記の浄書をはじむ、廣島出途より「ダルニー」上陸の所までを終り、母上に新聞二日分を讀みてすゝめぬ。

△五日。朝、手紙五通着、内二通は例の赤き支那封筒戦地よりなり、開きて讀めば始めの分は例の日記なり、寒さも餘程加はりたる様子、「朝鬚髯結氷す」とあり、日々徒然なる趣、「敵前に近く壘を對して茲に三十日未だ一矢を報ゆるの期を得ず」と次の手紙を開けば、二十六日午前、兵卒三拾人を率ひてゝ深く敵地に入り、偶然多數の敵より狙撃せられたとか、よむ中に心亂れ、手をのゝく、「弾丸は雨か霰か、身邊に飛び來るも中にあたるものなく僅に兵卒一名輕傷を負ひたるのみにて無事歸隊仕り候、思た程恐ろしきものにはなく臆病も出てず御安心あれ」、とあるに稍心落ちつき、顔見合て息つきたりき。

△七日。鳥取へ來月分の追送品を送りぬ、此度のには萬年筆十本、インキ一瓶、十二月の太陽一册、靴下五足、「サルマタ」二、さらしあん三袋、米粉一包、梨の鑵詰三個、及び此間英さんの持て來て下されし繪葉書用紙百枚、水彩畫繪の具一函、皆誂へ越したまへる品々なり、干柿はよく干たるものにあらざれば箱などにつめる事出來ず且つなもきもの故此度は見合せることとなしぬ、そのかはり「ベタ」の小鑵二個を加へぬ。

名流百家

家庭の模範

中村鈴子著

一月上旬發行

寫實の文章一代を壓して戰記、小說皆事實の一局面を摹するに至る、これ當代の文運にあらずや、中村鈴子、妙齢纖々の身を以て名門、豪族の間に出入し、深く其閨閣に候ひ、其の面目を看取して吾人に寄與す其筆神に入り、其文奕々、實に當世得易からざるの文才也本書記する處ろ。閨秀の譽高き一代の名夫人をして其平生を語らしめたるものなり、談中婦人の見たる哲學あり、文學あり、家事經濟あり、割烹あり、育兒談あり、世帶話あり、園遊會あり、夜會あり、飛んで繼母論あり、寡婦論あり、味噌醬油の買物論あり、繪畫、音樂の趣味談あり、上は翠帳の內事より下は庖厨の卑事に至るまで凡そ一家內の事は細大を擧げて之を網羅す恰も是れ一幅の活書にして當面婦人の性格、家門の規模歷々として吾人の眼底に迫り來る、

目次

小説

ひとり旅

田口掬汀

其一……雪道

冬期休暇になつたならば連れ立つて湘南の海岸に遊ばう、同級の親善五人が手を執合つて、人は血眼になつて越えやうとする年の瀬を長閑な浪の音に送つて、希望の溢るゝ相互の春を迎へやうてないか……と豫て申合はせた其機會が愈々來た、さらば打寄つて何彼の準備を整へやう、最初の方面は鎌倉より片瀨の濱、熱海を最終の場所として滯在の日數はしか〳〵、會計は某孃の任とまで大抵の手筈が定まつてから、私一人が除物にされて了ひました。いや除物にされたのではありませぬ、私一人で業を煮やして強ひて此愉快な旅行の列を外れたのです、都會生れの爾も有福な家に生長てる四人の學友に、山家育ちの、僅少な學資で暮らして居る私なぞが如何して對等の交際が出來ませう、衣服は勿論頭髮の雜飾品から穿物の果まで、何一つ較物にならぬ程見劣りのする身の樣が愧かしく、口惜しいやら羨ましいやら只譯もなく腹を立てゝ、四人の學友が新橋を發車したらうと思ふ時分に、私は反對に上野の停車場に人車を驅り、人氣の薄い青森行の列車に乘込みました、申すまでもなく、此一事に就いて起した不平の感を、暫し故郷の空に晴らさうと考へましたのて……

それは丁度昨日の夕方の事でありました、寒い列車の中にうた〻寐の夢も結べず、二十餘時間を揺られ〳〵て今唯ある停車場に着いたのですが、今後四五日で寒に入らうとする東北の山野は、一面に雪に埋れて言ひ難い沈靜の姿を見せて居るのです。

此寒村の停車場から私の郷里までは未だ十七八里も歩かねばなりませぬ、私は停車場前で橇を僦つて只走りに走らせました、橇は白銀の帶を展べたやうな雪道の上を矢石のやうに飛んで參ります、雪に壓されて蟄伏する村落や林や森や丘陵や、懐かしい沿道の風物を走馬燈のやうに後に見捨て〻、三時間足らずの中に七八里を走つたのですが、冬の最中の短い日は既早蒼然と暮れて了ひました、郷里までは尚十里に餘る道程です、尤も愉快な橇を驅つて走るのだから、夜中頃までには到着けるだらうけれど、突如の歸省に人の夢を愕かすも本意ない始末、はて如何したら可いだらう……と考へる胸の中に、私は可懐しい友の姿を浮べました。

心急くま〻今まで思ひ出さなかつたのであるが、此次の驛場には私の幼友達の末野と云ふが居る、此春城下の師範學校を卒業して此驛の小學校に奉職する事になつたと云ふ手紙に接したのは去る五月の下旬頃であつたと思ふ、當時私は形式ばかりの祝意を一枚の葉書に見せた限り、其後の起居も問はなかつたのであるが未だ轉任すべき筈もない、如何な生活をして居るやら第一には其が見たし、第二には都府の繁華から榮ある女學生の生活から、私の新らしい智識學問の程も見せ度いものだ、と思ふと一種の好奇心が簇々と湧き起つて、如何でも寄つて見ねば氣が濟まぬ……では今夜は無理にも末野さんの許に泊つて、都會の風聞に憧がれさせて遣りませう。

私は早くも斯う決心しまして橇が驛場端れに着くとゝもに、

「一番奇麗な旅宿へ着けて呉れ」と命じました、其處で仕度を整へて、更めて末野の宿所を訪はうと思ひまし

たので……すると人夫は素氣なく、

「お泊りなさるやうな旅宿は、此驛にや一軒も御座りやせん」

旅宿がないつて……ぢや學校の女教員をしてる末野さんて人の宿所を聞いて、直ぐ其處へ着けてお呉れな」

道行く人に訊ねて見れば末野は學校内に住つて居るといふ話、私は一刻も早くと急き立てゝ俥を校舎の玄關に着けさせました。

立つて聲高に訪へば奥の方に應ずる聲、洋燈を片手に急がしく立出てたのは、絶えて久しき末野である、私は手早く頭巾を脱ぎ、

「末野さん久濶てしたねえ」と聲掛けました。

「何誰？お丶靜子さん……まあ如何してお入來なすつたの？」

末野は寧ろ怪訝に堪へぬ面色、眼を据ゑて私の顏を視詰めるのです。

「二週間ばかり休暇になつたから些時歸つて來たの」と私は莞爾して見せ、「丁度通り掛つたものですから、久濶て會つて行度いと思つてね、斯うして押掛けて來たのよ」

末野は辛と安心したらしく、獨て何やら頷肯いて、

「よく訪ねて下すつてね、さ早く奥へ來てお煖りないさな、好い鹽梅に風呂も沸いて居ますからね……今良人が入つてるから後で二人で一緒に入りませうよ。」

「え良人と仰在ると？」と私は眼を大きくしました、末野は快活に笑つて、

「ほゝほゝ何だつて其樣な喫驚したお顏をなさるの？然う／＼靜子さんには未だ申上げなかつたけれど、私疾うに結婚しましたの、其や之やて種々面白い話がありますから、後で悠りお聞かせ申しませう、まア兎に角奥

へ被來しやい』と促し立てます。

さては最早良人を有つたのか……と思ふと何だか豫期した興の幾分を殺がれたやうで、此樣な事と知つたら態々立寄るてはなかつた、とまで思ふのてすけれど、今更辭し去るべき口實もありませねば、私は橇引人夫に賃錢を拂つて玄關を上りました。

末野は私の旅行鞄を提げて先に立つのです、私は後に跟いて薄暗く細長い廊下を辿つて行きましたが、其良人と言ふのは如何な人物か知らぬけれど、何有……多寡が田舍の小學校に住ふやうな人間に、如何なる優れた人のある筈もないなど丶、心の中て冷笑するのてありました。

其二……立派な財産

反古張窓の破目から冬空の星の仰がる丶野天同樣の湯殿ながら、昨日以來の冷え切つた體を溫め、親切な末野の手て旅疲れの背を擦つて貰ふ心地のすが〳〵しさ、宛ら生れ更つたやうになつて、主人の居室に導かれました。

末野は微りと紅らんだ、湯上りの艶を有た顏に笑を見せて、其良人に私を紹介するのてした。

『好く御訪ね下さいました、此樣な汚苦しい處て可ければ何時迄でも御逗留なすつて下さい、斯うして雪の中に埋まつて居る耳に、都會の風聞を聽かせて戴くのが何よりの愉快てすよ』

末野の良人といふのは、年紀二十六七、骨格逞ましく血色の好い青年て名を信男といふ、矢張り縣の師範學校卒業生て此春頃から當校の長に任ぜられた、末野は丁度其時分、新に正敎員の肩書を得て學校を出たのてあつたが、知邊の媒介て念なく夫婦の緣を結ぶ事となり、今は共稼ぎの樂しい月日を事なく送つて居るといふ事て

ありました。

「飛んだ御迷惑をかけまして御申譯も御在ません」と更めて頭を下げると、末野は周章しく遮つて、

「あら靜子さん！其樣に四角張つちや不可ませんと云ふに‥‥別段お構ひ申しませんから悠り遊んで行つて下さいな、ねえ良人、鹹辛い手料理を進げて靜子さんを困らせやうと思ひますわ、ほゝほゝ」

「然うだ〳〵」と信男も笑つて「偶には然う言ふものを食べるのも藥になつて可いかも知れない、はつはゝゝ」

私も釣込まれて笑ひましたが打見るところ目慾しい品一つあるでもなく、總ての調度の不自由勝な生活をば校舍の中に營む樣に考へても、斯うして不意に泊り込んで裕かならぬ懷中を傷けさせるのが、氣の毒で〳〵なりませぬ。

私は不圖考へついて旅行鞄を披き、佛蘭西織の羽衣肩懸を取出して、末野の傍に差出しました。

「え此品を私に?!」と末野は眼を大きくして「斯ういふ結構な物を‥‥譯もなく戴かれるものですか」

「貴女に進げやうと思つて買つて來たのだから、遠慮しずに納つ置いて下さいな、何も其樣な遠慮される程の品物ぢやないんだから‥‥」

末野は肩懸に眼を注いて飽かずも眺むるのでしたが、向き直つて良人の顏を見ました。

「ねえ良人斯ういふ立派な物を戴いちや濟みませんわね、ね然うでせう。」

「むゝ」と信男は頷首いた「折角御親切に仰在つて下さるがマア戴かない方がよからう、汝のやうな肥つた女が肩懸を卷いたところで‥‥はッはゝ、其頸に此晃々する物を捲いたなら、夫れこそ好い見せ物が出來るだらうよはッはゝゝ」

「其樣な口の惡い事を仰在らなくたつて可いわ」と末野は甘えるやうな語調で言つて「だから戴かない方が可

いんてせうつて、然う言つてるぢやありませんか。」
「然うさ、さ然う云つたら早く其鹹辛い物を出して、お客樣を困らして進げないか。」
「然うしませう。」と末野は膝を立て掛けて、「ぢや靜子さん此物は戴いたも同然ですから仕舞つて下さい、今度は愈々貴女を困らせる物を持つて來るんてすよ。」
「末野さん待つて下さい。」と私は袂を捉えました、「此物を納つて下さらなきや私之てお暇します、詰らない物だけども折角貴女に進げやうと思つて持つて來たのてすから、それに貴女のやうに言はれちや何程私だつて面白くないぢやありませんか、ね末野さんお願ひ—ですから何卒納つて置いて下さいな。」



「ほゝほ、靜子さんは彼樣な眞面目な顏をなすつて—」と末野は尙も笑ひを止めず、「折角仰在つて下さるもんだから戴いても可

いんだけれど、何せ巻いて歩けアしませんからね」

「何故巻れないと仰在るの？」と私は怪訝の眼を据ゑました、末野は事もなげに笑つて、

「何故つて分相應と云ふ事がありますわ、眞可手織木綿の綿入に、羽衣肩懸を。



かけたものでもないでせう、ねえ靜子さん、折角御親切に下さつた物から身代限りをするやうな事でも出來ちや、却つて貴女にも濟まないぢやありませんか、ほゝほ、お氣に觸つたら堪忍して下さいよ」

「だけども寒さ凌ぎになりますから…」と私は譯の分らぬ事を言ふ。

「寒さ丈けなら之て結構に凌げますよ」と末野は血色も肉附も好い頸の邊を撫てゝ、華やかに笑ふのであります。

「靜子さん之が私の財產よ、ね立派なものでせう」
「何ですか？」と私は頭を傾げました。
「ほゝほ此樣な事を言つたつて解りアしませんわね、寒さにも負けなきや病氣にも冒されず、火にも燒けなきや水にも溺れない健康つて財產ですわ」
「末野ー饒舌つてばかり居ずと、早く其鹹辛いのを持つて來ないか」と信男も笑つて促しました。
「ほゝほ、お饒舌ばかりして居つて、ぢや持つて參りませうね」
末野は忙しく座を起つて勝手の方へ去つて仕舞ふ。私は得も言はれない淋しさを感じて悄然と頭を俛れました。あゝ寒さにも負けず病氣にも冒されず、火にも燒けず水にも溺れない財產ー何と言ふ力のある言でありませう、先刻、ともに風呂に入つた時其健やかな體を見て、如何して斯う言ふ佳良い軀を有つてるだらうかと思ふたのでありましたが、今露骨に此樣に言はれて見ると、私は其を羨やむよりも先づ自分の身の將來を怖れねばなりませぬ、私は果して此樣な庖弱い身を以て、目的通りの名譽、地位、權勢と言ふものを捉え得る事が出來ませうか、見事、激しい生存の競爭に堪へ通すとが出來るでありませうか……
秩序もない感想に惱まされて居りますと、末野は甲斐〴〵しく膳部を搬出して、銅壺に酒瓶を入れました。信男は手自ら私に膳を勸め、先づ手酌で一盃呷つて、突如私に盃を獻しました。
「私は些とも不飮いんですから……お盃丈け戴きませう」
「眞箇に藥になるやうな鹹辛い物ばかりですが、何卒悠り召飮つて下さい」
「其樣な事を言はずに……末野何を憫然して居るか」
「ほゝほ、私靜子さんに見惚れて居ました、眞に靜子さんは如何して斯う美しいでせうねえ」と言つて酌をす

る。

「はッヽは、廢せ〳〵」と信男は大聲で笑つて、「それ丈けは何程眞似ても出來る事ぢやない、加之其頗る奇麗ならざるところがお前の價値なんて、其上何程でも奇麗になられるものとすると、それこそ大騷動が始まらうといふもんだ。」

「靜子さん、何程何でも餘り可哀相ですわねえ。」と末野も微笑みながら私に酌をして、「奇麗になりや如何して騷動が起るでせう、ゑ良人參考までに伺つて置度いもんですね、ねえ靜子さん隨分面白い譯ですからねえ。」

「然うですねえ。」と、私は爲樣事なしに笑ひました。

「いや察しの疎い女ぢやないか。」と信男は妻に酌をさせて一口舐め、「顏や姿が奇麗になると遂ひ野心が起つて來るもんだ、靜子さんのやうな學問のある仁なら兎も角、汝見たいな意志の弱い者になると、どうも其美くしい顏や姿を只置くのが惜しくてならない、可惜標致を有つて居ながら一生雪や草の中に埋まつて居られるもんか、一番東京へでも出て腕を磨いて玉の輿に乘る工風でもしやうとか何とか、兎角分外な望みを起して、求めて煩悶に陷るのが能くある奴だ。

然るに天の配劑といふものは有難いもので、靜子さんのやうな美くしい容貌を有つて居られる人には強い意志が授かつて居る、汝のやうな餘り有難くない標致のお方には、弱い意志が授かつて來る、……と言つたやうな譯合のもんで、僕見たいな者も自つと家長權を有する事が出來るのだ、はつは、怒つたか、いや失敬々々、我輩何も好んで最愛の夫人を侮辱しやうとするものぢやない、聞度いと言ふから一般原理を說いたに過ぎんからね。」

語了つて又聲高に笑つて、冷たい酒を一息に啣ります。

「ぢや私なんざ良人と夫婦になれたのが、分外の幸福なんですね。」と末野は又私に酌をして、

「餘り酷い說ですわねえ、ほヽほ、餘り有難くない標致のお方ですつて……。」

「眞に餘り酷う御座んすわ。」

私も微笑みながら銚子を合せましたが、此村夫子の一場の放言が從來曾て覺えのない鋭い諷戒の言となつて、深く胸底を刺るやうな感が致しました。

あゝ如何なれば今宵に限つて、斯うも不思議に鋭い、強い、激しい恐怖の念が起るのでありませう、我が講師が口を酸くして說く齊家修身の道も、則り守るべき古い物語の事實も、正面に浴せられる叱咤の叫びも諷刺の數々も、從來今宵のやうに私を感動させた事がなかつた……私は如何して此人が一夕の放言に動かされて、斯くまで心神の騷ぎを覺えるのか、たゞ〳〵不思議といふの外はありません……。

末野は私に盃を献して、

「詰らない事ばかり言つて御退屈さまね、靜子さん今度は貴女の番よ……些東京の評判を聞かせて下さいな。」

「東京の評判つて、一向詰りませんからねえ。」

「貴女が詰らなくたつて私や何を聞いても珍らしいんだから」と言つて信男の方に向き、「良人何を澄し込んで在つしやるの、些と盃をお廻しなさいな。」

「然うだつけな。」と信男は慌てゝ啣つた大きな盃を、又もや私に突附けました。

「何ですねえ良人、ほゝほ、突如に喫驚なさるだらうぢやありませんか、靜子さん堪忍して下さいよ。」

「はつは、生來の木强漢で今更如何する事も出來ん、靜子さん失敬しました。」

「如何致しまして……。」と曖昧な返答、私は爲樣事なしに盃を受けますと、末野は手早く酒瓶を執つて滿々と酌をしました。

「あら末野さん……此樣に澤山注くなんて、酷いぢやありませんか。」

「快く飮つて下さい、もう決して强ひませんから唧と一息に飮つて下さい、斯うして親近になつた祝ひの盃で

す、夫婦で以て貴女の健康を祝するのですから……。」

「眞にもう進げませんから其盃丈け召飲つて下さいな、ゑ靜子さん快く飲んで下さいよ。」

私は件の盃を手にしたまゝ凝と視詰めて居るのでしたが、夫婦に誠心籠つた面色で俯められて見ると、此盃には何か一種の幸福が宿つてゞも居るやうに思はれて、强烈な寒國の醇酒を盛れる其大盃を、眼を瞑つて雫も殘さず、奇麗に卽つたのでありました。

其後彼是十分餘り、夫婦が快活な談話を聞いて居つたのですが、湯上りの熱を有つた腹に曾て入れた事のない多量の酒精分を注いて、炭火の熱で蒸されたから堪りません、頭腦は割けるやうに痛み出す、眩暈がする、胸がむかつく、堪らなくなつて末野の手に扶けられて暗い臥床に入るや否や、頭を押へて俯伏になつた限り殆んど前後の見別も附きませんのでした。

其三……得知らぬ涙

不圖眼を覺して見ると、氷柱の垂るゝ硝子窓に朝日の光り眩しく照つて、其光線の落ちる枕許には洋盃、水注、寶丹の包など載せた盆が置いてあります、時は彼是九時過ぎかと思はれるので……

私は愕いて起上らうとしましたが、頭腦は錐で揉まるゝやう、視力も一定の運動が取れず、呼吸が窮迫んて迚も立たれさうにも思はれませぬ、

て再び枕に額を抑附けヂッと眼を閉ぢましたが、前夜以來の恐怖の念が、まだ狹い胸の底に亂れ騷ぐのであります。

あゝ寒氣に負けず病氣に犯されぬ天與の財產！末野が快活な氣性を宿す强壯な體を見、また信男か酒席の放

言を聞いてから、私は確に年來の希望の一端を挫かれたのであります、……繁華なる都府のさまや、榮ある女學生の生活や、自分の新らしい智識學問を誇らうと思つた前夜の考は、宛て煙のやうに消えて了つて、只自分の尩弱い體の將來が危まれ、また此體を唯一の資本として、名譽や地位や權力などを贏ち得べき働きの苦しさが、今から歴然と目に見えて言はれぬ怖ろしさを感ずるのです。

あゝ如何にかして末野のやうな天與の財產……强壯な體軀……が欲しいものだ、私は何故に此樣な弱い體をして、甘んじて煩悶苦惱の境に入り、名譽や地位を獲やうと考へたのでせう、身體の劣るのが殘念で旅行の列を外れた私の眼には、分を守つて一枚の肩懸さへ身につけぬ末野の心が、如何に尊く映りましたらう……本强漢の信男の一言一句が如何に私を戰慄させましたらう、私は實に、此若夫婦を神のやうに敬ふ心を起しました

暫時ジッとして居ると身も心も穩やかになつて、視力も定まつて參りました、靜に起上つて帶締直して障子の外に出る途端、左の土間で華やかな末野の笑聲がします。

私は此聲を聞くと共に急に心を引立てられて、頭腦の痛みも忘るゝやうに足を早めて椽側に出ました。

「あら靜子さん……」と末野は早くも私を見て、無理をしちや不可ませんから、もつと寢て在しやいよ」

「如何てすな御氣分は？大變熱が出たやうてしたから非常に心配したんてす」

夫婦は氣遣し氣に私の傍に寄りました、見れば末野は手拭を姐樣冠りにして紺の筒袖を被り、信男は鳥打帽に頰冠り同じく筒袖と云ふ異樣の粧ひをして、豆莢を打つて居るのでした。

「飛んだ御迷惑をおかせ申して、眞に申譯がありませんねえ」

「はッはゝ、却つて此方が申譯ないんて」と信男は大聲立てゝ、「荊妻が貴女太く私を攻擊するんてす、不飮いと言ふのを無理に强ひたから此樣な事になつたんだ、親友に病氣をさしちや濟まないから如何にかしろ、と云ふ談判てせう」

「あら良人こそ私に談判なすつた癖に……え何ですつて何方でも可いんですつて？ほゝほ、聘して來れあ必と彼樣な遁辭を仰在るよ」

「末野！」と信男は語調を更めて、「談話は後でするとして早く靜子さんを彼方へお伴れ申さんか、此樣に塵埃の立つ處にお客樣を立たせて置く奴もないもんだ、靜子さん今直き出來ますから何卒居室の方でお待ち下さい、しかし教員の共稼ぎをして其上農夫の眞似までするつてんだから隨分慾張つてるとお思ひでせう、けれども私は教育家は勞働しなくとも可いと言ふ法がなからうと思ふんですな、いや理屈は兎に角、斯うして手足を動かすと飯が甘く喰へますからな」

私は頷首きながら其處にある藁草履を穿きました。

「靜子さん如何なさるの？」と末野は仰山な聲を出して、「さ彼方へ行きませう、あら塵埃が立つて不可ませんてば……」

「私も少し働いて見やうと思つて……」

「え、何を働くんですつて？」と眼を圓くする。

「私にも手傳はせて下さいな」と信男の方に向いて、「働いて甘しく御飯を戴きたいんですから……」

「あはッはゝゝ」と信男は反返つて笑ひ、「そいつ丈けは御免蒙る、此樣な事だから譯あないやうなものゝ之でも慣れなきや出來るもんぢやない、紫式部ぢや衣砧が打てないと同じて、貴女にや、豆打は甚だ不似合だ、ま彼方へ行つて待つてゝ下さい、末野何を愚圖々々してるんか……」

「さあ此方へ被入しやい」と末野は私の手を執つて、無理に居室へと導くのです

私は顏を洗ひ口を漱いて末野と對向ひに坐りました、末野は尙も私の容態を氣遣ひ、あんな苦痛をさせたのは偏へに酒を侑めた自分夫婦の罪であると言つて、如何なる失態でも仕出來したものゝやうに、只管詫びて[illegible]

まぬのです。

　私は夫婦の情の有難さが身に泌むやうに覺えて、成らう事なら此處で新春を迎へたいとまで思ふたのですが不如意な夫婦の生活の中に如何して座食の日を送られやうか……いや縦し淋しい生活ならずとも、夫婦が額に汗して積む物を譯もなく減らさせる事が出來ぬ、然うだ、片時も早く立つて了はねばならないのだ……

　私は突嗟の間に思案を決して、末野に向つて言ひました

「末野さん、私之からお暇乞しやうと思ふのよ……」

「え出發んですつて？」と末野は如何にも愕いたらしく、「加減の惡い體を無理に搖られちや大變ですわ、何せ此樣な住居だから、定めしお厭だらうけども、全然癒るまで逗留して在つしやいよ、え無理をしちや却て後廻りになりますからね」

「折角親切に言つて下さるけども、もう癒つたやうだから之で失禮しませう、末野さん飛んだも御厄介でしたねえ」

「眞に出發つて仰在るの！其樣な無理をしなきや可いんだけども……」と呟いたが土間の方に向き、「良人！些時來て下さいな、大變な事があるから早く來て下さいよ」

　消魂しい聲に愕かされて信男は走つて參りました

「大變な事つて何だ、末野如何したと言ふのか」と座に着くのです。

「靜子さんがお出發なさるんですつて」

「何？お出發なさる？」

「はあ最早爽快しましたから、之でお暇乞しやうと思ひますの……通り掛りに寄つたりなんかして、飛んでもない御迷惑をかけました」

「ぢや眞に出發んですか……」と末野は尙も危ぶむ面色、お生家までは未だ十里からありますからねえ、また橇に搖られちや必と加減が惡くなりますよ」

「生家へは歸らない意ですから……」

「え生家へ歸らないんですつて？」

「あゝ生家へ歸つたからつて何の面白い事もないんだし、折角貴夫婦のお庇蔭で愉快な心になつたのを毀されたくもないし……私この愉快な心を土產にして、直ぐ東京へ歸らうと思ふのですと」

夫婦は目を見合せて、さて更めて私の顏を視成るのです、私の言つた事は熟く理解らない爲でせう其儘一同無言になつて暫し手持無沙汰の座となりましたが、ついと信男は膝を進めて、昨夜の容態から考へれば未だ旅行に出られぬこと、雪道の困難なこと、吹雪になりさうな空合の事などを楯にして、只管引止めやうとするのであります

しかし一旦思ひ立つた事は直ちに着手せずに居られないと言ふのが私の性分であり、又堅く決心した事もあるからと言つて、强ひて夫婦の厚意に反いて、丁度十二時と云ふ時分に再び橇に乘つたのです

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

信男夫婦は驛場端れまで見送つて、尙細々と旅中の注意をして吳れるのでした、私は誠心籠めた聲に力を入れて、夫婦の交りの永久に變らぬやうにと祈つたのでありますが、いよ〳〵橇を曳き始め……た時、得知らぬ淚が雨のやうに落ちるのでした

明日の夕方には、また都府の人なるのですが、昨夜以來の感動の心の現象は、何卒何時までも忘れたくないものす（完）

母ごゝろ

（上）

廣津柳浪

娘千鶴子の居室とせる、座敷の彼方の四疊半には、午後から遊に來た其學友二人、何が面白いのか、仰山な高笑が爲たかと思ふと、ひそ〳〵と沈んだ話聲が、茶の間に娘の袴の綻を縫つて居る母松子に、其眉根の皺を一入高くさせるのであつた。

松子は針の手を止めて、耳を澄しながら、

「何が彼樣に面白いのか知らぬが、能く談話の種が盡きないものだ。」と、洋燈の明に柱時計を見上げて、「三時から、もう六時過ぎて居るのに……四時、五時、六時と、三時間の餘にもなるのに、彼娘さん達の宅では、能く彼樣にして置けたものだ。學校の復修をするのに、忘れた所や不審ぬ所を、互に聞合ふのだと云つては、千鶴子も彼娘さん達の御宅に、度々お行でだから、他の事ばかしは云はれないけれど、彼樣に談話ばかし爲て居て、彼でも復修になるのか知ら……あれ、また彼樣に大きな聲をして笑つて……まア千鶴子の聲だよ、一番大きいのが。」

松子は斯う呫いて苦笑を爲たが、軈て大息を吐いて、また針を辿らした。

「私も行つてゝ。鳥渡待つてゝよ。」

千鶴子の聲が高く聞こえると、唐紙は開く音が爲て、小走に椽側を駈けて來る音が爲て、其足音は茶の間を

避けて、納戸の方から、下婢のお久を呼ぶのである。
「久、手燈をお呉れ。」
「はい、御手燈で御在ますか。」
お久の返辭も松子には手に取る樣である。
「千鶴子さん‥‥千鶴さん。」と、松子は聲を掛けた。
千鶴子は母の二度目の聲を聞いてから「母さま、何か御用。」
「此所に鳥渡お入て。」
「待てゝ頂戴、今彼の鳥渡、直ですから。」
お久が手燭を持つて來たのか、低い細語が聞こえながら、唐紙の開く音が爲た。
松子はまた針の手を止め、千鶴子が何を爲て居るのかと、納戸の物音に耳を欹てゝ居た。
簞笥を開ける音に續いて衣の滑る音、然て鬢でも梳いて居るかの氣配が、鏡臺の抽匣を開ける樣であつたり櫛を投込んだ樣の音がしたりしたのに察せられた。
松子の眉間には又もや深い皺が刻まれ、氣遣はしさうな色の浮んだ眼に、千鶴子がもう來るか〳〵と、其方の隔の唐紙を見返つて居た。
「阿母さま、」と、千鶴子は茶の間に入つて來るより「私大塚さんの宅へ行つて來てよ。」
見れば、牡丹色の紋縮緬の被布に着替へて、同色の肩掛を抱えて居るのである。
松子は何とも云はないで、千鶴子の顔を目成つた。
千鶴子は今年十七である。髮は今樣の束髮、色の白い丸顔の、眼の利發らしく淸しい、口元に何時も微笑が見

えて、殷懃の愛くるしい少女である。

　松子が何とも云はないので、千鶴子は切髪に年よりは老けて五十近い母の顔を、少時凝乎と見て居たが、眼を見合せて居る中に、二人の顔の何れにも、不快な色が浮んだ。

『また母樣は可厭顔を爲てよ。』と、千鶴子は胸の中に呟きながら、下を向いた顔には、不平で溜らなさうな色が溢れて居た。

　松子は重くるしい語調で、年頃の娘が、毎晩の樣に出掛けるものぢやありませんよ。

『千鶴子は母の顔を見上げて『何してゞせう。』

『何してと云つて、女が、夜行するのは、誰だつて良く思ひませんよ。』

『何してゞせう。私には行らなくつてよ、夜だから他が惡く思ふつて云ふのが。』

『お前さんには其がお解りでない。まア、』

と、松子は呆れたらしく千鶴子の顔を見て、『其位な事が、解らない樣な人ぢやない筈だがね。幼時から云つて聞かせたてせう。お前さんは其を忘れてお了ひなの。』

　千鶴子は稍顔を紅くし、『だつて、私解らないことよ。母樣は私が大塚さんだの井上さんだのと、一所に復修するのが、』

『それを惡いと云ふのですか。阿母さんがいつしか一度でも、復修お爲のを惡いと云つた事がありますかね。』

『だけども、』

『女が――別して年頃の娘が、晝と云ふものが無いてはあるまいし、態々夜になつてから、往復しないだつて、』

『だつて、私の宅には來て貰つて、私行くのは厭てすつて、其樣自分勝手な事は、千鶴には云へないことよ。』

と、千鶴子は顔を眞紅にして、母さまのお云ひなさる事は解つてよ。私が大塚さんや井上さんと、夜になつて家外に行くのを、何所か遊んでゝも來るとか思つて……私其樣、其樣不品行な事なんか、と、」語を斷つて、母を見上げた眼に涙含んだ。

松子は千鶴子が涙含んだのを見て、強く云ふのが可愛相になつて來て、暫時は躊躇つて居た。

「千鶴さん、母さんだつて此樣事を、度々云ひたくはないがね、夜行なんぞする娘は、誰だつて良く云ふ者はありませんよ……お前さん、其樣にお怒りでなく、母樣の心持になつても、考へて御覽が可いのだよ。假令惡く云はれる樣な事がある人だつても、惡く云はれまい、惡く云はれたくないと注意するのが、誰にしても同じ人情でせうよ。それだのに、」

千鶴子は獨語の樣に、惡く云はれる事があるから、其樣人達は大騷をして人前を作るのよ。」

「まアお聞き。」

松子に制せられて、千鶴子は不承々々に口を噤んだけれども、母の云ふ所を道理ありとして聞く樣子は見えなかつた。

「今云つた通だからね、惡く云はれる事がないのに、惡評を立てられる樣な事があつたら、お前さん何お爲てすよ。」

「自分の心にさへ疚しい事がなきやア、」

「え、何ですつて。」

千鶴子の聲は稍沈んで、自分の心にさへ羞しい事がなきやア、他が何樣事を云つたつて、私達は關はないつて、千鶴ばかしぢやなくつてよ、大塚さんも井上さんも、」

「それで世間が濟むのですか。」と、松子は乾皮した語調で、世の中の事は、自分一便で濟んで行くのではないでせう。それに、お前さんは自分の身の上を、能く考へて御覽なさい。お前さんば志賀の家を立てなきやならない人ですよ。來年學校が御卒みだつたら、相應の人を見立つて、」

「いやよ、私。」と、千鶴子は頰を膨らして、「母さんは私の厭がる事ばかし云ひなさるのよ。私其樣事なんか、」

「それは今の事ぢやないがね、女は世間が大事だと云ふ事を、何卒忘れない樣にしてお呉れて、此つばかしでも世間の口から瑕を附けられない樣に、」

離家の大塚智平子と井上多根子との、轉がる樣な笑聲が聞こえた。

「二人が彼樣に笑つてよ。」、千鶴子は離家の方に氣を奪られて、桃尻立てゝ居るのである。

「何を笑つてお居でか知らないけれど、勝手に笑はせて置くが可いのさ。」と、松子は稍氣色を損じた樣であつたが、直ぐに優しい顏色に返つて、「千鶴さん、母親さんの云つた事が御解りなの。」

「解つて居るは、母さまのは何時でも同一事ばかしよ。」

「お解りならね、其積で、夜なんかは、」

「だつて、もう約束して了つたのよ、」、千鶴子は怨むが如く母を見て、「大塚さんと井上さんを今まで待たして、今になつて私否ですつて、私云へない事よ‥‥可いは、絶交されだつて。私もう、明日から學校を退るから可いは。」と、半泣聲になつた。

母は呆れて、手が付けられないで、默つて千鶴子を見て居る。

「何故不可くつて、母樣は無理に私を押付けて了ふのよ、何時でも左樣よ。私だつて道理を知らない事はないのに、何時でも、何時もで私を壓制けて了つて、無理に服從させて了ふのよ。母樣は人の自由なんか何でも可

いつて……個人の獨立と云ふ事だの、精神の自由と云ふ事だのを、些とも重んじないで、唯世間に服従すれば可いつて……服従は惡德だつて云ふ事も知らないのよ。」
「千鶴さん、お前さんのお云ひの事は、母さんの意に落ちないから、」
「當然だは。私もう何でも可いのよ、明日から學校へも行かなきア、もう學問なんかも止して了つてよ。」
「其樣學問ならお爲でない。」と、松子は云つて遣りたくて、殆んど口まで出たけれども、千鶴子が肩掛を投出して、ぽい／＼と涙を溢して居るのを見て、つい心が弱つて、左樣は云ひ得なかつた。
離家の二人の話聲が、何時か高くなつて居て、千鶴子が何時まで何を爲て居るのか、そを餘所ながら促がしもするかの語さへ、茶の間に聞こえるのである。
千鶴子が母を凝視めた眼の、火光を宿した涙の底には、恨怨と憤思の輝さへ加うて、明日も亦、終日口も利かず、食事もせず、離家に閉籠つて泣いて居さうで、松子の心には其光景があり／＼と思浮めらるゝのである今夜は氣が立つて居るから、何を云ひ聞して會得るまい。明日になつて、氣の鎭つて居る時に、噛んで啣める樣に話して聞かせたら、もと／＼愚鈍な禀性でないのだから、存外會得するかも知れぬ。今夜は二人の友達は待つて居るのだし、それを強て斷らせて、萬一仲間外にされても可愛相だ。今夜までは千鶴子の我儘を通させて遣りませう。一夜の内に、取て返しの附かぬ樣な大事も發りはせまいと、松子は終に娘の可愛さに負けて、千鶴子を其友の二女と共に出して遣つた。
其日は十一月の中旬、空は見事に霽れて居たけれども、秩父颪の乾風は肌膚に砭するばかりで、何處かの梢頭にひゆうと鳴を立てゝ、雨戸を搖ぶる音に、松子は千鶴子が風邪でも惑かぬ樣にと、縫物も其儘片付けて了つて柱時計を仰いでは、早く時が過つて、千鶴子が早く歸つて來るのを祈つて居た。

（中）

千鶴子は大塚智平子、井上多根子と本郷弓町の我家を出た時は、駿河臺鈴木町の智平子の家に、八時頃まで數學の復習を爲す積であつた、然るに、四方吹通の寒い〳〵御茶の水橋を渡つて、右へ鈴木町に屈らうとした時、多根子が歩を止て、「今夜は十五日だは——五十稲荷の縁日だことね。」

智平子は試驗の問題に行詰めて、不圖其解答を案じ得た時の嬉しさよりも嬉しい語調で、「私忘れて居



てよ五十に行つて見たくつて、先程までだ機怹つてたのに、つい忘れて居たのよ。井上さん、貴女行らつしやらないこと。」

「いゝえ、行つてよ。志賀さんも行らつしやることね。」

千鶴子は二の足を踏んだが、全く行きたくなくもない。

「志賀さん、可いでせう、三人で行くんですから。」

「左様ねえ。」と、千鶴子は厭ではないのに、自分にも分らぬものが引留る樣な氣がして、躊躇つて居た。



「三人の中で一人缺けても、面白くないは、ねえ井上さん。」

「志賀さんも行らしつてよ、ねえ志賀さん。」と、多根子は譯けて熱心に、「一人仲間外にならないでも可いは。」

千鶴子も一人仲間外と云ふ語に、親友に對する義務としても、自分一人行かないとは云はれぬ。友達同志三人、緣日に行つた處で、別段人に耻づる事もないのに、二人へ義理としても同伴せねばと、

「餘り遲くなつちや厭ですけども、」

「直きだは、五十までゝすもの、三町もないことよ。」

「暑中の樣に賑だと、何ぼ面白いはね。」と、多根子は智平子の耳へ口を寄せて、「歸途に私の下宿に居らつしやらないこと、志賀さんと同伴に。」

「志賀さんが何ですか知ら。」

千鶴子の二人の談話が耳に入らぬでもなかつたが、われから口は云さなかつた。

此時三人は坂の下口に掛つて居たが、其處の角から端なく出て來た一人を、書生が夜目には多根子を其と認めたのか

「五十ですか。」

「おやッ、吉田さん。」

多根子は吉田と呼んだ書生の方へ、直ぐに歩寄つて、二人には早くも五六間離れて、話しながら行くのである。

千鶴子は覺えず歩を止めて「私いやよ、男の人なんぞと。」

「一處にならなきや可いは。」と、智平子は指を組合つて居た千鶴子の手を曳き、「私は貴女と二人で歩いてよ。」

千鶴子は促さるゝ儘歩を移しながら、「井上さんの御友達。」

「私知らないことよ。默つてらつしやいよ。」

千鶴子も智平子も、多根子等の足音を前に聞きながら、互に話もしないで、次の角まで行くと、小川町と神保町の路の五條に別れた角が彼方に見えて、遠くからでさへ眩しい樣な百千の燈火に、彼多根子と書生と駢んで行く後姿が、幾個もの人影にも殘れず、小く黒く彼方へと遠去かり行くのであつた。

「智平子さんも酷いことよ。好加減な事を云つて、私を此處まで連れて來て置いて、自分は井上さんの下宿へ行くんだつて、餘りだことよ。男の人が三人も同伴になつて……私へも入らつしやいだなんて、おゝ可厭ことだ。大塚さんも井上さんも彼樣人ぢやないと思つてたのに……私もう明日から交際しないから可いは。だけども、酷い人達だは。」

小川町から錦町三町目へ曲らうとする角に佇立んで、斯う呟いたのは志賀千鶴子である。

道幅は廣いが、燈火の映薄き彼方からは、多根子が倘ほ千鶴子を呼ぶのである。

「私の下宿へだつて、入らつしやつても可いは。千鶴子さアん、行つうやいつて云つてるのは、千鶴子さアん。」

續いて聞こえたのは、男の聲だ。

「おゝい、君も來たつて可いでせう。おゝい……何故返辭をせんですか。」

「志賀さアん……千鶴さアん、來玉ひな、おゝい。」

「僕が迎に行くから待ち玉へ。」

千鶴子は思なしの所爲が、此方に駈來る足音が聞こえる樣で、はつと思つて、倘ほ群集せる柚木屋の前の人の間に姿を紛らし、あはよく來掛つた俥に乘つて、態と水道橋から壹岐阪に路を取り、我家の前に梶棒が下りても、倘ほ動悸が鎮らなかつた。

（下）

千鶴子は智平子と多根子とには交際を絶つ積で、今朝家を出る時までは堅く決心して居たから、學校にて二人に出合つた時は、互に目禮を交したばかりで、何れも濟まぬ顏を爲て居た、が、晝飯後の休憩時間に、女才

なき智平子が退引させず千鶴子を運動場の人無端に通行き、昨夜千鶴子に別れた罪を謝し、それも多根子に欺かれし故と辨解し、彼三人の書生は何れも多根子と同じ家に下宿せる人々なりし事、多根子とも斷じて何等の關係なきこと、其上何れも大學は高等學校の學生て、神田に名高き墮落書生にあらざる事なぞを、繰返し〳〵辨護した後、從來の交際を繼ぎたき旨を述べた。

友達には心弱き千鶴子は、智平子の辨解に半信半疑の念を懷きながらも、一言智平子に反問する事も爲し得ず、智平子が取成すまゝ、多根子とも亦交際を續ける事にした。

此日千鶴子の歸宅を待受け、松子が昨夜の事から、其以前にも溯ぼりて、夜歩の女として爲す可からざる事、友を撰ぶには注意を要する事、其身の志賀家に負ふ大責任ある事等を、暮々も云聞かせて、此でも或ひは會得が行かぬも知れぬと、松子は覺束なげに千鶴子の擧動を見戍つた。

此日の千鶴子は昨夜とは全然別人てはないかと疑はれた、母へ對して一言も詞を返さず、今日以後決して夜行をせぬこと、母の許可が無ければ、智平子多根子の二人とも往復せざる事を契ひ、且つ從來の自分の不心得を深く〳〵詫びたのてある。而も、其樣悄然として、母の詞を一句〳〵に、首肯くが如き會釋をなす樣の可愛さに、松子は嬉さ過ぎて涙を溢した位てある。

けれども、松子の喜も一週間とは保たなかつた、丁度五日目に、例の智平子と多根子が以前の樣に、夕方から訪ねて來た、口實は例によつて學課の修復と云ふのてある、千鶴子は二人を謝絶しようともせず、母に顏を合せた時、きまりの惡い顏をしたのみて、何とも云はなかつた。松子は云甲斐がないと、獨熟く歎息したのである。

其翌日千鶴子は學校から直ぐに廻つたものか、夜の八時頃に歸宅して智平子の宅で復修して居て遲くなりま

したと、母へ一言斷つた儘、直ぐに離家に入つて、寢に就くまで母へ顏を合せなかつた。

翌朝松子が先日の誓に背いた事を責めると、過日の從順なりしに引かへ、例の調子で直ぐに泣出し、今日から學校が退ると云きつて、離家に入つた儘、飮まず食はずて、終日閉籠つて居た。

其翌日も千鶴子は學校へ行かぬと云のふを、松子は漸く賺して、俥にて學校へ送らせたのである。

「今の樣では、行末が案じられる。私は彼兒の爲に、死ぬまで泣かされるのか。」

松子は千鶴子を送出して、茶の間に歸るより、顏を袖に當てゝ泣くのであつた。下女のお久でさへ、次の間て貰泣をして、彼樣美い御容色で居らッしやるけれども、早晩御母樣の御罰がお當りなさらうのにと、私に呟いた位である。

松子はもう意見をしても無益だ、親一人子一人の賴ない上に、此悲を見ると云ふのも、彼樣な娘を子を持つた、此も何かの因緣と諦めるより外はない、誰を怨まうようもない。私も何故所夫と同時に死ぬ事が出來なかつたでせう。せめて千鶴子に婿を迎るまで、達者で居て下さッたらと、彼時枕頭で愚痴を溢したのに、今に成つて考へると、御死者なすつた所夫は御幸福、私ほど不幸な者はありますまいと、亡夫の位牌にまで搔口說くのであつた。

松子は日毎に而樣が爲るのである、千鶴子は其と氣付かぬのであるが、智乎子等との往來は每日の如く、夜の十時近くまでも歸らぬ事が、二三度續いたのである。

松子はもう云はぬ積にして居たが、今一度は親の役目、縱し耳に入らぬ迄もと、夕方出掛けようとした千鶴子を曳止め、お久に聞かせともなく四疊半に連行き、瓦燈口の唐紙をぴッたり締切り、

「千鶴さん、其處に坐つてお呉れ。」

「歸つてからぢや不可いこと。私急いで行かなきやならないんですから、今でなくッたッて。」

「たまに一度位は、素直に、母樣の云ふ事を聞くものです。」

母が眼に一杯涙を持つて居るので、千鶴子も有繋に爭ひかねて、不承不承に疊に音をさせて坐つた。

松子は凝乎と千鶴子の顏を見て居たが、「千鶴さん、お前は何して其樣人に——何して今の樣に、其樣人に成つてお呉れだよ。」と、兩袖を顏に押當て泣した。

千鶴子も有繋に母の此樣を、まじ／＼とは見て居られず、垂頭いて眼を閉ぢたのである。

松子は暫時泣いて居たが、漸く顏を上げて、顏の涙の痕も殘さじと能く拭き取り、尙ほ暫時は呼吸を調へ、垂頭いて居る千鶴子を凝乎と見て、深く／＼太息を吐いた。

「千鶴さん、母さんももう、今日限でね、決してもう云はないから、お前も母さんの兒だと、尙だ些でも思つてお居てなら、今日一度だと思つて聞いてお呉れよ。」

千鶴子は口の中で「其樣厭味を云はなくッても云いは。」

「千鶴さん、お前は母さんが何か云ふと、二言目には、母さんが無理に壓制けようとするの、人の自由を妨げようとするのと、直きに斯うお云ひだけれども……それに、自分の心に恥かしくさへなきアや、他の誹や、世間の惡評なんぞは、何でも構はないと云つてお居でだけれども、女は女らしく、男は男らしく、生性から違つてるのだから、其行ひだつても、男は男、女は女の踏む道が分れて居るんぢやないかと、何にも知らない、今の學問など些も知らない私は、左樣としきやア思へないよ。お前の今日の行狀が、女の道に外れて居るが、左樣でないかはね、世間には自然の大法がありますよ。人の踏外してはならない道がありますよ。お前のお爲の方が、法に外れ道に違つて居るものなら、お前は其大法の爲に縛られて、無理にても人の道を踏なきやならな

らお成りだから、私は其事に就いては、もう何にも云はないでね、お前が否でも、人の道を踏なきやならない時が來るのを、私は待つより外仕方がないと、今ぢやもう諦らめて居るのだよ。それは其として、」と、松子は眶に溢れさうな涙を拭いて、「私がお前に今一度話して置きたいと思ふのはね、親となり子と生れた其情愛――親が子を可愛いと思ふ情と子が親を慕ふ情とはね、二つの樣に聞えるけれども愛しいと思ふ――可愛いと思ふ其情は一つぢやないかと思ふのだがね、千鶴さん、お前は何思つてお居てか。」

千鶴子は一入深く垂頭いて、何とも云はなかつた。

「親は子が可愛いから、子の爲にな、何樣な辛い事でも、自分の事は忘れて、子の爲に〳〵ッて、唯其ばかしを思ふのだがね、子の方では左樣思へないものか知ら。私はお前さんて、つく〳〵左樣思ひますよ。」と、暫時してから語を繼いて、子の方にも、親を可愛がつて遣らうと思つたら、親を喜ばす樣に、親に心配させない樣に、自分で彼したい斯うしたいと思ふ事も、親の心配する事てゝもあれば、いや〳〵自分の好きな事や面白い事は捨ても、親を喜ばすのが、子の親に對する愛情ぢやあるまいかね。千鶴さん、私はお前が可愛くッて〳〵目も放せない程可愛いんだから、お前の爲には何樣事でも、何樣不自由も厭はないで、今日まで斯うして來たのだ。お前も知つてお居てゞせう、御死去んなすつたお前の父さんが御酒家だつたから、私もつい飮習つて寡婦になつてからは、お前の外の樂だつたお酒も、お前に見習はしては爲にならないから、それも止して‥‥止すのに實に辛い思をした烟草も、もしお前の爲にならない事でもあつては、と思つては止し‥‥此五六年と云ふものは、お前こそ遣りもするがね、物見遊山一度爲た事は無いのだよ。それも、些でも無益な費を省いてお前の學資や衣服の足にしたいし、一つには些とても餘計に、お前の財產に殘したいからてすよ。新しい衣服と云つたら、双子縞一反私が調へた事のないのは、お前が能く知つてお居てぢやないかね。年を老つたからと

云つて、斯もしたい彼もしたいと、私だつても隨分不自由な事があるけれども、いやく此不自由を耐へるのも、可愛い千鶴さんの爲だ。彼可愛い千鶴さんの爲になら、何樣不自由でも耐へて、早く學校を卒業させて、早く志賀家の跡目を立てさせてと、私やそればつかりが樂で斯うして居るのぢやないかね。千鶴さん、お前も其は能く知つてお居ての筈だよ。」

千鶴子は深く垂頭いた上に、手巾て顔の下半分を押へた。

松子は涙を呑んで、覺えず嘆をしたが、「千鶴さん、私がお前に何樣不自由をさせた事がありますか。母さんはお前を可愛がり過ぎる程可愛がつて、お前の喜ぶ顔が見たさに、身分不相應な扮裝もさせて居るぢやないかね學校の方だつても、出來るだけの事は爲て居る積ですよ。お前は其でも不自由だの不足だのつて……千鶴さん不自由な事があるなら云つて御覧、不足な物があるなら云つて御覧、不自由な事や、不足の物があるなら、」

「いゝえ。」と、千鶴子は初めて幽かに返辭を爲た。

「お前の不自由だとお云ひのは――母親が無理に壓制けるとお云のは、夜遊をしては不可ない、爲にならない友達と交際つては可くない……母さんが止めてるのは、唯た此二つですよ。お前は其が自由にならない、我儘がされない……お前のは我儘ぢやないか――誰に聞かせたつて我儘ですよ。千鶴さん、お前さんは隨分……何だねえ。」と、松子はまた袖を顔へ當て泣きながら、「親子の情愛と云ふものはね、親は子の可愛さに、身を捨てる者もあるよ。子だつて左樣だよ、親の爲には、隨分身を忘れて、不自由して居るどころか、苦勞に苦勞を重ねて……世間には其樣親子もあるのだよ。それと云ふのも、親子互ひに可愛いと思ふ情が籠るからこそ、其樣美しい事も出來るのですよ。それだのに……お前さんは、我儘さへ捨る事が出來ないで……阿母さんを可愛いなぞとは、夢にも、お思ひの事は、ありやしないのだからね、私は情ないよ。だけどもね、だけどもね、」と、後を云はうとしては、聲が逸んで云ひ得ないで、また泣いて了つた。

千鶴子も今は疊に兩手を先いて、もう零ちさうに涙が眶に差含んで居た。

松子は泣聲が逸みながら、「千鶴さん、母さんはね、お前さんが何樣に、不、不、不孝をお爲ても、私は何し

たつて、お前が可愛いのだからね、何時迄でも、私が生きて居られる間は、何時まてゝもお前を可愛がるけれども、世の中から捨られ、捨られない様に……世間は慘酷いものだと、お前が御知りの時はもう、もう〳〵…遲い、氣が付いても、もう遲いのだ、ようつ。」とばかりで、其儘疊に泣伏した。

「阿母さま、千鶴が惡かつたんですよ。」と、千鶴子も心の底から悔悟の聲を顫はして、「阿母さま、堪忍して、頂戴、千鶴が全く惡う御座んしたから……阿母さま、阿母さま。」

千鶴子は松子の耳に口を寄せては詫び、肩に背に手を掛けては、右に廻り、左に廻り、母の一言を得たいと心を盡したけれども、松子の耳には通ぜぬのか、尚ほ泣入つて返辭がなかつた。

* * * * * * *

翌日千鶴子は例の通學校へと家を出たが、物の十分時間とは過たぬのに、眞靑な顏をして歸つて來て、茶の間の母を見るより、

「母樣、私何したら可いでせう。」

千鶴子は吃驚の餘に聲も出し得ぬ母の手を曳張り、離家に入るより早く泣伏した。

仔細を聞けば、先般來から噂の高かつた「女學生」と題して、各女學校學生の陰事醜行の記事投書を滿載したる雜誌が、今朝しも其初號を發賣したので、各女學校の近傍には、其を讀賣せる者、之を購はんと競へる者群を爲し男女の學生に非常なる恐慌を惹起し、千鶴子の學校の女學生も二十名近く其雜誌の餌食となり、彼智平子多根子は云ふも更なり、千鶴子も不幸にして其名を揭げられたと云ふのである。

松子も千鶴子も途方に暮れて、施す可き術を得なかつた。千鶴子には全く雜誌に載かる可き陰事醜行は無かつたけれども、終に其學校を退く事になつた。

千鶴子に取つては、大不幸には相違なく、一年の後の今は、某女學校に入學し、學業の成蹟も優良、母に事へても孝順、松子は昔の事も忘れて喜んで居るけれども、世間では尙ほ左右の評を爲るものがあると云ふことだ。

講談

婦人の眞情

眞流齋貞水

お需めに從がひまして一席辨じまするは、新年とは申しながら軍國の際でございますから、何か戰爭に因みました御婦人に關する事をと存じまして、玆に婦人の眞情といふ題をおきまして、上下三段の異なる眞情のお話しを致します、男子と違ひ御婦人方の眞情といふものは亦格別なことゝて、第一に高貴の御方樣が出征軍人のためにお盡し遊ばされます御眞情の一斑、恐れ多くも閑院宮妃殿下が愛國婦人會の總裁と爲らせたまひて以來、戰地に赴きたる出征軍人の健康を日々祈つて在したるが、某夜のこと深更に至つて圖らず侍女の耳に聞えましたるは、妃殿下樣のお居室の方に何やら布でも裂やうな音が致した、ソコデ侍女が扨も不思議な音の聞ゆるものかな、此の眞夜中にお起遊ばしてゐらせられる筈もない、如何にも心得がたき物音であるとお居室をさして徐り〳〵と歩み來て御容子を伺はんとせしに、忽まちお居室の內より妃殿下の御聲として、妃「誰ぞ參りしか」侍「ハイ私にございます」妃「何うして此處へ參りましたか」侍「ハイ、今宵は何となく能眠られませんので考へをりましたところ、何やらお居室の方より聞えまする、夫が頓と物を裂まするやうな音に覺えますて、何ぞ御用でもあらせられるかと存しまして」妃「然やうあるか、別に用事はないによつて退りますやう、物音の聞えしは繃帶をこしらへてをるからヂヤ」侍「夫は恐れ多いことゝて、斯く夜の更まするまで遊ばしまするとは」妃「イヤ只今であるから申するが、是まで繃帶のことに付ては、其方始め皆の者が退りたる後、毎も午前三時頃ほひまでは是を致してをるのである」侍「夫は亦別して恐れ多いことでございまして、終宵御寢につかせ玉はず此繃帶のことを遊ばしますとは、定めし戰地へお送り遊ばして賜はりました將校士

卒、難有がたく存じ奉つることとてございませう」照「然う思ひくれゝば此方も致し榮があります、然なくとも皇國のために罷り出てたる軍人の繃帶が、若欠乏するやうな事があッては成ぬゆゑ、寸間も是を費して其やうな事のないやうに致すのヂャ」此仰せに侍女はいよ〳〵其の思し召の深きに、只だ恐れ入ッて感涙に咽び俯「以來は何卒私どもへも仰せ付られますやう」と願ッて致すやうになりました、然れば恐れ多くも皇族殿下、各宮妃殿下樣のお造りになりました繃帶は、戰地に夫々一卷づゝ皆順に廻ります、尤も貞水が戰地で實際を目擊しましたところでは、將校方でも兵士でも此恩賜の繃帶は二重に紙に包んでポッケットに收め、負傷をなすッても大概なことではお用ひになりません、餘り勿體なくて用ひられない、ナニ是しきの負傷何の物かは、恩賜の繃帶を所持してゐるんだから、殊更に卷んでも其の御威德で自然に血は留ると斯う仰しやるくらゐ、下々の者は夜分になれば最う十一時だ、サア早く寢ろと眠りにつく、夫を雲井に高き御方さまが、

斯くまで繃帶のことに御心を注がせたまふといふは、實に承まはッても有がたきことにございます。夫れから第二は妻として夫に盡された眞情、其夫とは誰人でありませう、是ぞ聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎君、未だ中將で在せし昨年の春のこと、彌よ露西亞を相手に戰はねばならんといふ危機一發の場合、番町のお屋敷にて奧樣の照子夫人にお對ひなすッて、東「此方は急に佐世保へ出發に及ぶから支度をせい」照「ハイ」と奧樣は仰しやッたが、餘り突然だから、照「只今貴君さまは御病氣でゐらせられます、未御快方に赴ひたといふわけではございませんによッて、今少し御加養の上御出發を遊ばしては如何でございませう」東「イ、ヤ構はん、病氣でも苦しうない、さしたる事は無のだ」照「然やう御意遊しますが、醫師の申ますには餘ほど御大切に遊ばさんければ成んといふことでございます」東「エー蒼蠅い何故其樣なことを申すか、此方は急に佐世保へ參らんければ成んのヂャ」照「然やうなら何か御公務について、至急に往らせられるのでござ

いますか、東「無論の事ヂャ」照「如何に御公務でございましても、御病氣でございますれば、誰人でも御養生遊ばしますので、お身體が御大切でございますから、何か急の御用でございますなら、電報にてもお達しなすッたら宜しうございませう」東「エ、蒼蠅いことをいふ女ヂャ、何故其様なことを申すのだ、此方は往んければ成んのだから捨置け」と恐ろしい御權勢、夫人は只夫を思ふ御一念、此お身體で何うしてお往でになることだらふと只々夫をお案じ遊はすのみ、露西亞を敵手に開戰をするといふ事は、未此際は極の秘密だから夫人へさへ御一言もお洩しがない、然れども夫人のお心では、追々時局は迫ッて來るし、万一の時には我夫は樞要の位置におつき遊ばすお方、其時に若御病氣にてお役を勤められぬやうな事が有てはならん、御感冒を少し頂らしてゐるのだから、飽までも御養生をと強てお勸になる、東「蒼蠅い其方のやうな者は夫人と思はん、何故然やうに强て留るか、白痴め」大いにお怒り遊ばして、東「最う其方は新橋まで送ッて來るには及ばん」お叱りなすッて、爰て閣下が御出發の時には御留別の御酒宴等もなく、急のことであつたから御令孃が「母上、お父様がお怒りてゐらせられますから、私だけ新橋までお送り申し上ませう、貴女は却つてお往でにならん方がお宜うございます」とソコで夫人は眞に御殘念ながら、閣下の御出張をお玄關先に兩手を付て只無言でお見送りをなすつた、其お心の中を推し參らすれば、御氣の毒とも何とも申さふやうもなく、斯て御令孃は新橋停車場のプラットホームまでお往でになると、陸海軍の御方薩摩御出身の御方朝野の紳士、何うも非常なお送りの人、ソコデ御發明な御令孃、是は事によると戰爭が始まるかとお心づきになつた、夫ではお屋敷をお出あそばす時に大層お急ぎの御容子と申し、此りや一刻も猶豫のならんといふ時期の切迫したに違ひないとお了りになる、其うちに時刻が參りましたるから、滊車の室内に東郷閣下はお乘込になると、滊車の前は人波をうつてゐる、「東郷君萬歲、東郷君萬歲」といふ聲は一時に

發つて天地に轟きわたる、此ときお見送りの貴顯將官がたは室内に皆御這入になつて、東郷閣下のお手をお握りになり、夫と言はねど此度の重任充分にお頼申すとの御容子はお顏に現はれ、又閣下は陛下の御爲皇國の御爲身命を拋つて其任務を盡さんといふ御決心の見えて、互ひに以心傳心確かと御手を握り合つて別れをお告になる、此始終を御覽あそばした令孃才子は、彌よ夫に違ひないと思し召て、孃「お父上、貴君は此まゝ御出發になりまして、母上へ何のお言葉もないと、母上が眞に御心配を遊ばします、母上はお父上が決てお役目に付ましての事をお留申したのではございませんので、夫をお叱り遊ばしたぎりで御出發になり、萬一のことがございました節は、母上は定めしお心惡う思し召ませう、何うかお父上、母樣へ何とか仰せられますやうに」此令孃のお言葉を閣下も尤と思し召、東「ヤ急務の場合てありしによつて叱りは致したが、決て仔細はない、能家を守つて夫人の道を缺ざるやうに務めよと申したと、歸つて能く言へ」孃「ハイ、夫では今までで通りにございますか」東「マ、一時叱言は申したが心に懸るなと言へ、身體を堅固に其方も能勉強いたすやうに」孃「ハイ、夫では歸りましたら母樣に、お父上の御機嫌が復りましたと申し上ます」東「アー然う申せ、隨分とも母を大切にいたせ」孃「ハイ、然やうならお父上にも御機嫌よう、別て御武運長久をお祈り申上ます」とは仰しやつたが、お心の中には無量の感にうたれ、お父上の御尊顏をチッとお見つめになる、東郷閣下も一目令孃を御覽になりましたる時には、傍らに居ましたる人々も思はずハラ〳〵と落涙に及ばれた、忽ち響く滊笛一聲滊車は進む、令孃はプラットホームに立上りお父上の召れた室を見送る、閣下は萬歲の聲轟ろきわたる中に、煙を殘して早くも滊車は離れたり、ソコで番町のお屋敷にお歸り遊ばして、令孃より夫人へ其趣きをお話しになる、新橋の模樣などをお聞あそばして、照「扨は其事でお急ぎ遊ばしたのを、然うとは知ずお留申したは何とも申し譯がない、併し御機嫌が復

つて御出發遊ばしたとは何より、夫聞て胸の惱みも安まりました』是よりは家庭を堅くお守りあそばして、傍ら貴婦人方と共に軍人遺族の救護等にお心を注ぎ、殊に義勇艦費募集については婦人部の幹事を御承諾になり、大いに御盡力になると承たまはるも美しき御事てございます、倚て第三は母として子を思ふ眞情、時は昨年の七月六日大山滿洲軍總指揮官が兒玉總參謀長と共に、此日午前十一時に新橋停車場をお出發といふので、滿都の人々は軒頭に國旗を揭げて兩閣下の御出發を祝す、新橋停車場内はお見送りをするので人波を打つてゐる、尤も總指揮官が滿洲へお進みになるについて、恐れ多くも陛下より戰地に用ひよと閣下にお馬車を賜はり、又兒玉閣下に對しては格別なる御乘馬を賜はりましたくらゐ、然れば内閣大臣方文武官朝野の貴顯紳士、愛國婦人會總裁閑院宮妃殿下を始め貴婦人方、續々と停車場のプラットホームにお詰かけ、夫ゆゑ警察は非常に御注意がございまして群集の人をお制しになッた、然



るに其雜踏の中に一人六十四五になります老婆、着服は餘り宜しくございません、婆「エーもし御婦人」婦「ハイ婆さん何でございますネ」婆「濟ませんでございますが和女、一針縫て下さいな」婦「オヤマア婆さん、此白い布に赤い糸で何を致します」婆「是は戰地へ忰をやりますのでございますが、千人の御婦人に一針づゝ縫て頂きますと、敵の打つ彈丸が命中ないと申します、夫でお願ひ申すのでございます」婦「オヤ〳〵然うでございますか、お前さんの息子さんが



戰地へ往らつしやるんで」婆「ハイ一人の忰でございますが」婦「お國の爲で結構でございます」婆「然れども嫁が煩らつてをりますし、只た一人の忰が陛下さまのお爲に出ますのでございます、夫は最う戰爭に出れば死ぬといふのは皆覺悟を致してをりますが、成ふことなら一人ッ子でございますから殺したくないので、皆樣方のお力をお賴み申すので」婦「オヤ然うですか、夫りやア先アお察し申します、是で宜いのでございますか」婆「結構でございます、有難うござ

います……モシ其方の束髪の御婦人、何うか一針願ひます」束「オヤ然うですか縫てあげませう」婆「チヨイと其方の丸髷の女房さん、御面倒ですが一針縫て下さい」丸「畏こまりました」婆「モシ其方の花月巻のお方、何うかお願ひ申します」花「ハイ」婆「モシ夜會巻のお孃さん一針願ひます」夜「ハイ」婆「モシ其方の島田に結てゐらつしやるお方」大變な婆さんだ、皆な頭髪の結かたで呼てゐる、婆「モシ其方の三十七八になる女房さん、何うか一針縫て頂きたいので」女「お婆さん折角でございますが、私は縫ないので」女「ナニ和女一針で宜いのでございます」女「お氣の毒さまだが一針も縫ないんで」婆「オヤ〳〵然うでございますか」女「何でも斯んでも仕立屋さんに出すんで」婆「夫りヤア結構でございますが御婦人のことでございますから一針ぐらゐは……」女「夫が縫ないんで、糠袋でも仕立職へ出すんで」婆「オヤ然うでございますか」傍らに立て聞てゐた貳拾一二の書生さん、薩摩飛白のつんつるてんの單衣に紺絞の兵兒帯を締めて、桐の書生下駄を穿て、何れの學校のか徽章の付た帽子を冠つて、書「オイお婆さん、オイお婆さん」婆「書生さん何か御用でございますか」書「イヤ彼の御婦人が針を持たことがないから縫んチウて」婆「然うでございます、アノ糠袋さへ仕立職さんにお頼みなさるんだつて」書「イヤ婦人として針を持んとは困つたてんだ、彼婦人の代りに僕が縫てやらふ、僕は下宿屋の貳階におつて襯衣の裂たのを繕ろつたり、隨分袴の綻びなぞも縫し、自慢ヂヤアないが手際が上手つもりだ、今朝も越中褌の紐を自分でつけたくらゐヂヤから」婆「オヤマア然うでございますか、御深切は有難うございますが、何うも男の方ヂヤア可ないんでございます」書「アー男ヂヤア可んのか」婆「ハイ、御婦人ばかりに願ふのでございます」書「アー夫ヂヤア僕の姉を頼んで縫て貰つてやらふ」婆「有難うございます、何うか夫ヂアヤお願ひ申します、歸りに何方でございますか伺がひますから」書「少し遠いのだ」婆「何の邊でございますか、芝邊でございますか」書「イヤ最う少し遠いんで」婆「品川邊りでございますか」書「モウ少し遠いんで」

夫なら何方で」書「肥後の熊本だ」婆「御戯談仰しやつちやア可ません」書「ハア夫チヤア迚も間に合んかネ」婆「ハイ有難うございますが、夫チヤア迚も間に合ませんて」書「アー夫りやアお氣の毒だつた」婆「モッ和女一つ縫て下さい」と此混雜の中を彼方へ拔け此方へ轉じて婦人と見ると赤い糸を通した針と白い木綿の布を指出し、何うかお願ひ申しますと一針づゝ縫て貰つてゐる巡査も邪魔になつて仕やうがないが、皇國のために一人の伜を出すといふ、其心根を推量つて制すにも制し兼、見て見ぬ振をしてゐられる、然處へガラ〳〵と一輛のお馬車、是を見て群集の者、又フラットホームにお出の兩閣下をお見送の方々のお口より、『妃殿下さまが入らしつた』といふ聲がチヨイ〳〵聞える、扨はとお馬車の中を覗けば、洋服を召れて麗はしき御顏に笑を含ませたまひ、雜踏の中なればお馬車を徐々とお進めになる、其跡より何れの貴婦人か、是は乘物よりお降になつたものと見え、洋服扮裝にて壹貳參名ほど徒歩にてポカ〳〵お進みになる、此とき婆さんは駈出

して、婆「モシ洋服の御婦人さん、恐れ入ますが一針縫て頂きたうございます」言かけられし貴婦人方は然も困るといふお顏て、婦「何でございますか、只今和女の御用をしてあげるわけに參らんので」婆「イ、エ和女、一針縫て下されば宜いので、何うか一寸とお縫下さいまし」縫てはやりたいが、前にお進のお方さまへ何となく氣兼のお模樣でゐらつしやる、スルトお先なる馬車の内に在した御美しき御方樣が、お馬車を駐めて此方の貴婦人へ對し、妃「何でありますか」と優しき御聲婦「ハイ此老母が何か一針縫てくれいと申すので」妃「アー何ういふわけてありますか」婦「ハイ」妃「お尋ねなさい」婦「アー老婆や是を縫ますのは何いふわけなので」婆「ハイ、一人の伜が此たび皇國のため戰地へ參るのでございまして、成ふ事ならば負傷をさせたくないと存じまして、千人の御婦人方のお手にかけて一針づゝ縫て頂きますと、敵の打ます彈丸が命中ないと申すので大山樣のお出發で今日は大層御婦人がお出かけになりますから此處で願つてをりますので」婦「夫てはお前の

一人の息子さんが戰地へお往でになるので」婆「ハイ近衞兵でございます」夫を馬車の内て聞し召て、妃「皆さん縫てお遣しなさい」婆「ハイ」夫から御各自、それては縫てあげます、それては縫てあげますと縫て下さる、婆「有難うございます、有難うございます」此皆さまが濟と右お馬車の内なるお方さまが、妃「是へ」と仰しやつて、竹の園生の尊とい玉手を延させたまひ、其白い布をお持遊ばして一針お縫下される、妃「コレ老人」婆「ハイ」妃「其方の悴が戰地に參つて、彈丸の命中んやう妾も祈つてあげますぞ」婆「ハイ有難うございます」其まゝお馬車へお進みになる、書「オイお婆さん」婆「最前の書生さんでございますか」書「和女は實に有難いことチヤ」婆「ヘヱー」書「實に和女は勿體ないよ」婆「何が勿體ないんでございます」書「何かつて、今の馬車の貴婦人を誰人と思つてお出だ」書「誰人だか存じません」書「彼は閑院宮の妃殿下樣だ」婆「貴君、其の妃殿下と仰しやるのは何てございますか」書「妃殿下て分らんければ御息所さまだ」、婆「御息所とは貴君何てございます」書「分らんなお妃さまだ」婆「夫ヂヤア何てございますか、宮さまの女房さんなんでございますか」書「和女、其んなことを言チヤ可ない、女房さんだなんと言て罰が當る、和女の息子が夫を締て戰地へ往つたら、彈丸なんざア當りつこはない、實に恐れ多いことて、和女有難く思はなくつちやア可ないぜ」婆「然うてございますが夫ては昔なら宮樣を拜むと目が潰れると申したくらゐ其尊といお方樣の奧樣なんて」書「マア奧樣と申しちやア濟ないが、モウ少し身分の低いお方なら奧樣といふんだ、何しろ彼いふ尊といお方樣がお手づから縫て下すつたんだから、夫て最う充分だらふ」婆「夫はマア有難いことゝて、千人にも万人にも替がたいお方てすな」

書「夫りヤア最う彼お方樣がお手に取てお縫下されたのだから、此んな有難いことはない、和女は最う夫て充分だよ」婆「アー然う何かつたら勿體ない事をしました、モウ誰が縫てやらふてつたつて縫て貰やアーしません、マア有難い宮樣のお妃樣、アー有難い、モウ誰が縫ふたつて縫せるものか、誰が縫せるものか」大變

な婆さんもあるもんだ、夫れから大喜びで自分の家へ歸つて來た、婆「伜や」伜「オイ阿母ア、お前何處へ往てるんだ、戯談ヂャアねエ、大變にマア心配をしてゐたらふヂャアねへか、お前何處へ往てゐたんだ、己が斯うやつて今度戰地へ往といふんて、朋友が集まつて己を送つてやると言てるんだ、女房わ寢てゐるしお前へ居ねへし、皆なに酒一杯出すことも出來やアしねエ、只今柴井町で電車に轢れ損なつて負傷をしたお婆さんがあるといふから、お前ヂャアねへかと心配をしてゐるところだ、己がお前戰地に往ッていて陛下さまのお爲に出るんヂャアねへか、お前然うキョと〱してゐチャア可ねエぢやアねへか」伜「伜や、私シャア其んな母親ヂャアないんだよ、お前が戰地に往ッて立派に皇國の爲に働いて貰はふと思ふて、昨日からお前集人に聞と、千人の女が一針づゝ縫た此腹卷を締て往くと、敵の彈丸が命中らないといふんだよ、夫だから私シャア、成べくならお前が無事で歸ッて來るやうに、昨日から斯うやッて皆さんに縫て頂いてゐるんだよ」

伜「チャア阿母、お前昨日から出たり入ッたりしてゐるのは、己の身を無事にと思ッて、夫を縫て貰ひに歩行てゐるのか」婆「然うさ、マア皆さん御免下さひ」甲「阿母宜いや、夫りャア先ア御苦勞だ……オイ熊、其處が母子だ、昨日からマア心配して、お前の身體を大丈夫にしやうと、彈丸除を縫て貰はふと言んだ、豪氣だ」婆「夫に伜、喜びなよ、今日お前大山樣がお出發になるんて、夫をお見送りするお方が大變なんて、新橋の停車場は恐ろしい人なんだよ」伜「然うだ、今日わ大山元帥に兒玉大將が御出發になる人だから、夫りャア新橋の停車場わ大變な人だらふ、夫に己も出るんだからお送り申さねへか……」甲「何うだい今度の戰爭ア、大變な大がゝりだなア」乙「夫りャア當然だ、彼お方樣たちが出發なさるくれへだものを」甲「然うだなア」婆「夫に伜や、未だ喜ばせることが有るんだよ」伜「何んなことだか」婆「何んな事ッてお前、新橋の停車場が然ういふ混雜だから、其多くの中で皆さんに一針づゝ縫て頂いたんだよ」伜「お前マア其混雜の中でやッて貰たのか」

婆「然うさ、夫からア閑院宮様のお妃様にも縫て頂いたんだよ」伜「何だ阿母、虚言を吐チャア可ねエ」婆「虚言ヂャアない、眞實にお馬車の中で縫て下すつたんだよ、私しや其んな尊いお方とは知なかつたんだが、傍にゐた書生さんが、彼は閑院宮のお妃様だと敎へてくれて初て知つたの、而して其お妃様が決てお前に敵の彈丸が命中らないやうに祈つてやるとまで言て下すつたよ」伜「夫ヂャア阿母、眞實にお手づから縫て下すつたのか」伜「然うさ」婆「マア勿體ねへヂャアねへか、其上に彈丸の命中らねへやう祈つてまで下さるとは、實に有がてへな、此んな有がてへことはねエ、だが阿母此いつア御前ニャア氣の毒だが生チャア歸られねエ、其んな尊といお方様が、彈丸の命中ねへやうに祈つて下さると仰しやりャア、尚更露助の奴を打さのめして皇國の爲に生命を捨なけりャア申し譯がねエ、お前は其筋て充分にお手當をして下さるから心配するニャア及ばねエ、己ア今度ア戰地へ往きャア生チャア歸らねへよ」婆「イ、エお前然う言つたつて、彼の伜といふ方様が彈丸の命中らないやうに祈つてやると仰しやつたんだから、敵の彈丸なんざア何うしても命中りャアしないよ、大砲の彈丸なんざア命中るやうに成ても逸ッちまふよ、水雷なんざア飛て來たつて除ちまふよ、機械水雷なんざア觸りつこないよ」伜「オイ阿母、戲談言チャア可ねエ、水雷なんざア陸軍の方へ來るもんヂャアない、彼りャア海のもんだ」婆「何だつて斯んだつて大丈夫、サア皆さんお急がしイところを有難うございます、何もないけれど出發祝ひに一口飲つて下さい」是から酒と肴を取揃へまして、心ばかりの首途といふんて一同が酒宴をする、「オイ熊」熊「何だ」甲「跡のことは己つちが附てるから決て心配しねえが宜い」熊「何うぞ頼むよ、此通り女房は煩つてゐるし、老人の阿母を殘して往んだから」甲「確かに請合つた、お前の身に萬一の事があらふとも、其筋からの下され物なんざア目的ニャアしねエ、己ッち一同で今日に困るやうな事は決てさせねへから、其積てお前も威勢よくヤッてくれ」熊「有がてへ、皆なが然う言てくれるんて己も心丈夫だ

マア一杯やつてくれ」　酒宴をしまして、彌よ出發の時には町内の有志其他大勢て送つてくれる、其人々にも六十有餘の老母の身を氣遣ひ、皆「何うか皆さん阿母を何分願ひます」甲「宜うございます、私どもて引受るから安心をしてお往でなさい」力を付てくれるから其言葉に勇みたつて出發をする、然るに其戰地にて負傷をしまして、今は廣島の第二分院の中に療養をしてゐる、芝區宇田川町の中村熊吉氏、激しい戰ひの中に僥かの負傷といふのも、是れ全く一つには妃殿下様の御保庇と、二つには母が此身を思ひくれたる眞情の結果と、本人の喜びは一方ならずと承まはりました、甚だ拙講御退屈さま。

紹介

▲家庭の友 家計簿

本書は家庭の友記者羽仁もと子氏が月々の經濟に豫算を立て可成多く剩して餘計に貯金すると云ふ趣意で編まれたものですから、家政に忠實なる奥様方の重寶たることは云ふまでもありません、記者の見る所を巾すと、今迄ある多くの家計簿の中で最も簡易で分り易く誰にでも雜作なく記入が出來る事を信じます、本書の内容を紹介すれば、副食物費、米麥費、住居費、衣服費、教育費、交際費、娯樂費、特別費、臨時費等の諸項に目分かたれ、副食物費の項には豫算額、日々の割當、支出、剩餘、不足を記入すべき欄を置き、其他の諸費目も豫算と支出の關係を明瞭にあらはし、尚ほ月々の收入や遣ひ拂ひや貯金額を一目の下に瞭然たらしむる組立てでありますから、月給に依つて經濟を立てる家庭には殊に便利であります、一部三十錢、本郷内外出版協會發行。

▲我子の惡德

本書は獨逸協會學校長大村仁太郎氏が家庭の父母の爲に獨逸で評判なる奇書（ザルツマン氏著惡德養成法）を基礎とし、之に我國の事情を參酌して編述せられたものであります。本書の趣意は家庭に於ける兒童教育の等閑は、其の邪家庭の不良と父母の怠慢とに在るとなし、寓話的に兒童の惡德惡習を列擧し、父母の反省を求むる料としたものでありますから、子故の闇に惑ふ人の親に取つて善い發明器であります、定價六十錢、東京同文館發行。

▲女子文壇

江湖の名流、知名文士の贊成を以て起りたる女子文壇は新春の一月元旦を以て新たに其第一卷を發行せり、其内容は妙齢なる才媛の纖手に成りたる玉の如き花の如き美文、和歌、小說、新體詩、消息文等にして、いつれも錦心繡腸の佳什多く、猶名家文壇には歌界の泰斗東久世伯の歌を始めとして藤井文學士、佐々木竹柏園、尾上文學士、中内文學士、小川直子刀自、長谷川大溪、大和田建樹其他文界先進の短篇十數章を掲載せり、口繪其他の裝飾清楚にして青年の婦女の伴侶として尤も其選を得たるものなり猶詳細は本誌廣告欄に委せり

記事豫告

第五卷第參號　毎月五日發行

毎月五日發行

定價表	
一册（紙數二百八頁）…金二十錢	
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢	
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢	
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢	
內　定刊數…………十二册	
增刊四回…三、六、九、十一月價格同一	
郵税	一册　二錢

廣告料	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	四十五錢	十四圓〇八錢	割引三十三圓
一等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十七圓
二等	二十九錢	九圓二十八錢	割引二十二圓
三等			割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規
●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅八年一月一日發行　第五卷第壹號

不許複製

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　合資會社博進社工場　東京市小石川區久堅町百〇八地
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

恭賀新年

博文館主
大橋新太郎
大橋進一

恭賀新年

博文館編輯局主幹　坪谷善四郎

巖谷小波
石橋思案
石倉翠葉
長谷川天溪
濱田四郎
堀井利太郎
鳥谷部春汀
鹿野直司
勝間恒彦
武内桂舟
田山花袋
武田櫻桃
竹貫直人
鷹野勇雄
根岸由太郎

上村左川
大町桂月
押川春浪
奥村卯兵衛
松原岩五郎
國府犀東
遠藤敏
齋木菊雨
齋藤紫白
岸上質軒
木村小舟
篠崎竹舟
平田骨仙
鈴木德太郎
（イロハ順）

博文館營業部

支配人　大野金太郎
副支配人　山田靜三
副支配人　內山正加
副支配人　杉山常次郎

事務員

宮川大壽
上村恭三
堀野賢龍
里見謙吉
田中六藏
宗像仲吉
加野十次郎
關謹平
松原濱之助
金子督太郎
富所三郎
松木玉之助

小峯正一
古賀豐策
細野佐藏
兒玉幡太郎
有田利雄
荒井芳太郎
淺沼滿次郎
番塲宗八
大谷濱次郎
權藤文雄
猿賢四郎
伊藤和三郎

横田地巴
繁田郁三
福澤市太郎
林彦之助
今井淳
長嶺幸吉
今井玉三郎
青木傳四郎
磯岡鷲郎
小瀧文治

（後付の一）

恭賀新年

合資會社博進社
專務理事 山本留次
支店支配人 中村孝吉
仝副支配人 長沼恒次郎

東京本店員
山本九兵
九里誠一
金原要一郎
武藏吉次
織田保次郎
中村健三
穗井田貞雄
富田新太郎
富谷松三郎
林季三郎
黑澤倉治
橫山幸七
岡崎保司
遠藤廣吉

大阪支店員
松本作造
井上謙次郎
川崎昇
石井治郎
小林勝太郎
長谷川金之助
岡打九十九
小川德次郎
柳橋兵一郎

東京神田區錦町二丁目
合資會社博進社洋紙店
電話 特本局千六百〇三番 本局二千四百十番

大阪東區瓦町二丁目
合資會社博進社支店
電話 特東四百四十九番 東千九百〇八番

恭賀新年

東京小石川區久堅町一〇八番地
合資會社博進社工場
電話番町四十六番

理事 大橋光吉
副支配人 水谷景長

事務員
佐藤憲斌
大内德亮
市川七作
小田内東藏
富井龍次郎
野中幹
稻波寅吉
飯塚市郎治
齋藤用當
森川鋭吉
谷俊三
高橋正信
近山喜代三
小笠原廣俊
中西榮次郎
栗田正生
浦山鐸太郎
小林文次郎
大江幸吉

技手
秋川研太郎
西郷勝
鈴木正臣
吉岡泰五郎

職工長
内山長吉
田中安藏
大崎福太郎
岡野勇五郎
多賀新太郎
深見豐次郎
吉田平吉
蛭沼武守
岩佐登吉

（挿付の二）

全書新刊

第百廿壹編

文學士 松本孝次郎君著

兒童心理學

（近刊）

上製五拾五錢　郵稅拾錢
並製四拾錢　郵稅八錢

抑ゝ兒童心理學は兒の精神狀態を攻究し兒童の心的發達を明にするを以て目的とせり而して此研究は一方に於ては普通心理學と相待て心に關する問題を解決し他方に於ては普通心理學と動物心理學及民族心理學との連鎖をなし尚精神狀態上より生理解剖學及病理學とに關する所少からず是れ近時學者間にありて兒童心理學が心理學中の一學科として重要なる位置を占め最新研究として最も價値ある科學と稱せらるゝ所以なり著者教職を高等師範學校に執られ久しく斯學に進涉する所あり、此頃講學の傍ら本書を公にし以て將來斯學の進步發達に多大の貢献を與へらる。

第百廿貳編

農科大學助教授 獸醫學士小倉鉀太郎君著

獸醫學汎論

（近刊）

上製五拾五錢　郵稅拾錢
並製四拾錢　郵稅八錢

要目　家畜解剖、家畜生理、疾病及用藥外科手術細菌、馬の外貌及管理、馬の疾病、牛の外貌及管理、牛の疾病、豚の管理と疾病、羊の管理と疾病、犬の管理と疾病、鷄の管理と疾病、獸醫學警察法

國運日々に隆盛なるに從ひ衣食住の變遷と軍備の擴張は家畜の改良蕃殖を促かし農業及び交通機關の進步發達は動物力の利用を增進せしめ家畜の增加と畜種の改良を來し隨て畜產事業に關係するもの、斯學の大綱を知ることは尙既に一般の普通學に於けると其必要の底を均ふせり故に本書は敢て學理の深きを說かす其一般大要を述べ愛畜家の參考に資せり

（梭村の七）

本町三丁目　博文館

祝戰捷新年

●讀書家諸彥の御便利を圖り新刊圖書雜誌は汎く蒐集陳列販賣候間御來觀希上候
●地方御同業者の取引は薄利を以て發送は非常の敏速に勉强致候間御注文希上候
●日本書籍株式會社發行國定敎科書は特約し卸小賣共勉强販賣候間御注文希上候

東京市神田區表神保町三番地

書籍雜誌

何れの出版に不係 勉强販賣

東京堂書店

電話（本局）一貳三番、一一四八番

●書籍雜誌の委托一手販賣は獨特の擴張法を以て販路勉强致候間御申込被下度候
●弊堂本店博文館出版の圖書雜誌は悉皆取揃へ置き同館同様割引發送共勉强致候
●東京堂出版部（文武堂英學新報社）は擴張し良書續々出版可致候間御愛顧希上候

祈倍舊御愛顧

（綴付の入）

女學世界
（明治卅八年一月一日發行 毎月一回五日發行）第五卷第壹號（明治卅參年拾貳月廿五日 第參種郵便物認可）



（定價金貳拾錢）

東京彩錦堂印刷